
鈍色の空を溶かして

丹羽遊星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈍色の空を溶かして

【Nコード】

N0798W

【作者名】

丹羽遊星

【あらすじ】

父の跡を継いで司祭となったルキア。望まぬままに司祭の道歩み始めて四年、穏やかでありながらも鬱々とした日々を送っていた。一方、幼馴染のエリーヌは王太子付きの近衛士官となっていたが、変わりゆくルキアに苛立ちと諦めを抱いていた。

疎遠になっていた二人だったが、ある日エリーヌは王太子の命令書を届けるためにルキアのもとを訪れる。その命令とは、近々開始されるシベリーとの戦に司祭を徴兵するというものであった。

登場人物（前書き）

第三章までに登場する人物の紹介です。

ネタバレはありませんので、確認用としてお読みください。

（年齢は、すべて物語開始時点のものです）

登場人物

【主人公】

ルキア・ドートリツシュ（21・♂）

「正式…セヴァンス侯爵ルキア・ベルネス・ディラ・ドートリツシュ」

父クラウスの死後、17歳でドートリツシュ家当主となった。

現在、ルドリア教会の高位司祭であり、四大司祭（炎）の地位を得ている。

エリーヌ・グレンヴィル（19・♀）

「正式…エリーヌ・フィーア・ディラ・グレンヴィル」

アシュレイ・グレンヴィル伯爵の一人娘。推定相続人。

近衛隊に所属しており、階級は少尉。

【王家】

ミカヤ・ヴィジェ・オトウール（22・♂）

ゴーステイン王国王太子。アルト・ヴィジェ王唯一の嫡嗣。生母はアイリーン・オルストン。

キイル・ヴィジェ・オトウール（40・♂）

アルト・ヴィジェ王の異母弟。クラヴィーエ公。

10代のころより兄王の摂政として、また、ミカヤ誕生後は宰相として国政を担ってきた。

生母は先王の二度目の王妃（現王太后） キャサリーゼ・ハーシエリオン。

アルト・ヴィジェ（63・♂）

ゴーステイン王国オトウル朝第16代国王。

若くして王位に就いたが、政治は弟と閣僚らに任せ、隠遁生活に入った。

生母は先王の最初の王妃であるオヴェリア・ギルベイド。
亡き妃レイリアとの間には二人の王女がいる。

【ルドリア教会】

エーゼン・サルファ （30・♂）

「正式…コルベール侯爵エーゼン・ドウル・ディラ・サルファ」
サルファ家当主。

ルドリア教会の高位司祭で、総議長の地位を得ている。

ルノー・ドートリツシュ （19・♂）

「正式…デフトール伯爵ルノー・アリオス・ディラ・ドートリツシュ」

ドートリツシュ家前当主クラウドスの息子でルキアの弟。
ルドリア教会の下位司祭。

ローザン・ゲートル (33・♂)

ルドリア教会の高位司祭で、四大司祭(土)の地位を得ている。
元魔道士。

クウラ・ウエリック (41・♂)

ルドリア教会の高位司祭、四大司祭(水)の地位を得ている。
リーヴァ・エクランドとは友人である。

リーヴァ・エクランド (40・♀)

ルドリア教会の高位司祭であり、四大司祭(風)の地位を得ている。

ラウル・アシリングの従姉。

ラウル・アシリング (20・♂)

ルドリア教会の高位司祭。リーヴァ・エクランドの従弟。

クラウス・ドートリッシュ

「正式…セヴァンス侯爵クラウス・リーゲン・ディラ・ドートリッシュ」

ドートリッシュ家前当主。ルキアとルノーの父。

ルドリア教会の高位司祭で、主教の地位に就いていたが、四年前に死亡。

【閣僚・軍人】

ジーク・ラッセル（44・♂）

〔正式…ジーク・レイ・ディラ・ラッセル伯爵〕

陸軍大臣。

代々ハーシェリオン家に仕えてきたラッセル家の当主で、キイルの腹心。

ロベルト・ネイゲル（43・♂）

〔正式…ロベルト・ウォード・ディラ・ネイゲル男爵〕
大蔵大臣。

キイルの元学友で、もつとも忠誠心の厚い人物とされる。

ミシェル・ハーシェリオン（53・♂）

〔正式…デュー公爵ミシェル・ロイ・ディラ・ハーシェリオン〕
外務大臣。

ハーシェリオン家当主で、キイルの叔父に当たる（王太后キャサリーゼの弟）。

アンジェ・ギルベイド（60・♂）

〔正式…ダラス公爵アンジェ・ヴォーヌス・ディラ・ギルベイド〕
法務大臣。

ギルベイド家当主で、現国王の従弟（先王妃オヴェリアの甥）。

アシュレイ・グレンヴィル（40・♂）

〔正式…アシュレイ・オーヌ・ディラ・グレンヴィル伯爵〕
グレンヴィル家当主でエリーヌの父。
北方軍司令官を長年務めており、階級は大将。

マーテル・バルフォア（49・♂）

〔正式…マーテル・フォー・ディラ・バルフォア伯爵〕
元西方軍司令官で、階級は中将。
ジーク・ラッセルの部下。

ケールセン・グラッド（40・♂）

バルフォアの後任として西方軍司令官となった。階級は少将。
王太子派の軍人の中でもっとも強い力を有する。

【系図】

> i 3 2 3 2 7 — 4 0 8 3 <

世界観・地図（前書き）

確認用としてお読みください。

世界観・地図

【アレシス大陸の主要国家について】

◆ゴースティン王国◆

アレシス大陸南部に位置する大国。

東と南は海、西はケーニヒス、ファジール、シベリーと面している。

現在、オトウール朝第16代国王アルト・ヴィジェによる治世のもと、十を超える属領を持つ。

王位継承は男系男子のみ。貴族や平民は女子相続が可能。
公用語はゴースティン語。

◆ケーニヒス王国◆

ゴースティンの西に位置する大国。

現在、セルバンテス王家による専制政治が敷かれている。

ファジールが独立したことにより本国の領土は三分の二まで縮減した。

ただし、シベリーやベイリーズ等の属領をいくつも有しているため、依然としてゴースティンと並ぶ国力を有する。

王位継承は男子のみ。ただし、女系王族にも継承権あり。
公用語はケーニヒス語。

◆ファジール大公国◆

ゴースティンの西、ケーニヒスの南に位置する国。
かつてはケーニヒス王国の一部であったが、二十年前にゴースティンの支援を得て独立。
独立当時はカール大公が治世を行っていたが、五年前に息子のジヨアンが大公位を継いだ。
ファジールのザイード大公家はケーニヒス王家の傍系である。
公用語はケーニヒス語。

◆シベリー自治国◆

ゴースティンとケーニヒス、ファジールとの国境に带状に広がる国家。

ゴースティンやケーニヒスを構成するガレ族とはまったく異なる容姿を持つ異民族で、宗教も異なる。

百年前より、ケーニヒス王国の属国となり、対ゴースティンの国境防衛の軍が組織されている。

八つの州（オーリア、カールトン、バードン、ミレニス、リブロ、アパス、ルドン、ジュダ）によって構成されている。

各州には州代表があり、州代表らを束ねるシベリー総督が首都バードンにおいて統治を行っている。

◆地図◆

>i32272—4083<

【暦について】

1年を365日とするグレゴリオ暦を採用。

月名は黄道十二宮を参照。

磨羯宮（1月）、宝瓶宮（2月）、双鱼宮（3月）、白羊宮（4月）、金牛宮（5月）、双児宮（6月）、巨蟹宮（7月）、獅子宮（8月）、処女宮（9月）、天秤宮（10月）、天蝎宮（11月）、人馬宮（12月）

蠢動

薄暗い執務室の中、水晶の埋め込まれた聖杖が揺れる。そこから指し示される淡い青緑色の光が弾け、部屋中に拡散し、頭上から柔らかに降り注いでいく。

美しい……。この光を目にするたびにそう思える。

ミカヤは煌めく光の粒を掴もうと手を伸ばしたが、それは小さな旋風となり、彼の赤い髪を緩く乱した。

「貴様はたしか、風を操るのだったな……」

呆けたように呟くと、黒衣の司祭はゆっくりと双眸を開き、燭台の灯りをその瞳に宿す。

「これは高位司祭らが儀式で用いる魔道の力となりますが、戦闘で使用するようになる力もまた、これと同じものにございます。……ミカヤ殿下」

その返答は、ミカヤにとって少々不満なものであった。

王宮にいれば、毎日の公式礼拝の際に司祭の操る魔道の力を目にすることができる。司祭たちは神々しいばかりの眩い光を放ち、あたりを包む。その光は、神の祝福と信徒らの祈りをつなぐもので、決して何人をも傷つけるものではない。

そのような力が一個大隊や砲弾をはるかに凌ぐものになるのだと、この男——ルドリア教会の高位司祭であり、総議長の座にあるエーゼン・サルファは言う。

ミカヤは頬に当てた手を下ろし、両腕を肘掛けに置いた。

「私は自軍の消耗を最小限に抑えるべく、魔道の力を利用したいのだ。貴様はそれが可能だと申したが、この程度のを兵力にせよと？」

「すべては司祭の＜念く^{ゼンセ}次第でございます。今お見せしました魔法は＞念くをほとんど込めておらず、魔力を可視化したものに過ぎません。ですが、司祭が強い＞念くを込めて放てば、魔力は狂気を孕み、敵へと向かうでしょう。無論、力を放った本人にもその力は及びますが……」

ミカヤが眉をひそめると同時に、エーゼンは先ほどと同じように聖杖を振った。

そこから放たれた光は、この薄暗い部屋においては視界を攪乱^{かくらん}させるほどに強く、ミカヤは思わず目の前に手をかざした。

目が光に慣れるより先に、背を怖気が走り、冷や汗が流れる。ミカヤは目元を覆っていた手を引き剥がし、目を鋭く細めてエーゼンをにらんだ。

「なにをした……？」

「先ほどよりも強い＞念くを込めさせていただきました。殿下のお身体に影響を及ぼすようなことはありませんので、どうぞご安心を」

「そういう貴様はどうなのだ？ 力は司祭にも及ぶのではなかったのか？」

ミカヤは尊大に振舞いながらも、いささかの恐怖を感じていた。

この部屋は強い魔力の波動に支配されており、肌を刺すような発気がまわりついてくる。胸の奥底からありもしない焦燥を次々にかき立てられるようで不愉快でしかない。

そんなミカヤの様子を嘲笑うかのように、エーゼンは目を細める。

「すなわち、高度な魔法を操るためには、それと同程度の防護能力や制御能力が求められているのです。高位司祭の叙階を受けた者らは皆、その能力に長けた者たちであり、それゆえに高等儀式を執り行う資格を有しているということです」

たしかに、儀式の最中に司祭が力を暴発させるようではたまらない。

「それでは、>神レガロの力<ならばどうなる？ はね返る力は、儀礼に用いる魔法のそれとはまるで比較にならないのか？」

「>神の力<とは教会内では禁忌魔法とも呼ばれております。通常の魔法が“精霊の力の一部を借りる”とするならば、禁忌魔法は“精霊の力をそのまま呼び出す”とでも申しましょうか。当然、求められる防護能力・制御能力の質は異なり、精霊の力を制御……いえ、支配する必要があるのです。支配する力を持たない者が>神の力<を手に入れば、ほんの一時その力を抑えることができたとしても――」

「身を滅ぼす、か……」

「はい。>神の力<はあまりに強大な力……。それゆえ、継承者たる器を持つ者が稀にしか現れません。しかし、現在の継承者は四名。これは、歴代で最高となります」

「初めて、そのすべてが同時に揃ったということだな」

ミカヤは満足げな声で応えながらも、その腹では苛立ちを抑えていた。よくもこれまでその存在を王家に秘匿していたものだ、苦々しく思う。

「神の力」と呼ばれる魔道の存在をミカヤは以前より知っていたが、それは教典に記されたお伽話としてであって、そのような力が実在するなど考えてもいなかった。これはミカヤに限ったことではなく、盲信的なルドリア教徒でもない限り、信じている者などいない。

ゴースティン＝ルドリア教会が王権の支配下に置かれ、早、三百年という歳月が流れた。

しかし、その支配はあくまで形式的なものにすぎない。

教会には完全なる自治が認められているため、絶対的権力者たる国王であっても内部への不介入が余儀なくされてきた。教会の存在を忌々しく思う者は王族のみならず貴族の間にも一定数存在するが、不平を抱く傍らで、司祭らの有する権力の恩恵に与ろうとする腑抜あずかけが大半である。

教会が王家の従属組織と化してからというものの、国内の聖職者を統率する高位司祭たちは、ゴースティン王と敵対してきたわけでも、その力を盾に王を意のままに操ってきたわけでもない。ただ、そこに在り続けてきたただけだ。王権ですら手の出せない孤高の存在として……。

だからこそ、癪に障るものがある。

ミカヤは執務机に身を乗り出し、語気を強める。

「訊いておきたいことがある。貴様はこれまで散々あやつらに味方

してきたはずだが、なにゆえ今になって私に手を貸そうとするのだ？」

「私はこういった話がございますとお教えしたまでのこと。失礼ながら、ミカヤ殿下に手をお貸ししようなどと考えているわけではございません」

エーゼンが伏せていた目をすっと開いたとき、蝋燭の火が小さく爆ぜた。

「加えて、王弟殿下並びにハーシェリオン家に対し忠義を尽くしてきたわけでも――」

「食えぬ男だな、貴様は」

ミカヤは侮蔑を込めて言い放ったが、エーゼンは意に介さぬというように微笑み、聖杖を軽く揺らす。それとともに、部屋中に撒き散らされていた＞念くは、聖杖の水晶へと吸い込まれるように消えていった。

圧迫感から解放されたミカヤは、再びエーゼンを鋭く一瞥する。

「司祭らの持つ力がどれほどのものか、閣僚らは知らぬはずだが、説き伏せることは可能か？」

エーゼンは切れ長の瞳を細める。

「必要であれば、王弟殿下や閣僚、軍幹部らの前で力をお見せする機会を設けましょう。……ただ、王弟殿下は高位司祭らの力についてご存じかと思われます。もしかしたら＞神の力くについても……」

「なぜだ？」

「あの方は、教皇一族について詳しいはずですから」

一体なんのことかとミカヤはしばし考え込んだが、やがて、ゆっくりと口角を上げた。ミカヤの前でその話を匂わせるエーゼンの豪胆さを、見上げたものだと思ったのだ。

「……まあいい。これであやつらのくだらん主張を黙らせる策が見つかったというわけだ。その策を有意義に役立てるため、貴様にはいろいろと動いてもらう必要がある。私にこのような話を持ちかけた以上、当然そのつもりであろう？」

「はい。司祭らの説得は私にお任せを」

エーゼンの返答はミカヤの心裡しんりを易々と読んでいくもので、ミカヤは初めのうちそれを不快に感じていたが、次第にそれは心地良ささえ帯びてミカヤに届くようになっていた。

もっとも、それは決してエーゼンに対する信用を意味するものではなかったが。

エーゼンは一礼をしたのち、身をひるがえし、王太子の執務室を後にしようとした。

毅然としたその背に、ミカヤは挑むような視線と声をぶつける。

「それにしても、あれが対峙しているのが貴様のような輩だったとはな。ルドリア教会は、宮廷以上の悪の巣やもしれんな」

偽りの仮面 (1)

「それではエリーヌ様、しばらくこちらでお待ちくださいませ」

女中が下がるとともに、エリーヌは示された長椅子に腰を下ろした。

貴賓室の窓からは、生い茂る庭木の果てに壮麗な聖堂を目にすることが出来る。陽の落ち始める空と聖堂の納まった風景は、まるで一枚絵のような魅力があったが、エリーヌは外に目をやることはなく、じっと手の中の書状を見つめていた。

この書状は王太子ミカヤⅡヴィジェからの命令書で、宮廷司祭ルキアⅡベルネス・ディラ・ドートリツシュに宛てられたものである。書状を届ける役目をミカヤより与えられたエリーヌは、今しがたドートリツシュ邸に到着し、当主の登場を座して待っている。

エリーヌは幼いころからこの屋敷を出入りしていたが、久々に訪れたということもあり、どこか居心地が悪く、妙に気分が浮ついていた。窓に映る自分の姿を見やり、少し乱れた前髪を指先で整え、気分を落ち着けようと室内をゆっくりと見渡していく。

ゴースティン王国首都エクシユール……。

その東部に位置するドートリツシュ邸は、王宮に匹敵するほど広大な敷地を要し、代々ルドリア教会の権力者を輩出してきた家系のため、豪奢でありながらも厳めしく、門扉から調度品のひとつひとつに至るまで、一族の歴史を感じさせるものばかりで揃えられていた。

ドートリツシュの紋章は薔薇を銜えた獅子であるが、その紋章は屋敷の至るところで見ることができる。今ちようど五時を示そうと

している黒檀の柱時計にも、獅子と薔薇の透かし彫りが施されている。

再び書状に視線を戻したエリーヌは、小さくため息を吐いた。ミカヤがこの命令書を託した意図をエリーヌははかりかねていたのだ。通常、このような役目が一介の将校に与えられることなどありえない。エリーヌとルキアは幼馴染みであるが、今ではそれほど親しくしているわけでもない。

ルキアは四年前に父侯爵が急死したことにより、十七歳で領地・財産のほとんどを爵位とともに受け継ぎ、さらに高位司祭の叙階を受け、ルドリア教会の権力者の一人として名を連ねるようにもなった。エリーヌがルキアと疎遠になっていったのはそのころからであるが、そもそも“彼と親しい”ことが遣わされる理由にはしない。

一向に掴めないミカヤの真意を探っているうちに、静かに貴賓室の扉が開き、ルキアが現れた。ルキアの斜め後ろに控えている壮年の男は、先代のころからドートリッシュに仕えている家令ベルチェ・モーガンであった。

ルキアは数日前から風邪で寝込んでいたとのことで、部屋の中央へ進む彼の足取りは少しおぼつかないように見えた。ベルチェは気遣わしげにルキアに手を差し出していたが、ルキアはそれを気丈に拒んでいた。

エリーヌは目線だけを動かし、いまだ言い慣れない称号で呼びかける。

「セヴァンス侯、ずいぶんと弱っておられるようですが？」

「いや、心配には及ばない」

ルキアはエリーヌの斜め横の肘掛け椅子に腰を下ろした。久々に間近で見るルキアは、いかにも熱に浮かされた顔をしていた。

エリーヌが突然来訪したために急いで身なりを整えたのだろう。簡素な藍色のローブをまとい、赤く長い髪を横でひとつに束ねた姿は、エクシェール宮殿の礼拝堂で目にする彼の姿とは大きく異なっていた。

「グレンヴィル少尉、あなたがここに来られるのは珍しいことだ。今日は一体どうされたのだ？」

ルキアはやつれた顔に、穏やかな笑みを浮かべていたが、エリーヌが書状を机上に差し出した途端、瞬きとともに柳眉を寄せた。

「ミカヤ殿下からの命令書を貴公に持参しました」

「なぜ、少尉がこれを私に？」

「私に持っていくようにとの殿下のご命令でしたので」

書状を手にしたルキアは、封蝋に押された王太子の紋章をしばし見つめていた。ベルチェがペーパーナイフを差し出すと、ルキアはそれを受け取ると同時に片手を上げ、しばらく外すようベルチェに告げた。

ルキアは厳かな手つきで中を開き、書状の文字を追いつめる。そんな彼の様子を、エリーヌは息をひそめてうかがっていた。

「……出撃命令？」

ルキアは書状から目を離し、困惑をにじませた深緑の瞳をエリーヌに向けた。その視線を、エリーヌはあえて冷やかに見返す。

「三日前の中央会議において、シベリー自治国に対し、国軍を差し向けることが決定しました。この戦は今年初頭の、シベリーによる西方軍奇襲への報復を目的としたものです」

「なぜ、いきなりそんなことに？ あの紛争の処理については、ケーニヒスを交えて交渉が行われていたのではなかったのか？」

「話し合いの場は設けられましたが、交渉は決裂しました。あれほど大規模の紛争であり、上級将校数人に死傷者まで出たのですから、シベリー側が大幅に譲歩しない限り交渉が進まないのは当然ではないかと」

「しかし、シベリーと戦など――」

「ずいぶんと呑気なことを。ルドリア教の司祭は、神に祈りを捧げてさえいれば平和がやってくるでも考えておられるのですか？」

エリーヌが冷たく言い放つと、ルキアはうつすらと赤く染まった顔に緊張を走らせた。そんなルキアの顔を直視できず、エリーヌは目をそらしながら椅子の背に深くもたれかかった。

ここ数十年のゴースティン王国の情勢は、他国に比して平和であると評してよいだろう。

ゴースティンと肩を並べる隣国ケーニヒスとの戦争は八十年以上起こっており、国内においてもオトウール王家が権勢を誇っているため、有力貴族による派閥争いもあるものの、権力奪取の兆候はない。財政も安定しており、ゴースティンの歴史始まって以来の太

平の世と呼ばれるようになって久しい。

ただし、ケーニヒスとの国境に位置するシベリー自治国との武力衝突は珍しくなく、二か月ほど前にも国軍の主力部隊が紛争鎮圧に向かう事態にまで発展した。シベリーは今から百年ほど前にケーニヒスの従属国とされ、シベリーの軍隊は、対ゴースティン国防軍としての機能を有するようになった。それ以来、シベリーはゴースティンにとって年々厄介な存在となっている。

「いずれにしても、近いうちにシベリーとの戦は避けられなかったでしょう。そこでミカヤ殿下が、国境近くのシベリー州軍を殲滅すべきと中央会議において主張され、国王陛下はそれに勅許を与えられました。それにより、一か月半後にシベリー軍討伐が開始されることとなり、その主力部隊に強力な魔法を扱うとされる高位司祭を加えることが決定したのです。……今、貴公が手にしておられる書状は、その決定を踏まえて出されたものです」

エリーヌが言葉を終えた後も、ルキアはしばらく口をつぐんでいた。話を聞いていなかったのではないかと思えるほど、ルキアは思案に耽っており、手の中の書状を見つめたまま瞬きさえしなかった。やがて、困惑を潰していくかのようにルキアはためらいがちに口を開く。

「たしかに、これまでに魔道の力が軍事利用されたことはある。しかし、それは衛生兵や工兵の一部としてであって、魔道の力それ自体が兵力として戦闘に用いられたことはない。中央会議に参加されている上級将校らはそれをご存じのはずだ。それに、昨今は銃器の開発も進み、大砲の機動性も増していると聞く。そのような中で、殿下はなぜ魔道の力などを戦闘に用いようなどとお考えになったのだ？」

「貴公の言われるように、魔道を戦闘に用いるなど前例のないことですが、ルドリア教会の高位司祭は戦闘に耐えうる強大な力を有していると言及んでおります。それならば、その力を利用しない手はないと思いますが？」

「殿下が、会議の場でそのように言われたのか？」

「ええ。特に＞四大司祭くの用いる力は、想像を絶する威力であるという話でした。そして、シベリーのような異教の蛮族の駆逐は、本来ルドリア教会の役割でもあるのだとおっしゃっていました。上級将校らも、自軍の兵力の消耗を極力抑えるために、なおかつ圧倒的な兵力をもってシベリー軍を殲滅するためにも、司祭の徴兵に賛同する者が多数を占めていました。なにより、シベリーとの紛争に終止符を打つことは、我が国にとって有益でしかなく――」

突如、エリーヌは熱気を感じ、言葉を止めた。

押し殺した怒りのように、瞬く間に火が燃え上がり、ルキアの手の中の書状は灰へと化した。

「ミカヤ殿下は、かのお伽話を信じていらっしゃるのだろうか？あれほど神など信じぬと口にされていたというのに」

ルキアはため息まじりに呟き、手を軽く握った。ルキアの細長い指の隙間から磨き上げられた床の上に灰がさらさらと落ちていく。エリーヌはわずかに乱れた鼓動を抑え、ルキアを鋭く見やる。

「殿下の命に従わぬおつもりですか？」

「……いや、殿下のご命令なれば私に否やはない」

妙な含みを持たせた物言いだった。エリーヌがますます眉をひそめると、ルキアは殊更に微笑んで見せ、澱みのない明晰な声で告げる。

「グレンヴィル少尉、あなたはこれからエクシール宮殿に戻られるのだろうか？ それならば、私が了承したという旨をミカヤ殿下にお伝えしてほしい。正式な返事は後で王宮にお届けすることになるだろう」

“了承”というルキアの言葉を聞いた瞬間、エリーヌの心は一際強く鼓動を打ち始めた。そして、心の中で何度も「なぜ」と繰り返した。

王太子付きの近衛士官であるエリーヌにとって、ミカヤに対する忠誠の言葉以外に受け入れられるものはない。彼の命令は絶対で、なにがあろうと従うべきものとこれまでずっと胸に刻んできた。

しかし今だけは、ルキアのミカヤに対する忠義を受け入れることができなかった。

「命令であれば、なんにでも従うとでも？ それではまるで木偶でくのようですね」

エリーヌは思わずそう口走っていた。はっと顔を上げると、ルキアの呆れたような顔が目に入る。

途端にかっと耳が熱くなり、エリーヌは乱れた口調で言い放つ。

「わかっているのですか？ あなたは戦場へ……それも前線に遣られるんですよ？」

「そういう命令だと、理解しているつもりだが？」

「わかっていてその態度だとしても？　ずいぶん物わかりがいいのですね」

「先ほどあなたが言ったのではないか。シベリーとの紛争に終止符を打つことは、我が国のために有益なことなのだ。それが私に与えられた役目だというのなら、それを全うすることだ」

「人殺しが司祭の本分だとしても？　あなたはどうかしているのではないのですか！」

エリーヌはとうとう声を荒げた。

ルキアに対し、どうしようもないほどの強い怒りを感じていた。

そして、ルキアの前で冷静さを保てなかった自分自身に酷く失望していた。

ミカヤの命令は、神に仕える司祭を戦場に遣るというあまりに理不尽なものである。司祭たちは軍事訓練を受けておらず、下手をすれば生まれてから一度も剣を握ったこともないような人間ばかりで、いかに強力な魔法が扱えようとも、前線で戦わせるなどあまりに非情であるように思われた。

この命令がどれほど不条理なのかルキアなら理解してくれるとエリーヌは思っていたのだが、ルキアはあっさりとミカヤの命令に従おうとしていた。

沈黙の中、エリーヌがじっと机上をにらみつけていると、いかにも辛そうに咳き込む音が聞こえ始めた。目を上げると、胸のあたりを強く押さえているルキアの姿が視界に入った。

ルキアが風邪で寝込んでいるということを、エリーヌはドットリ

ツシュ邸を訪ねる前から知っていた。それでもなお面会を望んだのは、ルキアが出撃命令に対しどんな反応をするのかを見届けたかったからだ。そのために、書状は必ず本人に手渡すようにとミカヤから厳命されているとベルチェに嘘を吐いたのだが、こんなに酷く風邪をこじらせているのなら、書状をあずけてすぐに立ち去るべきだったのだろう。

痛々しい音が長く続いていくごとに、エリーヌはみじめさが募り、膝の上に置いた手を強く握り締めた。

「……エリーヌ」

どこか懐かしさを覚える声で名を呼ばれ、エリーヌは恐る恐る顔を上げる。

ルキアは左側の肘掛けに身体をもたれかからせ、目線だけをエリーヌへと向けた。先ほどよりも顔が赤く、瞳も潤んでいた。

エリーヌはルキアを氣遣う言葉をかけようとしたが、それよりも先にルキアが口を開く。

「たしかに、私のような立場にある者が、戦に手を染めるなど許されざることだろう。だが、魔道の力を戦に用いることが国益に適うことならば、たとえ人殺しに加担することになったとしても、司祭の本分に違背するものではないと私は考えるのだが？」

ルキアがなおも物わかりの良すぎることを口にしたせいで、エリーヌは彼を労わる機会を完全に失った。

エリーヌはルキアに怒りと悲哀を孕んだ視線をぶつける。

「そんなことをあなたは本気で思っているのですか？ 昔、私が狩りに誘ったとき、あなたはなんと言われた？ 動物も人間も同じ命を与えられているものだから戯れに撃つことなどできはしない、こ

う言ったのを忘れたのですか？　あなたがあのころと同じ考えのままならば、どうしてそんな簡単に戦への加担を受け入れることができるのです？」

エリーヌが感情のままに言葉を口に出している間、ルキアは眉一つ動かさずに睫毛を伏せていた。そんなルキアの様子は呆れているようにも見え、初めのうちこそ威勢の良かったエリーヌの声は、次第に悄然としたものになっていった。

「第一、あなたは司祭でしょう？　いかなる理由があろうと、戦に賛同するような態度を取るべきではないはずです。いや、あなたが司祭でなくても同じこと。兎や狐を撃つことですらためらうような者が、どうして人を殺せると……」

エリーヌが言葉を止めた途端、部屋の中はがらんとなった。エリーヌは自身の乱れた息づかいと、大きな柱時計の振子の音だけを感じていた。ルキアがなにも言わずに俯いているせいで、寒々しい空気が部屋中に漂っている。ルキアの返答を待つことは、痛みに耐えようとするのに似た感覚だった。

「……なんとか言ったらどうです？」

沈黙に耐えかねて呟くと、ルキアは一度だけ瞬きをし、緑眼をエリーヌに向けて開いた。真正面から見据えた彼の瞳は、冷たく澄み渡り、静謐をたたえていた。

「あなたは、なぜ私のもとに命令書を持ってきたのだ？」

先ほどと同じ問いだった。

一度目と違うのは、ルキアの声から困惑が完全に消え去っている

ことだった。

エリーヌはどう答えてよいかわからなくなり、何度も目をしばたかせながらルキアを見つめていた。

「軍人であるあなたが司祭の徴兵に賛同できないのは当然であるし、シベリーとの戦についてもなにかと不服に思うところはあるだろう。だが、いくら不満であろうとも命令である以上、あなたはそれに従わざるをえないはずで、私の場合もそれは同じなのだ。私一人が頑なに拒もうとも、それにより罰せられようとも、なにも変わりはしない。別の者がその代わりを務めることになるだけだ。……私が狩りに加わらずとも、誰かが兎を撃ち殺していたときと同じように」

ルキアはエリーヌをなだめるように告げる。

「殿下のお考えは私などには推し量りようもないが、あのような命令書が出されたということは、これはもはや変えられぬことなのだろう。あなたの気持ちはわからないではないが、この件について一司祭である私ができることはなにもない」

もうどうにもならないとでも言うように、ルキアは首を振る。そんな彼の姿を見ていられず、エリーヌは顔をそむけて立ち上がった。

「……長居をして申し訳ありません。もう私の用は済みましたので、これで失礼します」

去り際に、横目でルキアを見やり、声をかける。

「早く風邪など治されればどうか。高位司祭ともあろう方のお姿とは思えませんので」

「ああ、わかっている」

ルキアはエリーヌのほうを見ずにそっけなく答える。エリーヌは唇を噛みしめ、逃げるように貴賓室から退室していった。

もうずいぶんと前から、エリーヌはルキアから強い拒絶を感じていた。

ルキアは聖職に就いてから、剣を聖杖に持ち替え、白い祭服に身を包んで祭壇に立ち、澄んだ声で教典を読み上げている。王宮の礼拝堂で目にするルキアは、神の御使いを思わせる穏やかな顔をしていたが、エリーヌの目には、すべてを捨て、なにかもを諦めたような隠者の顔にしか見えなかった。穏やかに微笑んだ偽りの仮面を被り、自らをひたすら虐げているかのようで、それを見ているのは辛かった。

その反面、ルキアの心が平穏であるならばそれだよと思う気持ちもあった。彼を敬い慕う多くの者たちが望むままに、いつまでも聖者の仮面を被り続けてくれればいいのだと、これまでエリーヌは自分に言い聞かせていたのだ。

しかし、これから起ころうとしている戦は自衛の意味すら持たない、ただの殺戮でしかないものだ。そんな戦いに、ルキアはなにを思っただけ加担するのだろうか。今までと同じように、自らを偽り、道なき道を独りで歩いていこうとするのだろうか……。

廊下の窓から見える空は、薄い闇色に染まり始めていた。

エリーヌは立ち止まり、後ろを振り返る。まだルキアのいる部屋を名残惜しげに見つめた後、ゆっくりと目を伏せながら身をひるがえし、燭の灯り始めた廊下を歩き始めた。

偽りの仮面 (2)

エリーヌが退室した直後、ルキアは大きく息を吐き、右手で顔を覆った。彼女によってかき乱された心は、なかなか本来の静けさを取り戻してはくれなかった。

もっと詰られることを覚悟していた。エリーヌがなにも言えなくなるように、ルキアはあえて突き放すような言葉を選んだ。だから、彼女が怒るのも無理はないことだと思っていた。

エリーヌの突っかかるような言葉は、ルキアの身を案じているものでもあり、また、彼に対して理想を求め、期待をかけるものでもあった。それらが無碍にはねつけてしまっても、ルキアには後悔をすることもできず、ただ、鬱積した想いを抱えることしかできなかった。

「……ルキア様」

視線を上げると、扉の前にベルチェの姿があった。

「お顔の色が悪うございます。そろそろお休みになられたほうがよろしいかと……」

「いや、これから少し出かけたい。馬車の用意を」

ルキアがそう告げた途端、ベルチェは顔を曇らせ、ルキアのほうへと静かに歩み寄る。

「エリーヌ様は一体なんの御用だったのです？ ミカヤ殿下からの命令書というの？」

ルキアは事実のままに話そうとしたが、どこまでをベルチェに話してよいものかと言いあぐね、そのまま俯いた。

「シベリー軍の討伐でございますか？」

「どうして、それを？」

「昨日、本邸の聖堂を訪れた方から聞き及んだのです。シベリー軍の討伐部隊が近々編成されることになり、その部隊に司祭を組み入れるという話が中央会議で出されたと、その方はおっしゃっていました。しかもそれは後方支援部隊ではなく、戦力としてだと……。まさか、そのようなことがあるはずがないと思っておりましたが……」

「そのまさか、だ。司祭の徴兵についてはミカヤ殿下からのご命令であるが、既に国王陛下の勅許が得られているものらしい」

「しかし、国王陛下の勅許とはいえ、それにどれほどの力があるのやら……。失礼ながら、今の陛下は国政を動かす権限などお持ちではないのですから」

不敬な言葉であったが、それを不敬と感じる者も今では数少ないことだろう。

現ゴースティン王アルトゥヴィジェは、歴代国王の中でも稀に見る穏健派の人物と評されている。彼の御世では一度も国内が戦火に見舞われず、幸いにも酷い天災が起こることもなく、財政は非常に

安定しており、民が重税に喘ぐこともなかった。

しかし、実際のところ王は政治・軍事にまったく関心がなく、彼がその半生をかけて精を出したのは色事のみであった。

そんな王に代わり、宰相として長年国政を取り仕切ってきたのが王弟――クラヴィーエ公キイルである。ここ数年に至っては、王は健康を理由に表舞台へ立つことが一切なくなったため、王太子であるミカヤが宰相のキイルとともに国政の中心にいる。

ただ、ミカヤとキイルはその気質・信条こそ似通っているものの、まるでそりが合わず、協調関係にはない。

キイルも以前よりシベリー軍の討伐について検討し、国境防衛のために西方軍の増強に力を注いでいた。また、二か月前の紛争は近年稀にみる大規模なものであったため、王弟派の閣僚たちの間でも報復のためにシベリーに軍を差し向けるべきとの意見が上がっていたという。

それにもかかわらず、ミカヤが同様の主張をし始めた途端に反対の意思を示し、王弟派の側近である陸軍大臣、大蔵大臣、外務大臣のほか、上級将校を扇動し、ミカヤを説き伏せていた。

……以上が、ルキアの把握していた数日前までの状況である。

それが今や、ミカヤは国王の許しを盾に、国軍の上級将校たちの賛同のもと、シベリー軍の討伐に踏み切ろうとしているのだ。それも、ルドリア教会の司祭を徴兵するという前代未聞の作戦とともに。

あれからたった数日の間に、一体なにがあったというのか。

ルキアは熱に浮かされた頭を抱え、いくつかの可能性を模索しようとしたが、政の一切について権限を有しないルキアの知れる事情は限られており、ミカヤの真意をはかることなど容易ではなかった。一つ引っかかったのは、中央会議においてミカヤが発言していたとされる内容である。

魔道の力が戦力として用いられたことがないというのは、ゴースティンに限らず、この大陸全体における共通認識であるが、厳密に言えばそれは正しくない。

かつてゴースティン地方において大きな戦が起こった際、強大な魔法が戦闘に用いられことがある。その魔法を現在の兵力に換算するなら、砲弾など比較にならぬ威力であろう。

その戦はアルゼ教典において>聖戦<として語られているもので、幼い子供までもが知っているが、昨今では単なるお伽話にすぎないと考える者も少なくない。なによりミカヤは、迷信や不確かな伝承の類は一切信じぬ性格で、あまつさえ神の存在を否定する発言をこれまで幾度も繰り返してきた。

だからこそ、ミカヤの発言は不可解に感じられるものであった。

「ルキア様、ミカヤ殿下がこのような暴挙に出られたのは、王弟派の大臣らの振舞いに腹を据えかねてのことでしょう。ただ、国王陛下がこのような戦に許可を与えられるとは思いません。司祭の徴兵など、もってのほかでしょう。おそらく、殿下が王に無理矢理――」

「滅多なことを言うものではない」

ルキアはベルチェをたしなめつつも、内心、それが正しいのだろうと思っていた。

王は先立っての紛争について報告を受けた際も、またいつものことだどろくに関心を示さなかった。あの状態では、殲滅作戦についても、ろくに話を聞かぬままミカヤに許しを与えたに違いない。司祭の徴兵に至っては、まったく関与していないのだろう。

ミカヤは王の無関心に付け込んでいるわけだが、それを表立って批判できるのがキイルだけだというのは皮肉なものである。周囲の

者たちは、次期国王となるミカヤの挙動に対し、下手な口を挟むことを恐れている。キイルの動きを待ち、より自分にとって有利なほうへ流れるのが今の宮廷の在り様だった。

そして今は、ミカヤのほうに風が吹いている。

ルキアが細い息を吐きながら顔を上げると、ベルチェの沈痛な眼差しが突き刺さった。

「恐れながら、ルキア様が国王陛下にお願い申し上げてはいかがでしょうか？ 司祭までも戦に出すとあれば、勅許の撤回もお考えになるかもしれません。陛下は信心深い方と聞き及んでおりますし、なにより戦など決して望んでおられないでしょうから……」

たしかに、この風向きを変えられる者など国王をおいて他にいないだろう。

王は四十を過ぎたところから非常に信心深くなり、ルキアの父クラウスを傍に置いて重用していた。ベルチェの言うように、王が司祭の徴兵命令の存在を知れば、いかにミカヤからの嘆願と言えども許しを取り下げようとするかもしれない。少なくとも、ルキアが戦場に出ることを王はそう簡単に許しはしないだろう。

しかし、いかに覆る見込みがあろうと、ルキアは自らの立場を利用するわけにはいかないと思っていた。それはいかなる時でも変わらぬ意思であったが、キイルとミカヤの間に争いが起こっている今ではなおのこと、ルキアの意思は頑なものになっていた。

「この話は後だ。とにかく、出かける用意を」

「……かしこまりました」

ベルチェが退室し、ルキアも服を着替えるために自室へ戻ろうと

したとき、強い風が窓を叩くような音がした。

ルキアは振り返り、テラスへと通じる大きな窓を眺める。そこには、ぼんやりと人影が薄闇の中に映し出されていた。

ルキアは気だるげに歩を進め、窓の前に立った。外にいる人物を硝子越しに確認すると、棒鍵を引き抜いて窓を開け放つ。冷気が室内に吹き込み、机上の灯りを吹き消した。

バルコニーの手すりに腰かけていたのは、銀髪に褐色の肌を持つ少年だった。少年は室内に入ると、黒い外套をひらひらさせながら、ルキアに笑いかける。彼の赤褐色の瞳は好奇心をのぞかせていた。ルキアは燭台に手をかざし、蠟燭に火を灯しながら問う。

「リジー、いつからそこにいたんだ？」

「ちょうど、お前に客が来たときだったかな。なにやら深刻そうだったから、なかなか声かけづらくてさ」

投げかけられたリジーの視線をかわし、ルキアは椅子の肘掛けにもたれかかる。

「……少々、面倒なことになった」

「ああ、シベリーの討伐か？」

「さっきの話、聞いていたのか？」

「聞いてたんじゃなくて聞こえたんだよ。偶然だつてば、わざとじゃない」

リジーは長椅子に腰を下ろし、呆れたような高い声を漏らす。

「それに、ここ数日えらく噂になってるんだけど、お前は知らなかったのか？」

「私は、噂などというものには耳を傾ける気はない」

「いや、ちょっとは耳澄ませとけよ。あんまり外のことには疎いのも問題あると思うぜ。お貴族様は外聞を気にする必要もあるだろう？」

「まさか、司祭の徴兵まで噂になっているのか？」

「司祭がどうしたって？」

「……ルドリア教会の高位司祭がシベリー軍の討伐部隊に組み込まれることになった」

「へえ、それはすごいな。この国では聖職者が軍人の真似事までするんだな」

ルキアは押し黙ったが、リジーは意気揚々として言葉を続ける。

「俗人以上に金欲と色欲に塗れた聖職者なんて別に珍しくないし、軍人以上に人殺しが趣味の聖職者がいてもおかしくないだろうけど、ちょっと問題ありすぎじゃないか？」

リジーの明るい声は、却ってルキアの心に暗い陰りを落とした。冷静になって考えてみるほどに、これはとんでもない事態なのだと思う。

「おそらく私はシベリー軍の討伐に参戦することになるだろう。こ

んなことになってしまつて本当にすまないと思っている」

ルキアが悄然として告げると、リジーは肩を竦めた。

「そんなこと俺に謝られてもな……。まあ、お前は好きにやれよ。どうせ俺は見てるだけさ」

「好きに、か。それができれば苦労はしないさ」

わずかな沈黙ののち、リジーは短くため息を吐く。

「こんなことになるならさ、司祭なんかにならなきゃよかったのにな」

ルキアは弾かれたように瞠目する。

「どうして、今さらそんなこと……」

「お前は子供のころから毎日朝から晩まで勉強漬けだったじゃないか。他にも剣術やら馬術やらって、ろくに遊ぶ暇もなくてさ。それこれも、将来、あの王太子様に仕えるためだったんだろう？」

ルキアの中からいくつもの記憶が断片的に浮かび上がり、しばらくの間、彼の思考は過去に止め置かれていた。それらの記憶は十数年も前のものから、ほんの数年前のものもあったが、そのすべてが遠い昔のことのように感じられた。

「……たしかに、そんなころもあったな。だが、今さらそんな話をしても仕方ないだろう？」

「仕方なくても文句の一つも言いたくなるさ。今のお前はあのときと同じなんだよ。物わりのいい振りして、綺麗事を並べ立てて……。当主の座なんか弟に押しつけちゃえばよかったんだよ。そのほうが、絶対お前のためだったと思うぜ」

「私がこの家を継いだのは国王陛下のご命令だったからだが、司祭となっても今まで学んできたことが無駄になるわけではない。後悔などしていない」

「お前が納得してるなら別にいいけどさ。……それよりお前、いきなり力を使うのはよせよ。見てて冷や冷やする」

ルキアが誰かにそのようなことを言われたのは久々のことだった。彼が不用意に力を使おうとも、それを咎める者はもういない。

幼いころ、ルキアは秘められた強い魔力を抑えることができず、度々、窓硝子や燭台を粉々に砕いてしまうこともあった。その程度ですんだときはまだ良くて、一度など、室内を炎で包んでしまい、あわや大惨事となりかけたことがあった。そのときのこと思い出し、ルキアを懐かしさと恥ずかしさが襲った。

「……今はもう、力を上手く制御できなかった子供のころとは違う。そんな心配はいらない」

「へえ、ずいぶんと偉そうな口を利くようになったもんだな。父親の前じゃ絶対にそんなこと言えなかったくせに」

「すまない、これから気をつけるよ」

ルキアはくすりと笑って、立ち上がり、そのまま部屋を出ていこうとした。

その背にリジ―の声が投げかけられる。

「どうしたんだ？」

「今から少し出かけてくる。だからリジ―はもう帰れ」

「病人が無理すんなよ。足元ふらついてるぞ？」

「ああ……」

ルキアは緩慢に相槌を打ち、そのまま貴賓室を後にした。

爛熟

アイオーン宮の談話室にて、ミカヤは長椅子に腰かけて斜陽を眺めていた。その長椅子は、曲線を多用した意匠で、細かいところまで繊細なレリーフが施されており、くつろぐには少し不適に思える造りをしている。

アイオーン宮は別名“王太子離宮”とも呼ばれており、この宮殿の主はまぎれもなくミカヤであるのだが、この部屋は主の意思にことごとく逆らうかのように、軽薄な華やかさばかりを漂わせていた。それはさながらミカヤの置かれている状況と似ている。

熟れすぎた果実……。

父王の御世についてそう評したのは誰だっただろう。人であれ、文化であれ、この国の至るところで、熟れて、腐り、地へと落下する果実の末路を思い起こすものを目にすることができる。

毒々しさを覚えるほどの甘ったるさとも言えばよいのだろうか。華やかな飾りは成熟の表れというよりも虚飾でしかなく、その最たるものが国王であるというのは爛熟の証とも言えた。

「あと、ほんの少しの辛抱だ……」

ミカヤは口の中で呟きながら、地に叩きつけられ、血のような赤い汁をほとばしらせる果実を頭の中に思い浮かべた。

現王アルト・ヴィジェがまだ王太子であったころ、彼はありあまる華やかな美貌とは不釣り合いなほど覇気のない性格をしており、それに加えて政務よりも色事に情熱を傾ける有り様で、先王の気を揉ませていたという。

王の悪癖に拍車をかけたのは、初めの妃を成婚後たった四年で亡くしたことにありとされるが、その数か月後に誕生した異母弟キイルの存在により、世継ぎを儲ける重責から解き放たれたことも大きいと言われている。

ほぼ時を同じくして先王は流行り病にて崩御し、アルトⅡヴィジエが王位に就くに至ったが、それから四十年の間、彼に王としての自覚が芽生えたことなど一瞬たりとてなかったのだろう。

宮廷においても国民の間においても、“お飾りの君主”と揶揄されるようになって久しく、老いによりかつての容色が失われた今となつては、もはや不要の装飾と化していた。二年前に王が大病を患い危篤に陥ったときも、王家に長く仕えてきた重臣たちでさえ、来たるべき時が来たという態度を取る始末だった。

そんな父王を、ミカヤはただ憐れに思う。

これまでミカヤは最低限の敬意と人並みの嫌悪以外の感情を王に抱くことはなかったが、昨今ではその敬意も憐れさに浸食され、嫌悪感ですら無関心へと変わりつつあった。

扉の軋む音が耳へと届き、ミカヤはおもむろに目を開く。

空は既に陽が落ちかけ、薄く闇に包まれていたが、それほど時間が経過したわけではないようだった。入口のほうへと視線をやり、そこに立つ近衛士官の姿を目に留めると、ミカヤはふっと微笑する。

「ずいぶんと早かったな」

ミカヤは目を細め、エリーヌⅡフィア・ディラ・グレンヴィル少尉に声を投げかけた。

彼女の存在は、この華美に過ぎる部屋の中でも浮くことはない。長い栗色の髪を束ねる赤のリボン、まだ幼さを残した顔立ちと華奢な体軀には不釣り合いな黒い軍服、ほとんど装飾と化した金色のサ―ベル……。それらを身にまとう彼女の存在もまた、この国の象徴の一角とも言える。

ミカヤは不愉快なレリーフの施された肘掛けに身体を寄りかからせる。

エリーヌはミカヤの近くまで進み出て、その場で恭しく膝を折った。

「ただいま戻りました」

「エリーヌ、急ぎ戻る必要などなかったのだぞ。あれとともに顔を合わせたのは久しぶりだったのだろう？ 積もる話もあっただろうに」

「いえ、わたくしの務めはセヴァンス侯に殿下の命令書をお渡しすることでしたので」

「実直だな。やはり、友人同士というのは似るものなのか？」

返答に窮しているエリーヌを見やり、ミカヤは左の口角を上げる。

「お前の場合は、ただ意地を張っているだけだな」

「意地などではございません。侯爵は酷く風邪をこじらせている様子でしたので、長居はできぬと思った次第でございます」

「あれが病を得た理由を知っているか？」

突然の問いに、エリーヌは大きな琥珀色の瞳を瞬かせ、不思議そうに口を開く。

「近ごろ、王都では質の悪い風邪が流行っておると聞いています。彼の病はそのせいではないのですか？」

「そのような理由ならば、わざわざお前に問わぬ。アンジェより聞き及んだ話だが……数日前、宮殿に来ていたジークの末子が池の近くで遊んでいたらしい。それで足を滑らせて溺れているところをルキアが助けたのだそうだ。当の子供はかすり傷で済んだにもかかわらず、あいつは何日も高熱にうなされ、出仕もかなわぬというわけだ」

「そうですか。ジーク・ラッセル伯爵のご子息を……」

「いかにもあいづらい理由だろう？」

ミカヤは嬉々として問いかけたが、それに反してエリーヌの顔は憂色に包まれていた。その反応に、本当にわかりやすいことだ、とミカヤは苦笑する。

ジーク||レイ・ディラ・ラッセルは王弟キイルの腹心で、その外戚——ハーシェリオン家に長年仕えてきた伯爵家の当主である。ジークは十年近く前から陸軍大臣の地位にあるが、今回のシベリー軍の討伐に今もなお難色を示している。ジークはこれまでもミカヤのやることなすことに難癖をつけてきた。そのため、ミカヤは王弟派の人間とルキアが関わることを酷く嫌っており、そのことはエリーヌもよく知っている。

「それにしても……父上だけでなく、子供のお守りまでしているとはな。あいつは一体なんのために宮廷に上がったのだ？」

ミカヤは呆れと興を織り交ぜた声で呟いた。

縁故で取り立てられた文官・武官よりもはるかに役に立つ人材でありながら、宮廷におけるルキアの主な職責は、公式礼拝を取り仕切ることと王の私的顧問を務めることである。私的顧問といっても、王は政から遠ざかって久しく、王から持ちかけられる相談事など空疎な夢物語にすぎない。ルキアが無為に日々を過ごしていることをミカヤはかねてより遺憾に思っていたが、それはエリーヌも同じであるようだった。

「出撃命令についてルキアはなんと言っていた？」

「殿下の命ならば否やはない、そう申しております」

「あいつらしい物言いだな」

「ただ、少々怒^{いか}っているようにも見受けられましたが……」

「ほう？　ルキアが怒るなど珍しいことだ」

「それほど不満に思っているということではないのでしょうか？　わたくしの目の前で殿下からの書状を燃やしてしまいましたから」

それを聞いたミカヤは愉快げに笑う。

「それで、お前はルキアと喧嘩になったのか？」

ミカヤの問いかけに、エリーヌは驚いたように顔を上げた。

「ルキアを戦場に遣ろうとしていること、お前が不服に思わぬわけはないからな」

心配なのだろう、とミカヤが微笑むと、エリーヌは慌てて端然とした顔を作った。

「恐れながら、わたくしは司祭を戦場に出すのは好ましくないと考えております。どれほど強い魔力を秘めていようとも、剣の使い方も忘れてしまったような者を戦場に出しても、足手まといになるだけではないのかと――」

ミカヤの低い笑声がエリーヌの声に被さる。これほど見え見えの嘘を吐くのなら、胸の内を明かしているのと大差なかった。

エリーヌほど愚直な人間はミカヤの周りにはいない。父王はさておき、皆、易々と心裡を隠し、心の中で唾を吐いている。その面の皮の厚さは、決して剥がすことのできない鉄仮面のごとくである。だからこそミカヤは、エリーヌを好ましく、貴重に思っていた。

「まったく、すごい素振りだな。昔はあれほど仲睦まじかったというのに……」

ミカヤの知る限り、ここ数年ルキアとエリーヌはろくに言葉を交わしていない。エリーヌが近衛に入隊してからは王宮で顔を合わせる機会が増えたにもかかわらず、挨拶をするどころか、目すら合わせようとしなない。

ここまで徹底的に意地を張り通すのなら、二人が疎遠になっていくのも仕方ない。誰の目から見てもルキアとエリーヌは対照的な人間であるものの、こういうくだらないこだわりを持ち続けるところだけはそっくりだった。

「たしかに、クラウド殿が亡くなり、ドートリッシュを継いでからというもの、あいつは変わった。お前の苛立ちはわからんでもないさ」

うろたえるエリーヌからわずかに視線をそらし、ミカヤはゆったりと背を長椅子にあずける。

「……久々に、会いに行ってみるのも悪くない」

悪の巢

夜の市街を二頭立て馬車が駆けていく。

ルキアは御者にとにかく急いでくれと告げていたが、病のルキアを気遣ってか、御者は比較的ゆったりと馬を走らせているようだった。それでも通常よりは速度を上げているため、滑らかに舗装された道とはいえ、不愉快な揺れが車両を通してルキアにも伝わった。

舗道には等間隔に街灯が設置されており、夜道でもある程度の明るさが保たれている。この街灯は、日暮れ近くになると点灯夫たちが市街中を回ってランプに点火し、なおかつ夜中灯りを絶やすことがないよう定期的に燃料を補給する必要がある。現在この大陸において、これほど街灯設備の整った都市はエクシユールのみであり、これはゴースティンのような大国の都だからこそ成せる技であった。

ルキアはずっと伏せていた目を開き、窓の外の風景を眺めた。

そこはドートリツシュ邸の南、馬車を十分ほど走らせた位置にあるフェルダ大聖堂の近くで、ここまで来れば目的地まであと少しの距離である。

今、ルキアが向かわんとしているのは、ルドリア教会の高位司祭エーゼンIIドウル・ディラ・サルファの邸宅である。

王都の中東部にあるサルファ邸は、濃い灰色の外壁を持つ珍しい建物で、王都に多数ある貴族の邸宅の中でも異彩を放っている。黒々とした外観は、昼間に見ると遠く離れた位置からでも威圧感を覚えるが、夜に見るとまた格別な凄味があつた。

サルファ邸へと着いたルキアは、当主エーゼンの私室に通された。

ルキアがサルファ邸を訪れることはこれまでに幾度かあったが、当主の私室に通されたのは今回が初めてのことだった。

数年前までエーゼンは宮廷司祭であったが、ルキアはミカヤの学友としてアイオーン宮に居室が与えられていたため、二人が王宮で顔を合わせる機会は多かった。エーゼンが教会の総議長となり、ルキアが高位司祭となつてからは、フェルダ大聖堂で開かれる定例会議や公式礼拝の場において同席するようになっていた。

エーゼンの部屋に足を踏み入れたルキアは、少し目を細めながら奥へと進んでいく。

部屋の右手には暖炉があり、赤々と焚かれた火が弾けていた。暖炉の上には小銃が置かれているが、それは半世紀ほど前に主流だった様式のもので、細かな美しい彫刻が施されていることから装飾目的なのだと察する。

部屋の中でルキアの目を一際引いたのは、暖炉の斜め右の壁に掛けられた巨大な絵画であった。

その絵はアルゼ教典の一節を描いたもので、ルドリア神の御使いにより力を授けられた聖イシスが、ヴァーロンの大軍勢と果敢に死闘を繰り広げている。

イシスの放つ^{レガロ}神の力^{レガロ}は、原始教典の中に登場する四聖獣の力を呼び出すものとされているが、絵画の中では聖獣の姿がそのままイシスの放った力として描かれていた。聖イシスはゴースティン地方に多い栗色の髪を持つ青年の姿をしており、現在のものとは形の異なる白い祭服をまとっている。

エクシユール宮殿とフェルダ大聖堂にも教典の一節を描いた宗教画が一枚ずつ置かれているが、おそらくこの絵も同じ画家の手によるものだろう。筆使いはさることながら、イシスの容貌がいずれも同じものであった。

（しかし、この絵はあまりにも……）

ルキアが眉をひそめたのと同時に、奥の間の扉がゆっくりと開かれた。ルキアは絵画から視線を外し、部屋の中央へと歩み寄る黒髪の男を見やった。

「その絵、お気に召しませんでしたか？」

「……なぜ、そう思われるのです？」

「あなたには珍しく、ずいぶんと険しい顔をしておいでですから」

エーゼンはルキアの横に並び、絵画を見上げる。

「この絵は、宗教画で知られる巨匠ノワイユの遺作です。彼はその生涯においてアルゼ教典の一節をもとに三枚の絵を遺しましたが、三部作の最後であるこの一枚だけがあまりに異端で、聖堂にも王宮にも飾られることがなく、私の祖父が買い取ったのですよ」

王宮と聖堂に飾られている宗教画は一对になっているのだとルキアは思っていた。ルキアに限らず他の多くの者も、サルファ邸にまだ別の一枚があることを知らないだろう。それも無理からぬことと思えるほど、三部作最後の一枚はエーゼンが異端と称するに相応しいものであった。

イシスの身体と白い衣は血に塗れ、足元には甲冑を身につけた戦士の遺骸が無数に転がっている。激しい戦闘の様子を表現するにしても、あまりに通俗的に過ぎ、神々しさよりも生々しさを強調している。

「私に絵を解する心はありませんが、これは少々悪趣味ではないか

と」

「たしかに、この絵の中のイシスは聖者とは程遠い姿ですね。しかし私はアルゼ教典を深く解して描かれたものだと思っています。大量殺戮を行なった司祭としての側面もまた、聖イシスの真実なのですから」

「申し訳ありませんが、私はノワイユの絵をあなたと論じるために赴いたわけではありません」

ルキアが冷たく遮ると、エーゼンは、肩にかかるつややかな黒髪を揺らしながら身をひるがえす。

「どうぞ、お掛けになってください」

ルキアはエーゼンが指し示した黒檀の椅子に腰を下ろす。ややあって、エーゼンもルキアの前に対座した。

今、ルキアもエーゼンも祭服はまもっていない。ルキアは夜着から礼装に着替えたが、エーゼンは白いシャツの上に深苔色のローブを羽織っていた。

「ルキア様、今夜はどうされたのです？ 伏せてらっしゃると伺っておりましたが」

「いきなり押しかけて申し訳ありません。……ですが、至急あなたにお話しせねばならぬことがございましたので」

高熱のために余裕を失くしたルキアは、前置きもそこそこに本題に入る。

「ミカヤ殿下からの命令書が届きました。一か月半後のシベリー軍の討伐に参戦せよとのことです。あなたも既に同様の書状を受け取っていらっしゃるかと思いますが……」

「ええ、それがどうかしたのですか？」

わざとらしいほどに余裕然としているエーゼンに対し、ルキアはわずかに気色ばんだ。

「それについて説明していただきたい。これは一体、どういうことですか？　なぜ、殿下があのような命令を……」

形式上、国王はゴースティン＝ルドリア教会の最高位にある主教くよりもはるかに強い権力を有している。国王の力は教会へ及ばないわけではないが、教会はゴースティン王国よりも長い歴史を持つ組織であり、国王自身が神への畏敬から教会への干渉を行ってこなかった。

教会内の自治を司るのは約二十名の高位司祭くであり、重要事項については彼らの合議によって決定がなされる。慣例上、その合議決定はゴースティンの国内法に優位し、国王であっても軽視することは許されないとされてきた。

「国王の勅許を得た王太子命令であろうと、教会の意思に反し、司祭を徴兵する権限などあろうはずがない……。ルキア様はそうおっしゃりたいのですね？」

「そうです。あのような命令書が出されたということは、ミカヤ殿下の命に従うという合議決定がなされたということでしょうか？」

エーゼンはルキアの怒りを受け流すかのように微笑んだ。その顔

は、一見、柔和な印象を与えるものの、瞳の奥に忍ばせた鋭利が見え隠れしていた。

「いいえ、その件に関して合議は行われておりません。私が高位司祭を代表して、徴兵命令への了承をミカヤ殿下にお伝えしただけです」

「いくら総議長とはいえ、あなたにそのような権限はないはずでは？」

「もちろん、マーシエル主教の同意を得た上でのことです」

「マーシエル様が同意なさったと？ 私にはとても信じられません」

ルキアが険しい表情のまま問いを重ねると、エーゼンはすっと笑みを消し、滑らかな言葉を舌尖にのせる。

「ミカヤ殿下のお言葉をそのままお伝えしましたところ、マーシエル主教は不承々々ながら同意されました。『所詮、慣例は慣例……。誰かが破れば意味などなくなる』とミカヤ殿下はおっしゃっていました、なんともあの方らしいお言葉だと思いませんか？」

ルキアは言いかけた言葉を飲み込み、別の問いを投げかける。

「それで、他の高位司祭らはなんと言っているのです？」

「一昨日、高位司祭をフェルダ大聖堂へ緊急に集め、事の経緯について私から詳細に説明をいたしました。なにぶん、司祭の徴兵など前代未聞のことですので、手放しで賛成する者などほとんどおりま

せんでしたが、最終的には納得していただけたようです。まあ、下位司祭からは批判が噴出するでしょうが、さしたる問題はないでしょう。彼らには関係のない話ですから」

「関係ないなどと、よくもそのような――。これは教会全体に関わることはありませんか！」

「あなたのお怒りはごもっともですが、もし仮にあなたが私と同じ立場ならば、どうされました？ 王の寵臣というお立場をもって、陛下にお願い申し上げましたか？ たしかに陛下はあなたのお願いならば、ミカヤ殿下の嘆願ですら反故になさるかもしれませんが。……残念ながら、私にはそのような手段を取ることはできかねますが」

当てこするようなエーゼンの言葉に、ルキアは机の下で膝に置いたこぶしを震わせた。やり場のない怒りのせいで、ますます熱が上がってきたように感じられた。

ふいにエーゼンの含み笑いが聞こえ、ルキアは視線を上げる。

「コルベール侯爵、ですか……」

エーゼンは懷から取り出した書状を手に取り、薄く笑う。

「いくらそれが私に与えられた称号であっても、私のことをそう呼ぶ者はほとんどおりませんね。あなたの場合は宮廷を出入りされているので、称号で呼ばれることのほうが多いでしょう。……セヴァンス侯？」

ルキアが言葉につまると、エーゼンは小さく息を吐き、軽く椅子を引いた。

「称号など、なんら価値のないものです。私たちはかつての地位を失い、王権の支配下に置かれた。侯爵と呼ばれるたびに、そのことを認識させられるだけなのですから……」

エーゼンは未開封の書状を持ったまま立ち上がり、暖炉の近くへと進むと、書状をためらうことなく燃え盛る炎の中にくべた。

かつてエクシユールの地はゴースティンの王都ではなく、ドートリツシュ家が支配権を有する教皇国の一部であった。その当時、ドートリツシュの当主は教皇と呼ばれ、ゴースティンのみならず他国のルドリア教会にも多大な影響を及ぼしていた。一方サルファの当主は大司教という地位にあり、教皇の側近の中でもっとも権威ある地位を受け継いできた家柄だった。

それが今から三百年前、教皇エルジェ三世の時代に、エクシユールの支配権がゴースティン・オトウール王家に譲渡され、教皇軍の解散と引き換えに、ゴースティン国内のルドリア教会は王家による保護が約束された。それに伴い、ドートリツシュとサルファには侯爵位が与えられてゴースティン王国の一貴族となった。

ただし、この二つの侯爵家は、国内のルドリア教会においてかつてと同じような権力を保ち続けている。ドートリツシュの当主は主教に選ばれることが多く、先代のクラウスも主教の地位にあり、現在ルキアは主教に次ぐ四大司祭の位を得ている。サルファ家もまた同様の傾向があり、当主のエーゼンは合議を取り仕切る総議長の座に就いている。数百年を経た今もなお、教皇時代の権威に縋り、古い血脈に強いこだわりを持つがゆえに、ドートリツシュやサルファの一族の中には王家に対し反感を抱いている者が少なくない。

燃え上がる書状を見届けた後、エーゼンはルキアのほうに向き直

る。

「私は教会が王権の支配下に置かれることを快く思っておりませんが、シベリーの討伐については教会が異を唱える必要はないと考えているのです。あの目障りな異教の蛮族の駆逐は、ゴースティン王国ではなく、我らルドリア教会の役割でもあります。それだけの力を私たちは神より与えられているのですから」

「……ミカヤ殿下は高位司祭が強大な力を有していると中央会議で発言されていたそうなのですが、まさか、＜神の力く<の存在についてもご存じなのですか？」

「ええ、ご存じですよ」

「殿下にそれをお教えしたのは、あなたですね？」

「そうです。私がミカヤ殿下にお教えいたしました」

エーゼンは悪びれる様子もなく、あっさりと認めた。その様子にルキアが唾然としていると、エーゼンはすらすらと語り始める。

「ラッセル伯爵がシベリー軍の討伐に難色を示されており、キイル殿下を始め、他の大臣方も王太子殿下には批判的なようです。殿下は大臣方を納得させるため、自軍の被害を最小限に抑え、なおかつ早期に戦を終結させる方法を模索しておられました。それで先日、魔道の力を軍事利用できないかと私にお訊きになられたので、高位司祭の力と四大司祭が操る禁忌魔法についてお話しした次第です」

＜神^{レガロ}の力く。

教会内では禁忌魔法とも呼ばれるが、それが実在することを知っ

ているのは一部の者に限られ、ルキアですら四年前に高位司祭の叙階を受けるまでただの迷信だと思っていた。教会がその存在を秘匿してきた理由は定かではないが、あまりに強大な力ゆえに、時の権力者たちに悪用されることを避けようとしてのことだと解されている。

「サルファ殿。……シベリーがルドリア教会において不都合な存在であるとしても、司祭が人を殺めるということについて、あなたはどうか考えておられるのです？　このようなことが許されるとでもいうのですか？」

「それは、シベリーがルドリア教会における“人”に当たればの話でしょう？」

平然と言ったのけるエーゼンに、ルキアはますます苛立ちを強めたが、このように思っているのはなにもエーゼンだけではない。

シベリーは、はるか昔よりアレイシス大陸に彼ら独自の文化を築き上げてきた民族と言われている。彼らは浅黒い肌に白銀色の髪をしていることに加え、発達した犬歯を持つ。そんな彼らの姿は異形の者とされ、その忌わしさから永く迫害を受けてきた。

その一方、ゴースティンやケーニヒスといった大陸南中部の諸国はガレ族と呼ばれる民族で構成されており、彼らの文化圏がルドリア教崇拝圏となる。ガレ族とはダグー族やフェルノ族といった大陸の多数派民族の総称であり、シベリーのような一貫した特徴を持たないが、それでもシベリー族が“異形”と呼ばれるのは、彼らがガレ族の容貌とは大きく乖離しているからに他ならない。

それゆえ、両族が互いの望む形での共生を目指すのは困難を極めていた。

シベリーはガレ族による迫害に遭いながらも、古くからの居住地を手放そうとせず、その結果、ゴースティンやケーニヒスといった大国が領土を拡張していくにつれ、両国の境へと追いやられていった。

現在、シベリーはケーニヒスに従属し、自治国としての地位が認められているが、シベリー自治国はゴースティンとケーニヒスの国境を帯状に分布しており、この奇妙で歪な形こそが、両族の盛衰の歴史をそのまま体現していた。

王都の貴族や裕福な平民たちは、シベリー族を直接目にする機会などなく、彼らは異形の悪魔であると子供のころより偏った考えを植えつけられ、多くはそのまま大人になっていくのだ。

ルキアは机上の一点をじっと見つめたまま、おもむろに口を開く。

「シベリーは長年迫害されてきましたが、この百年ほどはケーニヒスの保護下にあり、自治権や居住権を保証されています。ケーニヒスの意図は国境防衛のためにシベリーを軍組織化することであり、民族としての彼らを尊重しているわけではありませんが、依然として迫害に回るゴースティンにシベリーが反発するのは当然ではありませんか」

そう口にしながらも、ルキアはどこかで虚しさを感じていた。

ゴースティンの民——とりわけシベリーによる暴動や略奪行為の被害に遭ってきた国境周辺の民にとって、シベリーは軽蔑と憎悪の対象である。選民意識の強い貴族はシベリーの存在について歯牙にもかけない者が多かったが、ここ数十年、国境に駐留している西方軍の被害が拡大するようになってからは、討伐を主張する者が増えていった。今回はミカヤが強硬に進めようとしているが、討伐自体は遅かれ早かれ決行されたに違いない。

ルキアの心の迷いを嘲笑うかのように、エーゼンは冷笑的な視線を向ける。

「たしかに、シベリーはゴースティン・ケーニヒス両国の争いに巻き込まれてきた犠牲者ではあるでしょう。ですがルキア様、その件に関して責められるべきはゴースティンではありません。シベリーを国境防衛の捨て駒としているのはケーニヒスなのです。それにあなたもご存じでしょう？ ケーニヒスがシベリーの自治権を縮小し始め、それに不満を募らせたシベリーがケーニヒス相手にも暴動を起こしていることを……。そもそも、シベリーは国境を越えて略奪行為を起こすことが珍しくなく、彼らを一方的に弱者にとらえるのは無理があるのでは？」

エーゼンの言葉には明確な誤りなどなかったが、まったく正しいとすることもできなかった。ただしそれは、普遍的な道徳によってでしか批判のできない、言わば感情論でしかない。なにより今のルキアにはエーゼンに食ってかかる気力などなかった。

なおもエーゼンの言葉は続く。

「それとも、ケーニヒスと直接開戦すべきだともおっしゃりたいのですか？ かつてキイル殿下がシベリー討伐を主張されていたのは、ケーニヒスとじかに戦を交えることなく、その軍勢力を殺ぐためでした。今回のミカヤ殿下の提案はそれと同じものです」

ルキアはますます熱を持ち始めた額を押さえた。興奮をむりやり抑えていたために、余計に体力を使い果たしてしまったようだった。エーゼンと二人きりで話すとき、ルキアはいつも強い敗北感を噛みしめることになる。

「それにしても、＜神の力＞を軍事利用なさろうとするなど、あの方は本当に“神をも恐れぬ者”ですね。ミカヤ殿下については私よりもルキア様のほうがよくご存じでしょうが、そうは思われませんか？」

エーゼンが冷淡さを薄めた声で語りかけると、ルキアは額を押さえたまま小さく笑う。

「そうですね、あの方は昔から神など信じぬとよく言っておられました。そのことを思い起こせば、今回の徴兵命令もなんら不思議はないように思えます」

「一昔前ならばそのような方は本当に珍しかったのですが、今ではさほどでもないのかもしれないですね。本当に、神への敬意を払う者が少なくなってきているのは嘆かわしいことです。我らが受け継いできた力にしても、存在が秘匿されてきたがために徐々に権威が失われていき、挙げ句の果てには教典がお伽話のように扱われている始末ですから」

エーゼンの言葉には、その口調の柔らかさとは裏腹に鋭い棘を含んでいた。ルキアは幾ばくの不安に駆られながらも、こう問わずにはいられなかった。

「あなたは、昔のような権力を取り戻そうとでもいうのですか？力を誇示すべく、戦に協力しようとしても……？」

エーゼンは肯定するでも否定するでもなく、ただ目を細めただけだった。ルキアは熱い息を吐きながら、固く目を閉じる。

これから起こりうることを思うと、ルキアの胸は騒いだ。それは、

ほんの弾みで傾斜を転がり始めた小石を見ているような感覚だった。辛うじて続いてきた平穩に密かに影が落とされていく……。まさにその瞬間を味わっているのだと思った。

雪にけぶる視界へと (1)

ルキアは聖堂の西塔へと登り、その中ほどからエクシールの街並みを眺めていた。ここからは、まっすぐに伸びた幅の広い通りとその両脇に立ち並ぶ家々を臨むことができる。この一帯の建物の屋根は青銅色で統一されており、その風景は圧巻であるはずなのだが、ルキアの目の前に広がるものはどこか陰気で色を失くして見えた。

石灰のような空から雪が舞い降りてくる。くりぬき窓から手を差し出すと、小さな雪が手のひらに落ちたが、雪はその冷たさを感じさせる間もなく、すぐに熱で溶けていった。

無数の雪がひらひらと地上へと沈んでいくのを、ルキアは瞬きもせずに見つめる。

一週間以上も続いた熱は今朝ようやく引いたが、相変わらず身体中が痛く、脚も腕も重いままだった。そのせいか、気分も塞ぎがちになっていた。まるで、厚い雲に覆われたこの空と同じに。

突如強い風が吹き、黒い祭服のケープと銀飾りを煽る。

ルキアは乱れた服を正しながら、ふと通りに視線を向けたとき、黒塗りの二頭立て馬車をとらえることができた。その馬車はドートリッシュ邸へと向かってきているようだった。

おそらく礼拝に訪れた貴族だろう。

アメジスト

ルキアは壁に立てかけていた紫水晶の聖杖を手にし、長く続く螺旋階段を降り始めた。

西塔から出て聖堂の扉の前に立ったとき、先ほど塔の中から見ただけの馬車が豪華な浮き彫りを施されているものだと思えた。御者は藍地に銀の刺繍が施された衣装をまとうており、派手さはないが、品を感じさせるものであった。

馬がいななき、車輪が止まる。

ルキアはその様子をじっと眺めていたが、車両の屋根にある王冠の装飾を目に留めたと同時に、まさかと思いつながらも、急いで石段を駆け下りた。

御者が恭しく車両の扉を開けると、黒衣をまとった赤い髪の青年が石畳の上に降り立った。青年は黒い毛皮の外套をひるがえしながら、まっすぐに進んでくると、ルキアはその場に立ち尽くしたまま、乱れた息を押し殺すように唾を飲み込んだ。

「久しいな、ルキア」

「ミカヤ殿下、なぜここに……」

ミカヤはルキアの前を通り過ぎ、肩にかかる波状毛を揺らしながら石段を上り、聖堂の中へと入っていった。

この聖堂はドートリッシュ本邸の敷地内にあり、一般に開放されているが、今は誰も訪れていない。ルキアはミカヤの姿が聖堂の中へ消えたのを見送った後、彼の後に続いた。

ルキアが聖堂内に足を踏み入れたとき、ミカヤは身廊の中ほどに立ち、物珍しげに天井を見上げていた。

この聖堂は壁画の施された王宮の礼拝堂とは異なり、精巧な彫刻が施された円柱群がそびえ立ち、その間からはステンドグラスの高光が展開されている。

今日は空が薄曇りで窓から透過光がほとんど差し込まないが、そのことが却って高窓の装飾に荘重さを与え、ステンドグラスの細かな模様が豪華さを増していた。

ルキアは聖堂の重い扉を閉じ、表情を硬くしたままミカヤに声をかける。

「まさか、殿下がこのようなところに来られるとは思いませんでした」

「なぜそう思うのだ？」

「昔から、神など信じぬと言っておられたではありませんか。王宮での公式礼拝にもほとんど出られませんし」

ルキアの返答に、ミカヤは愉快そうに笑いながら、椅子に腰を下ろした。

「このようなところに用はない。お前に用があって出向いたまでだ」

ミカヤの強い視線をさりげにかわしながら、ルキアは問う。

「命令書への返事ならば、昨日お届けしたはずですが……？」

「ああ、昨夜受け取った。お前の手蹟しゅせきは相変わらず見事なものだな」

「では、わたくしへの御用とは？」

「久々に顔を合わせたというのにそっけないことだな。顔色が悪いようだが、まだ気分が優れないのか？ それとも怒っているのか？」

意外な問いかけに驚き、ルキアが瞳を瞬かせると、ミカヤは少し眉を下げる。

「エリーヌをお前のもとに遣ったこと、そんなに気に入らなかったのか？」

「いえ、そういうわけでは……。ただ、なぜ彼女に命令書を届けさせたのかと、疑問に思いました……」

「そう構えるな。別に深い意味はない。ただ、王宮で居合わせても目すら合わせないお前たちに話し合いの機会を持たせてやろうと思っただけだ」

「恐れながら、そのような気遣いは無用にございます」

「やはり怒っているのではないか。だから私からの命令書を灰にしたのか？」

ルキアがわずかに表情を乱すと、ミカヤはエリーヌに聞いたと言っただけ目細める。

「そのことを責めているのではない。あんな紙切れ一枚でお前が承服するなど、初めから思っておらぬ。あの命令書は、言わばパフォーマンスだ」

ミカヤは椅子の背に手を置いて身体をもたれかからせ、佇立しているルキアを冷やかに見やる。

「ドートリツシュやサルファの人間はなにか勘違いをしているので

はないか？　これまでは合議決定とやらが国内法や王命以上に優先されてきたようだが、本来、ルドリア教会はゴースティン王家の従属組織だ。ゆえに、私が教会の合議決定を待つことも、それを考慮してやる必要もない。国王の温情により自治権が与えられてきたからといって、それに付け入り、好き勝手にやってもらっては困る。……あの命令書に意味があるとすれば、お前たちにその立場を改めて認識してもらうためのものだ」

ルキアの頭に、先日のエーゼンとの会話がよみがえる。ルキアはエーゼンに賛同する気も、彼を庇うつもりもなかったが、ミカヤの言葉に対し少々反発を抱いた。

「そうそう、あの総議長が言っていた。たとえお前が司祭の徴兵に不服であろうとも、国王に縋ることはないだろう、とな。実を言えば、私はお前が父上に勅許の撤回を求めるのではないかと思っていたのだ。さすがに今回ばかりはなりふり構ってはいられないはずだからな。しかし、それはいらぬ心配であったようだ」

ルキアは聖杖を握る指先に力を込め、ミカヤに決然と告げる。

「そのようなこと、考えも致しませんでした。わたくしが陛下に勅許の撤回を求めるなど、あまりに僭越でございますから」

「いずれにしても、お前がおとなしくしてくれて助かった。父上がどう申されようと押し切るつもりではいたが、お飾りとはいえ、国王であることに変わりはない。今、父上に余計な口を出されては面倒なことになったやもしれんからな。まったく、国の行く末をその目に映せぬのなら、不様に寝たままでもいいものを」

「殿下、あまりにお言葉が過ぎます」

「案ずるな。お前以外、誰も聞いてはおらぬ」

ミカヤは不敵な微笑を浮かべてみせた。それは、昔からミカヤがよく見せる表情だった。

ルキアはミカヤの不遜な言葉を胸に沈め、端正な口調で問う。

「シベリー軍の討伐について、クラヴィーエ公らはなんと？」

「なんだ、お前がおとなしくしていたのは、私があつた男に屈するのを待っていたからなのか？」

「そうではありません。シベリー軍の討伐は、他国の軍隊の一部を壊滅させようとするもの。これまでの紛争制圧とはわけが違いますし、ケーニヒスやファジールといった隣国の動きも気になります。それゆえ、宰相閣下や大臣方のご意向はどうであるのかと……」

ミカヤはうんざりしたように高窓を見上げ、荒っぽく息を吐く。

「宰相は腹心の大臣らの意向を受けて、いまだ難色を示している。外務大臣はケーニヒス及びファジールとの関係悪化を、陸軍大臣はシベリー軍の討伐に伴う両国の動きを、大蔵大臣はケーニヒス本国が参戦した折の戦費拡大を懸念している、といったところだ。あやつらの弱腰が、これまでシベリーを増長させてきたのではないのか？」

ミカヤはそう論^{あげ}うものの、これまで彼らの外交姿勢が消極的であつたと言いがたい。

かつてケーニヒス王国と南部のファジール大公国との間には従属

関係が形成されていたが、二十年ほど前、ケーニヒスのセルバンテス王家とその支流に当たるファジールのザイード大公家との間で王位の継承及びファジールの独立を目的として内乱が勃発した。その際、当時ゴースティンの国政を担っていたクラヴィーエ公キイルは、ザイード家に味方することを決め、ゴースティンの軍隊の一部をファジールに派遣した。

その結果、ファジールはケーニヒス本国より独立を果たし、百五十年以上続いた従属関係は解消されたが、長年対立してきたゴースティンとケーニヒスの関係は悪化し、シベリー自治国が両国の緩衝地帯となっていた。

ゴースティンは最大の貿易相手国であるケーニヒスとの関係改善のため、両王家の婚姻による同盟締結を画策しようとしたが、計画は七年前に破談となり、それにより両国の関係はますます冷え切っていた。

ファジールについても、五年前にカール大公が亡くなり、その嫡子ジョアンが継いでからは、あまり良い関係が築かれているとはいえず、このシベリー討伐がケーニヒス及びファジールを巻き込むことにならない保証はない。なにより、シベリーがケーニヒス軍に直属するようになってから、シベリー軍にはケーニヒスから高度な銃器が出回るようになり、その戦力は数十年前とは比べものにならない。

シベリー討伐自体を回避したいという大臣らの考えはもったもなもので、むしろ、司祭を徴兵してまで開戦に踏み切ろうとするミカヤのほうがルキアには不可解だった。

「それでは、大臣方は高位司祭の徴兵を条件に、シベリー軍討伐に賛同されたのですか？」

「あやつらの賛同など不要だ。この件に関しては全権が私にある。」

他の者には一切口を挟ませはせぬ。たとえ影の王と呼ばれてきた宰相であろうとな」

ミカヤの声色が変わった。強気な言葉とは裏腹に、どこか焦燥が感じられ、先ほどまでの余裕を失っているようでもあった。

それに気づいてもなお、ルキアはミカヤに一気に告げる。

「殿下、クラヴィーエ公と手を取り合うことはできぬのでしょうか？ あの方は決して殿下を蔑ろにされているわけでも、自らが王になろうとされているわけでもありません。むしろ、宰相として長年この国のために尽くされてきた方です。今のうちに宮廷が二つに分かたれていては、内政に混乱が生じかねません。これ以上廷臣らの派閥争いを助長するようなことはお止めください」

ミカヤは眉を吊り上げる。

「お前は、私に譲歩せよと言うのか？ 父上がもはや君主として体をなしていないのだから、王の代わりとなるべきは王太子である私のはずだ。だというのに、閣僚らはその正統性を認めんと言わんばかりに私を爪弾きにしており、キイルは宰相でありながら、その状況をいまだに放置しているのだ。それが蔑ろにしているわけではないのなら、一体なんだと？」

これは、今までに二人の間で何度も繰り返されてきたやりとりだった。そしていつもこれ以上話が進むことはない。ルキアはミカヤを諷めたいとは思うものの、彼にはそれ以上の言葉を持ち合わせてはいない。

時折窓に打ちつける風が、冷えた空気をさらに寒々しいものへと変えていく。

ルキアが黙り込んだままだと、ミカヤは耐えかねたように立ち上がった。そのまま身動き一つとらないルキアに近づき、彼の手から水晶の埋め込まれた聖杖を奪う。

「なぜ、お前が司祭などになってしまったのだろうか？」

ぞっとするほど冷たい声だった。

ルキアは空になつた手を所在なげに下ろす。

「ああ、たしか父上のご命令だったな。元よりお前には司祭になどなる気はなく、クラウス殿もお前ではなく弟のほうを後継に指定していたというのに……。昔からドートリツシュの人間はあの方の我儘に振り回されてばかりで難儀なことだ」

ルキアが息を呑むと、ミカヤはわずかに表情を緩めた。

「お前は幼いころから高位司祭の叙階を受けるに相応しい力を有していたようだが、侯爵家の生まれで、学問にも武芸にも秀でているとくれば。司祭などになるよりも相応しい地位があったはず。……ルキア、教会になどさっさと見切りをつけてしまえ。私がこれだけ期待をかけているというのに、なぜお前はいつまでも司祭の地位にこだわっているのだ？」

ミカヤはそう口にしなから内陣を進み、祭壇を一段一段上り始めた。ルキアはその後ろ姿に声をかける。

「こだわっているわけはありません。わたくしはドートリツシュの当主として、司祭となるのが当然の道であるだけのことです」

「ならば、当主の座を弟に譲ってしまえばすむ話だろう。父上がなんのためにお前をマーシエル主教の側近に据えて宮廷に上げたと思っっている？ 本来の目的さえ達成されれば、なんにも司祭などにせずともよかったはずだ」

「おっしゃっている意味が……」

「父上はお前への負い目から、傍に置いて目をかけずにいられないのだ。はぐらかすのでもいい加減にしろ！」

ミカヤは声を荒げて振り返り、祭壇の上からルキアを鋭く見下ろした。ミカヤの目からは、ルキアの反応に対する怒りがほとばしっていた。

「……司祭となったのは国王陛下のご命令であると同時に、わたくし自らが選んだ道です。ですから、わたくしはもう、他の何者にもなるつもりはございません」

ルキアには、ミカヤの言葉と視線を真正面から受け止めることができない。だからいつもこうして甲斐のない言葉だけを繰り返し、ミカヤの怒りだけを受け止めるようになっていた。

ミカヤは辟易したようにルキアをにらみつける。

「お前のくだらぬ感傷に付き合うつもりはない。予定通り、シベリ―軍の討伐は断行する。よって、司祭の軍事投入も変えるつもりはない。私はこの戦にすべてを賭けているのだ。私に従うと決めたなら邪魔はするな！」

その力強い声は、聖堂内に響き渡った。ルキアは俯き、祭壇を降

りるミカヤの靴音を聞いていた。

徐々に近づいてきていた音が途絶える。

ルキアが顔を上げると、そこにはミカヤの冷たい笑みがあつた。

「ルキア、いつそあの蛮族を根絶やしにしてこい。そして、必ず生きて戻ってこい。数え切れぬ者を手にかけ、それでもなお聖職に留まろうというのなら、いずれお前に主教の地位を約束しよう。そして血濡れの手には主教の聖杖を握るがいい」

ミカヤはルキアの腕を掴み、奪った聖杖を手の中に戻す。
持ち慣れたはずの杖が、重くルキアの手には重かった。

「お前が私の戴冠を行うというのも一興だろうか？」

ミカヤが身をひるがえすと、黒い外套と赤い髪がルキアの腕をかすめていった。その名残を追いかけるように、ルキアは扉への通路を進んでいくミカヤをじっと見つめる。

再び重い扉が開かれたとき、厚い雲の切れ間から降り注ぐ陽光がミカヤを照らした。

（次期国王はこの方をおいて他にない……）

いかに不遜に振舞われようとも、ルキアがそう思わずにはいられないほどに、ミカヤは王者たる風格をその背に漂わせていた。

雪にけぶる視界へと (2)

ルキアは聖堂から出て、空を見上げた。

陽光がうつすらと照っているにもかかわらず、雪の勢いは強く、春先だというのに積もりそうな降りようだった。

風にまかれる長い髪を手で押さえながら、石段を降りていく。

「ルキア様」

呼びかけに引かれ、ルキアは西塔のほうへと視線を向ける。

そこには青色のドレスに身を包み、毛皮のケープを肩に掛けた少女が立っていた。彼女は、ドートリツシュ本邸近くに住む貴族の娘、ベアトリス・レイヴァンだった。

「来ていたのか、ビビ」

「ええ……。先ほど、ミカヤ殿下がいらっしゃっていたのですか？」

「殿下にお会いしたのか？」

「いいえ。ただ、王家の馬車が止まっているのが見えたので」

ビビは栗色の巻き毛に手をやりながら、物言いたげにルキアを見上げる。いつもは明るい光を宿している金茶色の瞳は、不安をにじませていた。

「ビビ、どうした？」

「あの、ルキア様は戦争に行かれるのですか？ 学校で噂になっているのです。高位魔法を扱う司祭までもが徴兵されることに決まったと。それは、ルキア様も行かれるということですよ？」

シベリー軍の討伐だけでなく司祭の徴兵までもが噂として広まっているようだった。既に予測されていたことだったが、それが決定事項として広まっていることにルキアは少し驚いた。

ビビの学校には高位司祭の身内の者がいるのだろうか。
ルキアはビビの正面に向き直る。

「ああ、そうだ」

「それでよろしいのですか？」

「よいもなにも、既に出撃命令を受けてそれに承諾した」

「殿下のご命令であれば、どのようなものであっても従われるというのですか？」

ルキアはビビとのやりとりに既視感を覚えた。

それが先日のエリーヌとの会話だったと思い出し、短く嘆息する。どのよう言葉を繕おうとも、彼女たちを納得させることはできないだろう。そもそも、ルキア自身が納得していないことを、他者にどう理解させるといえるのだろうか。

ルキアはビビの肩のあたりに視線を落とし、一息に告げる。

「奴らは異教の蛮族だ。仕方あるまい」

「異教の蛮族だなんて、ルキア様の言葉とは思えません。シベリーはその容貌や習俗から軽蔑されているとはいえ、我々は先住民である彼らを尊重せねばならない……。そうおっしゃっていたのはルキア様ではありませんか！」

ビビとエリーヌとの違いは、言葉に棘を孕んでいるかどうかぐらいのもので、二人の考えは同じなのだろう。おそらく、彼女たちに限らず、反発を感じている者は軍にも教会にも多数いるに違いない。

「……理不尽に思っても、従わねばならぬことがある」

結局、ルキアに言えることは、この程度のことではなかった。たしかエリーヌにも同様のことを言ったと思い出し、口元に自嘲を浮かべる。

「生意気なことを言ってすみません。お辛いのはルキア様だということに」

そう呟いた後、ビビは悲哀を漂わせながら俯いた。

ゴースティン＝ルドリア教会において、司祭の位は十五になれば賜うことができる。

ビビは優れた魔力を有し、既に十六歳になっているので、今すぐにもでも高位司祭となることができるだろう。もしビビが高位司祭となっていれば、彼女は今回の戦への徴兵対象となっていたのだ。彼女がまだ叙階を受けていないのは教会傘下の学校を卒業していないためであるが、この心優しい少女が戦場に遣われずにすんだことがせめてもの救いだとルキアは思った。

「今回の戦はシベリー軍の殲滅だけなのだから、それほど長引くことはない。だからすぐに戻ってこられるさ」

ルキアが笑いかけると、ビビは小さく頷く。

「無事にお戻りになられるよう、お祈りをいたします。それで私が司祭になったら必ず私をルキア様の弟子にしてくださいね」

それはルキアがこれまで散々ビビにせがまれてきたことだった。こんなときにまでをその頼みごとを繰り返す様に、ルキアからは自然と笑みがこぼれた。

「ああ、約束する」

「……でも、ルキア様。クラウドおじ様があんなにも早くお亡くなりにならなければ、ルキア様は司祭におなりではなかったでしょう？」

まだ諦められないのか、ビビは妙なことを言い始める。

「なぜ、そんなことを？」

「だっておじ様は、ルキア様を司祭にさせるつもりはないっておっしゃっていました。ルキア様だって、どのような道に進まれても良いようにと、様々なことを学んでいらっしやっただけではありませんか」

父がそのようなことを口にしていたのはルキアも知っている。

——この子を教会と関わらせるつもりはない！

もう十数年も前、父が誰かに対しそう言い放っていたのをルキアはなんとなくだが覚えていた。いつも穏やかな父が声を荒げていたため、その言葉だけが深く記憶に刻まれていた。その理由はいまだによくわからないが、そんな父の意思に背いた道を歩んでいる自分を不孝者だと思う気持ちはあった。

「すみません！ 今さらこんな話……」

知らずのうちに表情が硬くなっていたのだろう。必死に謝るビビに、ルキアは首を振る。

「それでも私は父上のようになりたいと思っていたし、幸いにも魔道の才にも恵まれていたから、進んだ道は間違っていなかったと思っているよ」

ルキアは、誰に教えられることもなく、幼いころから魔道を扱うことができた。これはルキアに限ったことではなく、ごく少数ではあるものの、生まれながらに魔道の操る力を有する者は存在する。

もっとも、このような才能を有さずとも、正規の教育を受けることでその力に目覚めることは可能であり、力の程度によらず魔道を扱う者はすべて＞魔道士くと呼ばれる。そのような魔道の教育機関はすべてゴースティンⅡルドリア教会の傘下であり、教育を修めた者の大半は教会に属し、教会に属した魔道士のみが＞司祭くと呼ばれることになる。

ルキアの場合は、父による手ほどきと独学により、八つになるころには高度な魔道を操るに至っていた。

ビビはじっとルキアを見上げる。

「変なことばかり言ってすみません。でも、もしルキア様がミカヤ殿下にお仕えしていたら、前線に出られるなんてことにはならなかったんじゃないかって思ってしまったて」

「かといって、軍人になっていれば、今と同じことになっていただろうさ」

「たしかにそうかもしれませんが。でもっ……！」

ルキアはビビの肩に手を置く。

「……どの道に進んでいたとしても、いずれなんらかの壁と向き合わねばならない時が来る。そのときに、おいそれと自分の選んだ道が過ちであつたなどと思っではいけない。本当に過ちであるならば認めなければならないが、今の私がそんなことを考えるのは逃げているだけなのだから……」

ルキアは微笑みを残し、その場を後にした。

雪にけぶる視界は、さながら、ルキアの進まんとする道のように薄靄うすもやに包まれていた。

ひらひらと雪は降り積もる。

彼の語った言葉を何度も胸に刻みつけるように。

足枷

白羊宮はくようきやうの月、一日。

本日午前十一時、フェルダ大聖堂に国内のルドリア教の司祭らが一同に参じた。

高位司祭の合議は特別なことがない限り開かれないが、高位司祭及び下位司祭のすべてを集めた定例会議は三か月ごとに行われることとなっている。

このフェルダ大聖堂は、国内外のルドリア教会において最高峰の聖堂として位置づけられている。それはかつてこの聖堂に教皇座が置かれていたことによるが、その他にも歴代主教らの遺体が埋葬されていることに加え、聖イシスの遺灰が安置されていることも大きい。

王都には他にガルバンヌ大聖堂もあり、こちらでは国王の戴冠式が行われたり、王家縁の者が埋葬されることとなっている。

ゴースティン＝ルドリア教会は王家の従属組織とはいえ、ガルバンヌ大聖堂は建設されてからまだ二百年程度しか経っておらず、フェルダ大聖堂は千年近くもこの地で権威の象徴とされてきたために、依然としてフェルダ大聖堂のほうが上位に置かれている。

定例会議が開催されるのは翼廊の最上部にある大会議場で、高位司祭二十一名、下位司祭約二百名が集っている。

この円形会議場の天井は高く、天井及び側壁には原始教典の内容が壁画とレリーフで表現され、最前部の総議長席の上方には、宗教画家ノワイユの手による巨大な絵画が議場を見下ろすように設置さ

れている。その絵は殉教者イシスが四人の弟子たちに自らの力を受け継がせる場面で、死の間際の情景ながら明るい色彩で描かれており、慈愛にあふれてさえ見える大作である。

総議長席のすぐ後ろには四大司祭が二人ずつ対座し、他の高位司祭は、前方の机とは切り離された別の席に叙階された順に着席している。

本来、総議長席の隣には主教席も設けられているのだが、現主教デルタ・マーシエルは病のため長らく定例会議には参加していない。そして下位司祭らの席は、中央の高位司祭らが着く議席を囲むように設けられている。

先日、高位司祭のみが参加する臨時会議が開催された。その場において、エーゼン・サルファよりシベリー討伐への高位司祭の徴兵決定とその詳細内容が報告されたが、下位司祭らはまだその決定の経緯をろくに知らない状態であった。

そのためエーゼンが先日の臨時会議での内容を述べた途端、下位司祭らを中心として議場は紛糾した。

「――では、合議すら行われなかったとあなたはおっしゃるのか！」

「サルファ司祭、あなたは総議長とはいえ、越権行為も甚だしい！」

「我らは戦場へ赴くために司祭の道を志したのではない！」

騒ぎ立てる司祭らに、エーゼンは冷たい光をたたえた視線を向ける。

「殿下のご所望は、高位司祭、とりわけ四大司祭の面々です。あなた方ではありませんよ、ご安心なさい」

エーゼンの言葉に、司祭らは一瞬押し黙ったものの、じきに怒号が舞い始める。

その一方で、徴兵を受ける当の高位司祭らは、一人を除いて口を噤んだままでいた。

高位にある者ほどエーゼンの顔色をうかがう傾向にあるが、それはエーゼンが総議長の地位にあるという以外に、元大司教の家系という彼の背後にある権力に拘まっているからでもある。

ゴースティン＝ルドリア教会は他国のルドリア教会とは異なる組織系統を有している。

三百年前に教皇位と司教位が廃されたことにより、国内の司祭には高位司祭と下位司祭の二階級のみとなり、その結果、最高位たる主教でさえ高位司祭の主席という以上の権力を有しなくなった。総議長や四大司祭といった地位もあくまで高位司祭の中の役職という扱いで、他の高位司祭の権限とさほど変わらない。だからこそ、かつての教皇位・司教位の権威が依然として作用しているのである。

組織系統以外にも大きな違いがある。

多額の寄進により高位が得られる他国の司祭とは違い、ゴースティンの司祭は魔道を扱えることが必須条件であるため、“実力主義”とも評されている。特に高位司祭は一定水準の高度な魔法を扱えることが求められるため、いかに財を積もうと手に入れられる地位ではない。

その一方で、下位司祭に求められている力の基準は極めて低く、育成機関において修練を積みれば大半の者が下位司祭の地位を手に入れることができる。

ただし、その育成機関の授業料は富裕層でなければ払えないほど高額であるため、下位司祭のほとんどが貴族の次男・三男で占められている。それゆえ下位司祭には、生家の宮廷における権力関係がそのまま反映されることとなる。下位司祭にはいくつかの派閥が形成されているが、ここ数十年、下位司祭を取りまとめているのは、国政と同様に王弟派の貴族出身者による派閥であった。

このような教会と有力貴族の癒着による派閥形成は、政治の腐敗につながるとされる。

たとえば今、徴兵されるわけでもない下位司祭がエーゼンに対し怒りを露わにしているのは、王太子命令にあっさりと従ったエーゼンの行動が、王弟派の者たちにとって不利益となるからである。ゴースティンでは聖職者が政に介入することを固く禁じており、教会権力が国の政治方針に干渉するなど許されないが、下位司祭には閣僚や上級将校の血縁者が多く、間接的に政治に影響を与えることが可能となる。

ゴースティン＝ルドリア教会が他国の教会より清廉潔白であるなど、とても言えたものではない。

荒れる議場は、エーゼンの毒を孕んだ説得によって徐々に鎮静化の兆候が見え始めていた。

下位司祭らも、このような場でどれほど騒ぎ立てようと、事態は好転しないとわかっている。シベリー討伐に関する全権は王太子ミカヤにあり、ミカヤには命令を撤回する気がまったくないため、司祭の徴兵決定が揺るぐことはない。

それでもなお、なにか文句を言わずにはいられないのだ。

ルキアは机上で指を強く組み合わせ、下位司祭らの無意味な主張に耳を傾けていた。彼らの主張はことごとくエーゼンにより潰されていき、次第にその矛先は、他の高位司祭にも向けられるようにな

った。

「ドートリツシュ司祭、あなたのお考えは……」

最後の細い糸へ縋るかのように、一同の目はルキアへと注がれた。その瞬間、エーゼンが口元に笑みを浮かべるのをルキアは横目でとらえた。

ルキアは自嘲を噛み殺し、少々早い口調で告げる。

「司祭である我らは、本来、政に関与すべきでなく、戦に与するなどもっての外である。しかし、これは王太子殿下のご命令であり、それを覆すことはできぬ。ゆえに、我らの進むべき道は一つである」

ルキアの冷やかに聞こえさえる言葉に、四大司祭の一人、ローザン・ゲーブルが声を荒げる。

「ルキア殿、あなたはオトウール王家に肩入れし過ぎておられる！ 亡きクラウス主教は教会の国政への関与を一切断つよう腐心されてきた。その後継であるあなたが、なぜ、それをなさろうとしない！」

真正面から発せられたゲーブルの怒声は、物理的にも精神的にも耳に痛いものであった。

なにも言い返そうとしないルキアに対し、さらにゲーブルは当てこするような物言いをする。

「あなたの事情は理解しておるつもりだが、ドートリツシュの当主ともあろう者がなんと不甲斐ないことか。……まあ、クラウス主教とて合議決定において国王の外戚の権力に屈されたこともあったと

聞くがな。まったく、司祭が王家と深く関わるから弱みを作ることになるのだ。私情でしか動けんのは、私欲に忠実なのと変わらん。どうせ、あなたもあの王太子にそこをつけ込まれたのだろう？」

ゲーブルの声はそれほど大きなものではなかったが、ちょうど議場が静まり返っていたため、その声は近くにいた高位司祭だけでなく離れた位置にいる下位司祭にもはっきりと届いていたようだった。ざわつきが波紋のように広がっていく。

「謝ってください！」

下位司祭議席の後方から鋭い声が響き渡った。

その声は、ルキアにとって聞き覚えがあるようでいて、これまで耳にしたことがないような響きを持っていた。

ルキアはまさか、と思いながらも後ろを振り返り、声の主を見やった。亜麻色の髪 of 青年は、彼は議場の前方へと進み出ながら、ゲーブルをにらみつけた。

「そのような放言、我が父と兄への侮辱に他なりません。謝ってください！」

「下位司祭ごときが偉そうな口をきくな！」

ゲーブルは激昂して立ち上がり、ルノーをにらみつけて咆哮を飛ばしたが、ルノーはひるまず応酬を繰り返した。

会議場の空気は一転していた。

ゲーブルの意見は下位司祭らと共通しているが、その下位司祭らを侮辱する発言により、彼は約二百名の支援を失った。

ゲートルは元々ゴースティンの人間ではなく、王家への敬意はほぼ皆無であるため、王弟派や王太子派などといった宮廷の派閥に興味がなかった。そんなゲートルの関心はひたすら自分の益につながるものばかりで、高位司祭の間でも彼は煙たがられており、殊にエーゼンとは誰の目にも明らかなほど不仲であった。

そのためか、エーゼンは総議長であるにもかかわらず、彼らの諍いを治めようとしなない。

ゲートルの隣に座する四大司祭リーヴァ・エクランドが見かねて、ゲートルを制しようと声をかけたが、彼の耳には入っていないようだった。

「ドートリツシュ本家の嫡子でありながら、下位司祭の叙階しか受けられんとはな。分家の者が三人も高位司祭となっておるというのに憐れなものだ。人には向き不向きというものがある。柔弱な貴族の子息は宮廷で王族の機嫌でも取っておれ！」

「あなたこそ、四大司祭という高位に就いていながら、ずいぶんと品位を欠く行いをされているそうではありませんか。以前から思っておりましたが、あなたの振舞いは神に仕える司祭のものではありません。司祭には魔道士とは違い、敬虔さや清廉さが求められていることをご自覚ください！」

「なんだと、この――」

ゲートルが罵声を発しようとしたとき、ルキアの隣から低い笑い声が漏れる。

その声は四大司祭クユラ・ウェーリックのものだった。ウェーリックは慌ててそれを咳でごまかそうとしていたが、その挙動は自然極まりなかった。

なおも、ゲートルとルノーの舌戦は、着席したままのルキアの頭上で飛び交っていたが、それはもはやただの罵り合いと化していた。

ルキアは、弟の短慮な行動に頭を抱えなくなった。

普段ルノーは気弱とも呼べるほど穏やかな性格で、怒って声を荒げることなどまずない。それほどゲートルの言葉に腹を据えかねたのだと思われるが、長年ともに過ごしてきた弟の意外な姿にルキアは困惑を隠せなかった。

とはいえ、会議場でのこのような振舞いを放っておくこともできない。

前を向いたまま、背後のルノーに告げる。

「ルノー、下がちなさい」

「ですが兄上……」

「いいから下がちなさい！」

ルキアはゲートルではなくエーゼンに向き直り、頭を下げる。

「失礼を……」

「いいえ」

エーゼンはさもおかしそうに首を振る。

ゲートルは、いつもは青白い肌を真っ赤にしながら、荒々しく椅子に腰かけた。

ルキアはちらりと後ろのほうを見やったが、ほぼ末席にいるルノーは人陰に隠れてしまい、ルキアの席からは見えなかった。その瞬

間、胸を突き抜ける鋭利な痛みをルキアは感じた。

下位司祭に派閥があるのと同様に、高位司祭にも派閥は存在する。ルキアは司祭になるまで知らなかったが、クラウスはサルファ家の司祭を敵視しており、エーゼン、そしてその父ロジェと激しく意見を対立させることが多かったという。ゲーブルが司祭となったのは今から五年ほど前のことであるが、彼はエーゼンを毛嫌いしていたため、クラウスに好意を抱いていたようだった。クラウスの死後、サルファ家に反目する司祭らはルキアに多大な期待を寄せていたが、その思惑が外れたことが彼らの苛立ちにつながっていた。

ルキアは、なにもできない自身を齒がゆく思っていたが、今日ほどそれを強く感じたことはない。ルキアはクラウスの遺志を継ぎ、教会内の不正を糾さんとしていたが、王家や有力貴族といった権力の渦に巻き込まれてしまった以上、父と同じ手を取ることは叶わなかった。

「皆様、もうよろしいではありませんか」

そう言って立ち上がったのは、最年少の高位司祭ラウル・アシリングであった。

「シベリー討伐は神が我々に与えられた使命であると私は思っております。四大司祭の方々の力をもって奴らを葬り去るのは、聖戦と呼ぶに相応しいものなのですから」

アシリングは揚々と語りながら、長い金髪を指で背に流した。

よくも聖戦などという言葉が出てくるものだ。ルキアは思う。かの聖戦においては、イシスは圧倒的に戦力差のあるヴァーロンの軍勢と戦った。彼は長年ヴァーロンの暴政に虐げられていた民た

ちのために立ち上がり、その命を捧げたのだ。

しかし、現状においてゴースティンはシベリーに支配されているわけではない。戦力にしても、シベリーだけが相手ならば西方軍の四分の三ほどを投入すれば事足りるにもかかわらず、高位司祭までを加えようというのだ。この戦は、圧倒的戦力をもって異民族に戦をしかけるもので、大義などありはしない。

アシリングの独演はなお続く。

「高位司祭である私の力は、四大司祭の方々には到底及びませんが、それでも国のため、そしてこのルドリア教会のために尽力したいと思っております。皆様、考えてもみてください。この戦は、ルドリア教会の司祭が人知を超える力を有しているということを国内外に示す好機なのです。愛や友情などはすぐに消えてなくなるものですが、恐怖はそう簡単には消えません。畏敬……いえ、畏怖を与え、ることこそが、教会の威信を復活させるもっとも有効な手段なのです」

まるでエーゼンの受け売りのような言葉であった。

ラウル・アシリングはリーヴァ・エクランドの従弟であるが、穏やかで柔和なエクランドとは正反対の人物である。強い力に惹かれる質で、エーゼンに心酔している。彼に野心などないが、好戦的な態度を見せることが常であり、他の司祭らと衝突することもしばしばであった。それはエーゼンも同じであるが、アシリングの場合はそこに悪意がない点が異なっている。

大会議場にいるほとんどの司祭たちは、アシリングの発言に啞然としていた。彼と同じような考えを持つ者は少なからず存在するが、それをそのまま口に出そうとする者はいない。司祭という立場上、決して言葉に出してはならぬと弁えているのだ。

アシリングの主張に異論を唱える者も賛同する者もいなかった。
要は、これ以上議論を交わせるような空気ではなくなっていた。

それにて、白羊宮の月の定例会議は閉会されることとなった。

足枷（後書き）

【補足説明】

白羊宮の月Ⅱ四月

嘲笑

会議終了後、ルキアは喧騒から逃れるように議場を早々に去り、回廊に囲まれた中庭へと出た。外気は少し冷たいものの、陽が差ししているため寒さは感じなかった。

数週間前にはまだ冬枯れの状態であった芝生は、もうその半分ほどが新芽に生え変わっており、春の気配を所々に感じる事ができる。

この中庭には聖堂の大柱が完成した当時に植えられた薔薇の木が茂っており、あと二か月もすれば白い薔薇が一面に咲き始めることだろう。

今年はその薔薇を目にすることはできるのだろうか。

ルキアは心を静めるように目を伏せたが、背後から近づく気配に、目蓋をうつすら押し上げた。

「ルキア殿、先ほどは失礼を申し上げた」

先ほどとは違う、酷く慇懃な声色だった。

ルキアは振り返り、一礼する。

「いえ、私のほうこそ本当に失礼をいたしました。ゲーブル殿のお怒りはもつともですし、多くの司祭らが承服しておらぬ以上、発言に気を遣うべきでした。ただ、ルノーの軽率な振舞いについてはどうかご容赦ください。弟はなにも知らぬものですから……」

ゲーブルが言い放った「司祭が王家と深く関わるから弱みを作ることになる」というのは、クラウスがアルトⅡヴィジェ王の寵臣であったことを指しているわけでも、ルキアがミカヤの学友であったことを指しているのでもない。あの場にいた大半の司祭はゲーブルの真意を知っているはずだが、それを知らないルノーは、なんの根拠もない侮辱だとは思わなかったのだろう。

いつかはルノーにも話さなければならぬこととはいえ、できることならば、話さずにいられればよいとルキアは思っていた。

ゲーブルは太めの眉を寄せ、腕を組む。

「私とて、司祭の徴兵に反対したところで意味がないのはわかっているのだ。それに、高位司祭の力――すなわち＞念くを込めた魔道の力についてだが、私はあれを戦争に利用するというのは良い手だと思っている。かつて強い＞念くを込めて力を放つてみたことがあるが、最新の砲弾の五倍の威力はあると知り合いの軍人が言っておったぐらいだからな。……だが、＞神の力くについては別だ」

ゴースティンⅡルドリア教会は、黎明期に作成された原始教典よりも一千年前の聖戦後に作成されたアルゼ教典に重きを置いているため、＞四大司祭くという他国にはない地位が存在する。

＞神の力くとはイシスが死の直前に弟子たちに与えたとされる力であるが、ゴースティンⅡルドリア教会はその力を密かに受け継いできており、その継承者に与えられる地位が四大司祭なのである。

＞神の力くはルドリア教会最大の権威であると同時に禁忌ともされており、継承者たちはその力を使ってはならないという一見矛盾したような戒律が存在する。

そのため、教会関係者でも＞神の力くが存在を知らない者は多く、四大司祭は高位司祭の中から特に強い魔力を有する者が選出されているだけなのだと思われる。

「あの若造……ラウル・アシリングは＞聖戦くなどと言っておったが、まったくけしからんことだ。誰もあの男を咎めなんだが、まあ、それも致し方ないだろう。下位司祭らは＞神の力くが実在していることすら知らぬ者が多く、高位司祭はそれを他言することが禁じられておるのだからな。ルキア殿、今ここで正直なお気持ちを聞かせ願いたい。……あのような力を戦争に用いることについて、あなたは どう思われているのだ？」

ゲーブルの声色は威圧的であったが、その瞳の奥にはルキアへの懇願が宿っているようにも見えた。

ルキアはわずかに目をそらす。

「私たちがあの力を用いれば、より早く戦に決着がつくのではないかと思っておりますが？」

「そうではない！ 禁忌とされている力を使うことに抵抗はないのかと訊いておるのだ！」

ゲーブルは鋭利な声を放ったが、すぐに口を噤み、苦々しげにため息を吐く。

「……私は、まだ物心もつかぬころから魔道を操ることができた。私の力を忌まわしいと蔑んできた者たちを見返してやりたいと思い、この国の高位司祭となることを決めた。ゴースティンのルドリア教会は私のような力を持つ者が多数おり、その力が尊ばれているとくれば、故郷を捨てることにまったく抵抗はなかった。むしろ清々しささえ感じた。＞神の力くの継承者に選ばれたときも、その感動に身が打ち震えたほどだ。このような栄誉は、片田舎の魔道士であれば決して手に入られるものではなかったと、自分の選んだ道は間

違ってはいなかったのだと、心からそう思ったのだ。……しかし、次第にこのような力を手にして本当によかったのだろうかと思うようにもなっておる」

「ゲーブル殿、あなたが気にされているのは、これまで四大司祭の地位に就いた者が皆、短命であることですか？」

ルキアはゲーブルに柔和な視線を投げかける。

そこには憐みに近い、共感が込められていた。ゲーブルが感じているものはまぎれもなく恐怖であることはわかっていた。

ゲーブルはルキアとの距離をつめ、小声で告げる。

「マーシエル主教は、もう長くはないのだろうか？　＞念くを込めた魔道を放つとき、司祭はなんらかの代償を払っているとされる。それは精神力であるとも生命力であるとも言われるが、おそらくは、そのいずれでもあるのだらうな。あなたは四大司祭にしか言及されなかったが、実際には高位司祭が四十やそこで命が絶たれる例が少なくない。儀式の際に用いる程度の、ごく弱い＞念くしか込められていない魔道ですら、それほどの影響があるということだ。あなたはそれを知っておられるというのに、なぜ、＞神の力くを使おうなどと思えるのだ……！」

ゲーブルの言うように、たしかに高位司祭には短命な者が目立つ。この国の貴族の平均寿命が六十歳半ばとされており、下位司祭らも同様であることを鑑みると、四十前後で亡くなるというのは早死と言えないこともない。

ただ、高位司祭は数が少なく、個々の価値が非常に高いため、一人失われるだけでも人々の記憶に残りやすいという側面もある。特にドートリッシュは主教や四大司祭となった者が多いので、その死により与える影響は非常に大きなものだった。

「たしかに、私の父などの例もありますが、受ける印象ほど、高位司祭らが早くに亡くなっているわけではないと思います」

「まあ、クラウス主教の場合は、サルファ一派による暗殺ではないかとも言われているがな」

「まさか……」

それはありえない、とルキアは苦笑まじりにそれを否定した。その話はルキアの耳にも入っていたが、それはただの噂であるとして信じていなかった。もちろん、ルキアにサルファ一門を庇うつもりなどない。

クラウスの死はあまりにも急なものだった。マーシエルのようにはっきりと病の兆候が表れていたわけではなく、所用により赴いていたフェルダ大聖堂で突然倒れ、そのまま亡くなったのだ。ルキアは父の最期を看取することは叶わなかったが、凶報を受けてすぐに聖堂へ駆けつけ、その遺体と対面した。

クラウスにはおよそ暗殺の痕跡というものは見られなかった。刃物を用いようと毒を用いようと、一切の痕跡を消し去ることはできない。たとえそれが魔道によるものであろうとも。

（あれは暗殺などというよりは、むしろ……）

ルキアは過去の情景を振り払うように一度強く目を閉じた。

それでもやはり、高位司祭の代替わりが下位司祭と比して激しいのは事実である。そのため、信徒の間では、教会内部の権力闘争に敗れた司祭は毒や秘術などを用いて暗殺されているのではと噂され

ているほどである。

 教皇の時代ならばそのような事例もあったかもしれないが、不自然な死には検視が義務づけられている現在において、その噂を本気にする司祭はまずいない。

「いくらなんでもそれはありません。たしかに父はサルファ一門の者と反目し合っていたようですが、父の死を彼らの手によるものであるとするならば、サルファ殿の父君ロジェ殿の件はどうなります？　ロジェ殿の死も、父やドートリッシュ一門の者の手によるものですか？」

 エーゼンの父ロジェ・サルファは、今のエーゼンと同じように総議長の座に就いていたが、十年ほど前に亡くなっており、当時二十歳になったばかりのエーゼンがサルファ家を継いだ。

 ロジェは四十を過ぎたところから労咳とよく似た症状に悩まされ、医師の診断では奇病とされた。これはマーシエルも同様で、特異な症状が見られるわけでもないが、徐々に身体が衰弱しており、現在の医学では治療を施しようがないのだそうだ。

 もっとも、そのような例は国内の至るところにあふれており、なら特別なものではない。

「あれは私にとって不愉快な噂にすぎません。理由もなければ、証拠もございませんから」

「ならばなおのこと、魔道の乱用は命を縮めることになりかねないというわけではないか。教会が暗殺を行っているなどという前時代的な噂がまことしやかに流れるのも、高位司祭らの死が不自然だと思われるがゆえだろう。……まったく、このようなことになるなら魔道士のままでおればよかったものだと思う。司祭などただ窮屈なだけだ」

ゲーブルは不満げに吐き捨て、栗色の短髪をかきむしりながら、回廊のほうへ向けて歩き出した。

ゲーブルが先ほど語っていた司祭の道を選んだときの想いは偽らざる気持ちなのだろうが、今現在、司祭の地位を忌々しく思っているのもまた彼の本音なのだろう。

この大陸には特別な修練を積まずとも魔道を操ることのできる者が稀に存在するが、彼らのすべてがルドリア教会に属しているわけではない。ゴースティンにおいて司祭はある種の特権階級であり、^{あずか}榮譽に与ることができる反面、教会に属することで様々な戒律が課せられるため、あえて魔道士の道を選ぶ者も珍しくない。

ローザン・ゲーブルも、元はそんな魔道士の一人だった。

ゲーブルの苛立ちはまぎれもなく恐怖によるものなのだろう。ゲーブルが司祭となったこの五年の間に、クラウスが死に、マーシェルも明日をも知れぬ命とくれば、固い意思を砕かれたとしても無理はない。

「本当に、ゲーブル殿には困ったものですね」

ルキアの背後から声が投げかけられる。

「あの者は力にこそ優れ、四大司祭の地位を戴いてはいますが、あまりに短慮な気質で、教会の権力者の器ではありません。あのお人好しのルノー殿ですら、不愉快に思われるほど品性の欠片もない……。所詮は、平民出身の司祭、といったところでしょうか」

「司祭となる条件はなにも貴族に限られてはいないでしょう。それとも、そのような新しい規律ができたのでしょうか？」

ルキアは振り返ることもせず、エーゼンに言葉を返す。その声には吐息が混じっていた。

「規律ではなく慣例というものですよ。私が申し上げているのは、金のために身売りした者に司祭としての矜持を求めるのは無駄だということですよ」

ゲートルが司祭になったのは、彼の優れた力を噂で聞きつけた教会関係者がゴースティンの司祭になるよう打診したのがきっかけである。

ゲートルはケーニヒス辺境の農村で暮らしていたが、当時彼は二十代半ばで、若さゆえに野心もあり、ルドリア教会の高位司祭となる道を選んだ。その際に、多額の報奨金を教会より得るに至ったが、それもまた“慣例”によるものである。

ゲートルの素行は褒められたものではない。暴飲に賭博、女遊びなど、司祭になったことで得た生活の余裕を自らの快樂のためだけに費消し、同輩から教会の品位を落としてしまうと散々批判されている。

ただし、教会にはゲートルと大差ない不行跡を働く司祭も珍しくなく、金に物を言わせて司祭の地位を得た貴族に批判される言われはないと、ゲートルは開き直る始末であった。

「そうそう、私の知る限り、ゴースティンの王族が司祭となった例は、教会の長い歴史の中でもございませんでしたね」

「それが一体なんだと言うのです？」

「ミカヤ殿下は、いずれ王権によるルドリア教会掌握を実現なさりたいそうですよ。そのために、ルキア様が主教になればよいとおっ

しゃっていました」

ルキアが絶句しているうちに、エーゼンはルキアの前へと回り込んだ。

「ルキア様は“実力主義”ともいえる教会の体制がお嫌いのようですが、それはルノー殿が日陰者であることを忍びなく思われるからでしょう？ ドートリツシュを継がれるのは本来ルノー殿であったそうですが、当主が下位司祭では話になりませんかからね」

反駁しようとしたルキアを制するように、エーゼンは言葉を重ねる。

「あなたはいずれルノー殿に当主の座を譲り渡されるおつもりでしょうですが、はたしてそれはルノー殿のためになるのでしょうか？ 却って、弟君に肩身の狭い思いをさせてしまうだけなのでは？」

「だとしても、それは父が決めたことです」

「現当主は、クラウド卿ではなくあなたです。ドートリツシュとサルファにのみ聖職者でありながら婚姻が認められている理由、そのすべては私たちの身体に流れる＞古代人＜の血統を維持していくために他なりません。その重要性を今一度お考えになってはいかがです？」

「……下位司祭が当主になっては、特例を設けた意味がなくなる、と？」

「ええ、その通りですよ」

エーゼンの背後から差す陽光が、彼の顔に暗い影を落とし、ルキアはその表情を掴むことができなくなった。

沈黙がしばし続いていたが、ルキアの耳に深いため息を吐く音が届く。

「ルドリア教の起こりは原始教典によると一千五百年ほど前とされていますが、そのころはまだルドリア教の司祭は魔道を扱える者はおらず、イシスの聖戦以降になって強い魔力を秘めた司祭がゴースティン地方を中心に現れるようになったようです。ちなみに、アルゼ教典に記されている、イシスの＜神の力＞を受け継いだ司祭というのはドートリツシュの者であったとか……。その真偽のほどはわかりかねますが、聖戦後、ドートリツシュ一族は教会内で強い権力を有するようになり、その百年後には教皇としてルドリア教崇拝圏において権勢を誇るようになったとされています。教皇の側近であったサルファの当主もまた、強い魔力を有する司祭であったようですが、以前より、このような強い魔力を有する者たちは、＜古代人の血が強く出ているのではないかと言われてきました。すなわち、魔力の強さを左右するのは古代人の血の濃さにあり、その血統の保持する必要があると考えられたのです」

現在、ドートリツシュ家はルキアを含めて四名の高位司祭、サルファ家はエーゼンを含めて五名の高位司祭を輩出している。それに加え、主教のデルタ・マーシエルも母系を辿ればサルファ家の遠縁に当たり、またリーヴァ・エクランドはかつて大司教であったところからサルファ家に仕えてきた司教の子孫に当たる。高位司祭の数は規律で定められているわけではないが、二十名前後で推移しており、教会組織の変革から三百年の間、ドートリツシュ及びサルファに連なる者だけで高位司祭の約半数を占めることが常であったと伝え聞く。

ルキアが黙り込んでいると、エーゼンから嘲笑が漏れる。

「初めて知った、というような顔をされていますが、私たちに様々な特権が付与された経緯すらご存じではないのですか？」

「あなたのほうこそ、どうしてそんなに……」

「一族の史書が遺されているからですよ。それは代々サルファの当主が受け継いできたもので、まったく同じ内容ではないにせよ、ドートリツシュにも一族と教会の関わりについて詳しく記された史書が遺されているはずですよ。もちろん、書には残さず、親から子へ口頭で伝えていく類のものもあるでしょう。クラウス卿が急死されたため、あなたにお伝えできなかったのは、仕方がないのかもしれないが……。だからと言って、ルノー殿がご存じとも思えませんからね」

高位司祭と下位司祭は聖職者という区分は同じであるものの、本質的にはまったく異なるものであり、下位司祭が高位司祭に昇進することはありえない。それゆえ、高位司祭は概して下位司祭を軽く見ているが、サルファ一門の者はその傾向が強く、特にエーゼンはそれを隠そうともしない。

ゲーブルの場合は自らの強い力を顕示する結果、下位司祭への侮辱につながっているだけだが、エーゼンの場合は表面を柔和に繕っているものの、力弱き者への侮蔑が露骨に感じられるのだ。

ルキアは苛立ちとともに声を低く抑え、エーゼンに問う。

「一つ、お訊きしてもよろしいですか？」

「ええ、どうぞ」

「＞神の力＜の使用を教会が禁じていたのはなぜです？　その禁を破れば、なにかが起るとでも？」

「あなたほどの方が、なにを怯えておられるのです？」

「怯えてなど――！」

自分の一挙一動がエーゼンの手の内で踊らされているように感じ、ルキアは語気を強めた。

エーゼンは笑いをこらえるような素振りで、顔にかかる前髪を後ろにかき上げた。

「使用することよりも、継承することそれ自体が禁忌なのではないでしょうか？　本来、あれは人が手にすることはない神の力。それを手に入れようなど人間の驕りに他なりません。ですから、むやみに使用することを禁じたのは当然ではないかと。ただ……あなたの不安を煽ることになるかもしれませんが、あえて申し上げておきます」

エーゼンは赤褐色の瞳を酷薄に細め、口角を上げた。

「先ほどあなたとゲール殿がお話しされていたように、強い＞念＜を込めた魔法は身体への負担を伴いますし、禁忌魔法におけるそれは、＞念＜を込めた他の魔道と比にならないのは事実です。また、いかに強い力を放つことができたとしても、あなた方は神ではありません。生身の人間です。……どうぞ、戦場では充分お気をつけになってください。権威の象徴である四大司祭が戦で命を落とすなど、あってはならないこと。司祭の徴兵はミカヤ殿下にとって宰相や大臣の反対を押し切るための口実なのですから、我々が前線で命を張

る必要はないのです。戦など軍人に任せ、あなたは適当にあしらっておられればよろしいのですよ」

それでは、と微笑み、ルキアの心中を散々かき乱してエーゼンは去って行った。

ルキアはその後姿が消えるまで、身じろぎせずに見えなくなっても、しばらくの間、そこから動く気にはなれなかった。

光と影

フェルダ大聖堂からドートリツシュ邸に戻ってから、ルキアは屋敷の離れにある書庫にこもっていた。この書庫はドーム型の建物で、最上部には三十を超える採光用の窓が設けられており、今日のような晴れた日の昼間ならば、ランプを持ち込まずとも充分な明るさが保たれている。

書庫には、現実に数えたことがないため定かではないが、十万冊を超える蔵書がある。王立大学の図書館に置かれていない書物や、一般に出回っている本の原本も多数残されているため、教授や研究者たちが本邸の書庫を訪れることもしばしばある。

ルキアは幼いころからこの書庫にある本をたくさん読んでいた。そのころは比較的近年に出版された図鑑や文学が主だったが、長じてからは勉強に直接関わるもの以外目を通すことはなくなった。教会に関する書物に手をつけることもあったが、司祭を目指していたわけでもないルキアにとって、それらの書物は学ぶ必要のないものだった。

司祭の息子でありながら、教会の歴史や教義、内部規律について深く理解してこなかったというのは少々問題があるのかもしれない。だが、それはルキアが自ら学ぼうとしなかったわけではなく、クラウスがルキアに深く関わらせないようにしていたためである。

いずれミカヤに仕えるためにと、まずは一般教養を、その次には法学や政治、経済の勉強に力を注ぐべきであるというのが父の教育方針だった。その次に力を入れていたのは剣術や馬術といった武芸方面であり、音楽や美術といった芸術方面については必要最低限の知識と技能しか身につけていない。一応、舞踊ダンスも教育課程に含まれ

ていたが、今となつてはあまり必要なかったとルキアは思っている。

跡取りであつたルノーへの教育方針は、ルキアとは正反対と言えるほど異なつた。

ルノーは司祭とならねばならず、ルドリア教についての深い知識と理解が求められており、それに加えて魔道の修練も必要であつた。しかしルノーは身体が弱いこともあり、あまり勉強に打ち込むことはできず、武芸に至つては、剣など握つたこともなく、馬にも一人で乗つたことはない。また、ルノーはルキアのように宮廷を出入りすることも、貴族の邸宅での夜会に出席することもなく、十七歳で下位司祭となるまで、ほとんど屋敷の外には出ることのない生活を送つていた。そのせいで世間擦れしておらず、年の割に幼いと感じられることがある。

ルキアは濃緑に金の縁飾りが施された本を抜き出し、脚立に腰かけた。適当に頁をめぐつてい^{ページ}ると、背後から聞こえていた靴音が徐々に大きくなる。

「ああ兄上、ここにいらつしやつたのですね」

ルノーが足早に駆け寄り、脚立の上のルキアを見上げた。

「ずいぶんと根を詰めて書を読まれているようですが、ご無理はなさらないでください。また、お身体を壊されます」

ルキアはふつと微笑む。

「この程度のことと病を得たりはしない」

「ですが、つい数日まで酷いお風邪を召されていたと聞いておりま

す」

ルノーは二年前に司祭となってから、ドートリツシュ家の領地の一つであるデフトール伯爵領へと移り住んだ。そして今日のように定例会議が開かれる日に合わせて王都へとやって来て、本邸に一週間ほど滞在し、再びデフトールへ戻るという生活を繰り返している。そのため、ルノーはこの十日ほどの間に宮廷と教会で起こった一切のことを知らなかった。

昨夜、夕食の後でルキアはルノーにシベリー討伐と高位司祭の徴兵の件について告げたが、そのときのルノーの驚愕はルキアの予測を越えていた。ルキアがどれほど言葉を尽くして説明しようとしても、ルノーは驚きのあまり思考停止に陥っており、話が遅々として進まなかった。

「少し、気になることがあったのだ」

「シベリー討伐の件ですか？」

「それだけではないよ」

ルキアはそう答えながら本を閉じ、棚へと戻した。

その背表紙には、ジーゼル・サルファと著者名が金字で記されており、ルノーが目敏くそれを見つける。

「その書物、教会が禁じているものですよね。たしか、＜古代人＞についての記述が虚構じみているとかで」

古代人――この書の中では＞ティード族＜と記されている。＞ティード族＜とは、ガレ族が台頭する以前に大陸北中部に居住し、高度な文明と特殊な力を有していたとされる少数民族で、原始教典の

中にも登場している。

一千年前に起こったイシスによる聖戦以後、>ティード族<に関する記述がどの文献にも遺されておらず、絶滅した、もしくは、初めから架空の存在であったと言われているが、ジーゼルの著書の中では、民族としての結びつきをなくし、ゴースティン地方に拡散していったと記されている。

著者のジーゼル・サルファ―エーゼンの祖父に当たる人物は、教会の高位司祭であったが、同時に歴史研究家でもあった。彼はアレシス大陸の王朝研究において多数の論文を発表しており、五百年から千年前の歴史研究においては第一人者とされている。

その一方で、大陸各地で伝承として残っている>ティード族<についての研究書物も執筆しており、この書物においては、教会の高位司祭たちの力は>ティード族<に所以するのではないのかとの記述がなされている。これについては信頼に値する原史料の公開がなされておらず、ジーゼルによるまったくの推測にすぎないとして、教会はこの著書を否定している。

しかし、この数百年の間に蓄積された史料を見れば、強い魔力を有する者にはなんらかの血脈が影響していることは明らかであり、ドートリツシュ家やサルファ家が高位司祭を確実に輩出してきたこともそれを裏づけていると言っているのだろう。

教皇の一族のドートリツシュ。そして、大司教の一族のサルファ
……。

この両家を二大柱としていたかつてのルドリア教会は、なにもゴースティン王国にのみその力を及ぼしていたわけではない。このアレシス大陸にはいくつかの民族が混在しているが、ガレ族はゴースティン・ケーニヒスといった二大大国を構成する多数派民族であり、そのガレ族が唯一崇める神、それがルドリア神である。ゴースティンもケーニヒスも、古来より小国家群を束ねる王朝が勃興して

は衰退し、それを繰り返していくごとに力を及ぼす規模は膨大なものになっていったが、そんな王朝盛衰の背後に存在し続けたのがルドリア教会であると言われている。

脚立から下り、ルキアはルノーの前に立つ。

「……ルノー。なぜドートリツシュやサルファにだけ王から特権が与えられているのか、お前は知っているか？」

ルノーは目を瞬かせたのち、小首を傾げる。

「あ、えっとそれは……ゴースティンの王が“呪い”を恐れたからでは？」

ルノーの返答を聞き、ルキアは嘆息する。

「あれ、違いましたっけ？　そういう風に聞いてたんですけど……」

「間違っているわけではないが、ルノーは呪いなどというものを信じているのか？」

「いえ、僕は信じてませんよ。でも、当時の人は信じてたんだろうなって」

ルノーがあまりに明るく答えるので、ルキアは拍子抜けしてしまった。自然と笑みがこぼれる。

三百年前、ドートリツシュがエクシユールの支配権をオトウール王家に譲渡した経緯について、表向きは王権と教会の和解によるものとされているが、その深部に触れることは禁忌である。

エクシユールはゴースティン王国内にありながら、王権が一切及ばない教皇の領地であったが、国内にはこの他にもたくさん教皇領が存在し、ルドリアの司教たちの手によって統治が行われていた。加えて、ゴースティンの民の大半が敬虔なルドリア教信者であるため、民は王よりも教皇に畏敬を抱く傾向にあった。オトゥール朝に先立って興ったギルベイド朝、ハーシェリオン朝の時代においては、教会勢力が王権に介入してくることが珍しくなかったが、オトゥール王家は教皇の権勢を殺ごうと画策し、代を経るごとに教会権力との対立関係は激化していた。

そしてオトゥール朝第八代国王の時代において、とうとうゴースティン軍はエクシユールの教皇宮を包囲し、教皇国の解体と軍の解散を教皇に迫るまでの事態に至った。

包囲戦の最中、両者の間で和平交渉が行われようとしていたが、その矢先、宮殿に侵入していたゴースティンの間者が教皇エルジェ三世を殺害し、その首を上げた。

教皇の死はゴースティン国内に衝撃を与え、教皇領を制圧しようとする国軍と教皇軍との間で激しい武力衝突が生じた。

ちょうどそのころ冷害により飢饉が起こり、民は食糧不足に喘いでいたが、戦により状況は深刻化し、農村部では死者が多発する事態に陥った。さらに折悪しく、エクシユールを含むゴースティン中西部において疫病が蔓延し、数万もの民が命を落とし、国軍の指揮を執っていた王太子までもが病に倒れた。民衆はそれを“呪い”によるものだ恐れ、国王への反発が高まり、各地において信徒らによる暴動が起きた。

事態の収束を図るため、国王はドートリツシュ家及びサルファ家の地位の保証と、現在もなお続く特権の付与について記した勅書を発令することとなった。また、教皇の殺害は不測の出来事であり、

王の意思に沿ったものではなかったとの主張がされたが、それまでの両者の対立状況を鑑みれば、宮殿に侵入していたのは間者ではなく、当初から刺客として放たれたものだと思えるのが自然であろう。

結果として、ドートリツシュとサルファがオトウール王家の支配下に置かれたことで、国内外のルドリア教会の組織体系は一変した。国内のルドリア教会はゴースティンの国教会として新たに生まれ変わり、他国のルドリア教会はゴースティンとは異なる独自の組織体系と教義を持つことになるのである。

ゴースティン王はエクシュールへの遷都は果たしたものの、それから数十年は王家の権威回復に注力しなければならなかった。

その一環として、教会に多額の寄進を行い、ガルバンヌ大聖堂の建設にも着手した。これもすべて、王や貴族らが内心では“呪い”を恐れていたためである。

「教皇が亡くなった途端、民がばたばた死んでいく事態になれば、怖くなるのはわからないでもないですけど、でもやっぱりあんなの偶然だと思えますよ。だってほら、教皇の統治下でも飢饉や流行り病は起こっていたわけですし。それに、ドートリツシュ家やサルファ家に特権を与えることで、事態が沈静化するのを期待されても困りますよね。僕たち、神様じゃないんですから」

ルキアとルノーは顔を見合わせて笑った。

「そうだな。もういい加減、過去のしがらみからは解放されたいものだと思う」

「僕も同じです。まあ、一族の者でいまだに王家に反発心を抱いてる者もいますけれどね」

「叔母上か……。あの方は、教皇一族を崇拝しておられるからな」

ルキアとルノーの叔母——イザベル・ドートリツシュは、クラウスの妻セルフィナの妹であり、クラウスにとっては義妹であり、従妹でもあった。つまり、イザベルとセルフィナの父は、クラウスの父方の叔父である。

これまでドートリツシュ一族は血族間での婚姻を結ぶ例が多く、千年をゆうに超える歴史を持つ家系であるにもかかわらず、あまり血族が拡散していない。ドートリツシュ家には司祭職に就いていないが、婚姻が特別に認められているが、その半数近くがあえて婚姻しないことも理由の一つである。

現在のドートリツシュ本家は、教皇エルジェ三世の直系筋ではなく、五百年ほど前に分かれた支流の末裔に当たるが、クラウスの母は教皇一族の出であり、分家にも一族の娘が嫁ぐ例が稀にあったため、本家にも分家にも教皇直系の血は受け継がれており、彼らがエルジェ三世を殺害したオトウール王家に強い遺恨を抱くのは無理からぬことであった。

「そもそも特権といっても、あまりありがたくないですよ。与えられた領地は、元々ドートリツシュが保有していたものですし、侯爵位や伯爵位とかの称号にたいした価値は見出せませんから。……ああ、これは叔母上からの受け売りです。でも僕自身、デフトール伯爵って呼ばれても実感沸かないですよ。襲爵してもう二年が経ちますけど、伯爵って呼ばれたのは数えるほどしかありませんし」

「お前も宮廷を出入りしていれば、称号で呼ばれる機会も多いだろうが……」

「僕は兄上みたいに宮廷仕えなんて無理ですよ。田舎の教会で神父

をやってるほうが性に合ってるんです。母上はよく、王都での暮らしは自分に合わなかったって言うておられますけど、たぶん僕も同じなんだと思います」

「……そうか。今の生活がルノーに合っているというのなら、それでいい」

ドートリツシュが王家から与えられた領地は、セヴァンスというエクシュールの北にある保養地で、現在ルキアが侯爵位とともに継承している。

セヴァンスには教皇の夏の離宮があり、三百年前からエクシュールを去った教皇の末裔が暮らしていた。夏の離宮は現在アルティス城と呼ばれており、ルキアは幼いころから毎年夏になると避暑に訪れていた。

ドートリツシュにはセヴァンス以外に、デフトール地方とマジエスタ地方の伯爵領も与えられており、これらを継承したルノーはデフトール屋敷に住まい、その教区にある教会で聖職に就いている。

「ところで兄上……」

「どうした？」

「今日は本当に申し訳ありませんでした。僕があのようなことを言ったところで、兄上に恥をかかせてしまうだけでしたのに……。僕は昔から兄上にご迷惑ばかりかけて……。本当にすみません」

「いや、議場ではお前を咎めたが、久しぶりに面白い出来事だったよ。あそこは息が詰まるから、ああいう騒動もたまには悪くないと思う。ウェーリック殿も笑っておられたしな」

ルキアは議場でのやりとりを思い出し、声を立てて笑ったが、ルノーは表情を硬くする。

「……いつも、ああなのですか？」

ルキアは苦笑を浮かべる。

「兄上、どうしてなにも言い返されなかったのですか？」

「私が父上のように振舞えたなら、あの者たちもなにも言わぬだろうな」

「そんなことはありません！ 兄上はよくやっておいでです」

「そんなことを言ってくれるのはお前だけだろうな」

二人の会話が途切れたとき、書庫の入口が開き、ベルチェがルキアたちのほうへと歩み寄ってきた。

「ルキア様、馬車のご用意ができました。そろそろお発ちになられたほうがよろしいかと……」

「ああ、わかった。ではルノー、私は少し出かけてくる」

ルキアは身をひるがえそうとしたが、ルノーの声がそれを制する。

「マーシエル様のもとへ行かれるのですか？」

「ああ。先方に様子をお伺いしたが、ここ数日は落ち着かれています。最後にお会いしたのは、もう二か月近く前になるが、その

ころ既にずいぶんと弱っておられた」

「そういえば、前回の定例会議にも出ておられませんでしたね。たしか、その前も……。本当に心配です。なんとか回復されればよいのですが……」

ルノーは悲痛に眉を寄せ、声を震わせた。

栄華を極め、成熟した文化を誇るゴースティン王国……。

国家間の戦も、疫病の蔓延も、干ばつや冷害による飢饉も、それらの記憶は遠く過去に捨て置かれ、死が身近な存在ではなくなってきた。それは王族や貴族に限らず、裕福な平民たちも同様である。

その結果、死というものに対し極端に憶病になる者が増え、さらに、風邪のような病や切り傷程度の怪我に対しても、過剰に反応するようになっていく。

研ぎ澄まされていく繊細な感性は、次第に退屈や虚無を恐れるようにもなり、享楽に溺れて恐怖を忘れようとする者もいれば、恐怖を受け入れていくうちに死への憧れを抱くようになる者もいた。それは目の前の現世を夢で塗り潰しているかのようでもあった。

このような感性がはこびる今の時代、もっとも恐怖を味わうのが、近しい者を失ったときである。ルキアにとっても、ルノーにとっても、そのすべては父の死に集約されている。人々の心が弱くなっていることを嘆く者もいるが、それこそが平和の証であると考えている者も多く、血生臭い時代に還るべきだなどと考えている者は稀であった。

悲壮な決意

ルキアは数日前の約束通り、四時過ぎにデルタ・マーシエルの邸宅を訪れた。

マーシエル邸は王都に多い青銅色の屋根に象牙色の外壁を持つ屋敷で、敷地はそれほど広くなく華美さもないが、庭も室内もよく手入れが行き届いており、清潔さにあふれた空間であった。マーシエル家はサルファ家の遠縁に当たるが、家柄としては貴族の中では下位に当たり、宮廷への出入りも認められておらず、官位に就いた者もない。嫡子以外は聖職に就く者が多く、長年慎まじやかな生活を送っていた一族だった。

もともと、デルタが主教及び宮廷司祭長となってから、マーシエル家はその地位による特権を享受できるようにもなった。

高位司祭には教会領の一部が一代限りで付与されるが、四大司祭・総議長・主教ともなれば、その割り当てられる領地も広大なものである。高額な俸給に加えて、領地収入までが手に入るため、有力貴族並の生活が可能となる。

しかし、デルタ・マーシエルの私生活は、オルガン演奏や静物のスケッチなどの趣味を楽しむ質素なもので、余剰の俸給は病院や施設への寄付に充てることも常だった。そんな彼の清貧で慎み深い人柄は、誰もが認めるものであり、信徒の間でも非常に人気のある主教であった。

ルキアもまた、そんなマーシエルのことを尊敬していた。そして二人はルキアが司祭となったときより師弟の関係にある。

ルドリア教会の高位司祭は、強制ではないものの、弟子を持つことが推奨されている。師弟関係は高位司祭と下位司祭の間で築かれることが大半であるが、叙階された順の先後により高位司祭同士がその関係を築くことも稀にある。

この制度は当初、師匠が弟子を教え導くという意味合いに留まるものであったが、いつのころからか師匠の持つ権力の後継者という見方をされるようになってきた。

そのため、弟子の思想や立場は師匠のそれと同一視され、派閥形成を助長することにもなり、もうずいぶんと前から本来の意味合いは薄れてしまっている。それでもルキアがデルタと師弟関係を結ぶに至ったのは、立场上、ルキアを教え導くことのできる人間はデルタをおいて他にいなかったからである。

司祭となる者は、大抵の場合、修道士としての修業を一定期間積んでいるものであるが、ルキアは十七のとき急遽司祭となることが決まり、ただちに高位司祭の叙階を受けたため、なんの知識も心構えも持ち合わせないまま教会の権力者の一人となった。

当時、教会内にはドートリッシュ一族の高位司祭が数名いたが、彼らが一族の当主であるルキアを弟子とするのは少々問題があった。そこでクラウスの友人であり、新たに主教に就任したデルタがルキアの師となったのだ。

生前クラウスは主教であるとともに、宮廷司祭長の地位にあったが、デルタはその二つを同時に引き継いだ。それに伴い、弟子であるルキアはデルタの補佐として宮廷に召されることとなった。

初めてデルタとともに王宮の礼拝堂に出向いたときのことを、ルキアは今でもはっきりと覚えている。

王宮の礼拝堂はこれまで数え切れないほど足を運んだ場所だったが、祭服に身を包み、これまでと逆の位置から宮廷貴族らを目にし

たとき、自分という存在を失念しかけたほどだった。それは落胆であり、強い諦念でもあったが、どこか晴れやかでもある不思議な心地だった。

デルタのもとで司祭としての役割を果たしていくにつれ、心は平穏を取り戻し、初めのころに感じた落胆は影を潜めていった。

ルキアは過ぎ去った日々を懐かしみながら、首から下げた聖イシスのメダルに触れた。

それは高位司祭の叙階を受けたとき、主教より賜ったものだった。

ルキアは初老の執事の案内で、デルタの寝室へと向かった。

そこはとても静かな部屋だった。壁紙も涼しげな水色で、大きな窓からは午後の柔らかな光が差し込んでいたが、中央に置かれている寝台が白い寝具ばかりで統一されているため、静謐さよりも寒々しさを覚えた。

ルキアは少し離れた位置から、寝台に横たわるデルタの姿を見つめる。

酷いやつれ様に、思わず息を呑んだ。眼窩は落ち込み、頬はこけ、病状は落ち着いたと聞いていたが、二か月前よりもはるかに病は進行しているようだった。

「……マーシエル様」

声を震わせないように、ルキアは平坦な声を出すように心がけた。

「ルキア、来てくれたのか……」

身体を起こしかけるデルタを制しようと、ルキアは寝台に駆け寄

った。

デルタは深く息をつきながら身を横たえ、軽く目を閉じる。その様子を見ているうちに、ルキアはまったくの平静ではいられず、少し声を乱した。

「ご無理をなさらないでください。皆、マーシエル様のことを心配されているのです」

「……情けないことだ。呑気に寝ておる場合ではないと言うのに」

今、この国でなにが起ころうとしているのか、デルタは知っている。さすがに今日の定例会議の様子までは把握していないと思われるが、シベリー軍の討伐、そして司祭の徴兵についてはエーゼンから聞き及んでいるはずである。

「ですが、どうか今はご自分のことだけをお考えてください」

「そういうわけにもいかぬだろう。それに、私は一日中このように天井ばかりを眺めているのだ。なにか思案にでも耽っておらねば、他にすることがない。いくら考えても、答えなど見つかりはせんがな……」

自嘲するような口ぶりではあったが、決して自らの職責を放棄しているようなものではなかった。

ルキアは呆然と立ち尽くしていたが、デルタに勧められ、寝台の脇に置かれた丸椅子に腰かける。

「王命には逆らえぬ以上、私は了承の意思を示さざるを得なかった。……私にこのようなことを言う資格はないが、司祭らの力をこのようなことに使ってほしくはない。変えられぬこととはいえ、私の中

には後悔しかないのだ」

膝に置いていたルキアの手には、デルタの手が伸びる。

「ルキア、お前の秘めている力はたしかに強い。だが、戦などに用いてよいものではない。敵兵とはいえ、相手は我らと同じ人間だ。それでもお前は、敵を滅せなどと、念じることができるのか？　そして戦が終わったとして、お前は信徒らの前でなにを祈るというのだ？」

喉の奥で声が鳴った。

既にその覚悟はできていると、ルキアはデルタに答えようとしていた。それは、デルタを納得させるためだけでなく、自分自身を諦めさせるためのものだったが、デルタを前にすると上手く口にすることができなかった。

「クラウドと私がお前に魔道の扱い方を教えたのは、決してこのようなことをさせるためではないぞ」

ルキアを諭すような穏やかな声色だった。

六歳になるころ、ルキアは既に＜念く>をもって魔道の力を放つことができた。しかし、ルキアは自らの力を持て余し、制御できずに暴発させることが度々あり、適切な対処を教えねば、自身も周囲の者も傷つける危険性があった。

クラウドとデルタはまだ幼いルキアに魔道の扱いを指南し、力は不用意に使ってはならぬと厳命してきた。ルキアはその言いつけを十七になるまでずっと守ってきたのだ。

「そもそも父は、私を司祭にさせるおつもりではありませんでした

から」

「まったくお前は、まだそんなことを言っておるのか」

「いえ、私は司祭の道を選んだことを後悔しているわけではないのです。少なくともあのときは、私が家督を継がねばならなかったのですから。ですが、いずれは……」

貴族が家督を継ぐには、成人年齢とされる十七歳以上である必要があり、それ以下の年齢であれば後見人を立てることになる。クラウスの死に伴い、ルノーではなくルキアが家を継いだのは、高位司祭の叙階をすぐにも受けることができ、なおかつ、成人年齢にも達していたということが理由の一つである。

当時十五になるやならずだったルノーも、今では十九となっている。ルノーの心情や性格をよく理解している母はともかく、叔母はいまだにルノーに家督を継がせたがっている。ルキア自身、あくまで自分は仮の当主であり、いずれ本家の正統な血筋であるルノーに家督を譲るべきであると考えていた。早いうちに自分の真意をルノーに告げなければと思いつつも、弟を前にするとなにも言い出せず、他愛ない雑談でその場を取り繕うのが常だった。

今日のルノーとのやりとりを思い出し、ルキアは嘆息する。

「お前はルノーに家督を譲り、司祭は辞するつもりなのか？ 反対はせぬが、四大司祭の地位を得てしまった後で司祭を辞するのは容易ではないぞ。おそらく、そのような前例はなかったはずだ。私もお前が>炎の司祭<に選定されるまでは実質的にその地位を手放すことはできなかった。だから少なくとも、新しい継承者候補が現れるまでは――」

「その心配は必要ありません。家督は譲っても、司祭を辞するつもりはありませんから」

デルタの問いをルキアはきっぱりと否定したが、ルノーに家督を譲ることもなかなか困難であろうとも思っていた。

「マーシエル様、私はもはや他の何者にもなることはできません。ですから、戦が終わった後も司祭であり続け、神に変わらぬ祈りを捧げることでしょう。それが私の選んだ道ですから」

ルキアはデルタに微笑を向けたが、デルタは眉間に深く皺を寄せるばかりだった。

「お前はなにもわかっておらぬ。いや、わかった上でのその言葉なのだろうが……」

「どうかもう、なにもおっしゃらないでください」

消え入りそうな声で告げ、ルキアはデルタの手を握り返した。

そのとき、扉の開く音が聞こえた。

ルキアが顔を上げると、入口には、柔らかな微笑を浮かべる壮年の女性が立っていた。

「ドートリツシュ司祭、あなたも来ていらっしゃったのですね」

エクランドはアシリングと同じ、長い金髪を揺らしながら、寝台の近くまで歩み寄ってきた。

「デルタ、思ったよりお元気そうで安心いたしました」

「ああリーヴァ、よく来てくれた。お前には前から話さねばならな
いことがあったのだが、なかなか私が人を呼べる状態ではなかった
のでな」

エクランドは寝台の前で膝をつき、デルタをさらに近くで見つめ
た。

「あのマーシエル様、エクランド司祭とお話があるのでしたら私は
これで……」

「いや、よいのだ。できればルキアにも聞いていてもらいたい」

デルタは立ち上がりとしたルキアを制し、窪んだ目に力を込め、
エクランドと視線を合わせる。

「リーヴァ、今日お前をここに呼んだのは、お前に教会のことを頼
みたいと思つてのことだ。おそらく、私の跡はお前に託すことにな
るだろうから」

唐突に振られた後継者問題に、エクランドは細い眉を寄せる。

「デルタ、私でよろしいのですか？ 私よりも相応しい方がおられ
るのでは？」

「現在、四大司祭長の地位にあるのはリーヴァだ。それにお前なら
ば派閥争いも激化せぬだろうと思つてな。……ルキアもそうは思わ
るか？」

ルキアが相槌を打つと、エクランドは苦く笑った。

エクランド家は旧体制下において、司教くを数多く輩出してきた家系である。

教皇や大司教とは違い、司教位にあった者たちには王家から特権を与えられず、また、エクランド家出身の司祭は他の司祭と同様に婚姻が禁じられているが、エクランド家はそれを合法的にこなしてきた一族である。

魔力の強さは血統に左右されるという仮説は、証明する手立てこそないものの、既に事実として扱われている。財産の分割を避けるために血族婚を好む貴族は多いが、エクランド家の場合、強力な魔力を生み出すために血族婚を行ってきた。婚姻が認められないため、秘かに儲けた子を兄弟や従兄弟らに養子として差し出し、彼らは血統の保持と家の存続に苦心してきた。

その甲斐あってか、エクランド家は数十年に一人は高位司祭を輩出してきており、今はリーヴァ・エクランドとその従弟ラウル・アシリングがともに高位司祭の地位に就いている。

ちなみに、この二人の表向きの関係は従姉弟であるが、血縁上の関係は叔母と甥である。

「デルタがそうおっしゃるならお引き受けしますけれども、総議長はどう言われるかしら？」

マーシエルは天井を見つめ、細く長い息を吐いた。

「……反対はせんだろう。エーゼン自身は主教になる気などないのだから。まあ、そうでなくとも、私はあれが主教になることには抵抗を覚える。ただでさえ、高位司祭の中にはサルファ家に気兼ねしてなにも言えぬ者が多いというのに」

力に優れ、清廉な人柄であったデルタが重い病の床に就いて一年近くになる。主教は教会の絶対権力者でないとはいえ、その権威を蔑ろにする司祭はおらず、主教の立ち位置が司祭の派閥に与える影響は少なくない。

そのため、クラウドが亡くなり、デルタが不在となってからは、サルファ一門の横暴が以前よりも際立ち始めたと感じている者は多い。

「それならば、ドートリツシュ司祭を後継に押されるべきでしょう。私としましても、かつての主筋に当たるサルファ家が相手では、やりにくさはございます。ですから主教は可能な限りドートリツシュの当主が担ってききましたのに」

「ですが私は……」

反駁しようとしたルキアに対し、エクランドは微笑で制し、デルタに向き直る。

「総議長はドートリツシュ司祭には敬意を払っておられますから、少なくとも高位司祭でドートリツシュ司祭に従わない者はいないと思います。……ゲーブル司祭は別ですけど」

「ゲーブルか……。あの者の素行は褒められたものではないが、世俗の権力関係をまったく引きずらぬところだけは好ましく思う」

デルタは力なく笑いながらも、エクランドにきっぱりと告げる。

「いずれにしても、叙階を受けた順を考慮すれば、私の後継はお前かクユラであろう。ルキアもゲーブルも司祭となって五年ほどしか

経っておらぬ。特にルキアはまだ二十一。お前の甥のラウルとは一つしか変わらんのだから」

「デルタ、私も一応女ですので、年齢の話はおやめください」

エクランドの冷ややかな声に、デルタは一瞬眉を上げた。

すぐにエクランドが、冗談です、と言って微笑むと、デルタは弾かれたように声を立てて笑った。

「そうであつたな、すまぬ」

「それに、そういったお話はまだまだ先にしていただきたいものです。私たちはただ、あなたの病状が落ち着いていると聞きましたからお見舞いに参っただけですのに。ねえ、ドートリッシュ司祭？」

「ええ、その通りです」

ルキアはなんのためらいもなく、素直にそう答えることができた。そのせいか、デルタのやつれた顔の中に、安らかな兆しが差して見えたような気がした。

この部屋に流れるのは、穏やかな空気だった。

ルキアはほんの少しの間、今自分の置かれている状況と、これから起こりうる事態とを頭の中から押し出していた。

まるで夢でも見るかのように、戦の終わった後のことを思う。

それは、どこまでも退屈で、そしてどこまでも平穏な日常であった。未来に馳せる情景は、ルキアの過去にあるものばかりに違いなかった。

三者三様 (1)

ゴースティン王国……。

アレイシス大陸南中部一帯を支配していたガレ族により建国された王国であり、幾度か王朝の変遷を経ていく中で領土を拡大し、現在、オトゥール朝第十六国王アルトゥヴィジェによる治世のもと、本国以外にも十を超える小国や島を属領とし、広大な領土と成熟した文化を持つ大国となった。

気候は穏やかで、南東部を中心に肥沃な大地に恵まれているために農業が盛んであるが、北部は歴史的に鉱工業や紡績業の中心地として繁栄してきており、これらの産業の発展は国内だけでなく諸外国にも多大な影響を与えてきた。銃や大砲の開発により戦争の様相や築城方式が大きく変化し、また、服飾や建築様式の分野においてはゴースティンが流行文化の発信地としての地位を確立するに至った。

この他にも多岐に渡る分野の学問が発展し、多くの書物が大陸中に出回っている。この大陸においてゴースティン語を公用語としている国は半数ほどであるが、それ以外の国も学問研究のほか、外交や社交のためにゴースティン語の習得に血道を上げている。

栄華を極めた王国の都には、五百年続くオトゥール王朝の象徴ともいえるエクシエール宮殿がそびえ立つ。

この宮殿には、本宮のほか、西側に王太子離宮とも呼ばれるアイオン宮殿を、東側にはその他の王族が住まうヴァンチェスタ宮といった離宮を構えている。

広漠とした庭園の中心には巨大な噴水が設けられているが、そこに施された壮麗な像や彫刻は叙事詩をもとにしており、美しい水の流れとともに訪れる者の目を奪う。

白羊宮の月、四日。

ルキアは久しぶりにエクシール宮殿に伺候し、大理石の廊下を王の侍従数人とともに進んでいた。

宮殿内には多くの絵画が飾られているが、国王の私室へ向かうまでの長い回廊には、王の肖像画をいくつも目にする事ができる。巻き毛を垂らした愛らしい幼児、王太子時代の凛々しい甲冑姿、即位したときの王冠を戴いた姿、成熟した風格を漂わせた壮年のころ……と、現国王の歴史を順に眺め、最後に現在の姿へと辿り着く。

王侯の肖像画は概して美化して描かれるものだが、若いころのアルトヴィジェ王はその必要のない容姿をしており、彼の姿を実物以上に描くことなどできないと、腕の良い宮廷画家たちを苦悩させるほどだったという。それを実際に知る者はいまでは限られてきているが、年若い者たちの間でも生き伝説として語り継がれている。

だからこそ、目の前にいる老王が、肖像画に描かれた人物の数十年を経た姿だとにわかには信じられないものがある。老いとは、時間の経過によってのみ起こるものではない。王は国の繁栄よりも自身の快樂を追及した人物であるが、その快樂の中に彼を疲弊させるものが数多くあったのだろう。

絢爛とした金細工の天蓋から、えんじ臙脂色の天鷲絨ビロードが波打つように垂

れ下がっている。

靴先が深く沈むほど毛足の長い絨毯の上を歩き、ルキアは寝台の前に跪いた。

王は皺の刻まれた目尻を下げ、ルキアに語りかける。

「病に伏せていたと聞いていたが、もうよいのか？」

「はい、ただの風邪でございましたので。長らく失礼をいたしました」

「風邪とはいえ、酷くこじらせておったそうではないか。これほど長く姿を見せぬから、お前の身になにかあったのではないかと……」

「ご心配をおかけして申し訳ございません。一週間ほどで回復いたしました。教会のほうで少々揉め事がございまして……そちらに手がかっておりました」

ルキアが屋敷にこもっていた約二週間の間、王宮より幾度が様子を見かがう書簡が届いた。王からの書簡はなにやら大袈裟な様相であったが、その内容はルキアの容体を案じることに終始しているものだった。

ルキアはそれらのすべてに対し早々の返事を王宮に届けたものの、それだけでは王の憂慮を解消するに至らなかったのだろう。

ルキアは漏れ出そうになるため息を押し留め、柔らかな声で問いかける。

「陛下こそ、お加減はいかがですか？」

そう口にしながら、ルキアは伏せていた顔を上げた。すると、皮膚の弛んだ青白い手がルキアの頬に触れる。

「本当に、お前は母親に似ておるな」

その言葉がしたたかに耳朶を打ったとき、ルキアは睫毛を震わせながらゆっくりと瞳を閉じた。

ルキアの貌かたちを確かめるように辿る王の指先は、どこか縋るような動きをしており、ルキアは物悲しきとともに虚しささえ覚えた。

「目に見えるものこそが揺るぎないもののだと、かつて余は思っていた。だが今、アズノエルについて思い出せることと言えば、静かな眼差しや佇まい、穏やかな声……そんなものばかりだ。ここ数年、様々な記憶が次から次へと余から遠ざかっていってしまう。そのたびに寄る辺のない想いを味わっておるが、ふとした瞬間に思い起こす無形の心象が余に安らぎを与えてくれるのだ」

「……それで、ございますか」

「不思議なものだな。お前には母親の記憶などほとんどないであろうに、これほどまでに同じ空気をまとっているのだから……」

かつての王は、ルキアの容貌にばかりアズノエルの面影を見出しているようであった。

しかし、そんな王の言葉は、あるときを境に変化が見られるようになった。

二年前の初冬、王は大病を患い、一時的に重篤な状態に陥った。なんとか回復はしたものの、それ以後は一日の大半を寝台の上で過ごすような生活を余儀なくされている。

宮廷医によれば、最近ではほとんど目が見えなくなってきたおり、光の加減や色の明暗ぐらいしか認識できていないとのことだった。

その証拠に、今日ルキアは祭服ではなく礼服をまとっているが、王はそれを訝る素振りを見せない。

実は今日の午後一時より、アイオーン宮において将校と高位司祭を集めての軍議が開かれることになっていた。その軍議にはルキアも参加するよう通知を受けていたため、ルキアはその時間に合わせて王宮へと向かったのだが、離宮の会議室に通じる廊下を歩いていたとき、王の侍従ら数名に出くわし、ルキアは本宮へと連れ戻される羽目になった。

国王直属の侍従は、長上着ジュストコールから靴に至るまで純白の衣装を身につけ、鬘かつらまで白いものを被っており、遠く離れた場所からでも目立つ出で立ちをしている。会議参加者で行き交う離宮の廊下の中央でそのような集団に取り囲まれたルキアは、耐えがたいほどの視線を集めることとなり、一刻も早くその場から離れたいという思いから、おとなしく王命に応じた。

もっとも、ルキアがどう言葉を尽くそうとも、王の侍従らは了承以外の言葉を受けつけることはなかっただろう。彼らは忠義に厚く、仕事熱心であるものの、あまりに融通の利かない者ばかりである。軍議への召集がかかっていると告げたにもかかわらず、ともかく早くお越しください、の一点張りで、まったく取り合おうとしなかった。

今、ルキアが王に召されたことに理由などない。

公式礼拝の最中でもない限り、いついかなる時でも、できる限り早く王のもとを訪れ、王が満足するまで夢物語のような話の相手をしなくてはならない。

これは四年前からルキアに与えられた役目で、ほぼ毎日のように繰り返されているものである。

アルトⅡヴィジェは先王の崩御により二十三歳で王位に就いたが、その数か月前、王太子時代において妃を亡くしている。熱愛していた妃と父王の立て続けに起こった死が彼に与えた影響は大きく、元来の内気で無気力な性格に、慈悲深さが混じるようになり、廷臣らのちょっとした諍いからも目をそむけるようになっていた。

ここ数年であれば、寵臣のクラウスが急死したこと、そして王自身も生死の境をさまよったことにより、絶えず夢を見ているような空気をまとうようになっていた。

ゴースティン国内において、王が国政の一切を王弟や廷臣に任せ切りにしていることは有名な話である。王が若く美しかったころは、宮廷でも民衆の間でも彼の人気は高かったが、長い間妃を娶らず、世継ぎを儲けなかったことにより、“多くの妾をはべらし政治を捨てた王”と嘲弄されるようになったらしい。

ルキアは幼いころから王の姿を何度も目にすることがあり、直接言葉を交わしたこともあった。

王は歴代国王のみが身につけることを許される緋色の外套をまとい、堂々とした態度で玉座に腰かけ、王者にふさわしい華々しい様相をしていた。

そんな王の姿が目には焼きついていたルキアは、王についての悪評を耳にしても、嘘や誇張が入り混じっているに違いないと本気にしなかったが、宮廷に上がるようになってからは、その噂が流説でも捏造でもなくただの事実だったのだと嫌というほど思い知ることになった。

聞くところによると、もう二十年も前から大臣たちは重要な閣議決定であっても王への報告は不要としているという。

何十年もの間、“お飾りの王”と諷^{そし}りを受けるぐらいならば、いっそ装飾でしかない王冠から解放されたほうがこの王にとって幸せ

だったに違いない。だが、ゴースティンの王位は終身制を取っており、譲位は認められていない。地位の安定を図るために設けられたその制度が、却って現在の宮廷闘争につながっているのは皮肉なことでと思う。

しばらくの間、沈黙が続いていた。

そんな中、王が記憶を手繰りよせるように、弱々しく口を開く。

「ミカヤの様子はどうか？ あれはまったく姿を見せんが……」

「近ごろはミカヤ殿下が中心となられる政務が増えておりますので、なにかとお忙しいのでしょうか」

「では、シベリー軍の討伐はどうなったのか？」

ルキアは言葉につまる。まさか王の口からその話題が出ると思っていたなかった。

これまで王は、政に関わる一切のことをルキアの前で口にするとはなかった。今年初頭にシベリーと西方軍の間で大きな紛争が起ったときですら、ほとんど関心を示さなかったのだ。

ルキアは動揺を抑えながら、淡々と答える。

「殲滅作戦が開始されるのは金牛宮きんぎゅうきうの月ですので、今はまだ出撃に向けて準備をされているところではないかと思われま

す」
「シベリーの紛争などいつものことであろう。ミカヤがどうしても言うから許可を与えたが、そのように大事おおごとにする必要もあるまいに」

ルキアが曖昧な相槌を打つと、王は身を大きく傾け、ルキアを覗

き込むように見上げる。

「ルキア、これはすぐに終わる戦なのであろう？　もしこれがきっかけて大きな戦につながりでもしたらと思うと胸が塞がれる思いがする。余は、もう誰かが死ぬところも悲しむところも見たくはないのだ」

ルキアは王の濁った瞳をまっすぐに見つめ、微笑みを返した。

「ご心配には及びません。陛下の御心を煩わせるようなことにはなりませんから……」

シベリー軍の討伐は、場合によっては数か国を巻き込む戦になる可能性があるが、ルキアはそれを王の前で口にするつもりはなかった。ルキアは王を心から敬うことはできなかったが、老いと病により気弱となった彼を苦しめることはしたくなかった。

王もまたルキアのそんな気持ちを察しているのか、それ以上深く問うことはしなかった。

この王は、なにもわかっていないわけではない。ただ、見たくないものからは目を塞いでしまう。かつて、青玉のような深みと輝きを持つと謳われ、多くの者を魅了してきたその瞳に、今はなにを映しているというのだろうか……。

王の瞳が視力を失いかけているのは、王自身が望んでいることのようにさえルキアには思えた。

さらに埒^{らち}もない会話が続けられていたころ、王の私室の扉がおもむろに開かれた。

こちらへと歩み寄る二つの人影を横目で捉えたとき、ルキアはすつと立ち上がり、寝台の脇へと下がる。

「兄上」

「おおキイル。お前がここに来るのは珍しいではないか」

王は暗く沈んでいた顔を一転させ、親子ほど年の離れた弟を迎え入れた。

クラヴィーエ公キイルは、先王とその二度目の王妃キャサリーゼとの間に生まれた第二王子である。キャサリーゼの生家であるハーシェリオン家は、先王の最初の妃を輩出したギルベイド家と双壁を成す権威ある家柄で、何百年にもわたり両家の間には強い軋轢が生じている。

そんな外戚同士の不和にもかかわらず、この王と王弟には比較的良好な関係が保たれてきた。キイルは王の娘たちよりも後に生まれたこともあり、王はキイルを息子のように扱い、誰よりも深い信頼を傾けている。

「ご無沙汰しており申し訳ありません、兄上。政務が立て込んでおりましたゆえ……」

キイルは理知的な青い瞳に、彼の情熱的な性格を表すような赤い髪を持ち、常に自信に満ちた笑みを口元にたたえている。ミカヤもキイルも、彼らはオトウール王家の紋章である黒鷲を思わせる風格を漂わせており、その意味で国王とは正反対の人物であった。

父に連れ立たれて宮殿に出向くことが多かったルキアは、幼いころからキイルのことを見知っていたが、彼からは慄然とするような

気迫を感じたものだ。それは宰相として、代王として、この国を統べる者としての威厳に他ならなかった。

その反面、時折、慈愛に満ちた言葉と笑みをミカヤやルキアに向けることもあった。それはもう遠い過去のことであるが、あまりに深く印象に残っているため、いまだに忘れることができないでいる。

王とキイルの会話に区切りがついたとき、キイルの後方に控えていた陸軍大臣ジーク・ラッセルが、ルキアに声をかける。

「セヴァンス侯、まだ少し顔色がお悪いが、ご無理をされているのではないのか？」

「いえ、お気遣い痛み入ります」

「愚息のために貴公をあのような目に遭わせてしまい、本当に申し訳なかったと思っている」

「そのようなこと……。あれは私の不注意ですのでお気になさらないでください。ご子息にお怪我がなくて何よりでございました」

「お身体には充分気をつけられたほうがいい。貴公は前線に出るのだろうか？」

「……ラッセル伯爵」

ルキアは思わずジークをたしなめるような声を漏らしたが、ジークはそれをまったく気に留めることなく話を続ける。

「今はたしか“赤の間”にて軍議が開かれているはずだが、貴公にも出席要請が出ていたのではなかったのか？」

ルキアはジークの問いには答えず、静かな視線だけを返した。

今、キイルとジークが王の私室に出向いてきたのは、偶然ではないのではとルキアは思った。

先ほど、王の前にいるルキアの姿を目に留めたとき、彼らは驚いているようにも見えた。だからこそ邪推であると思いたかったが、たった今ジークが軍議の話題を振ったのは、まぎれもなく害意が込められているに違いなかった。

ジークの言葉を王が聞いていなければいいとルキアは思った。

しかし、その思惑は儚くも碎かれ、普段は^{もつろく}耄碌しているはずの王がすかさず訊ねる。

「キイル、それは一体どういうことか？」

「兄上、やはりまだご存じではなかったのですか？ ミカヤ王子がルドリア教会の司祭をシベリーの討伐軍に加えることを決められたのですよ。前代未聞のことですし、私や閣僚らもお止めたのですが、王子がどうしても主張されましてね」

不敵な笑みをたたえながらキイルは答える。

こういうときの彼の顔は、本当にミカヤとそっくりだとルキアは思う。

「では、ミカヤはルキアを戦場に出すというのか？」

王は濁った瞳に悲哀を浮かべ、ルキアを見上げる。

「陛下、ミカヤ殿下には殿下のお考えがあつてのことです。魔道の

力を戦に用いるのは、これまでも検討されておりましたこと……。なにも特別なことはありません」

ルキアは王のために精一杯の気休めの言葉を取り繕うとしたが、ジークがそれをあっさりと遮る。

「工兵や衛生兵の補助として魔道の力を利用するというのであれば、私とて反対はせぬ。昨今、医学と魔道の融合はますます進んでおるようだし、優秀な司祭や魔道士を従軍させるのは当然のことだろう。ただ、どういう考えを持てば、高位司祭を前線に出すという結論に至るのか……。司祭らの操る魔道の力は強大なものという話ではあるが……。まったく、私の頭では到底理解の及ばぬこと。ミカヤ殿下は少し人とは違う思考をお持ちのようだ」

ジークの毒の含んだ言葉をほとんど聞き流しながら、ふとルキアは強い違和感を抱く。

今、アイオーン離宮で軍議が開かれているはずであるが、なぜ、キイルやジークが参加していないのだろうか。

シベリー軍の討伐は単なる報復ではなく、他国の軍隊の一部を殲滅するという意味合いを持ち、それゆえケーニヒスを敵に回しかねない危険を孕んでいる。いくらこの件に関しての全権がミカヤにあるとしても、事前交渉を行うためには宰相の力は不可欠であるし、軍の編成や配置、その他諸々の面で強い権限を有しているのは陸軍大臣のほうである。

大臣たちが出席要請を無視したのか、それとも王太子が彼らを排除したのか。

いずれにしても、出撃を控えたこの時期の軍議に、宰相と陸軍大臣が出席していないなど考えられないことである。しかし、それがありえてしまうのが、今この宮廷において勃発している“戦”ゆえ

のことだ。

「セヴァンス侯、貴公はご自分が徴兵されるにもかかわらず、いささかの異を唱えることもなく命令に従われたと聞く。それはそれで理解のできぬことだな」

ジークの鋭利な視線を受け止めつつ、ルキアはこれまで自分に言い聞かせてきた言葉を口にする。

「ラッセル伯爵がシベリー討伐に難色を示されているのは、自軍の兵を徒に消耗させぬためだと聞き及んでおりますが、高位司祭の操る魔道を用いれば、少しでも余計な犠牲を払わずにすみましよう。国にとって人は資源です。我らが出ることで多くの失われぬ命があるのではと考えております」

途中、ルキアの言葉にキイルの嘲笑が重なった。

「兵たちのために自らを犠牲にすることも厭わぬとは、見上げたものだ。だが、それは神に仕える者の言葉とは思えぬものだ。そなたは人を殺めることに抵抗がないと？ それとも、シベリーはルドリア教における“人”のうちに入らぬか？」

秘めた迷いを言い立てられ、ルキアの心に波が立った。

ルキアはミカヤの権柄さに少なからず反発心を抱いていた。しかし殊にキイルが絡めば、ミカヤの味方とならざるをえなくなる。

胸が、重く塞がれていく。それでも心にもない言葉を口にし、偽りの決心を守る壁を厚く塗り固めていくことしかできない。

「今回の徴兵命令に応じたのは教会の総意でありますし、教会の一司祭に過ぎぬ私が、それを反故にするわけにはまいりません。そも

そも主命の前では、私個人の感情など無意味なものですから。なに
より、シベリーによる暴動は我が国だけの問題ではありませんし、
いずれは決着をつけねばならぬことでございましょう。……失礼で
すが、クラヴィーエ公殿下」

ルキアはゆっくりとキイルを見上げる。

「シベリー討伐の件、元は殿下が主張されていたことでは？」

キイルはくつと柳眉を歪ませた。

「……私が今になって反対するのを奇妙に思うのか？　あの王子と
くだらない意地の張り合いをしているとでも？」

決してそうは思わなかったが、ルキアはなにも口にしなかった。

キイルは少し苛立たしげに息を吐く。

「私を非難しようというのか？　そなた……先ほど、主命の前では
私情など無意味だと申したが、いまや教会の中では主教に次ぐ高位
にある者が、教会の決定に盲従するとはどういうことだ？　なにも
せずに、ただ見ていただけか？」

ルキアはキイルに言葉を返そうとしたが、ジークがそれを遮る。

「セヴァンス侯、貴公とあの王子はまるで似たところはないと思っ
ていたが、その賢しいところはそっくりであられるな。長年連れ立
っていれば、次第に通ずるものができてくるのであろうな」

「ラッセル、やめよ」

王のかすれた声が張りつめた空気を割った。そして王はルキアの腕に手をかけ、強く引く。

「ルキア、一体どうしたというのだ。お前がそのような物言いをするなど……」

ルキアは王の手を腕に絡めたまま、キイルに向かって頭を下げる。

「……クラヴィーエ公殿下、失礼を申し上げましたこと、お詫びいたします」

その様子を憤然と見つめていたジークが、今度は王に迫る。

「しかし陛下、シベリーとの戦は、周辺諸国を巻き込みかねないものでして――」

「ああ、もうよい！ そのような話は余に聞かせてくれるな」

さも忌まわしいとばかりに王はジークの言葉を遮った。

このような諍いが周囲で起こるとき、王はいつも向き合うことなく、その一切を拒否してきた。そんな場に幾度も居合わせてきたキイルは、もはや王になにかを口にする気はないようだった。

王太子派に王弟派、そしてルドリア教会……。

その企みは三者三様で、その中心に国王がいる。なにも知らぬふりをする傍観者として。

人に悪意を抱かず、ただ、人を愛し、愛されることだけを望んだ王だった。情事の駆け引きは好んだが、相手を蹴落とすことにしか

ならない政争の駆け引きを極端に嫌った。そのことは廷臣たちに無用の争いを起こさせることにもつながり、今また、王弟と王太子の確執を生むこととなっている。

しかし、それでも彼は現実を見ようとはしない。ひたすら自分の愛した女たちのことを枕辺に浮かべ、幻惑の中で生きている。

ルキアはそんな王をただ羨ましく思った。

キイルとジークが退室していくとともに、王は眉間に深く皺を刻んだまま無然と口を開く。

「……なぜ黙っていた？」

王がルキアに向けてこのような厳しい声を投げかけることは本当に珍しいことだった。

ルキアは微笑してうそぶく。

「陛下が反対なさるかと思ひまして」

「当り前ではないか！　なぜお前を戦場になど遣らねばならん」

ルキアは王の怒りを受け流すように笑う。

「もし私が武官になっておりまして、戦場に行くなど申されるのですか？」

今では見る影もないが、ルキアは元々武官を志望しており、剣術は一流の師について学び、学問も軍事学に関わるものに特に力を入れていた。そのことは王もよく知っているはずである。

王は肩のあたりに散らばる波状毛を振り乱し、荒い息を吐いた。

「勅許は取り消す」

「それはなりません」

ルキアは王にまっすぐに向き直り、決然と告げる。

「事態は既に動いております。この局面において陛下が許しを撤回されては、王太子殿下の威信に関わります」

現在、ミカヤの地位は決して盤石なものとは言えない。王が病を患い、そう遠くない未来にミカヤが王位を継ぐと思われる今になっても、王弟派の権勢は依然として強い。だからこそ、王がミカヤを蔑ろにしているような振舞いは決してしてはならぬものだ。

「今になってそのようなことをなさるのならば、初めから、殿下にお許しを与えてはなりませんでした」

ルキアは無礼を承知で重々しく諫言すると、王は苦渋に満ちていた顔を徐々にほどいていった。その横顔は、再び夢を見ているかのように虚無をたたえていて、それを目にするルキアもまた虚脱感を味わっていた。

ルキアは自分が戦場に出ることを王に告げるつもりはなかったが、出撃すればしばらく王都を離れることになるため、王をごまかし続けるなど不可能だっただろう。その意味では、王に知られるきっかけを与えてくれたジークに感謝をしていた。

もっとも、このような形で知らせたくはなかったが……。

やがて、長いため息が聞こえ、王は静かな声でルキアに告げる。

「暖炉の上に剣がある。それを、ここへ……」

ルキアはふつと後ろに視線を投げかける。

寝台から向かって右手にある暖炉には、たしかに一振りの剣が飾られていた。

なぜ王が剣などを、と訝りながらもルキアは暖炉の近くまで歩み寄った。台座に飾られた剣をじっくりと見つめる。

それは、とても美しい剣だった。

剣は鞘と柄が銀製で、全体に蔦模様が細かく彫られ、柄の先に埋め込まれた大きな紅玉には沈み彫りが施されている。そのインタリオは、冠を戴いた双頭の鷲——オトゥール王家の紋章であった。

台座から持ち上げると、予想以上の重みがルキアの手へのしかかる。同時に、しばらくの間にずいぶんと衰えた己の力を知るに至った。

剣を手にしたルキアは寝台まで引き返し、王の手を取り、剣の柄と鞘を慎重に握らせた。

王は柄を握る指で紅玉に触れた。ゆっくりと確かめるようにインタリオに触れていく様子は、どこか祈りを込めているかのようにも見えた。

鞘に柄、そして鍔^{つば}に施された彫刻をなぞった後、王はルキアのいるほうを見上げ、剣を差し出した。

「ルキア、お前にこれを……」

ルキアは王の言葉がすぐに理解できず啞然としていたが、すぐに気を取り直して叫ぶ。

「このようなもの受け取れません！」

ルキアが慌てると、王は声を立てて笑った。

いつもより深く皺の刻まれた朗らかな顔は、永く見ることの叶わなかった彼本来の素顔であるかのように思えた。

「この剣は余が若いころに身につけていたものだ。いくつか肖像画を描かせたときも腰に下げていたものだが、幸いなことに余は一度もこの剣を抜いたことがないのだ。余の怠惰な生はそう長く続かぬだろうが、せめて、一度もこの剣を抜くことなく生を終えることができればと思っていた。余は民のためになることをただの一つとして成すことのできぬ王だった。だからこそ、最期のときまで平穏な世が続けば良いと、そのことだけを願い、祈り続けてきたのだ。……だが、所詮、祈るだけでは夢物語にしかならぬということだろう。まったく、無力なものだ」

王は眉を下げながら悲しげに笑む。

「ルキア……。余は、お前の望むことであればなんでも叶えてやりたいと思う。しかし、お前が余になにかを望むことはなく、お前がなにを本当に望んでいるのかわかってやることもできぬ。だから、この剣をお前に託したいと思う。この程度のことしかしてやれぬでな」

「陛下、そのようなことをおっしゃらないでください。それに、陛下のそのような祈りが込められているものを、私などが戴くわけには……」

「やれやれ、王として命令を下さねば、お前は余の好意すら受け取ってはくれぬのか？」

「いえ、そういうわけでは……」

「余にできることなど、お前の無事を祈るぐらいのもの……。せめてもの守りだと思い、受け取るがよい」

王はいつになく重厚な口調で告げ、ルキアの前に剣を押し出した。

ルキアは王と剣を交互に見やり、やがて、ためらいがちに王の前に跪いた。

自らの前に差し出された剣を両の手でしっかりと受け取る。

「ありがとうございます、陛下」

その剣の重みを感じながら、ルキアは明晰に謝辞を述べた。

三者三様 (1) (後書き)

【補足説明】

金牛宮の月Ⅱ五月

三者三様 (2)

紛争鎮圧から二か月。あと一か月で、国軍によるシベリー軍の殲滅作戦が開始される。

そこで本日、アイオーン宮殿“赤の間”において、特別軍議が開かれることとなっており、西方軍及び北方軍の上級士官、王太子付きの近衛将校が集められた。そして今回は特別にルドリア教会の高位司祭も出席要請が出ている。

その一方で、陸軍大臣ジーク・ラッセルは、他の調整事項があるとのことで、この軍議に参加しない。開戦を間近に控えたこの軍議に、陸軍大臣を始め、宰相や外務大臣までも出席しないというのは異様な光景でしかなかった。

彼らの不在は、まさしく無関心と呼べるものである。シベリー軍の討伐に関して全権を有しているのはミカヤであるが、この有事において外務大臣や陸軍大臣と足並みが揃わないというのは、戦を進める上であまりに不都合である。

ただし、それは常時から両者が協調関係にあることが前提でもある。今の宮廷の有り様では、余計な口出しをされるぐらいならば、無関心を気取ってもらったほうがよいこともある。

多くの将校たちは、ミカヤが王弟派をこの軍議から排除するつもりなのだろうと考えていた。それは、宰相や大臣以外にもう一人、重要人物がこの会議に欠けているためである。

その人物とは、マーテル・フォー・ディラ・バルフォア中将――前西方軍司令官を務めていた人物で、今年初頭のシベリー紛争時の

責任者であるが、殲滅作戦の直接原因となった紛争鎮圧責任者の出席を強制しないというのは不自然極まりない。もつとも、バルフォアがジーク・ラッセルの配下であり、王弟派の軍人であるということとを鑑みると、彼の不在が自然なものとなる。

“赤の間”は、かつてクラヴィーエ公キイルが筆頭王位継承権者で、この宮殿に居住していたころ、広間を改装して作られたものである。

ここでは月に一度、定例軍議が開かれているが、その参加者は大佐以上とされているため、少尉であるエリーヌが“赤の間”に入るのは機会は今まで一度もなかったが、今回の特別軍議は非公式に開かれていることもあり、王太子付きの近衛士官はすべて出席するように指令を受けている。

室内の大半を埋め尽くしている重厚な机と椅子は、暗紅色の深みのある光沢を放つ紫檀素材で、机の側面と椅子の背部分には大輪の花が透かし彫りされている。約五十の座席には陸軍大佐以上の軍人と、ルドリア教会の高位司祭が順に着席し、その周囲には黒い軍服を身につけた王太子付きの近衛将校らが起立している。

深紅の絹糸で織られたカーテンと壁紙には金糸を用いてオートウール王家の紋章が無数に刺繍されている。天井から吊るされた巨大な三つの照明や窓枠には豪華な金細工が施されており、赤一色に染められた部屋にさらなる荘厳さを与えていた。

ほどなくして、王太子ミカヤが現れ、前方に用意された肘掛け椅子に腰かけた。ミカヤは灰緑色の長上着ジュストコールを身につけており、それは

彼の赤銅色の髪をより鮮やかに見せている。

ミカヤは片肘をつき、薄く笑む。

「これより、特別軍事会議を開催する。皆も知っての通り、本日の議題はシベリー軍殲滅作戦についてであるが、この場においては、まず、殲滅作戦の概要説明を一通り行うこととする」

ミカヤが斜め横に座する壮年の男に合図をすると、一同の目はその男に注がれた。

席を立ち上がった男は、灰色地に紺の縁飾りの施された軍服をまとっており、肩章には少将の位を表す二つの五稜星^{ペンタグラム}が付され、金の飾緒^{しよくしよ}が肩から胸部にかけて吊るされている。

彼は、新たに西方軍司令官に着任したケールセン・グラッド將軍——バルフォア將軍の後任に当たる人物であった。

グラッドは、目の前に勢揃いする将校・高位司祭を見据え、悠然と口を開く。

「来たる金牛宮の月、一日。ベスラ要塞及びキウロス要塞よりシベリー軍の討伐に向けて進撃を開始することとなる。今作戦における討伐対象は、シベリー自治国の中でも暴動の中核となりやすいカールトン、ミレニス、リブロ、アパス、ルドン以上五つの州軍であり、それらすべての州政府を制圧することが目的である。討伐軍には西方軍の八割を投入し、さらに北方軍の一部を加えることとした。また、今作戦の切り札とも言える魔道軍についてだが、主力部隊に加えられるのは、ここにいる二十余名の高位司祭である」

司祭たちは、二十代から四十代半ばに見える者たちで、祭服を着ている者、礼服を着ている者、髪の長い者、髪の短い者など様々であったが、華美に過ぎる宮廷人と比べるせいなのか、彼らは質素で高潔さが透けて見えた。また、彼らからは軍人のような気鋭が感じ

られず、聖職者特有と言うべきか、どこか達観したような目をして
いる者が多くいた。

「諸君らの中には、たかだか二十名程度を戦に加えたところでなに
が変わるのかと訝る者もいるだろう。たしかに、儀礼の際に用いら
れる司祭の力は何人も傷つけるものではない。しかし、あれは魔道
の持つ本来の力が開放されていないものに過ぎないのだ。……今こ
こにいる諸君らには、それがわかることと思う」

この部屋には、なにやら凄まじい圧迫感であふれ返っている。そ
の正体は、まぎれもなく高位司祭たちから放たれている魔力の波動
であった。

ゴースティンの人間は礼拝堂や聖堂などで司祭の操る魔道を目に
する機会は多いが、司祭の中でも特に選ばれし者とされる高位司祭
らが二十人以上も集うと、その威圧感は暴力的と言ってもよいほど
だった。

ミカヤやグラッドは余裕然としているものの、将校らは歪に眉を
ひそめている者が散見される。

エリーヌは、昔からルキアから放たれる魔力の波動に慣れていた
が、軍議が始まる前、室内に高位司祭の数が増えていくにつれて、
酷く空気が張り詰めていくのを肌で感じていた。そして今、そのあ
まりの威圧感に背筋を怖気が這っていた。

同じ部屋に居合わせるだけでこの威力である。彼らがその力を開
放すれば、一体どれほどのものになるのだろうか。

「司祭の方々には、砲兵と同様の役割を果たしてもらうこととなる。
無論、あなた方の放つ力は砲弾など比べものにならぬものと聞き及
んでいる。小銃も大砲もここ数年技術改良がされ、威力・射程距離・
命中精度など改善されてはいるが、なにぶんまだまだ発展途上であ

り、最新式のものは数が足りぬ有り様……。とりわけ＞四大司祭＜のお力に我々は期待している。主力部隊は四つに分けて進撃させることになるが、その各部隊に一人ずつ四大司祭を配置することとなるだろう」

ルドリア教会の四大司祭とは、高位司祭の中でも特別に精霊の加護を受けているとされる者たちで、＞風の司祭＜リーヴァ・エクランド、＞水の司祭＜クユラ・ウェーリック、＞地の司祭＜ローザン・ゲーブル、そして、＞炎の司祭＜ルキア・ドートリッシュ、以上の四名を指す。

主教に次ぐ高位とされる彼らの席次は、高位司祭の中でもっとも先に割り振られているが、今そこにルキアの姿はない。

グラッドはさらに説明を続けようとしていたが、怪訝そうな声がそれを遮る。

「ところで、あいつはどこに行ったのだ？ 軍議の知らせは伝わっているのだろうか？」

ミカヤの問いが誰のことを指しているのか、この場にいるほとんどの者がわかっている。エリーヌを含め、一部の者の間で緊張が走ったが、ミカヤの近くにいた近衛の佐官が遠慮がちに申し出る。

「セヴァンス侯はお越しになられていたのですが、その、国王陛下のお召しであるとかで、王の侍従らが……」

「なるほど」

愉悦とも不快とも取れない声が短く吐き出され、佐官の言葉を遮った。

「ならば、しばらく戻ることはできんだろうな……」

ミカヤは肘掛けに両腕を置き、まっすぐに前を見据えて言い放つ。

「後で私のもとへ来るよう伝えておけ」

「はっ……」

ミカヤの放った一言は、司祭から感じる威圧感とはまだ別の凄味があった。

その後、グラッドから軍編成及び現状についての概要説明が続く。

「磨羯宮まかつぎゆうの月に発生したシベリーの暴動により、西方軍の第五連隊に多大な被害が発生し、その報復として、宝瓶宮ほうへいきゆうの月に紛争鎮圧が西方軍の主力を用いて行われた。その後にシベリー自治国アパス州の代表と講和に関する交渉が試みられ、最終的にそれが決裂したというのは皆も知ってのことと思う。交渉が決裂するに至った直接の原因は、シベリーと西方軍、先制攻撃を行ったのはどちらかということに食い違いが生じたためであるが、双方の主張が食い違うのはいつものことであり、真実がどこにあるのかなど追求するつもりは毛頭ない。重要なことは、国境線の紛争をいかにして終止符を打つか、それだけである」

ケーニヒスとの国境は八十年前に両国の間で起こった戦争の後に画定したものが基準となっている。

その際の講和条約において、現在シベリー自治国のアパス州を始め、ミレニス州やカールトン州付近の国境画定に関しては不備な部分が多く、その結果、シベリーとゴースティンとの間に相手側の越境について主張が異なるのが常だった。

ここ数十年の間、何度かゴースティンとケーニヒスとの間で国境画定について話し合いの席が設けられ、問題の箇所はいくつかは解決しているのだが、その決定がシベリーにまで徹底されていないため、結局は同じことだった。

「シベリー自治国はケーニヒスの従属国であるが、あやつらは宗主国の命令を遵守するような輩ではない。シベリー総督は好き勝手に権利を振りかざし、昨今ではゴースティンだけでなくケーニヒスの辺境の村までしばしば越境し、略奪を行う有り様だという。ケーニヒスの傘下に入ってから、シベリーの人口は増加の一途を辿り、軍も拡張され、もはや辺境の蛮族と侮ってもいられん。これはケーニヒスが奴らに余計な知恵を授けた結果であり、国境防衛の捨て駒としてきたツケが回ってきたわけだが、もはや他人事ではない。これ以上シベリーを泳がせておけば、ゴースティンもケーニヒスの二の舞となる。二か月前の紛争鎮圧によりアパス州は既に落ちたも同然だが、シベリー軍の主力は首都バードンに駐屯しており、交戦の状況によっては首都バードンをも陥落させねばなくなるだろう」

「……グラッド將軍」

重々しい声が空気を割る。

「貴公は先ほど、今回の殲滅作戦は暴動の中核となる州の制圧が目的であると言われた。西方軍の精鋭である第五連隊にあれば被害が出た以上、シベリーを侮るのは愚行でしかないが、それでも西方軍だけで事足りるはず。もっとも、西方軍を全軍出撃させれば後顧に憂いが生ずる。だからこそその北方軍派遣要請であると私は理解していたのだが、今の話を聞けば、双方の理解に齟齬があったと言わざるをえないのではないか？」

そう意見するのは、エリーヌの父――アシュレイ・オーヌ・ディラ・グレンヴィル伯爵であった。彼は北方軍司令官を長年務めており、その階級は大将である。また、ケールセン・グラッドとは同い年で、士官学校時代の同期でもあった。

アシュレイはさらに続ける。

「シベリー軍だけが相手ならば、自治国のいくつかを占領下に置くことは戦力的にも容易であろう。また、制圧対象に挙げた州はいずれもゴースティンに向けて暴動を起こした歴史がある。その報復であるとするならば、ケーニヒスもまだ静観しているやもしれぬ。だが、首都バードンまでゴースティンが占領するとなれば、ケーニヒスは黙ってはいまい。そもそも、いくら報復とはいえ、シベリー自治国の全八州のうち五州を制圧するとなれば、一国を占領下に置くのと同じこと。西方軍の八割、北方軍の三割という軍編成は、初めからケーニヒスとの交戦を見越してのものと考えてよいのか？」

現在、既に北方軍の二個師団がキウロス要塞に向けて進軍を始めている。西方軍の八割に派遣軍を併せると、兵の数は十万を軽く超える。それはまさにケーニヒスと全面戦争を起こそうかという勢いの規模となる。

これに関しては、ゴースティンの閣僚・将校だけでなく、ケーニヒス政府も同様の推測を抱くことだろう。そもそもゴースティンとケーニヒスの確執は根が深く、二か月前にケーニヒスを交えてのシベリーとの交渉が決裂していることから、ケーニヒスの参戦可能性を楽観視することはできなかった。

グラッドはわずかに目を細めてアシュレイを見やり、返答を告げようとしたが、ミカヤがその言葉を奪う。

「無論、そのつもりだ」

一瞬、“赤の間”には静寂が降り落ちた。

次第に百数十人の息づかいと固唾を呑み込む音が混じり合っていくにつれ、再びざわつきが生まれていく。

アシュレイの指摘は、シベリー討伐が決定したときから多くの将校たちの抱いていた懸念であるが、これまでに幾度か行われた軍議の中で、ケーニヒスとの交戦可能性について、明確に否定されることも肯定されることもなかった。

元は、国境周辺の州のいくつかを制圧するという作戦のはずであったのだ。それにもかかわらず、今ではケーニヒスと開戦にまで言及されている。そもそも、十万を超える軍勢をシベリー自治国へ差し向けること自体、ケーニヒスへの宣戦布告と取られても仕方のないものである。

思案に暮れていたアシュレイは、頬杖をついているミカヤに視線を投げる。

「しかし、殿下。シベリー総督との講和が決裂したのは致し方ないこととしても、その後ケーニヒスとの交渉は一体どうなっているのです？ 不戦同盟の締結を推し進めているとも聞き及んでおりましてが……」

「ああ、できうる限りケーニヒスとの戦は回避したい。そのための手立てをいくつか試みているところだ。だが……」

ミカヤは小さく喉を鳴らし、おもむろに口角を上げる。

「シベリー軍の殲滅、ケーニヒスにとって願ったりだと思いがな。もはや、あやつらはケーニヒスのために動く手駒ではないのだから」

ミカヤが冷笑を含んだ声でゆったりと告げると、議場は再び水を打ったように静まり返った。

シベリー自治国は八つの州で構成されており、中央政府はバードン州に置かれている。

バードンではそれぞれの州代表者が集い、合同で政治を行い、その首長が総督と呼ばれる。シベリーがケーニヒスの支配下に置かれてから百余年が過ぎたが、年々、ケーニヒスの官僚から強い内政干渉が行われるようになっており、総督および州代表者による自治が機能不全に陥っているとされる。

また、ケーニヒスはシベリーを軍事力として利用しながらも、その自治権を縮減し、シベリーの領地を自国に組み込む政策を実行していた。それにより、シベリーはケーニヒスに対し自治権奪回を求め、暴動を起こすことも珍しくなくなっている。

しかし、属国内に軍が攻め入られて静観している宗主国などあるのだろうか。ゴースティンならば考えられないことだ。

シベリー軍殲滅戦に関して、ケーニヒスとはどのような交渉が行われているというのだろう。ミカヤの返答は言外に含みを持たせていたが、ケーニヒスが動かないという確信でもあるのだろうか。

二十数年にわたり外務大臣を務めているのはキイルの叔父——デュー公爵ミシエル・ロイ・ディラ・ハーシェリオンであるが、デュー公はケーニヒス高官を始め諸外国の外務官と親しく、開戦前に事前交渉を行うならば、彼以上の適任者はいないだろう。だが、デデュー公までも今この場にいない。

沈黙の中、濃緑地に臙脂^{えんじ}の縁飾りの施された軍服を身につけた北方軍の佐官らが、次々に口を開いていく。

「それならば、ファジールの動きが気になるところではある。……まあ、既に動き始めているのかもしれないが」

「ファジールはジョアン大公の代になってからというもの、無謀とも思える軍備拡張を行い、それが財政を逼迫させていると聞き及んでいる。才智にあふれた先代とはずいぶんと異なるお方のようなだ」

「しかし、なぜジョアン大公はあれほど軍拡に力を注いでいるのだ？ あれはケーニヒスへの牽制なのか、それとも……」

「よもやゴースティンに？」

「いや、まさかそのようなことは……。ルザーリやベイリーズなど、国力の劣る小国への侵攻を企んでいると考えるほうが自然ではないのか？」

「我が国と同じく、シベリーに軍を差し向けようとしているのかもしれない。殊にファジール国境に近いアパス州などには金や銀の採掘される鉱山があるゆえ、資源に乏しいあの国にとっては喉から手が出るほど手に入りたい地だろう。そもそも、ほんの二十年前まではケーニヒスを介してその恩恵を受けていたのだからな」

ファジール大公国は、東をゴースティン、北をケーニヒスと面している国家で、二十年ほど前に内乱を経てケーニヒスより独立した。その独立戦争において、ゴースティンはファジールを支援し、独立後も乱れる国内の平定に幾度となく力を貸してきた。当時ゴースティンの治世を行っていたのはクラヴィーエ公キイルであるが、ファジールへの支援はケーニヒスの国力を分散させ、なおかつファジールに恩を売っておく目論見があったのだ。

しかし、それが叶ったのも先代ファジール大公カールの治世下においてのみに過ぎなかった。

かつてケーニヒシとファジールは、ケーニヒス王がファジール大公を兼ねる同君連合が成立していたが、それが解消されてもなおファジールはケーニヒスの属国であり続けた。ファジールの統治を担っていたのはケーニヒス王家の傍系に当たるザイード大公家であるが、ケーニヒス王女を母に持つカール前大公は、ケーニヒス先王妹と王位を争って内乱を起こした。

その結果、カール大公のケーニヒス王位継承こそ叶わなかったが、ファジールを永きにわたる従属関係から解放することに成功したのだ。

ゴースティンにとって誤算だったのは、現大公のジョアンが智謀に長けていた父とは対照的な人物であったことである。ジョアンは血気に逸る短慮な性格で、軍事・外交面に対する姿勢もただ貪欲なだけであり、その治世は善政とは程遠いものである。

ジョアンは長年ファジールを属国化してきたケーニヒスにまだまだ強い反発心を持ち続けており、彼が行き過ぎた軍拡を推し進めていることから、ファジールとケーニヒスには近いうちに戦争が起これかねないと周辺諸国は危惧していた。

じつと沈黙を保っていたグラッドは、ようやく話を再開させる。

「ケーニヒスの出方についてだが、八十年前の大戦の折にゴースティンとケーニヒスの間で不可侵条約が締結されているものの、ファジールの出方次第ではそれが反故にされる可能性がある。ファジールも心情的にはゴースティン寄りであろうが、ゴースティンとケーニヒスが戦になれば、どちらにつくかは五分といったところだろう。ジョアン大公が領土拡大のためゴースティン及びケーニヒスに野心

を抱いているのは明白……。不意を突かれる可能性を軽視するのは得策ではない」

ミカヤはグラッドの言葉を継ぐ。

「北方軍の三分の一をキウロス要塞に向かわせたのは、シベリーではなくケーニヒス及びファジールの参戦を視野に入れたものだ。状況が変われば、さらなる増援が必要となるが、その場合は王都周辺の駐留軍をまとめて派遣すればすむこと。司祭の徴兵に踏み切った目的もそれと同様のものだ。……だが、元より奴らなど恐れるに足らぬ」

初めから勝利を確信しているという口ぶりだった。

もちろんミカヤやグラッドに限らず、シベリーや隣国との戦についてゴースティンの敗走を思い描いている者などいない。それでもやはり、ゴースティンの人間にとってケーニヒスとの戦争はなんとしてでも避けたいという気持ちが強かった。

八十年前のゴースティン・ケーニヒス間の戦争は、ケーニヒス北部の属領で内乱が起こった際に、かつての領土を奪回しようと考えた三代前のゴースティン王ルイスⅡヴィジェが、国境を越えて侵攻したために起こった。

ゴースティン軍は勝利を重ね、当初の目的であるカールトン要塞及びヘリテ川河口付近を取り戻すことに成功したが、南西のミレニスマで侵攻しようとしたところでシベリーの猛攻に遭い、ケーニヒスからの講和の申し出に応じることとなった。

この講和はケーニヒスが大幅に譲歩し、ゴースティンに多額の賠償金を支払うことでカールトン要塞とヘリテ川河口付近の領土を再取得するというものだった。それはケーニヒスにとって不利な合意

であつたとはいえ、ゴースティンにもたらされた恩恵は微々たるものだった。

ゴースティンは開戦以前より度重なる要塞の建設により歳出が増大しており、戦争の遅延によりそれはさらに逼迫した。巨額の賠償金を得てもなお、財政の立て直しは難航し、貴族への課税に踏み切らざるをえなくなったのだ。

戦後、国力が落ちたのはケーニヒスも同様で、ファジールとの独立に絡む内乱以降は、ますます国内は疲弊している。ファジールは肥沃な土壌を有しており、ケーニヒス本国の食糧はファジールに依存している節があつたが、ファジールの独立後は搾取が不可能となり、近年では穀物の輸入を不和の続くゴースティンに頼る有り様である。

そんなケーニヒスの現状を知っている者ならば、永く続いてきた平穩にひびを入れたくないと願うのは当然であろう。

軍議は一時間ほどで終幕を迎えたが、終始、張りつめた空気が緩むことはなかった。中央に座する司祭たちの存在はただただ物々しく、その威圧感を味わうためだけに軍人が集められたようなものであつた。

三者三様 (2) (後書き)

【補足説明】

磨羯宮の月 〓 一月
宝瓶宮の月 〓 二月

悲しき恋の語りべ

軍議の後、エリーヌは離宮の談話室を訪れた。といつても、エリーヌが望んでその場に向かったわけではなく、談話室の前を通りかかったところ、顔見知りの貴婦人らによって強引に中へと連れ込まれたのである。

彼女たちは、流行のドレスや髪型、舞踏会に観劇にと、いつも華やかな話題に事欠かないが、今日に限ってはシベリー討伐が話題に上っていた。身内や友人に軍人がいる者も多く、気にならないはずはないだろう。

エリーヌが談話室に足を踏み入れ、幾人かの者と簡単な挨拶を交わしていると、近くにいた別の集団から先ほどの軍議の内容について質問攻めに遭った。あまり詳しい内容を話すわけにもいかなかったが、不安を煽るようなことは避けたいので、エリーヌは事実には虚構を織り交ぜて、彼女たちが納得できるような言葉を選んで説明した。

一通り説明し終わると、貴婦人たちは安心したのか、それとも飽きたのか、すぐにいつも通りの彼女たちへと戻っていった。

流行のドレスや髪型の話になど、エリーヌにはついていけないはずもないが、今はこういった浮ついた話題の方が好ましいと感じられた。

春の柔らかな日差しが降り注ぐこの部屋には、レースやフリルがふんだんにあしらわれたドレスを身につけた貴婦人たちが、色とりどりの菓子が並べられた猫足テーブルの間を蝶のように行き交っている。

花々が舞い踊るこの空間において、一見、戦争の話など不釣り合いに思えるが、彼女たちが好む話題こそ、この場に不釣り合いなものであることが多い。見た目は甘やかな砂糖菓子であつても、一度ひとたび口にすると、そこに含まれている毒に気づいてしまうようなものだった。

喧騒を逃れようと、エリーヌは少し離れた席に腰かけた。すぐに給仕の者がエリーヌの前にティーカップを置き、お茶を注いでいく。急須から注がれているのは南大陸の属領である諸島を原産地とするお茶であるが、透明度の高い琥珀色をし、渋みと甘い香りを持っている。そのままの味を楽しむ者も多いが、女性にはミルクや砂糖を混ぜて飲む者が多く、エリーヌはいつも角砂糖を三つ入れている。

「エリーヌ様」

その呼びかけに顔を上げると、エリーヌの前には、艶然とした笑みを浮かべるミルドレッド・レイヴァンの姿があつた。

エリーヌはお茶をかき混ぜていたスプーンを置き、ミルドレッドに笑みを向けた。

「レイヴァン夫人、お久しぶりですね」

夫人と呼ばれるものの、彼女は既に寡婦であり、再婚をする気もなさそうである。

ミルドレッドは夫の死後にベアトリスという遠縁の少女を養女に迎えたが、ミルドレッドとベアトリスが並ぶと、とても母娘には見えない。ベアトリスとの実際の関係は又従姉妹であつたと記憶しているが、ミルドレッド自身がまだ二十九歳で、見た目はその年齢以上に若く、姉妹と言っても良さそうなものである。

「エリーヌ様が談話室にいらっしゃるのは珍しいですわね。どなたかにむりやり連れて来られましたの？」

エリーヌが曖昧に苦笑すると、ミルドレッドは花の顔を綻かんばせばせた。

ミルドレッドは宮廷人の間でとても人気のある女性だった。家柄はそれほど優れているわけではないが、男女ともに惹かれずにはいられない魅力を持っていた。

この国ではありふれた栗色の髪に金茶色の瞳をしているものの、高く結われた髪は誰よりもつやかで、片方の肩に垂らされた巻き髪が鎖骨にかかっており、白い肌と濃い色の髪との対比はなまめかしかった。長く濃い睫毛に縁取られた琥珀の瞳は、静かでありながら優美な視線を放っている。加えて、堂々とした振舞いといい、軽やかな足取りといい、扇子を持つほっそりとした手といい、なにもかもが貴婦人たちの憧れであった。

ミルドレッドは洗練された動きでドレスの裾を捌き、エリーヌの斜め横の椅子に腰かける。

「シベリー軍の討伐、もう間もなく始まりますのね。高位司祭までもが戦場に行かれると聞き及んでおりますわ。戦力の要は四大司祭らであるとか……」

ミルドレッドは教会に属していないものの、強い魔力を秘めた魔道士で、教会権力者——特にクラウド・ドートリッシュとは幼いころから親交があったそうだ。

教養が深く、知性に優れ、ただ噂に興じている貴婦人とはまったく別の人種であるといえる。

「ルキア様はどう思ってらっしゃるのかしら？」

「さあ、そのようなことを話す機会などありませんので、なんとも……。先ほどの軍議、高位司祭にも出席要請が発せられていたはずですが、彼は来ていませんでしたしね。私個人としては、軍事訓練も受けていない者を戦に出すなど、邪魔になるだけではないかと思いますが」

エリーヌはカップに口をつけ、お茶を一口飲む。

「高位司祭の使う魔道は強力なものよ。とりわけ四大司祭の力は計り知れないものだと言われておりますわ。きっとルキア様は、司祭らが戦うことで自軍の犠牲が減るのであればよいとお考えになっているのではないかしら」

「そうだとすると、ご立派な大義名分だと思えばかりですね」

エリーヌがそっけなく答えると、ミルドレッドは少し困ったように眉を下げた。

ミルドレッドはドートリッシュ家の者と親交が深いために、なんとかルキアを庇いたいのだろう。エリーヌもルキアの苦渋の決断を肯定したいと思っていたが、出撃の日が迫るにつれて割り切ることができなくなっていた。

なにより、エリーヌには司祭らの操る力がどれほどのものなのか予想がつかない。ミルドレッドが冷静に振舞っていられるのは、自らが魔道士であり、司祭の力を知っているからなのだろうか。ミカヤにしても、司祭に危険が及ばない確信があるからこそ、ルキアを戦場に遣るなどという決断を下したのだろうか。

そうであってくれればいいと思いつつも、募る焦燥を押し留めることができなかった。

「あの男はミカヤ殿下に盲従するだけしか能がなく、信念など持ち合わせてはいませんよ」

エリーヌが心にもない言葉を言い放った途端、あたりに漂う香水の濃度が増し、なんとも形容しがたい圧迫感を覚えた。視線を上げると、そこには十七、八の、まだ少女と呼んでいいような貴婦人たちが円卓を囲むように立っていた。

「エリーヌ様、そのようなことをおっしゃってはいけませんわ。だってセヴァンス侯は複雑なお立場でいらっしゃいますもの」

「そうですね、本来であればクラヴィーエ公殿下のお味方をされたはず……。けれど、クラヴィーエ公殿下がミカヤ殿下の案に強く反対されていた以上、ルキア様はミカヤ殿下に従わざるをえなかったのですわ」

「もしルキア様が反対なさったために国王陛下が王弟殿下にお味方されるようなことになれば、ミカヤ殿下のお立場が悪くなりかねませんもの。ルキア様とミカヤ殿下は幼いころからのご友人同士ですし、殿下にいろいろと気を遣ってらっしゃるのだわ」

三人の少女たちはエリーヌとミルドレッドの間に入り、一気にまくし立てた。

エリーヌはその剣幕に呆然とし、カップを手にしたまま固まってしまうていた。ミルドレッドとの会話の最中、複数の視線をずっと感じていたが、どうやら彼女たちは二人の話に聞き耳を立てていたらしい。

この少女たちによる主張は、噂好きの貴婦人の話を聞きかじった

ものであるが、彼女たちの言うことは正しかった。

王は息子同然のキイルに深い信頼を寄せ、国政の一切を彼に任せている反面、昔からミカヤのことは粗略に扱っているようなところがある。この状況において王が勅許について翻意しようものなら、これまでミカヤを軽んじてきた廷臣たちを増長させる可能性も高い。

ルキアはあの命令書を受け取ったとき、瞬時にそこまで判断していたのだろうか。

だとしても、今回のように自身が徴兵されるという事態に直面しておきながら、一切の異を唱えることもなく恭順したことは、不可解であり不愉快でもあった。

エリーヌはカップをテーブルに置き、ため息まじりに告げる。

「あなた方のおっしゃることもわかりますが、司祭でありながら徴兵命令にああも簡単に応じるなど、聖職者としての本分を軽視しているとは思えないでしょう」

「いいえ、エリーヌ様。ご両親の悲恋を思えば、ルキア様が宮廷の諍いから身を引いてしまわれるのも無理ありませんわ」

「そうですわ。あんなに悲しい出来事があったのですもの……。わたくし、あの話を聞くとたびにルキア様に同情いたします。いいえ、本当にお辛いのはクラヴィーエ公かしら……。ああ、思い出しただけでも、わたくし、なんだか胸が苦しく……」

「ですけど、セヴァンス侯も胸を痛めておいでに決まっているわ。昔はもっと社交的で朗らかな方でしたのに、ここ何年かはいつも憂いた顔をしていらっしゃるもの。……お可哀想に」

ルキアを庇おうとする少女たちの話は、一気に横道にそれていった。

もっとも、彼女たちにとっては横道にそれるどころか、話の核心を突いているつもりなのだが、エリーヌにとっては筋違いの話もいところだった。

たしなめるような気持ちを込めて、エリーヌは貴婦人たちに問う。

「あなた方は、一体なんの話をされているのですか？」

少女たちは驚いたように眉を上げたが、じきに白い手を口元に宛て、さもおかしそうにエリーヌを見る。

「いやですわ、かの有名な恋物語のことですわよ」

「まさかエリーヌ様、ご存じないのですか？」

その話を、エリーヌが知らないはずはなかった。近衛士官として宮廷に出仕するようになって二年、エリーヌは幾度もその話を耳にする羽目になり、今ではその話が始まると自然に心の耳が閉じていくようにすらなっていた。

エリーヌは慚然としたまま黙りこんでいたが、突然、甲高い声が耳朶に突き刺さる。

「まあ！　ご存じないのでしたら、わたくしが教えて差し上げますわ」

エリーヌはとっさに彼女たちを制止しようとしたが、それは間に合わず、少女の一人がうっとりとした口調で語り始め、他の二人は瞳を閉じて少女の話に耳を傾けていた。

「昔々、ある王国の宮殿で、見目麗しい王子様と可憐な貴族のお姫様が恋に落ちました……」

困惑したエリーヌがミルドレッドを見やると、いつものことだ、とでも言うように、ゆっくりと首を横に振った。

エリーヌは努めて顔には出さなかったが、内心うんざりしながらその悲恋物語を聞き流していた。

大国の王子と名家の姫との恋……。

将来を誓い合うほど深く愛し合っていた二人を引き裂いたのは、王子の兄である国王だった。王は早くに妃を失くし、後添えは娶らないと心に決めていたが、姫のあまりの可憐さに凍てつかせた心を溶かしてしまったという。

王子と姫が恋仲であることを知らない王は、姫を王妃にと望むようになつてしまった。国王に逆らうすべなどなく、王子と姫は苦悩の中で別離を選んだが、王子のことを想い続ける姫は王の懇願を振り切って姿を消し、二人の愛を守るために一人で生きることを選んだ――。

五年ほど前、エリーヌが初めてこの物語を耳にしたとき、手垢のついた展開だという以外の感想を持たなかった。愛し合う二人が自分たちの力ではどうにもならない運命に翻弄され、決して結ばれないと知りつつも恋人を深く想い続ける……。これと似たような話なら他にいくらかでも知っていた。

大抵の娯楽に飽きた宮廷貴族がこの陳腐な物語に惹かれるのには、それ相応の理由があった。

今では宮廷中の貴族たちの知るところとなっているが、この物語は二十年ほど前にこのエクシュール宮殿を舞台として実際に繰り広げられた実話である。それが宮廷人の手により歌劇を思わせるほど

に脚色された結果、貴婦人たちの間で定番の話題と化してしまっているのだ。

「――王子は姫だけを想い続け、生涯、妃を娶ることはしませんでした。悲しき恋人たちはヴァルハラでの逢瀬を心に誓い、やがて天へと召されたとき、ついに二人は結ばれるのです……」

物語を聞き終わったとき、エリーヌは大きなため息をこぼした。そんなエリーヌを嘲笑うかのように、再び甲高い声が彼女の耳に突き刺さる。

「ああ、何度聞いても涙がこぼれてしまいますわ！」

「本当に、なんて悲しいお話でしょう！ 地上では決して許されない二人の恋……。たった一人を死ぬまで想い続けるだなんて、そうできることではありませんわ」

「ああ、わたくしもそんな風に愛されてみたい！」

「あら、できることなら地上で結ばれたいものですわ」

「わたくしたちにできることといえば、観劇を見て美しい恋を夢見ることぐらいかしら」

彼女たちの上品な笑い声はエリーヌにとって不愉快な響きしか持っていない。それはどうやらミルドレッドも同様のようだった。

「……本当に皆さん、そのお話が好きでらっしゃるのね」

ミルドレッドは呆れたように三人の少女を見やったが、彼女たち

はそれを気にするでもなく、ますます高い声を響かせた。

彼女たちに限らず、この話を口にする少女たちは興奮からか、少々はしたなくなる。我先にとばかりにそれぞれの想いを口上にのせ、うっとり夢に浸っていくのだ。

今から二十二年前のこと。

この歌劇を現実世界で演じた三人の役者は、宰相クラヴィーエ公キイル、国王アルトⅡヴィジェ、そしてアズノエルという名のドートリツシュ家の姫であった。

王子と姫の別離により第一幕が下りた後、幕間において姫は舞台を永久に降りたが、現在もなおこの宮殿において第二幕が演じられている。第二幕では姫の代わりにその子供が舞台に登場することになった。

それがルキアである。

「……というわけですからエリーヌ様、ルキア様の心情、お察しくださいませね」

なにが「というわけ」なのだろうと思いつつも、エリーヌは彼女に向かつてうなずくしかなかった。

少女たちはなおもおしゃべりを続ける。

「そういえば、あのお話を歌劇の題材にしたいとおっしゃった音楽家がいらっしゃるそうですわ」

「まあ、それは素敵ですわね」

「王子役は歌がお上手であることよりも、見目麗しい方に演じていただきたいわ」

もはやエリーヌは開いた口が塞がらなかつた。

王子が生涯妃を娶らないだの、ヴァルハラでの逢瀬だのという件くだりに関しては、勝手な妄想も甚だしい。既に故人であるアズノエルに對してならばまだしも、いまだ若々しく壮健であるクラヴィーエ公に失礼極まりないものである。

宮廷人たちの手でどんな書き足されていった脚本は、既にキイルの耳にも入っていることだろう。それを想像するだけで寒気を覚える。

「エリーヌ様はどう思われます？」

「……それは、さぞや過激な内容になりそうですね」

少女の無邪気な問いかけに、エリーヌはひきつった笑みをもって答えた。

王宮の音楽堂では余興としてよく歌劇が上演されているが、稀に宮廷や社会情勢を風刺した内容のものが選ばれることもある。その手の歌劇は特定の人物や集団を笑い物にする低俗さが売りで、刺激に飢えた宮廷貴族たちはそんな劇を大いに楽しんでいる。しかし、さすがに王族を風刺するような内容を上演するのは止めたほうがいいだろう。あまりに不敬である。

……+……

エリーヌとミルドレッドは三人の浮かれた様子を尻目に、談話室

を出ていくことを決めた。

少女たちが恋物語に大輪の花を咲かせたことにより、談話室内にいた他の貴婦人らも彼女たちの周囲に群がり始めていた。あの部屋は毒々しさを覚えるほどの甘ったるさに満ちており、もはや居続けることは限界だった。

離宮の中庭に出たとき、ミルドレッドがため息まじりに告げる。

「政治や軍事の話となると耳を塞いでしまうあの方たちも、かのお話となれば別のようなね。……充分、政治にも軍事にも影響のあるお話ですのに」

「まあ、有事を目前としているというのに、あの空間だけは変わらず軽薄なほど平和で、いっそ安心しましたけれどね」

「……エリーヌ様はあのお話のこと、好きではありませんのね」

「当たり前ではありませんか！」

わかり切ったことを訊くミルドレッドに、思わずエリーヌは語気を強めた。

「……不愉快に思われる気持ちわかりますけれど、そういった恋愛に憧れているのはわたくしも同じですよ」

ミルドレッドは伏せていた目を、ふと遠くに馳せる。

「わたくしは夫を愛しておりましたし、夫もわたくしを愛してくれていましたけれど、世間から見れば幸せな結婚であったとはいえませんが。そんな世間への反抗かしら……。愛のない結婚よりは、

周囲に認められなくても、祝福が与えられなくても、心から愛する人と結ばれた自分は幸せだったと思いたいのよ。おかしいでしょう？　こんな年増の未亡人がこんなこと思っているなんて」

ミルドレッドは結婚後二年ほどで著名な画家である夫ダグラスを事故で亡くし、その精神的打撃により、生まれてくるはずだった子まで亡くしている。

そのことを改めて思い出し、エリーヌは声を落とす。

「私があのお話を不愉快に思うのは、あれが作り話ではなく実話だからです。甘い夢に浸るには、あまりにも生々しすぎますし、当事者の耳に入ること考えれば、とても……」

かつて、貴婦人らが優秀なルキアのことを褒めそやすように“未来の宰相様”などと呼ぶことがあった。今になって思えば、その言葉は暗にクラヴィーエ公キイルとの関係を揶揄しているものに他ならなかった。その真意を理解していた者はどれほどいたのかわからないが、少なくとも言い始めた者はわかった上で、宰相閣下の御子と呼んでいたのだ。

美辞の裏に隠された毒を知ったとき、エリーヌは胸を衝かれる思いがした。どれほど陰湿なのかと、思わず唇を噛みしめた。

「そうね、的外れなことを言ってしまったわ。……きつとルキア様も、作り話であってくれればと思ってるでしょうね。ルキア様がお可哀想なのは、もうずっとあの無責任な噂に晒されてきていることよ。あの方たちにはおわかりになれないでしょうけど」

毒の含んだ言葉であったが、エリーヌはそれを好意的にさえ感じた。

ルキアの置かれた状況は厳しいものであるが、あんな少女たちに

まで「可哀想」だなどと言われてしまつては、ますます憐れさが増すというものだ。

そもそも「可哀想」などという上から見下ろすような感情はルキアにはふさわしくない。これまでずっと、エリーヌにとってルキアはそんな風に思つてはならない相手だった。だからこそエリーヌはルキアに多くの理想を求めてしまふのだ。

陽が雲に隠れ、少し強めの風が吹き始めた。

エリーヌは立ち止まり、風に煽られた髪を押さえる。

「ただ……噂に花を咲かせていられる今は、まだ幸せではないのかとも思うのです。もうあと少ししたら、事態は一変してしまふのかもしれない。そのときルキアはどうするのでしょうか？」

宮廷において語り継がれてきた有名な悲恋の物語……。

それは噂好きの貴婦人だけでなく、閣僚、果ては軍人に至るまで、宮廷人たちを夢中にし、よほど鈍感でない限り、知らぬ者はいない。当然、外国の大使を通じて他国の宮廷でも話題にされているのだろうが、この悲恋物語がこれほどまでに注目を集めているのは、決して甘やかな刺激とときめきを与えてくれるからではない。

ひとえに、王太子ミカヤの地位に関わるためである。

現王アルトリヴィジエは、国内外問わず“病的な女狂い”と揶揄される人物である。

かつて王にはたくさんの愛妾がいた。それは王太子時代にレイリア妃を亡くし、その喪失感を埋めるためだったとされているが、王が六十の年になるまでに抱えた妾の数は、寂しさを言い訳にはできぬほどのものだった。一夜の恋を楽しめる貴婦人だけに留めていれ

ばよいものを、臣下の妻や、妾の姉妹や母子、さらにはその侍女といった関係にある者にまで無節操に手を出し、その数、ゆうに百は超えていたという。

妾との間に生まれた庶子や私生児の数は相当数に上るが、他国の例に漏れず、ゴースティン王家においても妃以外の産んだ子に王位継承権はない。レイリア妃との間には二人の王女がいるものの、この国では王家の女子相続が認められていない以上、長年、筆頭王位継承権者であったのは王の異母弟クラヴィーエ公キイルであった。

王の外戚に当たるギルベイド家は、いずれハーシェリオン家の流れを汲むキイルに王位が渡ることを苦々しく思っており、なんとか王に世継ぎを儲けてもらわねばと新たな妃候補を勧めていたものの、死別したレイリア妃の面影を追い続ける王は頑として受け入れず、優秀で若い弟に政のすべてを委ね、享樂に耽溺する毎日を送っていた。

レイリア妃の死から十八年経って初めて、王が自らの意思で再婚の意思を明らかにした。その相手こそ、アズノエル・ドートリツシュであった。

アズノエルはドートリツシュ前当主クラウスの従妹で、両親亡き後に本邸へと引き取られ、クラウスが妹同然に接してきた娘である。ゴースティン王妃となるには、しかるべき家柄であることが唯一絶対の条件とされている。ドートリツシュはオトウール王家をはるかに凌ぐ歴史を持ち、王家に匹敵する権勢を誇ってきた一族だが、両家の間にある過去の確執を考慮すれば、いかに名家であろうと、王たつての望みであろうと、廷臣たちは手放しで賛同するわけにはいかなかったという。

時を同じくして、王の妾の一人であったアイリーン・オルストン

が一人の男の子を産んだ。その子は数多くいる王の子の中で初めて生まれた男児であったが、王位継承権は持ちえないため、この件が宮廷において特別視されることはなかった。

また、オルストン家は下級貴族であり、宮廷の有力貴族とは一切つながりを持たないため、いくら王の私生児を有していても野心など持ちようもないと判断されていたのだ。

しかし、事態は一転する。

王弟と妃候補の姫の不義密通により……。

多情な王は、自らが人妻に手を出すことが多かったため、自分の妾が誰か他の男に奪われようとも意に介さないところがあった。王はいつまでもレイリア妃だけを愛しており、数多くの妾には一時的な執着すら持っていなかったとされる。

だからもし、アズノエルがそんな妾の一人に過ぎなければ、キイルとアズノエルの関係が問題になることはなかっただろう。元々、キイルとアズノエルの関係は数年来に渡るものであり、それを知らない王がアズノエルに懸想しただけなのである。

不幸なことに、王がアズノエルを妃に望んでいることは既に宮廷貴族たちの知るところとなっており、さらにアズノエルがキイルの子を宿していることが発覚したために、二人の関係が国王への反逆に当たると主張する勢力が台頭した。

その結果、キイルは筆頭王位継承権者としての地位を失い、アズノエルは宮廷を追放されるという事態にまで陥ったのだ。

この一連の騒動は、ハーシェリオン家の血を王家に残したくなかったギルベイド家の陰謀であると同時に言われていた。

事態の発覚後、ギルベイド家の者たちはアイリーンを妃とし、その子ミカヤに王籍とともに第一位の王位継承権を与えるよう王に迫

ったのだが、そのあまりに強引な主張は多くの廷臣の反発を招いた。また、ハーシェリオン家の力が強く及んでいたルドリア教会からも、国王とアイリーンの婚姻が著しく身分が釣り合わないとして、不許の達し発せられようとしていた。

それでも結局、教会はギルベイド家の要求を受け入れることとなった。

このような暴挙がまかり通ったのは、当時主教の地位にあったクラウスに対し、アズノエルの件から多大な圧力がかかり、ハーシェリオン家もまた、キイルの国王に対する不忠をつけ込まれ、強く出ることができなかったからだと言われている。

国王の従弟――ダラス公爵アンジェーヴォーヌス・ディラ・ギルベイドは、キイルの宮廷追放をも主張していたそうだが、王は弟への負い目からそれを許さず、キイルを宰相の座に据え、彼に国政を担わせ続けた。

ただし、アズノエルを庇うことまでは叶わず、王はその罪悪感からか、しばらくは一切妾を持つことはなかったという。

女狂いの王の気まぐれにより、恋人たちが引き裂かれることとなった……。

宮廷貴族の間ではそのように語られ、キイルとアズノエルに対して同情の声が多数を占めていた。彼らの語る恋物語は脚色の目立つものではあるが、国王がアズノエルに特別な想いを抱いていたことは明白で、いまだにキイルが妃を娶らずにいることから、まるで事実のように扱われてしまっている。

引き裂かれた恋人たちを憐れに思う者たちの間では、アイリーンが王妃となり、本来であれば私生児に過ぎなかったミカヤが王太子となったことへの反感は根強く、その余波はいまだに残っているの

だ。

一連の事態が収束した後、キイルは宰相として王族の務めを果たすようになり、対外的にはキイルがゴーステイン王であると認識されるほどの影響力を持つようになっていた。

ハーシェリオン家当主のデュー公ミシエルが外務大臣の座にあり、法務大臣を除くその他の大臣職もハーシェリオン一門やそれに連なる大貴族、キイルの学友たちで占められており、これまでミカヤは王太子でありながら、その地位にふさわしい扱いを受けてきたとは言い難かった。

しかし、いずれ国王が崩御し、ミカヤが王位に就いたとき、そんな宮廷の勢力図が一変するのは間違いない。

王は二十数年前の騒動に辟易し、その後一切の宮廷闘争から身を引いている。争いを避けたいという思いからかも、ミカヤを王太子として扱うことに異存はないようで、それを覆す気は毛頭ないようだった。二年前に国王が病に倒れたことにより、ここ最近ではますますミカヤの即位に現実味が増し、そんな中で宮廷貴族たちは王太子派の勢いに恐々としており、依然としてキイルへの敬意と同情を抱きつつも、自らの行く末を憂えるあまり、日和見的になっている。シベリー軍の討伐にしても、多くの宮廷貴族たちは戦争そのものに興味はないのだが、徐々に変わりつつある変化の波に逆らわぬようミカヤに賛同する者が目立つ。

たとえば、宰相も大臣も出席しなかった本日の軍議……。

ミカヤが発言するたびに漂う張り詰めた空気が、現在の状況を如実に表していた。

揺れる心

エリーヌとミルドレッドは、風とともに離宮の庭園内を流されていた。

やや西から照らされる陽光に、エリーヌは目を細める。あたりは夕暮れ前の穏やかな空気に包まれており、目を伏せると思わず眠りに誘われそうになった。

「あら……」

ふと歩みを止めたミルドレッドが呟く。

その視線を追ったエリーヌは小さく息を吸い込んだ。白亜のガゼボの石壇には、柱に寄りかかるようにして座っている男がいた。

「ご両親の悲恋を生まれながらに背負ってらっしゃる方よ」

「レイヴァン夫人……」

この夫人は生真面目ではあるものの、たまに今のような冗談めいた言葉をさらりと口にする。

エリーヌの呆れ声を聞き流すようにミルドレッドは微笑み、ここで失礼いたしますと告げ、優雅にお辞儀をした。本宮のほうへと歩いて行くミルドレッドの後姿を眺めながら、こういった気の遣われ方をするのは苦手だとエリーヌは思った。

ガゼボの近くへと足を進める。

「ルキア」

寝入っているのか、まったく反応がなかった。

エリーヌはため息を吐きながら、ルキアの珍しい姿をじっと見下ろす。

ルキアはいつも一点の汚れもない白い祭服をまとっているが、今日は黒い礼服に身を包み、首元はモスリン製のクラヴァットで飾っている。身をひるがえすたびに背にさらさらと流れる赤い髪は黒絹のリボンで結わえられていた。

エリーヌの記憶では、幼いころのルキアの髪色は今とはだいぶ違った。金髪に赤毛を混ぜたような、とても稀有な色をしていて、いつもそれを羨ましく思ったものだった。ただ、年々赤みが増してきたようで、ミカヤとは色調が違うものの、赤毛と呼べるような色合いになっている。

ルキアには、そんな赤い髪がよく似合っていた。

魔道を扱う者は、星宮の生まれや相性により、修得できる魔法の属性が異なるという。風のない湖面のように穏やかな気性のルキアが扱うのは炎の属性魔法だ。初めてそれを知ったときは意外に思ったものだが、今となってはその違和感もない。

たとえば、時折見せる鋭い顔つき……。彼はいつも静かな炎を心にたたえているのだと知る。

「ルキア」

もう一度名前を呼び、肩を揺らした。

やがて彼は薄く緑眼を開き、エリーヌを力なく見つめる。

「軍議に出ていなかったようだが、こんなところで寝ていたのか？」

どこにいたのかを知りつつも、あえてエリーヌが訊ねると、ルキアはわずかに首を振った。

「いや、あのときは国王陛下のもとに伺っていたのだ」

ルキアが公式の謁見ではなく、私的に国王に呼ばれるのはよくあることだった。

昨年、宮廷司祭長であるマーシエル主教が病により宮廷を一時下がつてからは、ルキアが司祭長の役割を代行するようになったが、彼が王に召されるのは司祭としてではない。それは宮廷貴族ならば誰でも知っている。

ルキアは緩慢に立ち上がった。

少し乱れていた着衣を正しながら、銀の懷中時計を取り出し、時間を確認する。ルキアの手動きで長上着が揺られるたび、左手の中にある剣がちらちらと姿を見せる。その剣は、なにやら細かい装飾がふんだんに施されているものだった

剣を手に行っているルキアの姿を、エリーヌは懐かしく思う。

ルキアは、銃は一切扱うことはできないが、剣の腕は本当に優れていた。幼いころから一流の教師ばかりに剣を習っていたが、教師たちは口々にルキアを褒め称えたものだった。

また、ほんの数年前までミカヤとルキアの剣術指南をしていたのは、現近衛連隊長――エリーヌの上官に当たる人物であるが、彼がふとした瞬間にルキアのことを懐かしげに語るのも幾度か耳にしてきた。それらの賛辞は決してお世辞ではないとエリーヌは身をもって理解している。これまで数え切れないほどの勝負を挑んでも、エリーヌがルキアに勝てたことは一度としてなかった。

「帯剣している司祭など初めて見ました」

エリーヌは意識的に不敵な笑みを作る。

「どうせなら、久々に剣の相手をお願いしたいものです」

「司祭に剣の手ほどきを願い出る近衛士官と会うのは初めてだよ、グレンヴィル少尉」

嫌味などまったく意に介さぬというように、ルキアはふっと微笑む。

「すまないが、私はこれからミカヤ殿下のもとに参らねばならないから、あなたの剣の相手をしている時間はない。……出撃までの間であれば、いつでも屋敷に来られるがよい。相手になろう」

そう言い残し、ルキアはエリーヌの横を通り抜けた。そのときにうかがえたルキアの横顔は、なんの色も持っていなかった。

白でも黒ではなく、かといって透明でもない。鈍い闇色とでもいえばいいのだろうか、そんな表情をしていた。

——昔はもっと社交的で朗らかな方でしたのに、ここ何年かはいつも憂いた顔をしていらっしゃるもの。

聞き流していたはずの言葉がエリーヌの頭を過ぎる。

「ルキア！」

思わず呼びかけると、振り返ったルキアは怪訝そうに眉をひそめ

た。

「あ、その……今日の軍議で我々近衛隊もキウロス要塞まで従軍することになった。ミカヤ殿下がそこで作戦指揮を執られるから……」

「そうか」

一言だけ返し、眉一つ動かすこともなく、ルキアはまた身をひるがえそうとした。

「あなたにとっては、関係のないことでしたね」

エリーヌが落胆まじりに呟いた数秒ののち、立ち止まったルキアは弾かれたように笑い出した。

突然のことに呆氣にとられたエリーヌは、呆然としたまま、身によじって笑うルキアをうろたえながら見つめていた。

顔を上げたルキアは、どこか懐かしい笑顔をエリーヌに向ける。

「あなたは昔からそうだったな」

「なんの話です？」

「私が手を差し出せば、その手を払いのけ、私が背を向ければ、すぐにその背を追いかけてくる」

「なっ……」

「ああ、そういうばこんなこともあった。数式のわからぬところを教えてやれば、そんなものはわかっていたと言い、欲しそうに見て

いた菓子をやろうとすれば、いらぬ、子供扱いするなと怒り、剣術にしても――」

「もういい！」

エリーヌが怒鳴ると、再びルキアは笑い始める。

「あなたは……私を馬鹿にしているのですか？」

「いいや、昔を懐かしんでいるだけだ。気を悪くしないでくれ」

目の端の涙を拭いながら、ルキアは切れ切れに言葉を紡ぐ。

「エリーヌ、私はあなたの心配はしていない。ミカヤ殿下のおられるところは戦場とはいえもっとも安全なところだ。あなたにとっては初めて従軍する戦になるわけだから、それでも良い経験になるだろうとは思うが」

「あなたにとっても初陣のはずでは？」

「そうだな、私は初めて人を殺めることになるだろう」

「余裕たっぷりなのですが、その覚悟は？」

「……覚悟など、あの書状を灰にしたとき既にできていたさ」

そのときルキアが見せたのは、笑った顔ではなく、歪んだ顔といったほうが正しいものだった。吹っ切れた、というよりも、投げやりであるようにさえ見えた。

出撃命令を受けてから、彼は、自らの信念、恐怖、失望らが錯綜する中で闘い続け、なんらかの答えを手にすることができたのだろうか。それとも、今なおもがいている最中なのだろうか。

エリーヌもまた、自らの葛藤と闘っていた。

司祭が戦闘に動員されると初めて聞いたとき、彼女の頭に真っ先に浮かんだのはルキアのことだった。戦に反対だったのは、ルキアが前線に赴くことが嫌で仕方なかったからだ。

あの、優しい彼の手を、血で汚したくはなかった。ルキアが王太子と王弟との間で板挟みになっていることを知っていながら、彼を責め立てるようなことを言ってしまった。

ルキアにはその心のすべて見透かされていたというのに……。

ルキアはエリーヌのほうに向き直り、口元だけに笑みを作ってみせる。

「あなたにあえて告げることもないが……この戦、我々に負けはありえない。なにがあらうと我々の勝利は約束されている。問題は、どれほどの戦力を投入し、犠牲を払うことになるかというだけのことだろう」

「……それは専ら、高位司祭たちの力に左右されるものでしょう？
そもそも、魔道の力を用いることで、この戦が決行されるようなものですし」

エリーヌはルキアから視線をそらし、そう言い捨てた。
するとルキアはふっと息を吐く。

「あなたはあなたのなすべきことを、私は私のなすべきことをする……。それだけのことだろう、エリーヌ・グレンヴィル？」

我々のなすべきこと、つまり、自分たちの歩んでいく道は違うのだとも言いたげだった。

ルキアは事あるごとにこのような物言いをする。それがエリーヌを苛立たせる。共に同じ道を歩まんとしていたころなど、ルキアはもう忘れてしまったのだろうか。

「あなたは……本当に、嫌な男だ」

エリーヌがそう呟いたが、ルキアは気に留める様子もなく、離宮へと続く石畳の上を進んでいった。エリーヌは彼の姿が消えるまで、その後ろ姿を見つめていた。

……+

ルキアが本宮と離宮をつなぐ柱廊に差しかけたとき、前方を歩く長身の軍人の姿が目に入った。

「グレンヴィル伯爵、お久しぶりです」

ルキアは、どこか強張った表情のアシュレイに声をかけた。ルキアの礼装姿を珍しく思ったのか、アシュレイは瞠目したのち、端正な顔をほころばせた。

「最後にお会いしたのは、前回の定例軍議が開かれたときであった

だろうか。お変わりなくて安心いたしました」

「アシュレイ様が王宮に来られるときぐらいしかお会いする機会がございませんからね。アシュレイ様こそ、ご壮健のようですねによりです」

「そういえば、あなたは先ほどの特別軍議には……」

アシュレイの言わんとしたことを汲み取り、ルキアは苦笑を返す。

「ええ、欠席しておりました。今からミカヤ殿下のもとへ伺うところですよ」

「今日の特別軍議は形式的なものに過ぎぬ。先ほどまで准将以上の者を集めて、新たな西方軍司令官のもとで作戦の調整が行われていたのだ。ミカヤ殿下は独自に動かれているようだが」

“赤の間”のような大会議場で開かれる会議全般に共通しているが、ああいった場では決して物事の中核は明かされない。あくまで表向きの現状を告げるに留まり、核心部には触れない。仮に触れたとしても、それは嘘で覆われている。

ミカヤが独自に作戦を推し進めているのは、王弟派の士官が多数を占める西方軍に信用を置いていないためである。王弟派の貴族は、ミカヤが失策を犯すことを望んでいることだろう。宰相や大臣からの協力を得られないともなれば、まさに足の引っ張り合いでしかない。

「新しい司令官殿というのは……たしかグラッド將軍でしたか。有能な方であるとお聞きしております」

「ああ、グラッドはこれまでその能力に応じた役職に恵まれずにいた者だ。ミカヤ殿下は人を見る目はたしかであると思う」

ケールセン・グラッドは、二年前にミカヤから直々に取り立てられ、わずかの間に少佐から一気に准将まで登りつめ、西方軍司令官となったことで少将に昇格した。グラッドは、長年ギルベイド家に仕えてきた軍人の家系の出身であることもあり、今や王太子派の軍人の中ではもっとも強い影響力を有するとされる人物である。

一方、アシュレイは宮廷の二大派閥のいずれにも属していない。アシュレイ自身はどちらかと言えばキイル寄りの考えを有しているが、ミカヤに敵意を抱いているわけではない。そうでなければ、エリーヌを王太子付きになどしなかつただろう。

グレンヴィル家は代々王家に忠実な臣下であったが、王弟と王太子の対立に関しては中立な立場を取らざるをえない理由がある。

アシュレイの二十代半ばで夭折した兄エイルバードは、アルトⅡヴィジェ王の第二王女カレニーナと結婚していた。カレニーナは、叔父であるキイルとは三つ年上の姪という関係にあり、姉弟のように育ったために心情的には非常にキイル寄りで、異母弟であるミカヤに対しては辛辣な態度を取り続けている。

義姉と王太子の板挟みになっているアシュレイの気苦労は、宮廷闘争から完全に引いてしまっているルキアよりもはるかに深刻であろう。昨今、現役軍人でありながらアシュレイを陸軍大臣に推す声も上がっているが、彼はそれを頑なに固辞している。アシュレイが北方軍司令官の地位にこだわるのは、定例軍議の際を除いて王宮に赴く必要がないことと、王弟派が多数を占める西方軍とは違い、北方軍には中立姿勢を保っている士官が多いためだろう。

「よもや、このようなことになるうとはな……」

アシュレイは苦々しく呟き、ルキアを見据える。

「私も北方軍を率いて出撃することになるが、ルキア殿が所属する部隊と直接関わることはないだろう。……司祭らが危険にさらされる可能性は低いようだが、前線でその力が求められることに変わりはない。特にあなた方、四大司祭の力は作戦の中でも重要な役割が与えられることだろう」

刻々と出撃のときは迫ってきている。

ルキアの心は今はまだ平静であったが、実際に戦場へ出たとき、自身がどのような心持ちになるのか予想もできなかった。

それでもルキアは薄く笑む。

「ええ、承知しております」

アシュレイがわずかに眉を寄せたのがわかったが、ルキアは一礼ののち身をひるがえした。まっすぐに柱廊を進んでいき、離宮へと足を踏み入れた。

揺れる心（後書き）

【注釈】

ガゼボ……西洋風あずまや。休憩用や装飾用に庭に置かれる構造物。
(Wikipediaより)

好奇心

特別軍議の後、西方軍及び北方軍の上級将校と作戦をつめていたグラッドは、ある人物より受け取った書を携え、王太子の私室へと向かった。

グラッドがこの部屋に入るのはまだ数えるほどしかないが、そのたびに圧倒されている自分に気づく。

壁に飾られた絵画は、賢王と称えられた六代前の国王ラグナ・ヴィジェの肖像で、王は黒い甲冑を身につけ、黒馬に跨り、兵を指揮するように剣を高く掲げている。

ラグナ・ヴィジェの肖像画は多数遺されており、もっとも有名なものは緋色の外套を身につけた戴冠時のもので、本宮の大広間に飾られているが、この部屋に飾られているのは王の即位前に起こった戦争の様子を描いたものである。ミカヤがあえてこの絵を自室に飾った気概を、グラッドは好ましく思った。

ここ数十年、室内装飾は女性的で優美な意匠が流行っており、アイオン宮も壁紙や調度品の多くが改装されているが、王太子の私室は、立ち並ぶ豪華な調度品、壁に掛けられた剣や斧など、床から天井に至るまで威圧感を与える前時代的な意匠で埋め尽くされている。

ミカヤは華美なものを好まない。

軟弱で軽薄なものを嫌う彼の人柄は、臣下の登用についても表れており、貴族という下限を満たす者ならば家柄に拘ることがなかつ

た。

この国の貴族は大きく分けて二つの階級がある。

一つは“大貴族”であり、ギルベイドやハーシェリオンという王家との縁が深い一族を筆頭に、王から叙爵されたグレンヴィル伯爵家やラッセル伯爵家などのことを指す。ここには侯爵位とともに広大な領地が授けられたドートリッシュやサルファも含まれる。

そしてもう一つは大貴族以外——貴族全体の九割を占める“下級貴族”である。

ただし、下級貴族と一括りにされる者たちも様々で、宮廷への出入りを許されている者とそうでない者、官職に就いている者といない者……など細かく分けていけば切りがない。貴族とは名ばかりの平民と大差ないような生活を送る者もあり、ミカヤの外戚であるオルストン家はアイリーンが王妃となったときに公爵位が与えられたが、今から二十数年前は、下級貴族の中でもとりわけ下位に当たるような家柄であった。

ミカヤが国政においてその権力を振るうようになって数年、これまで大貴族によりほぼ独占されてきた官職に下級貴族が混じり始めている。ミカヤは自らの側近にはギルベイド家の者を重用する傾向があるが、有能であれば家柄は問わずに起用する側面もある。そのため、大貴族たちの間ではミカヤへの批判が燦^{くす}つており、その際、母親が下級貴族出身であることを引き合いにされることが多い。

ミカヤ自身が母の出自についてどのように捉えているのか、グラッドに推し量ることはできない。家柄に拘らないどころか、貴賤に拘らないとも言える官職の任免は、ミカヤの強い劣等感の現れだと揶揄する者もいたが、ミカヤが大貴族を蔑視しているのは、王族に媚びへつらい官位を強請る様に辟易しているからでもあるのだろう。

グラッドはほんの数年前まで、大貴族出身の上官のもとで軍役を勤め上げてきた。縁故採用の上官たちは、軍人としてよりも宮廷人として生きることに関心を出し、夜会や観劇に明け暮れてばかりだった。グラッドはすべての大貴族を論う気はないが、そんな者たちを多く見てきたからこそ、彼らを蔑視したくなる気持ちは身に染みてわかっていた。

「グラッドか、入れ」

その声を受けてグラッドが奥の間へと入室したとき、普段は閉ざされているはずの隠し扉から走り去る女性の後姿が見えた。その衣装から察するに、宮廷に上がることが許された貴族の娘だと思われる。

王と比較すれば微々たるものではあるが、ミカヤにも父王と同様の悪癖の兆候が見られる。妃も娶らぬうちに妾を持つなど好ましいことではないが、王の妾遊びの惨状を知っている者は、この程度のことではミカヤに諫言しようなどと思わないのだろう。幼いころからミカヤを支えてきたダラス公爵ですら、この件に関してはミカヤの好きにさせているようだった。

グラッドは視線を前方に戻す。

天蓋から流れ落ちる天鵞絨の奥……。白い横顔と無造作に投げ出された片腕をうかがい見ることができた。

グラッドは構うことなくミカヤの近くへと歩み寄っていく。その途中、くぐもった声が投げかけられた。

「グラッド、奴らの動きはどうだ？」

「はっ……。開戦を避けるよう秘密裏にファジールへ打診しておるようです。しかし、ケーニヒスが参戦するとなれば、当然ファジールはゴースティンに対し兵を向けるでしょう。あのジョアン大公がその機会を見逃すとは思えません。……さぞ、王弟殿下は苦々しく思っておいででしょう」

グラッドは跪き、寝台の上のミカヤに書を差し出した。

「こちらが、陸軍省が秘匿した西方軍の第五連隊に関する報告書にございます」

書を受け取ったミカヤは、一旦は広げたものの、枕の脇へ乱暴に置く。

「端的に説明しろ」

「これまで幾度か報告を申し上げておりました通り、シベリー紛争の端緒となった第五連隊奇襲事件について、マーテル・バルフォアの行った報告はまったくの虚偽に基づくものでございました。この報告書は、その確たる証拠となりましょう」

前西方軍司令官であったマーテル・バルフォアの報告は、以下のようなものであった。

アパス州東の国境地帯において、シベリー兵がゴースティン側へと越境したため威嚇射撃を行ったが、それでもなおシベリーの騎兵が攻撃を仕掛けてきたので、やむをえず第五連隊が応戦に当たることとなった。

一先ず、シベリー兵を撤退させることに成功し、敗走する兵に向

けて追撃を行っていたが、ほどなくしてシベリーの別動隊による再度の奇襲があり、連隊長マティアス・バルフォア大佐を含む三人が重傷を負い、尉官が二人死亡する事態となった。

これを重く見たバルフォアは、西方軍の主力を率いてアパス州の駐屯地まで攻め入り、その紛争を鎮圧させた――というものである。

しかし、事実はまるで異なる。

「敗走するシベリー兵に対する追撃ですが、第五連隊がアパス州の南西部にまで踏み込んで行われたものでございました。これはケーニヒスだけでなく、ファジールとの協定にも抵触するものであり、軍務規定違反も甚だしい行為です。また、第五連隊に奇襲をかけたシベリーの別動隊は、ケーニヒスではなくファジールに所属するものであったようで、その件の処理に關しまして、ファジール・ゴースティン間で密約が交わされた模様です。そして、発端となった交戦についてですが、先制攻撃を行ったのはどうやら第五連隊のほうであったとか……。これでは、シベリー総督との講和が決裂したのは無理からぬことでございます。いかにゴースティンがしらを切ろうと、ケーニヒスに責を帰することはできかねますから、先方の讓歩を引き出すことをゴースティンは早々に諦めたのでしょう」

まず、交戦地とされているシベリー自治国のアパス州であるが、ここはゴースティンとケーニヒスの国境に面していると同時に、ファジールの国境とも面している。つまり、アパス州の東部はケーニヒスの支配領域であるが、その南西部はファジールの支配領域となる。

これはファジール独立によって起こった弊害の一つで、現在のシベリー自治国は、アパス州の他にルドン、ジュダの三州がファジールとゴースティンの国境を分かち形で存在している。その三つの州は、表向きこそケーニヒスに従属しているが、実質的にはファジー

ルの及ぼす力のほうが強い。

また、公にはされていないが、シベリーを軍事利用しているのは宗主国であるケーニヒスだけではない。ファジールは傭兵としてシベリーを雇い、彼らにケーニヒス及びゴースティンの偵察を行わせている。第五連隊と衝突したのは、まさにその偵察部隊であったのだ。

交戦時、第五連隊の連隊長を務めていたのはバルフォア將軍の次男マティアスであったが、越境してまで追撃を行った結果、マティアス大佐を含む三人が重傷を負い、尉官が二人死亡している。貴族の将校に死傷者が出たためにシベリー討伐を望む声が一時的に高まったが、半月が経つころ、その勢いは急速に沈静化した。

その半月の間に王弟派の外務官とファジールとの間で交渉が行われ、互いの違反行為を不問に付すための密約が交わされたのだろう。このことがミカヤの耳に入ったのは、今から一か月ほど前のことになる。

ミカヤが額に手を当てたまま物憂げに問う。

「ファジールとの密約、それにキイルが関わっている証拠はあるのか？」

グラッドは一瞬言葉に詰まったが、すぐに薄笑みを浮かべ、ゆったりと言葉を紡ぐ。

「証拠はございませんが、それを挙げる必要はないかと存じます。バルフォア父子の起こした不祥事は、外務大臣・陸軍大臣だけで処理し切るのは厳しいもの……。王弟殿下はザイード大公家と親交が深いと聞き及んでおります。殿下が口添えされたからこそ事態は早期に決したのだと、誰もが考えることでしょう」

「それもそうだな」

ミカヤは小さく笑み、気だるげに呟いた。

バルフォア伯爵家はハーシェリオン家に連なる名家であるが、当主のマーテル及びその息子マティアスは家名にものを言わせて分不相応の地位を手に入れた。

マーテル・バルフォアは陸軍大臣ジーク・ラッセル直属の部下ではあるものの、キイルの腹心とされる大蔵大臣ロベルト・ネイゲル男爵ら他の廷臣らと比べるべくもなく、キイルからの信頼はない。それにもかかわらず、ラッセル家やネイゲル家よりもはるかに良い家柄であることを鼻にかけ、主君にすら煙たがられている始末である。

「所詮、あれは將軍の器にはない男でございます。墮落し切ったバルフォア家の人間など、ハーシェリオンの者たちも扱いに窮しておるでしょう」

「それに比べて、メイローズは本当に役に立つ女だ」

ミカヤは二本の指で書一枚をつまみ上げ、文末に記された署名に目をやる。

「父君のネイゲル男爵を裏切ることになっても、殿下に尽くされたいのでしょう。それほどまでに慕っておられるのでは？」

「グラッド、お前にしてはくだらんことを口にする。まるでルキアのようにだ」

「セヴァンス侯、でございますか……」

グラッドはわずかに眉をひそめた。

セヴァンス侯爵ルキアⅡベルネスは、宮廷内の派閥に属しておらず、ただ国王のみに尽くしており、その立場は中立である。ただしグラッドの目には、中立と表現することも不適切なほど、ルキアは何事にも無関心であるように身えた。先ほども、火急でもない王の呼出に応じて軍議を欠席するなど、グラッドには到底理解の及ばない振舞いであった。

グラッドはルキアのことを十年近く前から見知っているが、ドートリツシュ家を継いでからの彼は、それまでとは大きく雰囲気が変わったと思っていた。子供のころより物静かで沈着ではあったものの、昨今ではすべてを諦めたような佇まいをしている。聖職者にそのような人間は珍しくないのかもしれないが、少なくとも宮廷にそのような人間がいた試しはない。

だからこそ、グラッドは警戒していた。

「差し出がましいこととは存じますが、セヴァンス侯は一体なにを考えておられるのでしょうか？ ミカヤ殿下にそむくようなことはなさらないと思いますが、真に信用のおける者と言えるのでしょうか？ あの者は王弟殿下の御子ではありませんか」

「父上の子かもしれんぞ」

起き上がったミカヤは愉悦を含ませた笑い声を立てた。

「そのようなことを……」

グラッドはたしなめようとしたが、ミカヤは悪びれる様子もなく、グラッドを牽制するように見下ろすだけだった。

宮廷への出入りが許されている貴族ならば、ルキアがキイルの子であると大半の者が知っているが、それは噂の中で語られているもので、真偽については不明である。

ただ、キイルの不忠を契機に彼を廃位に追い込んだギルベイド家にとっては、キイルの子であるとするほうが都合が良く、また、キイルの醜聞を公にしたくないハーシェリオン家にとっては、クラウスの子であるとするほうが都合が良かった。

そんな両家の思惑が絡み合った結果が、今現在のルキア・ドートリッシュの立場なのだろう。

「ふっ……噂をすれば」

ミカヤの鼻を鳴らすような声に、グラッドは振り返り、ミカヤの視線を辿った。

グラッドはこちらへと歩み寄る男に妙な違和感を覚えた。同時に、その姿から目を離すことができなかった。彼の容貌は、いくつかの面影が絶妙に絡み合っており、それらが代わる代わる浮かび上がってくるかのように思えたのだ。

五百年続くオトゥール王家の人間は血が濃く、キイルとミカヤも、皮肉なほどその容貌は似ている。一方、ドートリッシュ家は一千年以上という長い歴史を持ち、血族婚を繰り返してきたためか、本家の者も分家の者も似通った容貌であるという。

王家とドートリッシュ家双方の血を併せ持つルキアは、髪の色こそ王家直系の者に近い赤い色をしているが、顔立ちは母アズノエルそのものであると評されることが多い。ただ、養父であるクラウス

とも比較的近い血縁関係にあるため、似ていないということもなかった。

もったも、グラッドはアズノエルの姿を直接目にしたことはない。彼が武官として宮廷に上がるようになったころ、彼女は既に王都を去った後であった。しかし、その噂はいくらでも耳にしたことはある。

長い亜麻色の髪に深緑の瞳を持ち、その微笑みは、宗教画の中に描かれている天使のようであったと誰もが口にしていた。

その宗教画というのはアルゼ教典の一節を描いたもので、本宮と離宮とをつなぐ階段に飾られているものだが、国王がアズノエルの姿を偲ぶようにその絵をよく眺めていたという。グラッド自身、そんな王の姿を何度か見かけたことがある。

「ミカヤ殿下、お呼びと伺いましたが……」

続きの間からルキアの声が聞こえる。

ミカヤは無造作に投げ置かれていた黒いローブだけを羽織り、裸足のまま歩を進め、窓際に置かれたカウチに身体を沈めた。ミカヤは宮廷の儀礼やしきたりに無頓着で、煩わしい慣例などは積極的に廃止せんとしている節もあったが、このような姿を臣下の前で堂々と晒すことはなかった。

グラッドがミカヤの脇に立つと、ルキアはまっすぐにこちらへと向かってきた。

途中、ルキアは分厚いカーテンに遮られた寝台のほうを見やった。そののち、視線はわずかに落とされたが、表情は色を浮かべないものであった。

ルキアは一礼し、ミカヤの前に跪く。

「珍しい姿をしているな、ルキア」

興をそそられたようなミカヤの声を聞いて、グラッドは先ほどの違和感の正体に気づく。

ルキアは公式礼拝の場では白い祭服を、それ以外の場では黒い祭服を着用しているが、今はそのいずれでもない。それどころかサーベルまで手にしている。

「どうした？ 久々に私の剣の相手になってくれるのか？」

「いえ、この剣はそういうつもりのもでは……」

グラッドはルキアが脇に置いた銀細工の施された剣に目を落とす。その柄にはめられた赤い宝石には王家の紋章が彫られており、そのような剣を持つことができるのは王族に限られている。ミカヤはそれに気づいていないのか、それ以上のことをルキアに問わなかった。

ミカヤは脚を組みながら、短く息を吐く。

「先ほどの軍議、お前は出ていなかっただろう？ 聞けば、離宮に向かおうとしていたところを、いきなり父上の侍従らによって連れ戻されたらしいな。まったく、父上の我儘には困ったものだ」

「近ごろ陛下は、とてもお気が弱くなられているようで……」

「その話はもういい。軍議の内容は文書で送らせるから目を通しておけ。……それより、お前に厳命しておかねばならないことがある」

ミカヤは波打つ髪を煩わしげにかき上げ、冷たく言い放つ。

「司祭に犠牲を出すな」

「殿下……？」

ルキアは困惑の渦の中から、なんとか言葉を選び出そうとしているようだった。

ミカヤは瞳を瞬かせるルキアを見返し、教会の総議長から聞いたであろう話を始める。

「>神レガロの力<と言ったか？ 四大司祭と呼ばれる者は特別に精霊の加護を受けているとされているが、その加護とやらの正体はズいぶんと強大な魔法らしいな。ルドリア教会は一枚岩ではないと思っていたが、よもや、そのような力を隠し持っていたとまでは思っていなかった」

ミカヤの出方を探っているのか、ルキアは黙したままでいた。

いかに王家に従順に見えても、所詮はルドリア教会の権力者、ということなのだろうか。ルキアにとって、これは外部に漏れては困る話であったはずだ。教会内の不協和音は王家にとっては好ましいことであるのかもしれないが、この戦いまで持ちこまれては少々面倒であると思う。

「私は実際に>神の力<とやらを目にしたことはないが、王家に秘匿せねばならぬほどの強大な力は、さぞ戦闘で役に立ってくれることだろう。だが、それほどの力を有するお前たちであっても、生身の人間であることに変わりはないのだろうか？ 他の高位司祭ならばなおのことであろうな」

ミカヤは軽く顎を上げながら目線を落とす。

「要は、高位司祭に犠牲が出るのは避けたいのだ。いまだ、司祭の徴兵を命じたことによる私への不満は燦々している。そんな中で司祭に死者でも出れば、司祭の特権を享受している貴族どもがこぞとばかりに非難を向けてくるだろう。シベリー討伐の流れが宮廷で強まったのも、貴族の将校に死傷者が出たことがきっかけだった。そうなつては面倒だからな。……元々、シベリーなどお前たちが前線で戦わずとも勝てる相手であり、司祭の投入をせずともゴースティン軍が敗れるなど万が一にもありはしない。それだけの戦力を初めから用意している。弱腰の宰相や大臣を黙らせるためには、さらなる戦力の存在が必要であっただけだ。所詮、お前たちは開戦に踏み切るための口実に過ぎぬ。その口実に死なれては困る。お前たちはその力を敵軍に知らしめることができたなら、後方に下がっていればよい。軍人と同じ働きなどお前たちに期待してはいない」

ミカヤの発言の最中、グラッドは無意識のうちに眉を寄せていた。たしかに司祭を徴兵せずとも、シベリー相手ならば西方軍だけで事足りるだろう。しかし、ケーニヒスやフアジルとの戦を見据え、戦力を温存しておく必要がある、そのためにも司祭らの力を前提として戦力の編成が行われているのだ。彼らが戦わずともよいというのは、現在、詳細を詰めている作戦と矛盾が生じかねないものである。

グラッドが鬱積を抱きながら二人の様子をうかがっていると、ルキアは穏やかに笑み、深く頭を下げた。

「事情は理解いたしました。高位司祭らに犠牲者が出ぬよう、最善に努めます」

ルキアは恭しくそう告げた。

その様子を微笑まじげに見つめていたミカヤは、笑声まじりに呟く。

「私も前線に出てみたいものだな」

「そのようなお戯れを……」

「別にふざけてなどいない。お前の受け継いだ＜神の力＜とやらを見てみたいだけだ」

ルキアは小さく息を吐き、憂いを秘めた瞳でミカヤを見上げる。

「幼いころ、戯れにお見せしましたでしょう？ それと変わらぬものでございます」

「ふん、あの程度のものなのか？ 期待をしていないとは言ったが、あまりに役に立たんようでは困るぞ。それでは初期の戦力配分について再考せねばなくなるからな」

「……いえ、魔道の力というものは＜念＜^{ゼンゼ}の込め方によってその性質が変異するものなのです。つまり、傷を癒す場合、敵を殲滅せんとする場合、すべては司祭や魔道士の意思次第です。ですから、その……あのころお見せしたものは性質も威力もまったく異なるかと思えます。＞神の力＜に至りましては、なおのことです……。申し訳ございません、嘘を申しました」

ルキアが所々引っかけりながら言葉を紡いでいると、ミカヤは肩を震わせながら哄笑を響かせる。

「ルキア、お前の気鬱は不要のものだ。よほどのことがないかぎり、私が本営であるキウロス要塞を離れることはない。当然、直属の近衛は要塞に留まり、戦場に出ていくこともないだろう」

そう告げるミカヤからは自然な笑みがこぼれていた。そんなミカヤの表情は普段決して見ることでできないもので、だからこそグラッドは、自身の抱いた気鬱が不要のものであったのだと知った。

ここ数年、ルキアは本宮の礼拝堂と王の私室を行き来するばかりで、アイオーン宮に寄りつかなくなり、王宮でルキアとミカヤが親しげにするところを目にすることはなくなっていた。それはルキアの出自を互いが知るに至ったためであろうが、誰の目から見ても、彼らの仲は拗れたかに思えた。

しかし、今こうして二人のやり取りを見ると、目に見えるものがすべてではなかったということだろう。そもそも何事もなければ、ミカヤにとってルキアは忠実なる臣下となっていたに違いないのだ。さながら、王弟キイルに対するラッセル伯爵、ネイゲル男爵らのように。

話が終わったため、ルキアは剣を持って立ち上がり、ミカヤに向かって一礼をする。

「そういえば……」

ミカヤは深くもたれていた背を起こし、ルキアの持つ剣を指差す。

「その剣、見覚えがある。たしか父上のものだろうか？」

今やっと気づいたという言い方ではあったが、おそらくミカヤは

初めからそのことに気づいていたに違いない。

ルキアは特に驚いた風でもなく、淡々と答える。

「はい。先ほど、陛下より賜りました」

「そのようなものを易々とお前に与えることがなにを意味するか、あの方はなにも考えておいでではないのだろうか」

「陛下のお考えは、わたくしにはわかりかねます。それに、わたくしが知る必要もないことでしょう。それでは殿下、これにて失礼を……」

ルキアは優雅な所作で身をひるがえした。

その姿をしばし見つめていたミカヤは、側にいるグラッドの腕に手をかけながら立ち上がった。

端正な横顔が、微笑に歪む。

グラッドが腰のあたりに違和感を覚えたのも束の間、ミカヤはグラッドから剣を奪い、その懐からすり抜けていった。

グラッドはその場から一步も動かなかった。グラッドがミカヤを止めようとしなかったのは、ミカヤが絶対的忠誠を誓う主君であるからではなく、ただ、その先を見届けたいという一個人としての好奇心からであった。

引き寄せられるように、ミカヤの背を目で追い、その先を歩くルキアの姿をも同時に捉える。

背後から迫り来る気配を感じ取ったルキアは、すぐさま振り返り、大きく見開いた目でミカヤを見上げる。

その後のルキアの動きを、グラッドは正確に捉えることは叶わな

かった。次の瞬間には、剣を両の手で高く構えるルキアの姿があった。

鈍い音があたりに響く。

降り下ろされたミカヤの刃は、ルキアの剣の鍔で辛くも受け止められていた。

ルキアに剣を構えさせたのは、幼いころからの訓練の賜物か、それとも人としての本能か……。

そのいずれにしても、ルキアの行動にミカヤは満足げだった。

当のルキアは、そんな自分の行動に困惑を隠せず、何度も瞬きを繰り返しながら視線をミカヤから外した。

刃を受け止めた手腕に対し、ミカヤは賛辞ではなく警告を与える。

「少しは剣の腕も磨いておいたほうがいいのではないか？ 戦場ではなにが起こるかわからん。咄嗟に斬りかかれたとき、魔法を繰り出すよりも剣を抜くほうが有益だろう？」

ミカヤは剣を下ろし、口角を上げた。

「父上がお前にその剣を与えたのは、そのように考えられてのことだろう。あの方は思ったままを口にし、思ったままの行動をお取りになる。為政者としてはあまりに不適であられるが、私はあの方のそういった部分だけは好ましく思っている。宮廷に、そのような人間は他におらぬからな」

ルキアは剣を持ち直し、ミカヤに向かって再び深く頭を下げた。そして、なにも口にすることなく部屋を後にしていった。

ルキアの退室を見届けたミカヤは、抜き身の剣をグラッドに押しつけ、再びカウチに腰を下ろす。その横顔に、グラッドは問いを投げかけた。

「殿下、もしやセヴァンス侯に王籍をお与えになろうとお考えなのですか？」

「いけないか？」

それになんの問題があるのかとばかりに、ミカヤは嘲笑混じりの声で答えた。

「ですが、それではハーシェリオン家の者たちを増長させかねないのでは？」

「案ずるな。私はあれをハーシェリオンの手駒とするつもりはない」

ミカヤはそう言い放ち、肘掛けにだらりと身をあずけた。

ギルベイド家とハーシェリオン家……。

宮廷を二分するこの二つの権門は、ともにオトゥールに先立って興った王朝の末裔である。一度その権勢は衰え、地方の一貴族として地位に留まっていたが、この二百年ほどの間に小国の王族を取り込み、なおかつ両家ともに先王の妃を輩出したために、オトゥール王家に対し強い影響力を及ぼすようになっている。現在の王弟派・王太子派という宮廷闘争は、厳密に言えば、四十年以上にわたるハーシェリオン家とギルベイド家の権力争いという図式になっている。

仮定を持ち出しても詮なきことではあるが、先王が初めの王妃であるオヴェリア・ギルベイドの後添いにハーシェリオンの娘を選ば

なければ、そして、現王が異母弟に政治の一切を押しつけなければ、今の宮廷闘争は起こっていなかったに違いない。

王太子派の軍人であるグラッドは、王弟派の者たちと敵対しているものの、一個人に立ち返り、王弟キイルとその腹心であるラッセル伯爵やネイゲル男爵らを見ると、彼らの評価はまったく別のものになる。

キイルによる二十数年の統治は、ハーシェリオンの力を行使する専制的なものであったわけではない。結果として閣僚・軍幹部高官らはハーシェリオンの息のかかった者たちで占められているものの、彼らの言いなりになっているわけでも、その利益を図ろうとしているわけでもなかった。

天秤をつり合わせるかのごとき慎重さで、譲歩と圧力を巧みに使い分け、ギルベイド家の権勢を殺いでいく様は見事であったとしか言いようがない。

専制的に物事を推し進めているかに見えるミカヤでも、国王の従弟であり自らの後見人でもあるダラス公アンジェ・ギルベイドの意向を無視することはできず、背後の力に突き動かされている面もある。特にほんの数年前までは、宰相や大臣らのもとで国政について学んでいる状態であったため、ミカヤの及ぼせる力というのは微々たるものだった。

もっとも、昨今ではそのころを払拭せんとするかのように、権柄に振舞うようにもなっている。

突然、独り言のようにミカヤは呟く。

「ファジールの独立……。あの男がザイード大公家を全面的に援助したのは、ケーニヒスの権勢を殺ぎ、膠着していたゴースティンと

ケーニヒスの均衡を切り崩すためであったのだろうな。専らゴースティンのための行為であり、決してファジールの利益を図ろうとしたわけではないであろうに……」

そんなキイルの思惑は別に、ザイード家はケーニヒスのセルバンテス王家からの離脱を画策していたため、ゴースティンによる軍事及び経済援助は、まさに願ったりであったのだ。その経緯からファジールの高官たちは、キイルを始め、当時から外務大臣を務めていたデュー公ミシェル・ハーシェリオンらに恩義を感じており、その政敵とも言えるギルベイド家を敵視する始末であった。

現大公のジョアン・ザイードに至っては、キイルが妃を娶らず、ルキア以外の子を儲けることをしないにもかかわらず、いまだキイルが王位に就くことを望んでいると伝え聞く。

(……滑稽なことだ)

グラッドがそう思った瞬間、ミカヤは唇を歪めて一笑した。

「ハーシェリオン家に加担するザイード家など、ともに堕ちてゆけばいい」

「そしていずれは、ケーニヒスも……ですか？」

その問いかけに、ミカヤはなにも答えなかった。

過ぎる面影

ドートリッシュ邸へと戻ったルキアは、かつては父の私室の一つでもあった北の書斎へと向かった。

ここは一部の使用人を除いて立ち入りが禁じられており、この数年、“開かずの間”となってしまうている。掃除が満足に行き届いていないせいで、雑然としているわけでもないが、埃と湿気で陰鬱な空気が立ち込めていた。

ルキアは部屋を中心に置かれた長椅子に腰かけ、手にしていた剣を脇に置いた。

他の部屋とは違い、特別に分厚く詭えられたカーテンが閉め切られているため、まだ陽は陰っていないというのに室内は薄暗い。

そんな中で、ルキアはさらに闇を深めるように目を閉じた。軽く俯くと、横顔に長い髪がはらりとかかる。

元より長かった髪をさらに伸ばし始めたのは、司祭になってからだった。

宮廷において、髪を長く垂らしている者は少ない。男ならば、肩につくほどの長さがあればリボンや飾り紐で一つに結ぶ者が多いが、軍人ならば短髪の傾向が高くなる。女ならば鎖骨やデコルタインを強調するドレスの流行により、髪は高く結い上げることが主流となった。

その一方で、司祭らは長く垂らしている者が珍しくないせいか、この四年もの間、ルキアはひたすら髪を切らずにいた。

王から賜った剣を手取る。

刀身を引き抜き、ゆっくりと緑眼を開く。そこに映る自分の姿に向けて、ルキアは深いため息を吐いた。

子供ころ、ルキアはもつと淡い髪色をしていたが、年を重ねるにつれて赤みが増していった。

この国において、貴族や平民の別なく赤い髪は見られるが、その数はごく少数であり、歴代国王に赤みの強い髪色がよく見られたために、赤毛はオトウル王家の象徴のように捉えられている。ドートリッシュの人間は金髪に近い亜麻色が多いが、ルキアは表向きクラウスの庶子とされており、ルノーと母親が違うことは幼いころから知っていたため、深く疑問に思うことはなかった。

十一のとき、ルキアは避暑に訪れていたアルティス城で、母と会ったことがある。

王都に戻ったルキアが、城にいた女性は誰なのかとクラウスに訊ねたが、父は悲しげに微笑み、はぐらかすばかりだった。そんな父の挙動から、詳しい事情はわからずとも、訊いてはならないことなのだ幼心に悟ったものだった。

結局、ルキアと母の邂逅はその一度きりであった。

その数年後、あのとき会った女性が自分の母だと知ることになったが、ルキアがクラウスに母のことを訊ねることはなかった。クラウスもまた、最期までアズノエルのことをルキアに一切語らなかった。

ルキアが十二になったころ、ミカヤの学友として宮廷に召され、アイオーン宮に住まうことになった。その際、クラウスに連れられて国王に接見した折、王はルキアを見た途端に「アズノエル……」と小さく呟いた。

ルキアはふと隣にいる父を見上げたが、その顔は苦渋に満ちていた。傍にいた王の侍従たちもどこか焦ったような不自然な素振りを見せていたが、王がそれを気に留めることはなく玉座から立ち上がり、周囲が止めるのも聞かずルキアに歩み寄ったのだ。

ルキアは今になって思う。

ミカヤの言うように、アルトⅡヴィジェ王は、“思ったままを口にし、思ったままの行動を取る”人物であった。

宮廷に上がれば、多くの貴族たちと顔を合わせ、様々な話を耳にする機会が増えていった。宮廷人たちとの会話は興味深いものもそれなりにあったが、辟易するものも少なからずあった。

目配せし合い、なにかを面白がっているような貴婦人たち……。扇の裏に隠された好奇と嘲笑を、あのころのルキアに理解することはできなかった。

ルキアに好奇の目を向けてきたのは噂好きの貴婦人たちだけではない。いわゆる大貴族と呼ばれるような者たちは、なにやら値踏みをするような視線をルキアに投げかけてくるが多かった。

——本当に、アズノエル様によく似ておられる。

『アズノエル』

宮廷に上がるようになってから、たびたび耳にするようになった名だった。ルキアは疑問に思うままに、それは一体誰のことなのかと彼らに訊ねた。

ある者は微笑むばかりでなにも答えず、またある者は、かつて宮廷に出入りしていた貴婦人のことだと答えた。

名ばかりを聞き続けた女性が母だと知ったのは、それからほどなくしてのことだった。それは王の口から聞き及んだことであった。たまたま侍従たちが席を外し、周囲に誰もいなくなったとき、ルキ

アは王に直接訊ねた。王は別段驚く風でもなく、むしろ懐かしさを噛みしめるようにしてアズノエルのことを語った。

もったも、王がルキアに教えたのはアズノエルとルキアの関係のみであり、それ以外のことをルキアが知るに至ったのは、また別の者の口を通してのことだった。

――許してくれ……。

いつのころか、王はルキアに向けて奇妙な謝罪を繰り返すようになった。

アズノエルは二十二年前の一件により、王都を去り、セヴァンスのアルティス城へと移り住んでいた。そこは彼女が十二の年まで生まれ育った城で、十八から十数年にわたり幽閉同然で過ごすことにもなった場所でもある。

アズノエルが亡くなったのは今から七年近く前のことであるが、彼女の葬儀は行われず、一族の墓にも葬られてはいない。王の妃にと望まれた身でありながら王弟との不義密通により、追放の憂き目にあったゆえの結果だと口にする者もいたが、まるで彼女の存在そのものが消されてしまったかのような扱いは不自然に思えるものだった。

その死の噂は静かに王都エクシュールへと届き、アズノエルのことを覚えていた宮廷人らの間へと拡散していった。

孤独のうちに死へと追いやられた名家の姫の憐れな末路により、秘かに語り継がれてきた恋物語は一気にカタストロフィーへと向かっていった。

王がこのことを負い目に感じているとミカヤは言っていたが、実際にルキアがそう感じることはしばしばある。王は、ルキアを呼びつけ、とりとめのない昔話を繰り返し、かつて深く愛した女の名を

刻みつけてくる。それは、ルキアの中に見出すアズノエルに許しを請うかのようなが、王の口にする言葉はあまりに泡沫的で、聞くごとに虚しさが募るばかりである。

ルキアは感覚を閉ざすように、鋭利な刃だけをじっと見つめた。

それは、本当に綺麗な刃だった。

一度も抜いたことがないと王が話していたが、それは誇張ではなく事実だったのだろう。カーテンの隙間から差し込む一筋の光が、片刃にさらなる輝きを与えている。

ただ一つ、ルキアが母に似ていると言われなかったのがこの髪の色だった。だから、そんな唯一の差異を誇示するかのように、ずっと伸ばし続けていたのだ。

（あまりに、子供じみているな……）

数年前から今なお続く稚拙な拘りに苦笑を浮かべ、ルキアは剣の柄を強く握った。

座っていると腿のあたりにまで届く髪を、背の中ほどで一つに掴んだ。そして剣を首の後ろへと回し、そのまま一気に斜めに引いた。

はらはらと髪が散らばる感触が肌に伝わったとき、心のつかえが溶け落ちていくように思えたが、それはほんの一時だけ得ることのできた安息に過ぎず、断ち切られた糸が再び複雑に絡み合っているのを静かに感じていた。

背後で蝶番の軋む音がするとともに、室内一面に光が差す。

「自害でもするのかなと思ったぞ」

さらりと投げかけられた不穏当な言葉に対し、馬鹿なことを、とルキアは苦笑まじりに呟いた。

「あれほど長くては、戦闘で邪魔になるだろうと思ったただけだ」

剣を鞘に納め、脇に置き、ルキアはくつろぐように長椅子に背を預けた。

リジーは絨毯の上に散らばった髪の手を見下ろし、不満げな声を発する。

「髪を切ったりしたら、魔力が落ちるかもしれないぞ？」

「そうなのか？ そんな話は初めて聞いたが……」

リジーは炎を操る魔道士であるが、彼自身の髪は襟足の部分だけが肩甲骨のあたりに届こうかという程度で、ルドリア教会の司祭と比べて長いわけではなかった。そもそも強すぎる魔力など日常生活には必要なく、むしろ不自由なだけである。

「まあ、ただの迷信だろうけどさ。俺たちの一族の祈禱師たちとはとにかく長く髪を伸ばしていたことを思い出したんだ。それをいろんな形に結っててさ、ある意味芸術って感じだったな」

リジーもかつてはそうだったのだろうかと思いつながら、ルキアは一時的に頭の中から追いやっていたことを思い出し、わずかに眉を寄せた。

「私とお前は似たような力を使うが、シベリーにはお前のように魔道の力を使う者は多いのか？」

「いいや。こんな力持ってる奴なんかほとんどいなかったさ。それに、いたとしても戦に使ってくることはないだろうから安心しろよ」

リジーは苦笑の中にそっけなさをのぞかせていた。まるで、それ以上訊いてくれるなど言っているようでもあった。

リジーの同族——シベリーとの戦は一月も^{ひつつき}しないうちに決行される。

エリーヌには覚悟はできているなどと答えたが、なにをもって覚悟とすればいいのかルキアにはわからなかった。せめてこの戦に“大義”があればと甲斐のないことを願った。罪人を手にかけるならば、ここまで心が倦んでいくことはなかっただろう。

ルキアは前髪をかき上げ、そのまま額を強く押さえた。

「なあ、ルキア」

ルキアは上目でリジーを見やる。するとリジーは、気にするな、とでもいうように無邪気に笑んだ。そしてソファの肘掛けに腰を下ろし、ルキアの髪を一筋掬い上げた。

「なんだか昔みたいだな」

それは二人が初めて会ったころのことだろうか。

ルキアは薄く笑みながら、ふいに巻き起こる情景を目蓋の裏に感じていた。

こぼれる光の中で

強い陽光が薔薇窓やステンドグラスから差し込み、身廊に鮮やかな色を落としている。その光は、椅子に腰かけるルキアの頭上にもきらきらと降り注いでいた。

ルキアはじつと手の中の聖杖を見つめる。

この紫水晶が埋め込まれた杖は、生前クラウスが使用していたもので、ドートリツシュの当主に代々受け継がれているものである。それをずっと辿っていけば、教皇エルジェ三世にまで行き着くことになる。

教皇エルジェ三世は、オトウール王家にとって禁忌の存在とされているが、それはドートリツシュ家にとっても似たようなものであった。

エルジェ三世に関する文献はドートリツシュ本邸を始め、アルテイス城やフェルダ大聖堂の書庫などに多数残されているが、そこに記されている彼の人となりについては、目をそむけたくなるようなものが散見された。エルジェ三世は非常に強い魔力を秘めていたとされるが、そんな自らの力を盾に、王家にも司教らに対しても高圧的な態度で臨む人物であったという。挙げ句、晩年には精神に異常をきたし“狂王”とまで呼ばれるようになり、そのことが身の破滅につながったというように評されていた。

そのせいか、彼の肖像画はほとんど残されていない。エルジェ三世が殺害されたのは四十の半ばであったとされるが、晩年の肖像は一枚もなく、せいぜい十代半ばから二十歳までにしか見えないものばかりが数点残されているのみであった。その肖像画は今もアルテイス城に飾られているが、彼の容貌は、髪の色こそ違えどルキアとよく似ていた。

聖杖を持つ手に力を込めた。この杖には強い魔力が染みついている。

どこか懐かしさを覚える波動。それは父のものであるのか、それとも狂王のものであるのか……。

出撃まで後十日。

ここ最近、ルキアは朝の公式礼拝と国王との謁見が終わると早々にエクシール宮殿を後にし、それ以外の時間のほとんどをドートリッシュ本邸の聖堂で過ごしている。そこでなにをするというわけでもなく、ただ、無為に時間が過ぎていくのを待っているだけだった。

ふいに、ゆるやかな魔力の波動を感じる。

ルキアは顔を上げ、開け放たれた扉に目をやったが、そのあたりには午後の強い光が降り注ぎ、迫り来る人物の容貌を隠していた。横に広がったドレスの影からは女性だということしかわからないが、彼女から感じる波動は身に覚えのあるものだった。

「ルキア様、お久しぶりね」

「ええ、しばらくですね。……ミルドレッド」

ルキアの前にまで歩み寄ったミルドレッド・レイヴァンは、口元に手をやり、笑みを浮かべた。

「お髪、どうされましたの？」

誰の目にも真っ先に目につくのだろう。髪を切って以来、屋敷の者たちでさえもルキアとすれ違うたびに驚きの視線を投げかけてくるほどである。

「戦争に行くのなら邪魔になると思いまして」

「ずいぶんな理由でお切りになったのね。これまでずっと伸ばしておられたから、なにか意味があるのかと思っておりましたわ」

ミルドレッドには稚拙な動機が見透かされていたのかもしれないと思い、ルキアは自嘲気味に口角を上げる。

「ええ、魔力が増強するという迷信がありました」

「あら、よろしいの？ 戦では魔法を使われますのに」

「……多少弱まったくらいで、ちょうどいいのかもしれないので」

その言葉に、ミルドレッドは複雑そうに眉を寄せた。

ルキアが昔から強い力を秘め、その力に手を焼いてきたことをミルドレッドは知っている。しかしルキアの懸念はまた別のところにある。

髪を切るぐらいで魔力が弱まるのであればそれに越したことはない。そんな迷信に縋りたくなるほど、今のルキアは恐れを抱いていた。この恐れは、戦場に行くことに対してではなく、あの力を初めて使うことに対してである。

ルキアは椅子から立ち上がり、ミルドレッドの前に立つ。

「ミルドレッド、今日は一体どうされたのです？」

「用がなくては来てはいけませんの？」

「そういうわけではありませんが……。ただ、父が亡くなってから、あなたがここに来られることもなくなりましたからね」

「そうね。昨今、あなたとお会いするのは王宮ばかりでしたものね」

クラウスが存命のころ、ミルドレッドやベアトリスを屋敷に招いて晚餐をとにもすることがしばしばあった。レイヴァン家とドートリッシュ家の付き合いは何十年も前から続いているが、殊にこの十数年、両家の親交はより強固なものになっていた。

きっかけは、レイヴァン家の跡取り娘であったミルドレッドが、ドートリッシュ家お抱えの画家であったダグラスと結婚したことによる。ドートリッシュはダグラスの後援者の中でもっとも有力な貴族であったため、幼いころのルキアやルノーの肖像画の大半をダグラスが手がけており、また、本邸の階段の壁に掛けられているクラウスの肖像も彼の手によるものであった。

ダグラスの突然の事故死により、二人の幸せな時間は長く続かなかった。そのことに胸を痛めたクラウスはミルドレッドを気遣い、晩餐や会合によく招いていた。また、クラウスの勧めによりミルドレッドは宮廷を出入りするようになり、王宮を彩る花の一人となっていた。

クラウスの死後、ルキアが父と同様の気遣いを続けなかったため、徐々にレイヴァン家とは疎遠となっていた。

突然、ミルドレッドは大げさにため息を吐く。

「王宮にはたくさんの方がいらっしゃるから、なかなか込み入ったお話をする機会がなくて困っておいりましたのよ。だからこちらに参りましたの」

どこか棘のある言葉に、ルキアは少しの焦りを覚えた。

ミルドレッドは昔から辛辣なことでも平気で口にする質であつたため、ルキアは大人になってからでもどこか彼女に頭が上がりないところがある。

ルキアは探るような視線でミルドレッドを見やる。

「その、込み入った話というのは？」

「ええ。実はこの間、たしか特別軍議が開かれていた日だったかしら？ 久しぶりにエリーヌ様にお会いしましたのよ」

「そうですか」

「ルキア様も、離宮の中庭でお会いになったのでしょう？」

「ええ、まあ……少し言葉を交わしただけです」

なぜミルドレッドがそのことを知っているのかと訝りながらも、ルキアは適当に言葉を返す。

「それで、エリーヌとなにかあったのですか？」

「なにやらずいぶんとあなたに否定的な物言いをされてましたけど、喧嘩でもなさいましたの？」

そのことかと、ルキアは安堵から微笑を浮かべた。

それにしても、エリーヌはミルドレッドにどのようなことを言ったというのだろう。ミルドレッドがわざわざ心配で出向いてくるほどエリーヌは怒っていたのだろうか。

勝手な空想がいくつもルキアの頭を過ぎっていき、自然と苦笑がにじんだ。

「先月、エリーヌがミカヤ殿下の命令書を私のところへ届けにやってきたのです。その、つまり高位司祭に徴兵命令が下ったときのことですが、少し言い合いになりました……。そのことで怒っていたのかもしれませんが。ただ、この間会ったときは別に怒っているという風ではなかったのですよ。こういった風の吹き回しか、剣の相手をしてほしいと言ってきたぐらいですから。出撃までの間なら屋敷に來ればいいと言っておいたのですが……。まあ来ないでしょうね、あの人は」

「かといって、来るなど言えば絶対いらっしやらないでしょうし……。あの方の扱いは難しいところね」

ルキアはミルドレッドと顔を見合わせて笑いながらも、徐々に笑みをほどいていく。

「別に、彼女に來てほしいわけではないのですよ。会ったところで一体なにを話せばいいのやら……。それに、私は長らく剣の稽古などしておりませんし、この鈍った腕で彼女の剣の相手をするのは骨が折れそうですから」

エリーヌの腕は、ルキアと最後に手合わせしたときよりもはるかに磨きがかかっていることだろう。エリーヌは子供のころから負けず嫌いで、その向上心の高さに比例するように剣の腕もみるみる上達していった。十五で士官学校に入って以降、彼女の腕前を直接目

にすることはなくなり、噂として耳にするだけになっていったが、それは決してグレンヴィル家の名声によるものではなく、彼女自身に対する真実の評価であったに違いない。

淡く浮かび上がる追想を、ミルドレッドの声が遮る。

「ここ数年、あなたは社交というものを一切無視しておられるようですけど、グレンヴィル家とだけは堅密な関係をお続けになったほうがよろしかったのではなくて？　グレンヴィルはカレニーナ王女殿下の降嫁先ですし、王家の信任も厚く、宮廷での影響力も強いお家よ。当主のアシュレイ様は宮廷内の派閥に与することのない清廉な武人であつしゃいますし、エリーヌ様もまっすぐなご気性で、勝手な噂に振り回されるような方ではないわ。カレニーナ様だって、昔からルキア様に好意的でいらしたでしょう？」

「……そうですね。今の宮廷においては珍しく、真に信頼のおける方々だと思っておりますよ」

「そう思いなら、エリーヌ様と和解されてはいかが？　エリーヌ様があなたに突っかかるような態度をお取りになるのは戸惑つてらつしゃるからよ。ろくに理由もわからないまま拒絶されたら、どうすればいいかわからないのは当然でしょう？　あなただって、同じような経験をされたことがありでしょうに……」

ルキアはなにも反応を返さなかったが、ミルドレッドは神妙な声で言葉を続ける。

「あれから四年……いえ、もう五年近く経つのよ。あの方はもう大人だわ。いつまでも子供だと思いいなくなって見くびってらつしゃるの？」

「そういうわけではありません」

ルキアが強い口調で言い切ると、ミルドレッドは鋭い視線をルキアに返した。

「あなたのこと、心配しておいでよ。戦場になんて行ってほしくない、あなたに人殺しなんてしてほしくない、そう思っている方もあの方はそれを口に出すことができないから」

「私も、エリーヌには戦場に出てほしくありませんね。たとえば、ミカヤ殿下の護衛として要塞に留まるだけだとしても」

「そのお言葉、私ではなくてエリーヌ様の前でおっしゃればよろしいのに」

「それができれば苦労はしません」

ルキアが開き直ったように呟くと、ミルドレッドは呆れたと言わんばかりに大きく息を吐いた。

ルキアはミルドレッドに微笑を向け、冷淡に問う。

「……あなたがいらっしゃったのは、そのような話をなさるためだったのですか？」

「まさか。本題は別にありますわ」

ミルドレッドは青灰色のドレスの裾を捌き、ルキアに一步近づく。

「あなたが戦争に行かれるだなんて、クラウド様が生きていらした

ら、なんて言われたかしら？」

明らかな非難の色が漂う声色だったが、ルキアはそれをはぐらかすように明るく答える。

「父が生きていれば、そうですね……まずは、勝手に司祭になったことを叱られそうです」

「それでしたら、叱られるのはルノー様も同じでしょうね。お言いつけ通り、家を継がなかったのですから」

「父から二人揃って叱られるだなんて、子供のころ以来で懐かしいでしょうね」

「おふぎけにならないで」

口調とともにミルドレッドの目には険しさが宿る。

「今さらこのようなことを申し上げても仕方がないとわかっていますけど、この際だから言わせていただくわ。噂でお聞きしたただけですけれど……司祭の徴兵命令が発せられたとき、あなたはそれに快諾されたとか……。それは本当でらっしゃるの？」

「本当です」

ルキアがためらいなく答えると、ミルドレッドは眉を上げる。

「エリーヌ様はあなたのこと、聖職者としての本分を軽視しているとおっしゃってましたわ。それについては私も同感よ。そもそも、他の司祭たちならばともかく、あなたが賛同なさるということがど

れほど影響力を持つことなのか、ちゃんとわかっておいでなの？」

「お言葉ですが、私のような立場にある人間が、王家に背くことのほうが問題なのです。いつまでも教皇時代の権威に縋っているわけにもいきませんから」

「……それと同じこと、クラウド様の前でもおっしゃることができて？」

「シベリーへの報復はいずれ近いうちに行われたでしょうし、私が父の言いつけ通りに司祭になっていなくても、軍人になっていれば戦場に赴くことになっていたでしょう。ですから、父は仕方ないことだと思いいなるのでは？」

「その詭弁、ベアトリスにもおっしゃったそうね？」

「筒抜けのようですね……」

薔薇窓から差す光はさらに強い輝きを帯びた。ルキアはその日差しとミルドレッドの視線から逃れるように身をひるがえした。

その背に厳しい声が投げかけられる。

「絶対に生きて戻って来られる保証はおありなの？」

「私は外遊に行くのではなく戦争に行くのです。そのようなことは答えられません。そもそも、絶対の保証なんて何事にもありはしませんよ。……ただ一つ言えることは、私の操る力が強大なものであるということだけです」

「それは、四大司祭の方々の力ということかしら？」

「そうです」

「アルゼ教典の一節と同じことが起こると?」

「……おそらくは」

原始教典の中に登場する四聖獣——旋風の刃を放つ狼フレイド、長大な胴体を持つ水蛇アナート、獰猛な爪と牙で大地を引き裂く黒牛ガリアント、そして黄金の翼を持つ炎の鳥ベリアザーベル……。

ルドリア神の御心により地上へと降り立った四聖獣は、その聖なる姿を人の形へと変え、眩い光を放ちながらイシスのもとに現れたという。四聖獣の力を分け与えられたイシスは、その化身となり、暴君ヴァーロンの軍勢をたった一人で壊滅させたとアルゼ教典には記されている。

もうすぐ、一千年前の聖戦以後初めて、>神^{レガロ}の力くが使われることとなる。

かつてはお伽話にすぎないと思っていたその力は、ルキア自らの身をもって実在した力だと思い知らされることとなった。禁忌魔法を継承してからルキアは一度もその力を開放したことはないが、それがどの程度の威力なのか、容易に想像することができる。

戦場において“敵”を滅せと念じながらその力を開放するとき、迫り来る軍勢は一瞬にして炎の翼に抱かれることとなるだろう。さながら、エーゼン・サルファの私室に掛けてあったノワイユの遺作のままだ。

>神の力くについて考えるとき、ルキアの中に一つの疑問が沸き

起こる。

ゴースティンのルドリア教会が聖職者に魔道の力を求めてきたのは、教皇位廃止後ではなく、聖戦以後からであったと伝えられている、おそらく、教皇時代に＞司教＜と呼ばれていた者たちが、現在の高位司祭に相当するような力を有していたのだろう。

それならば、なぜ三百年前の内乱の折、教皇軍は＞神の力＜を用いなかったのだろうか。

内乱の詳細について、これまで王も貴族も隠匿せんと努めてきた。それにより、歴史書や関連書物において内乱の経緯や戦闘についての記述はことごとく削られており、王族や一部の貴族、教会関係者を除いて公のものとはなっていない。

だが、民衆の口を完全に塞ぐなど容易ではない。当時は一千年前とは違い、既に紙は貴重品ではなく、書物に残す技術も発達していた時代である。また、戦闘において多くの民を巻き込んだとはいえ、虐殺が行われたわけでもないのに、伝承としてすらまったく残されていない。加えて、教会が保持している史料や古い書物には検閲が及んでいないが、それらの中にも教皇軍が＞神の力＜を使用したという記述はないのだ。

敵とはいえ、ガレ族相手に＞神の力＜は使えないとでもいうのだろうか。しかし、教会と王権の対立の歴史を鑑みると、そのようなことを考慮するとはとても思えなかった。

「ねえ、ルキア様……」

ミルドレッドの呼びかけに、ルキアは視線だけを返す。

「＞神の力＜の存在、私は昔からそれを単なるお伽話だとは思って

おりませんでしたわ。確信に至ったのは、あなたが四大司祭となられてからだったかしら？ あなたから感じる魔力の波動……魔道を扱う者にとっては畏敬を覚えずにはいられないほどのものですから」

ルキアは聖杖に視線を落とし、紫水晶にうつすらと映る自分を見つめながら呟く。

「私自身、自分の中にある凄まじい力の塊には時折恐れを感じるほどです。力を意識的に抑えようとしなければ、子供のころのように暴発させてしまいそうになることもありますから」

「それと、あの伝承も本当だと思っておりますわ」

「……伝承？」

「イシスより＞神の力＜を受け継いだ司祭は、ドートリッシュ家の司祭であつたとか……。あなたの強い魔力に触れれば、信じざるをえませんわ」

ミルドレッドの敬意をにじませた言葉を遮るように、ルキアは首を振る。

「いえ、それは本当に俗説に過ぎないものでしょう。おそらくドートリッシュの当主が教皇としての権威を手にしていく中、その正統性を高め、さらなる威信を得るために、自ら聖イシスの後継者を名乗り始めただけだと私は考えています」

「大事なのは人々がどう思うかということよ、真実ではないわ」

ミルドレッドは吐息まじりに告げ、いつも華やかであるはずの顔

に強い苦悩を漂わせた。

「今は、数百年前とは比べものにならないほど医学も発達して、悪魔の仕業と呼ばれた伝染病の蔓延にも対策がなされ、飢饉による食糧事情も改善されたわ……。きつと、平和と呼ぶにもっともふさわしい時代なのでしょね。そのせいか、神への感謝を忘れる者も少なからずいるわ。イシスの正統なる後継者、神の化身とも呼ばれたドートリツシュ一族に対してもね」

「それも一つの時代の潮流というものでしょう。平和ゆえに神への畏敬が薄れるというのであるならば、かまわないと私は思っておりますよ。そもそも私たちは神ではありませんし、一司祭に過度の敬意など不要です」

「あなたがどう思われようと、ドートリツシュ一族への畏敬は依然として存在しているわ。どれほど薄れようと、それは決して消えることはないもののよ。あなた方のことを“眠れる獅子”だなんて呼ぶ者たちもおりますけど、それはいまだに教皇の一族を恐れているからだわ。三百年という年月が経つていようとも、あなた方はその血統を保ち、教会の権力者であり続けているのですから」

「私は自分をそんな大層な人間とは思っておりませんし、その力を振りかざす気もありません。あなたは、私にかの“狂王”のように振舞えとでも？」

ミルドレッドは耐えかねたように語気を強める。

「話を極端な方向へ持っていけないで。ご自分の立場を軽々しく考えられるべきではないと申し上げているだけよ。あなたの一挙一動がどれほど影響力を持つものなのか、いい加減自覚なさったらいか

が？」

ルキアは短い息とともに言葉を呑み込み、そのままゆっくりと俯いた。目をそらすことも沈黙することも卑怯でしかないと思ったが、これ以上空虚で愚かな反論を繰り返す気にもなれなかった。

ミルドレッドに指摘されたことは、つい先日、充分に思い知らされたことである。

強制的に徴兵命令がかかったのは高位司祭のみであるが、下位司祭及び国内の魔道士についても、任意ではあるものの衛生班として後方支援部隊に従軍するよう呼びかけられている。ルキアはルノーにはデフトールへ戻るよう厳命したが、一族の下位司祭たちについては従軍するか否かは彼らの判断に任せた。

その結果、ドートリツシュ一族の司祭は、ルノーを除いたすべてが戦地へ赴くこととなった。いくらルキアが強制しなかったとはいえ、当主が前線に出る以上、彼らには否の選択など初めからなかったのだろう。たとえ残るように命令したところで、彼らは聞き入れなかったのかもしれない。

また、ドートリツシュ一族の司祭が従軍することで、他の下位司祭から選択肢を奪う事態にもなっていた。定例会議において、あれほど反対の意思を示していた者たちまでも従軍を決めたという話が、既にルキアの耳にも入っている。後方支援部隊には命の危険などまづないと思われるが、多くの司祭を巻き込んでしまったことを申し訳なく思う気持ちはあった。

強い自責と諦念が襲い、ルキアは片手で目元を強く覆った。

わずかな沈黙の後、ミルドレッドは労わるような声色でルキアに語りかける。

「あなたが強いしがらみを絶ち切れずに苦しまれていること、それは私も存じておりますわ。けれども、ドートリッシュの当主として重責は、たとえ宮廷闘争の前においても軽視してはならないものだわ。ルドリア教の信徒にとって、あなたという存在がどれほど大きなものであるのか、それをお忘れにならないで」

そう言いながら、ミルドレッドはルキアの手首を軽く掴み、目元からそつと手を引き剥がす。ルキアの瞬く瞳には、ミルドレッドの沈鬱そうな顔が映った。

「……決して誤解なさないで。あなたを敬い慕う多くの者たちは、ドートリッシュの権威に縋ろうとしている者ばかりではないわ。そのほとんどが、あなた自身の人柄に惹かれてのものよ」

ミルドレッドの言葉は努めて冷静なものであったが、その端々に必死さを感じられるものでもあった。そのことをうれしく思わなくはないが、ルキアには慰めの言葉などもはや不要のもので、誰にも、なにも期待などしていなかった。

ただ、否定の言葉を告げることは心が倦み果てていた。

ルキアはミルドレッドに向けて薄く笑みを作る。

「そういえば、ビビからは弟子にしてくれと言われているんですよ」

「ベアトリスが、そんなことを？」

「ええ、反対なさいますか？」

ルキアが皮肉っぽく問うと、ミルドレッドは細い眉を寄せた。

「あなたが六年前に遠縁のビビを引き取ったのは、あの子をいずれ司祭にさせるためなのだと思います。司祭になるには貴族であるほうがなにかと都合がいいですし、なにより、あの子は既に高位司祭の叙階を受けられるだけの力を有しておりますから。ですが、あなたはいまだビビを司祭にさせる気がないようですね。……私は、できればそのほうがよいと考えておりますけれど」

「ええ、私個人としては今のルドリア教会に対しては批判的な考えを持っているわ。もちろん、それは教義や王家との関わりがどうのということではないわ。司祭たちの在り方、与えられた特権、そして俗世との強固な結びつき……。疑問を抱かざるをえないことが散見されますもの。なにより、司祭が戦争に遣られるようでは話にならないわ」

「まったく、その通りです」

「多くの人を救うため、望んでその身を捧げる……そんな人柱のような精神は聖職者には必要なものでしょうね。人々が信仰のために命を投げ出した殉教者たちを崇めるのは、彼らを自らになぞらえるとき、その偉大さに打ち震える想いを抱くからに他なりませんもの。……ただ、今回の戦はいくらでも回避できたはずのものでしょうか？」

「そうですね。シベリーへの報復と呼ぶには、少々行き過ぎているようにも思えます。それに、いくらシベリーが異教徒とはいえ、大義もないこの戦は＞聖戦＜にはなりえません」

「そこまでわかっていらしても、あなたはミカヤ殿下に盲従されるのね」

ミルドレッドは挑むような視線をルキアに向けた。

ルキアは柔い笑みをたたえ、透き通った金茶色の双眸をまっすぐに見つめ返す。

「私が拒否したところで、他の司祭らが戦場に遣られるだけのこと。ならば私の力を使いましょう。そのほうが、犠牲は少なくてすむはずですから」

「ご立派な大義名分ですこと」

「まるでエリーヌが言いそうな台詞ですね」

「その通りよ、エリーヌ様がおっしゃっていたことだわ」

ミルドレッドが落胆をにじませながら睫毛を伏せた。

眩い光がこぼれ落ちる薔薇窓を物憂げに見上げ、ルキアは眩く。

「それでも私は、ルノーやビビまでもが徴兵されることになるのなら、必死に反対したのでしょうか。物わকারのいい振りをする事すらできなかったでしょう。……国のためだなんだと言いながら、結局私は自分の周りの者たちが可愛いだけなのですよ」

久々に吐き出すことのできた本音は、胸のつかえを溶かしてくれるわけでもなく、ただ、独り善がりな自身を思い知るばかりでしかなかった。

秘めたる炎

金牛宮の月、一日。

瞬く間に時間は過ぎた。出撃までの間、エリーヌがルキアのもとを訪れることはなかった。いつでも屋敷に来ればいいとルキアは言っていたが、所詮、あれは社交辞令だろう。十数年もの付き合いがあれば、その程度のことは容易に知れる。

ゴースティン王国西部、アズーラ平原の中央に位置するキウロス要塞に国軍が集結し、それらが平原に整列している。

このキウロス要塞は百年近く前に二十年もの年月を割いて建設された稜堡式城砦都市で、これまでケーニヒスやシベリーとの戦いにおける本営となってきた場所であった。西方軍の駐屯地であるこのキウロス要塞を中心とし、国境周辺に点在している前進基地を物資の配給地として、シベリー自治国の州へと進撃を開始する。

また、キウロス要塞の北にあるベスラ要塞にも同程度の戦力が集っており、その部隊も時を同じくして出撃することとなる。

整列した大軍は、はるか遠くまでその列を広げており、それが軍隊であると思わなければいっそ痛快なほどである。

ゴースティンの国旗は風を孕んで翻り、形を変え、また一気に張り巡らされる。深紅の旗は、これから起こることが夢物語に思えるほど、今はまだ清浄なままである。メイスを掴んだ黒鷲の描かれた王太子の旗もまた同様であった。

国軍は大きく四つに分けられており、第一・第二部隊はベスラ要

塞、そして第三・第四部隊はこのキウロス要塞に結集している。

ルキアが所属しているのは第四部隊で、その部隊は、エリーヌのいる場所から肉眼でとらえられる位置に整列していた。ルキアの姿をはつきりと見ることは叶わないが、おそらくは司祭と思われる五人ほどの集団を見つけることができた。彼らは正規の軍人とは異なる衣装を身につけている。それは近衛の制服を思わせる黒い軍服だったが、上衣の丈がかなり長く、祭服に近い形をしていた。

「エリーヌ、そんなに気になるのか？」

食い入るように隊列を眺めていたエリーヌは、突然のミカヤからの問いかけに、思わず肩が震えた。

「なんのことでございますか、殿下」

「ルキアのことだ」

狂いなく言い当てられたミカヤの言葉に、エリーヌは驚きを隠すことができないでいた。

その動揺ぶりにミカヤは笑う。

ミカヤの笑声を打ち消すように、エリーヌは必死に言葉を紡ぐ。

「わたくしは殿下の護衛のためにここにいます。他のことは気になどなりません」

「見え透いた嘘はやめろ。お前ほど心が見え顔に出る者など他にはおらんぞ」

ミカヤの視線は冷たいようでいて、時折温かさをのぞかせる。エリーヌはそんなミカヤを懐かしく思った。それはきつと、まだなに

も知らずにいられた子供のころへの憧憬だろう。

エリーヌは恐る恐る問う。

「……殿下は、ルキアのことを心配しておいでではないのですか？」

「私があれの心配などするものか」

くだらないとばかりにミカヤは言い捨て、まっすぐに平原の先を見やる。

「あれを誰だと思っている？ あいつは生きてここへ戻ってくる、必ずな」

ミカヤは黒馬とともに前に進み出る。

ほんの一瞬うかがえたミカヤの横顔は、ルキアの面差しを宿しているかに見えた。二人に共通するのは、似たような赤い色の髪と緑の瞳を持っていることぐらいで、顔立ちも顔つきも違う。ただし、彼らの本当の関係は従兄弟ということになるため、似た面影を有していたとしても不思議ではない。

エリーヌがルキアの出自について知ったのは、二年前、士官学校を卒業し、近衛士官としてミカヤに仕えることが決まったときだった。

エリーヌの伯母カレニーナは二十数年前の出来事を間近で知る数少ない人物である。カレニーナは、王宮で過ごす時間が長くなれば、いづれ噂として耳にすることになるだろうからと、ルキアの母アズノエルとキイルの関係、ミカヤが立太子された経緯のすべてをエリーヌに話した。その話はエリーヌを驚愕させるものだったが、同時に、家を継いでからのルキアの急激な変化の理由を知ることができて、安堵したところもあった。

この国において一般的に庶子や私生児の肩身は狭いものである。いかに権威あるゴースティン王家の血縁であろうと、正式な婚姻関係にない男女の間に生まれた子は蔑視の対象であり、アルトⅡヴィジェ王の数多くの私生児も、一定の年齢に達するとその大半が修道院に遣られている。

しかしルキアは、クラウスがドートリッシュ本家の長子として扱い、一流の教育を受けさせていたため、向けられる偏見は軽かった。だからこそ、王太子の側仕えとして選ばれたのだ。

ミカヤとルキアは年が一つしか変わらないということもあり、幼いころから親しく、ルキアがミカヤの学友として宮廷に召されてからは、なおのこと気を許し合う仲になっていた。

それが一変したのは、まぎれもなく、ルキアの出自を互いが知るに至ったからだろう。ミカヤにとってルキアは、いわば政敵の子になる。かつては常に寄り添っていた二人が、今では言葉を交わすところさえほとんど見られなくなってしまった。幼いころから主君と仰いできたミカヤと父であるキイルを天秤にかけるなど、ルキアにとっては酷であったに違いない。

カレニーナによれば、王弟派の重臣たちはともかく、キイル自身は決してミカヤを邪険に扱っているわけではないということだった。昔からキイルは王太子であるミカヤに一定の敬意を払って接しており、むしろミカヤがキイルを一方的に嫌っていたのだ。ミカヤの後見人がダラス公アンジェである以上、キイルに悪感情を抱くようになるのは仕方ないとカレニーナは悲観的に語っていた。

しかしここ数年、キイルの腹心である陸軍大臣ジーク・ラッセルや大蔵大臣ロベルト・ネイゲルらとミカヤの対立は激化しているのは事実である。きっかけはミカヤが次期国王として国政に携わるようになったことであるが、キイルの側近たちは軍事・政治において、

なにかとミカヤに批判的な持論を展開する。それらの意見の中に建設的なものがどれほど存在しているのか、疑問を抱かざるをえない。少なくとも、このシベリー討伐に関わる一連の流れについては、まるでミカヤを試すかのように、国政を仕切ってきた重鎮たちが一線を引いてしまっている。この件に関しては元々ミカヤが全権を有しているとはいえ、王弟派の者たちがミカヤの独裁ぶりに反発し、水面下で彼の足を引っ張ろうとしているようにしか見えなかった。

この状況下において司祭を軍事投入したことは、その結果によっては反王子派を増殖させかねない。戦の中で稀少な高位司祭が一人でも失われるようなことがあれば、司祭の徴兵を強行したミカヤへの不満が教会でも宮廷でも噴出することだろう。

ミカヤには、いささかの敗北すら許されないのだ。

エリーヌはまっすぐに顔を上げて、目の前の光景をしっかりと目に焼きつけた。

初夏の、濃い緑の平原が揺れる。王太子の旗がはためく。

「全軍、進撃せよ！」

ミカヤの声は大地に響き渡り、深い色の空へと吸い込まれていった。

エリーヌは常々感じていたことがある。

超然としたミカヤの佇まいは、その場の空気を一転させてしまう。これは彼と関わった誰もが認めることではあるが、きっとこの戦場においては殊だろう。彼は生まれながらの王者であるとの思いを強くさせる。

ルキアのいる部隊も進軍を開始した。エリーヌはそれをじっと眺

める。

ルキアの長かった髪は、胸の辺りで切り揃えられていて、彼がまだ少年だったころを思い起こさせた。しかしその横顔には、あのころのように柔らかな微笑がかすめることはなかった。

静かに炎をたたえていた。

赤い夢

金牛宮の月、一日。

ベスラ要塞より第一・第二部隊が、キウロス要塞より第三・第四部隊がシベリー自治国へ向けて行軍を開始した。

第一部隊はカールトン州を、第二部隊はミレニス州のシベリー軍を攻略し、その後はシベリーの動きをうかがい、場合によっては、両部隊が合流して首都バードンの攻略に移行することになる。

一方、第三部隊はキウロス要塞からもっとも近く、これまで幾度も交戦してきたリブロ州のシベリー軍を、第四部隊はジュダ州及びルドン州といったファジル国境を分かちシベリー軍の攻略が目的で、ルドン州の制圧をもってその任務は完了することとなる。

ルキアの所属する第四部隊は、シベリー自治国最南端のジュダ州へと進攻するため、一日半をかけ、ジュダ州の南東に位置するエーヴェル要塞に辿り着いた。

エーヴェル要塞はキウロス要塞に比べて規模は小さいものの、マーヴェエ川の支流で堀を囲んだ強固な造りの稜堡式要塞で、キウロス要塞と同様、西方軍の駐屯地となっている。

そして四日の早朝、二万七千の第四部隊はジュダ州軍攻略のため、エーヴェル要塞を出立した。

ジュダ州はシベリー自治国八州の中でもっとも小さく、これまでジュダ州軍が西方軍と交戦したことはほとんどない。つまり報復という観点からではなく、ルドン攻略に向けてエーヴェル要塞からの補給路確保の必要性から、ジュダ州軍の殲滅に踏み切ることとなったのだ。

第四部隊はゴースティンの国境線を越え、アズーラ平原を西へと進軍していく。そしてジュダ州の市街に入る手前の平野に布陣して態勢を整えた。全軍が隊列を整えジュダ州軍と向かい合ったとき、ちょうど正午に差しかかるころだった。

偵察隊からの報告によれば、対するジュダ州軍の数は約二万であるという。

シベリー族は、成人した男のほぼすべてが軍属であると言っても過言ではない。古来より、シベリーの男は幼少のころから馬術・剣術の鍛錬を当然のように積んできており、昨今では戦闘に用いられなくなったものの長弓にも非常に長けていたという。

そのため、ゴースティンが武器の精度や戦術に優れているとも白兵戦に持ち込まれた場合は圧倒的に不利となる。八十年前の戦争においても、そんなシベリーを見くびったことがゴースティンに多大な被害をもたらした。だからこそ、これまで戦に用いられなかった魔道の力を導入することに価値がある。

第四部隊の司祭は、ルキア・ドートリッシュ、エーゼン・サルファ、ラウル・アシリング、アゼリア・ドートリッシュ、オーウェン・サルファの五名で、ルキアを除き、風属性魔法を操る司祭である。

これは意図的な編成ではなく、現在、高位司祭にはルキアとデルタ・マーシエル、ローザン・ゲートル以外はすべてが水属性もしくは風属性魔法を操る者で占められており、とりわけ風属性の高位司祭が多いためである。

ルキアたち五人の高位司祭は馬に跨り、部隊の最前列へと進み出た。司祭の前方には横列の歩兵と竜騎兵部隊が、そして後方には騎馬砲兵が控えている。

通常、戦の口火は両軍の間で砲戦が交わされることで切られるが、

今回は四大司祭の＞神の力＜がその代わりとなる。人知を超えた力を初めに見せつけることで敵の戦意を挫くことが主目的であるが、異教の者たちに対し、ルドリア神より授かった力をもって応えようという皮肉も込められている。

今まさに戦闘が開始されるという状況に身をおいてもなお、ルキアの心に迷いはあった。この件は軍議で決定された作戦の一環であり、それに迷いを抱くなど滑稽なことであるが、それでも一切の迷いを捨て去ることはできなかった。

人を殺めること、そして禁忌とされる力を使うことについて……。

背に、無数の視線を感じる。

ルキアは躊躇いがちに後方を見やると、目の端にエーゼンの姿が目に入り、再び前方を見据えた。

「ルキア様、私が先に行きましょうか？」

そう言つてルキアの隣に並び立ったのは、ラウル・アシリングであった。その顔には、自信に満ちた瞳が一際煌めいていた。

高位司祭らの戦闘に挑む態度は様々だった。使命を感じている者、背徳感から萎縮する者、傍観する者……。アシリングは誰の目に見ても“使命を感じている者”であった。高位司祭の力は、このような場でもない限り最大限に開放されることはないため、類まれな強い魔力を有する彼はその力を誇示したいのだろう。

ルキアは言いようのない嫌悪感を覚えた。もちろん、それを容認している自分自身に対しても同様に。

「……いや、私が行く」

徴兵に賛同しておきながら、この期に及んで逃げ出すわけにはいかない。アシリングの申し出は、彼の意味と反して、ルキアの迷いを断ち切らせてくれた。

手綱を引き、少し前へと出る。

瞳を閉じ、胸に手を当て、身体の奥にある力の源に強く＜念く＞を込めると、ルキアの身体中の血が騒ぎ始める。

強く打ちつける鼓動を感じていた手を、ゆっくりと前に指し示すと、その手には凄まじい光を放つ魔力の塊が納まっていた。その光は炎へと姿を変え、次第にルキアの身体を包み込んでいった。

ルキアは、これまで一度もその身に宿した力を開放したことはないが、これからなにが起るのか、己の血が知っているかのように思えた。

瞳の奥が熱い。喉が渇く。頭の中を白い光が何度も閃き、そのたびに仮想の視界には赤い情景が映し出されていく。身体の奥深い部分を針で刺されるような感覚が襲い、ルキアはその不快感に思わず身を固くした。

その途端、身体を包んでいた炎は、ルキアからすうっと離れていき、巨大な鳥の姿を象っていく。そして強い光を放ちながら両の翼の悠然と開き、シベリーの軍勢へと向かっていった。

それはまさに原始教典の一節に登場する炎の鳥、ベリアザーベルの姿をしていた。

黄金の翼を広げた鳥は、敵兵を呑み込むようにその翼を閉じ、自らの姿を赤く燃え上がらせていく……。

しばらくの間、戦場には似つかわしくない静寂が訪れていた。背後からのざわめきが聞こえ始め、ルキアがゆっくりと双眸を開

くと、予測した通りの光景が、より鮮明さを増してそこに広がっていた。

草地は一瞬の間に焦土と化し、前方にいた約三百の部隊はなにやら黒い塊と化している。

それは、どこことなく既視感のある光景のように思えた。たしか、サルファ邸で見たノワイユの絵画だっただろうか……。

ルキアはふっと視線を落とし、自分の両手をじっと見つめた。

（けれどまだ、この身はあの絵の中のイシスのように血に塗れてはいない……）

静寂を完全に打ち破るかのように、砲兵隊長の号令がかかり、砲撃の音が噴煙とともに地面に鳴り響く。

ルキアのすぐ後ろに控えていたアシリング、アゼリア、オーウェンの三人が一斉に強い＜念く＞を込めた魔法を放った。

彼らの力は同じ風属性であっても、現れた力はそれぞれの意思により様々な形をしている。矢や剣といった武器の形もあれば、獐猛な牙や爪を持つ獣の形もあり、それらを象った風の刃で、敵兵の身体を次々に斬り裂いていった。

それが、この会戦を本当の意味で開始させる合図となった。

砲弾と風の刃を浴びて口火が切られたシベリー軍は、“敵”の布陣へと猛攻を開始した。彼らは前方に銃撃部隊が控えていることを承知で突撃しており、ゴースティン軍も一切の躊躇を持たずに次々と引き金を引いていった。

その様をルキアは遠くから眺める。

自らの放った力の行く末も、聴覚を麻痺させるような爆音も、す

べて非現実の世界の出来事のように思えた。

「――炎の鳥、灼熱の翼を広げ大地に降臨す。両翼に抱いだかれたその軍勢、刹那のうちに身を焦がし……」

その声は耳元で囁かれたかのように、ルキアの耳朵に響く。

「まさに、アルゼ教典のままでしたね」

はっと振り返ると、そこにはエーゼン・サルファの姿があった。無視を決め込み、前へ進み出ようとしたルキアの隣に、エーゼンが並び立つ。

ルキアは軽く手綱を引き、エーゼンを無言で見やった。

「ルキア様。その力、使われたのは今日が初めてですか？」

「……当たり前ではありませんか」

「あなたのその翡翠の瞳、片方が真っ赤に染まっていますよ。力を使われた影響では？」

エーゼンがルキアの右目を指差すと、ルキアは咄嗟に目を押さえながら顔をそむける。

力を放ってから、痛みに近い違和感が眼底に纏わりついていた。それを不審に思っていたが、エーゼンの指摘でやっとその原因を知る。

さらに一步近づいたエーゼンが、再び声を投げかける。

「教皇一族は過剰な血族婚を繰り返してきたと言われていますが、

あなたのその力を見れば彼らが血の濃さに固執してきた理由にも納得できますね。あなたは一族の血を半分しか引いていらっしやらないというのに、それほどまで強い力を有しておられるのですから」

「今は、そのような話をしている場合ではないと思いますが」

ルキアは手綱を取る手に力を込め、強く言い放った。

「たしかに……それも、そうですね」

苦笑まじりに呟くやいなや、エーゼンの両手に魔力を物質化した光の玉が現れる。

（――速い！）

エーゼンの手が前方を指し示した途端、視界が白むような閃光とともに、無数の刃が数十のシベリー騎兵を瞬時に切り裂いた。

馬上から転げ落ちた敵兵は自軍の騎馬に踏み潰されていくが、その馬を駆る兵もまた夥しい血を流し続け、痛みに暴れる馬から振り落とされたとき既に絶命していた。

エーゼンから放たれた魔法の威力は他の三人のものとは比べものにならない。

なにより、魔力を瞬時に物質化させたこと……。速さとは精度であり、すなわち、高位司祭に求められている制御力に優れているということを表す。

彼に言わせれば、これもサルファ家の血脈によるもの、ということなのだろう。

歩兵による一斉射撃による噴煙が消えていく中、ゴースティンの

騎兵隊が総攻撃を仕掛け始めた。シベリー兵たちの断末魔の声は、銃撃の音、馬蹄の音、銃剣のぶつかり合う音、そして司祭らが放った力による爆音にかき消されていくが、平原にはまだまだ勢いの衰えないシベリー騎兵の群れを見ることが出来る。

シベリーは、辺境の蛮族、ならず者と蔑まれてきたものの、戦場におけるその姿は勇猛果敢と評するに相応しいものだった。きっとそれは、この大陸のどの軍隊よりも優っているに違いない。

そんな猛々しさも、この状況においては、命知らずとしか呼べないものであったが。

「もう、勝ち目などないでしょうに……」

くすくすと笑うエーゼンの声を背に、ルキアは馬を駆っていった。遠くを見据えながら右手に強い＜念く＞を込め、内なる魔力を開放し、再び劫火を放った。

……+

戦闘開始より一時間も経たないうちに勝負は決した。

現在、ゴースティン軍の騎兵は敗走するシベリーへの追撃を行っており、歩兵や砲兵、そして司祭は次なるルドン州攻略のためにジユダ州を北上し始めた。

この戦における勝敗は、損害の規模で決せられるものではなく、シベリー軍の殲滅という目的の達成によってのみ決せられる。シベリー族はその大半が戦闘員であるため、軍の殲滅とはある意味、民

族の根絶やしに近いとも言えた。

そして夕刻になり、ゴースティン軍は宿营地へと到着した。

宿営のために必要な設備を積んだ荷馬車や工兵は、司祭や将校らに先立って宿营地に到着しており、既に大半の天幕が張り終えられていた。

五人の司祭は、さながら親征した王族のような扱いである。一人ずつ天幕が与えられ、中に設けられた寝台もしっかりとした造りで清潔なものだった。食事は将校らと同じものと思われるが、エーヴェル要塞から運ばれたパンや鮮度の保たれた肉や野菜が出された。近くに川が流れており水の調達が容易であるため、ふんだんに湯を使うことも許されていた。

野営においてルキアが感じた不自由は、せいぜい身の回りの世話をする従者がいないことぐらいである。

パンとスープの夕食を終えたルキアは、続きの天幕の奥へと戻り、寝台の上に寝転がった。

腰から下げていた剣を外し、片腕で剣を抱えながら、戦闘の様子を頭に過ぎらせていく。

ほんの数時間前の出来事だが、それらのすべてが遠く、本当にあったことなのかどうかも疑わしく思えた。これは、戦闘中にも感じていたことだった。

（すべてが、夢か幻のようだ……）

ルキアが魔道の力で人を殺めたのは今日が初めてだが、そのことへの感慨がまるでない。戦場には騒がしい音が錯綜していたが、それらが彼の心を乱すことはなく、平静を保ったままだった。

この数日間、戦場へと足を踏み入れていくにつれ、人並みに恐怖を感じていたものの、いざ戦闘が始まるとその恐怖は消え去り、迷うことなく敵を葬り去っていた。

剣や銃剣を用いての戦闘ならば、人を殺めた感覚はたしかにこの手に残ったかもしれないが、魔法ならば、あれほどの人を一瞬で殺めてもまったく実感が沸かない。なにより、その瞬間のことをよく覚えていない。

今日の戦闘において、ルキアは神の力くを二度発動させたが、そのいずれも力を加減することは叶わなかった。一瞬意識が失われ、気がついたときには目の前に辛うじて人馬の形を留めているものが無数に転がっていただけだった。

泡沫^{うたかた}の世界で、屍を越えて、さらに屍を積み上げているかのようだった。越え切れぬ屍を目にしたとしても、夢の中を浮遊しているように感じたのかもしれない。

ゴースティン軍が圧倒的な優位に立っている以上、ルキアが戦闘に慣れるころ、既に戦は終結していることだろう。

ほぼ戦闘が決着したとき、ルキアは馬上より息絶えたシベリーたちを見つめていた。ルキアが劫火で焼いたシベリーたちは遺体であるかどうかの判別もつかない黒いものと化していたため、銃弾や銃剣で絶命したと思われる敵兵たちを瞳に映していった。

一般的に、シベリー族は銀髪に褐色の肌という特徴的な容貌とされているが、ルキアの眼下で折り重なっていた者たちは、シベリーと言えども様々であった。ガレ族とは一目見て異なると感じられたが、肌の色が薄い者もいれば髪が濃い色の者もあり、むしろ銀髪に褐色の肌という典型的なシベリーは一人も見つけることはできず、かなり稀少なのではないかと思われた。

ガレ族の台頭により強い迫害が行われるようになって、既に一千

年以上経つと言われている。いかにシベリーが閉鎖的な民族であっても、ゴースティンやケーニヒスの者と交わっていく中で、既に本来の形質が失われているのかもしれない。

——敵兵とはいえ、相手は我らと同じ人間だ。

ふいにデルタの言葉が過ぎり、ルキアは剣を抱いたまま寝返りを打つ。師の言葉を頭から追いやるようにシーツに鼻先を埋め、強く瞳を閉じた。

厚い天幕の向こうから、ルキアを呼ぶアゼリアの音が響く。

ルキアはうつ伏せていた顔の向きを変え、どうかしたのかと問う。

「あの、エーゼン様がいらっしゃっているのですが……」

咄嗟に片肘をついて起き上がったものの、ルキアはどう答えるべきか逡巡していた。前髪を掻き上げ、すっきりとしない頭を片手で支える。

（できることなら、今は誰とも会いたくないのだが……）

唇を噛み、髪を握る手に力がこもる。

「……どうかされたのですか？」

無反応のルキアを訝ったのか、再度、アゼリアから不安げな声かけられる。

「ああ、わかった。お通ししてくれ」

取り繕った明るい声で応え、ルキアは手にしていたサーベルを枕元に置き、脚を寝台から下ろした。

ややあって、天幕の布が上げられ、エーゼンが中央まで歩み寄った。そしてちらりと天幕の中に視線を馳せ、薄く笑む。

「どうも、戦場に来ているという気分にはなりませんね」

その言葉に、ルキアは歪な笑みを浮かべる。

「あれだけ人を殺めておいて、実感がないというのもどうなのでしょうか……」

「砲兵隊の者たちも私たちと同じ心境なのでは？ 魔法を放つのは、砲弾を撃っている感覚に近いように思いますよ」

平然と言い放たれて、ルキアは言葉に詰まる。さすがにそれは違うのではないかと思いつつも、反論をする気になれなかった。

「……あの、私になにか御用があったのでは？」

躊躇いがちに問うと、エーゼンの瞳がいつになく穏やかな色を浮かべた。

「宿営地に着かれてから、負傷兵の治療に行かれていたとお聞きしましたが？」

ルキアは小さく頷くと、エーゼンは労わるようなため息を吐く。

「休んでいらっしやなくてよかったのですか？」

「……気が昂ぶっているせいか、疲れをほとんど感じないのです。時間を持て余しているぐらいならば、なにか自分にできることを、と思ひまして。幸いなことに負傷者の数はそれほど多くなく、軍医や従軍している司祭もありましたので、それほど長居はしませんでした」

「死者の数も数十名ほどだという話ですね。この規模の戦闘においては異例の数とのことですが、そうでなくては我々が徴兵された意味がありませんからね」

「それならば、私たちは一人の命も失われぬよう努めるべきだったのかもしれないね」

思わず皮肉っぽい声が出てしまい、ルキアは眉を寄せた。

「……だから、死者への祈りを？」

ルキアが瞠目して顔を上げると、エーゼンはわずかに目を細める。

「ああ失礼……。戦場を去る少し前、戦死した兵の前に立たれているお姿を拝見しましたので、お気に病まれているのではないかと思ひまして」

「いえ、そういうわけではありません。ただ、そうするのが私の本来の役割だと……」

強く否定しようとしたが、デルタに言われたことを再び思い出し、ルキアは不自然に言葉を止めた。

戦場から丁重に回収された遺体を前にしたとき、ルキアは、彼らに向けてなにを祈ればよいのかと強い迷いを覚えた。

司祭が徴兵されずともこの戦は起こった。ルキアが王都に残っていたところで、戦の中で失われていく兵たちの運命は変わらなかっただろう。また、ルキアたち司祭が今日の戦にいなかったとしたら、ゴースティン軍の被害が数倍に拡大していたのも事実だ。

だが、そのことをもって、自らの行いを正当化できるものでもなかった。

——お前は信徒らの前でなにを祈るといふのだ？

死の苦しみに耐えた彼らに与えられた安息……。天に召される彼らを祝福の光で照らすべく、祈りを捧げることが司祭の役割である。

（けれどそれは、シベリーを殺めた力と同じものなのだ……）

ルキアがそのまま黙り込んだためか、エーゼンは別の話題を振る。

「そうそう、先ほどまで将校を集めての軍議が開かれていたようですよ。知人の将校から聞き及びましたが、予定では、六日早朝にはルドン州軍との戦いに入るとのことです」

当然のように、ルキアたち司祭にその連絡はなく、決定事項について報告もない。

第四部隊の指揮官であるメフィス少将は長年西方軍に所属していた人物だが、彼は自身の力を過信しているのか、態度や言葉の端々から、司祭を疎んじているような空気が感じられた。

ルキアはため息まじりに告げる。

「……あまり、私たちはよく思われてはいないのでしょね」

「余計なことはするな、指示通りに動け、將軍はそう言いたいのでしょう。まあ、あの方たちの不満はわからないでもないですけどね。西方軍の損害を度外視すれば、司祭の投入などするまでもなかったわけですから。少々不愉快ですが、司祭にすべてを丸投げにされるよりはマシだと思っておきましょう。所詮、我々として生身の人間……強い＞念くを込めるほどに精神力を激しく消耗する以上、次から次へと魔法を放ち続けるのは不可能です。＞神の力くならば、なおのことでしょう？」

ルキアは曖昧に微笑みながら頷いた。

「あなたの疲労は私の比ではないでしょうから、早くお休みになってください。アゼリアが心配しておりましたよ」

そう最後に付け加えて、エーゼンは身を翻した。

エーゼンが去った後、ルキアはすぐに寝台の上に身を横たえたが、疲れはさることながら、眠気も感じなかった。かといって思考は正常に働いておらず、深く物事を考える気にならなかった。

顔を横に向けると、襟元から聖イシスのメダルが零れ落ちた。銀のチェーンを指に絡めながら引き出し、イシスの横顔をじっと見つめる。そうしているうちに、白い祭服を血に染めながらヴァーロンの軍勢を屠っていくイシスの姿がぼんやりと頭に浮かんでいく。

(……この戦いは、きつとすぐに終わる)

声には出さず、唇だけを動かす。
ルキアは祈るようにメダルを握り締めたまま、静かに目蓋を閉じた。

…：…：…

第四部隊はさらに北へと進み、ルドン州を目指した。

行軍速度は初めのころと比べれば少し落ちてきているが、それは軍の士気や疲労によるものではなく、六日の深夜より天候が少々悪くなり、今もまた小雨が降っているためである。歩兵や騎馬にそれほど影響はないが、食糧や資材を積んだ荷馬車や騎馬砲兵の引く大砲の車輪がぬかるんだ地に引っかかり、常時の速度を保つことができなかった。

ただ、補給路がしっかりと確保されているこの戦線において、強硬に軍を進ませて兵の体力と気力を消耗させる必要はない。無理なく進めていけばいいというのが上層部の考えのようであった。

シベリー自治国ルドン州は、ケーニヒスのラウバル湖から流れるマーヴェ川により東西が分かれており、東西をつなぐ大橋が州内に三つ存在している。

現在、順調に計画が遂行されていれば、第三部隊がルドン州の東へと行軍しているはずである。第四部隊はルドン州の西を攻略した後、ここから北東にあるガイル・ゼシカ大橋を渡り、第三部隊とともに東のルドン州軍と交戦する予定になっている。

金牛宮の月、九日。

西のルドン州軍は、市街の外れから小高い丘の中腹に向けて布陣していた。その数は約一万二千という話であったが、敵側は死角の多い地形である上に霧が出ており、その情報が必ずしも正しいとは言いい切れなかった。

ルドン州はファジールに面するシベリー自治州の中でもっとも規模が大きく、駐留する軍も首都バードンに匹敵するものと言われている。一万二千というのはルドン州軍総勢の四分の一程度であり、偵察隊による報告は過小評価であるか、もしくは仮にその数が正しかったとしても、伏兵の存在について考慮する必要があった。

また、敵右翼は三つの堡壘^{ほうるい}が築かれた強固な守りであることに加え、前衛には騎兵軍団が二重の戦列を配置していた。ただし、敵左翼には堡壘が築かれておらず、歩兵の戦列が二重に組まれているのみであったため、左翼側から攻めるのが定石であるという判断がなされていた。敵の片翼から攻めていくというのはゴースティンにおいて伝統的な戦法でもある。

先日の戦いにより、シベリー軍の持つ小銃はゴースティン軍が有するものより旧式で、射程が短いものであると判明しているが、今日は霧のせいで視界に難があるため、少々の射程の問題は意味をなさないと思われた。

さらに夜中に降り注いだ雨により地面がぬかるみ、砲兵隊が本来有している機動性を発揮することができないのは明白だった。

そこでゴースティン軍の砲兵隊は、敵左翼への一斉砲火のため、三十門の大砲を最前列まで牽引して砲撃準備を整えた。そして、大砲の後方には、歩兵により突破口が開いた後に突撃を行うための騎兵部隊を待機させている。

司祭たちは先日の戦いと同じように戦列に加わろうとしたが、交戦が開始されようかという際になって、第四部隊の指揮官メフィス將軍の副官を務める大佐が、こう言い放つ。

「しばらく、あなた方はそこで静観しておられればよい」

これは軍議で決せられた作戦だということだったが、いくつかの面でゴースティンにとって不利な要因があり、予測戦力だけが有利である過ぎない本日の戦いにおいて、これが一体どんな作戦だというのだろう。

上層部の将校たちは先日の圧勝に酔っているのだろうか、それとも、これ以上司祭の力に頼るわけにはいけないという軍人としての誇りが邪魔をしたのだろうか。そのいずれであろうとも、彼らの行動は作戦遂行者として認められたものではなかった。

案の上、大佐の言葉に気を悪くしたアシリングは、武勲がほしいだけなのだろうと苦々しげに吐き捨て、敵の砲撃が絶対に届かない位置に留まってやると豪語した。エーゼンやその部下オーウェンもアシリングに賛同するかのように、前衛部隊よりかなり後方に馬を停止させ、事の成り行きを見守るつもりの方だった。

アシリングたちの気持ちはわからないではなかったが、能力を買われて戦場に駆り出された者として、ルキアは大佐の言葉に従うことはできかねた。

それゆえアゼリアとともに前衛に向かい、そこで待機して、事態が動くのを見計らってから応戦に転じようと考えていた。

霧が晴れるまで待とうとしたのか、戦列が整ってからの約一時間、ゴースティン軍は動こうとしなかった。

時刻が午後一時に差しかかろうとしても霧が完全に晴れることはなく、視界不良のまま、ゴースティン側の砲撃により交戦が開始し

た。

ゴースティン軍の砲弾が、ルドン州軍左翼の前衛歩兵に向かって次々と撃ち込まれていく。しばらくは両軍の砲弾の撃ち合いが続いたが、ゴースティンの猛攻がシベリーの歩兵をなぎ払っていく一方、敵中央の堡壘からの砲撃は微弱であったため、ゴースティンは前衛の歩兵部隊を前進させ、進路の啓開に努めていった。

ゴースティン歩兵は陣形をほとんど乱さないまま銃の射程範囲まで前衛を進め、射撃の構えに入る。そして、シベリー歩兵に向かって一斉射撃が行われようとしていた――。

まさにそのとき、先ほどまでほとんど止んでいた敵中央堡壘と敵左翼正面から十字砲火が開始され、砲火をまともに受けた前衛の歩兵がなす術なく倒れていった。それを見計らったかのように、丘の斜面に隊列を組んでいたと思われるシベリー騎兵部隊が姿を現し、突撃を開始した。

その光景が目に入った瞬間、ルキアとアゼリアは攻撃に転じる時期を悟り、二人はほぼ同時に前方に向かって魔法を放った。アゼリアの風の刃とルキアの劫火は、迫り来るシベリーの騎兵を狙ったものだったが、広範囲に散開しながら猛進する騎兵を一度に仕留めることはできなかった。

ジュダ州軍戦でも見られたことだが、シベリーの騎兵は砲撃も銃撃も、さらには魔法でさえも、まるで恐れずに突撃を仕掛けてくる傾向にある。

仕留め損ねたシベリー騎兵はゴースティンの歩兵や騎兵の列に突っ込み、砲兵までの距離を一気に縮めていった。歩兵は銃剣での応戦に転じたものの、隊列が乱れたことでその力を充分に発揮することができない。

死角で視認することが叶わなかった敵左翼の後方には、予備戦力とは呼べないほど騎兵が配備されており、敵左翼前方からの砲撃が止むやいなや、シベリー騎兵が斜面を駆け降り、ゴースティン軍へと向かって突き進んできた。

さらに敵右翼の堡壘から放たれた砲弾が唸りを上げながら上空を舞い、地響きとともに前衛部隊を目がけて落下し、あたりには鉄塊でなぎ倒される歩兵や、馬から投げ出される騎兵が続出した。

ルキアは馬を前方へ駆り、突進する騎兵に目がけて再び劫火を放つ。

二つに分かれた炎は数十の騎馬を両側から丸ごと包み込み、一気に爆発炎上した。既に息絶えた人と馬がぬかるんだ地に倒れ伏しても、炎は執拗に燃え続け、ばらばらに吹き飛んだ四肢から皮膚や肉を溶かしていった。

しかし、その攻撃によって敵に与えることができた損害は有益と呼ぶにはまったく足らないものだった。

正面から迫り来る騎兵の勢いはまだまだ衰えを知らず、なにより敵軍中央の堡壘からの攻撃は依然として止む気配がない。中央からの砲撃により、ゴースティンの前衛部隊は次々と倒されていく。前衛部隊は、その倒れた兵の上を踏みつけながらも、さらに前進を続けている。

そこでルキアは、なによりも先に中央の堡壘周辺の戦力を殺ぐべきと考え、^{レガロ}神の力くを発動させるべく意識を集中させようとしていた。

「――セヴァンス侯！」

近くから聞こえたその声の方向を見やった瞬間、ルキアの瞳に映ったのは、首から上を砲弾で吹き飛ばされたゴースティン将校の姿だった。西方軍の灰色地の軍服が、襟元から徐々に下へと赤く染まっ
ていく様子を、ルキアは瞬き一つせずに見つめる。

あの声の主はどんな顔をしていたのだろうか。

肩章を見れば大尉の階級にあった者だったとわかるが、それ以外のことはなにもわからない。

……上手く頭が働かない。

胴のあたりまで血に染まった身体は、平衡感覚を失い、肩を大きく揺らしながら馬上から滑り落ちていった。

地へと崩れた身体は不自然に折れ曲がり、その片足はあふみ鎧に引っかかったままとなっていた。

主を失った軍馬が歩を進めると、頭部のない身体がぬかるみの上を引きずられていく。

馬が方向を変えた弾みで身体が反転した際、鎧に引っかかっていた片足が落下し、あたりに血の混じった泥水が跳ね上がった。

目の前の光景が悪い夢であればと願った。

ふと落とした視線の先には手綱を握る自分の手があり、その指先から二の腕にかけて血の飛沫や小さな肉片らしきものが付着していた。恐る恐る異物感を覚える頬に触れると、ぬるりと指先が滑った。

しばし放心していたルキアだったが、右前方からの猛射により、抗いようのない現実へと引き戻される。

戦列歩兵の指揮を執っていた士官が倒れたことも相まって、最前線は強い混乱に陥っていた。

当然、ルキアもその例外ではなかった。手綱を握る手にほとんど

力が入らないのも、爆音が膜を隔てたように聞こえるのもすべて、彼の精神が乱れているからに他ならなかった。それでもルキアは、敵右翼の堡塁からの猛砲火を少しでも抑えるために攻撃を仕掛けようとしたが、そのたびに銃弾や砲撃に阻まれ、思い通りに力を操ることが叶わなかった。

前衛の隊列の一部は崩壊し、兵たちは攻撃はおろか防御に転じる隙すらないようだった。

自軍後方から強い魔力の波動を感じた。

前進した司祭たちが敵中央への一斉攻撃を開始したようだったが、敵左翼の前方からも砲撃が放たれ、シベリ―騎兵による一斉銃撃も今まさに開始されようとしていた。

前衛部隊の歩兵・騎兵は、砲撃を避けながら後退する者もいたが、そのほとんどが敵右翼からの砲火から逃れるように東へと壊走していくこととなった。

冷たい雨 (1)

伝令のためにキウロス要塞を発ったエリーヌたち三人の近衛士官は、エーヴェル要塞及び第四部隊へと向かっていた。まず九日の朝にエーヴェル要塞へと着き、その後すぐに第四部隊のもとへと発つこととなった。

九日現在の第四部隊の交戦地は、エーヴェル要塞からほぼ真北に位置しており、宿営地はそれよりも手前であるため、早馬を飛ばせば半日で辿り着ける距離であつたが、昨日より雨が強く降り注ぎ、遠くの視界は白んでいる。朝と夜は一気に気温が下がるために羽織っていた外套は、防寒というより雨具としての機能しか果たしていなかった。

同日の午後五時過ぎ、三人の士官は第四部隊の宿営地に辿り着いた。そのころになると雨はほとんど止んでいたが、あたりは雨音の代わりに、なにやら騒がしい物音で満ち溢れていた。

宿営地とはいえ戦場の空気はこういうものなのだろうかと思ひながら、指揮官メフィス少将のいる天幕へと向かった。

「メフィス將軍は、この中におられますか？」

近衛中佐が敬礼する兵に訊ねた瞬間、

「——そんなことは言われんでもわかっている！」

天幕の外まで低くかすれた怒声が響き渡った。威圧的な口調から察するに、声の主はメフィスであろう。

「軍議の最中なのですか？」

「ええ、まあ……そのようなところでして……」

中佐の問いかけに、兵は微妙な間と含みを持たせて答えた。なんらかの異変を感じ取ったのか、中佐は険しい声色で兵に言い放つ。

「それならば、伝令の内容を作戰に考慮していただく必要がごきます。至急、將軍にお取次を」

兵が慌てて中へ入っていったから、ややあつて、天幕の布が左右に開いた。中へと入った三人は、地図の広げられた机を挟んで、メフィス將軍とその副官である大佐と向かい合った。

「……近衛士官らが直々に出向かれるとはご苦勞なことだ。では、その伝令とやらの内容を聞こう」

なにやら恐々としているメフィスに対し、近衛中佐が明澄な声で告げる。

「八日未明、第三部隊の指揮官よりキウロス要塞へファジールの動きに関する伝令が入りました。この件につき、第四部隊に至急報告せねばならぬと判断し、こちらに参った次第でございます」

「ファジールの動きというのは……？」

「報告の前に、少々お訊ねしたいがございます」

中佐がきっぱりと言い切ると、メフィスの副官の肩がわずかに揺れた。副官だけでなく、天幕の端に起立する将校たちもなにやら表情に陰りを見せた。

「我らは伝令に加えて、第四部隊の作戦遂行状況の把握も任務として請け負っております。ジュダ州軍との交戦は早々に決したとの報告が中央司令部に入っておりますが、予定では本日、ルドン州軍と戦を交えるはずであったかと……。それについての説明をお願いできますか？」

「ああ……早朝からの会戦予定であったが、実際には昼を過ぎてからの会戦となった。ただ……ルドン州軍との決着はついておらぬゆえ、そなたら報告することは、なにも……」

「ルドン州軍の規模はバードン州軍に匹敵するという話ですし、これほど早く決したというのならそのほうが驚きます。殿下への報告は、現在の状況についての詳細をお伝えせねばなりませんので、それについての説明をお願いしているのですが」

「いや、だから、それは……」

メフィスの歯切れの悪い言葉に、中佐は眉をひそめる。

「將軍……。先ほど、なにやら言い合う声が聞こえたのですが……なにか急な事態でも発生したのでしょうか？」

その問いに、將軍はとうとう黙秘を始めた。

苛立ちを見せる中佐に見かねたメフィスの副官が、私から説明い

たしますと告げ、目線を机上の木目に固定したまま、たどたどしく現状を説明していく。

それは、耳がおかしくなったのではないかと思いたくなるほど、予想の斜め上をいった内容であった。

本日のルドン州軍との交戦において、ゴースティン軍は当初、堡塁のない敵左翼への攻撃を開始したが、それはシベリー側の誘導作戦であったようで、敵右翼と左翼正面からの十字砲火により前衛にいた兵たちに三百を超える死傷者が出た。

また、最前線に大砲を配置していたが、それらの砲はシベリー騎兵の突撃の際に放棄せざるをえなくなったという。

さらに、前衛にいた兵が東の湿地へと追い込まれ、彼らは退却できず、依然として行方不明となっているらしい。

「湿地にシベリー兵が潜んでいる可能性があるが、この悪天候であるし、じきに日も暮れる……。追撃の手は止むのではないかと私は思う」

メフィスは副官の説明にそう付け加えたが、それはあまりに希望的観測に過ぎるものである。

シベリーはゴースティン兵を捕虜に取る気など毛頭ない。ゴースティンがシベリーに対して行ってきたのと同様に、敗走兵には容赦なく追撃を行い、再戦の機会を永久に奪おうとするだろう。

「……要は、本日のルドン戦において第四部隊は敗走したということなのでですね」

近衛大尉が苛立たしげに呟く。

すると、前衛部隊の死傷者はジュダ州軍との戦に比べれば多いと

いうだけで、通常の損失と比すれば最小限に食い止めることができた、とか、三十門の大砲は失われたものの、まだその倍の数を有しているため今後の戦いに影響はない、とか、あまりに酷過ぎる弁解をメフィスは繰り返した。

その言い訳の最中、上官である中佐と大尉の背後に控えていたエリーヌは、困惑と怒りの入り混じった視線をメフィスに投げかけていた。

近衛中佐は眉間に皺をますます深く刻みながら、メフィスを見やり、憎々しげに問いかける。

「それで、湿地へ追い込まれた兵の数はどれほどなのですか？」

「生存していれば、約百五十……といったところだ」

顔をそむけながら言い淀むメフィスに、中佐が鋭く切り込む。

「では、その百五十名の中にいる高位司祭は何名ですか？ それほど焦っているからには、司祭が含まれているということなのでしょう？」

それを聞いた途端、エリーヌの背筋が粟立った。中佐の問いを耳にするまで、その可能性に思い至らなかったのだ。悪い予感急速に募っていく。

「司祭は、一名……」

「どなたですか？」

中佐が机に両手を勢いよくつき、メフィスに詰め寄る。エリーヌ

は祈るような気持ちで強く手を握り締めた。

「セ……セヴァンス侯が……」

メフィスが苦々しげに口を開いた途端、エリーヌは目の前が白んでいくような気分を味わった。

握り締めていた手から力が抜けていき、メフィスを真っ直ぐに見据えていたはずの視線が、無意識のうちに上下に揺れた。

中佐の隣に控えていた近衛大尉が、もはや我慢の限界といわんばかりに声を荒げる。

「メフィス將軍……あなたは一体なにをされているのです！一刻も早く救出のための軍を編成なさるべきではありませんか！」

大尉に意見されたことを不愉快に思ったのか、先ほどまで悄然としていたメフィスが勢いを盛り返す。

「じきに日も暮れる上に、あたりは敵兵だらけ……。この状態で、どう軍を動かせというのだ！司祭一人を救出するためにあの湿地に軍を送り込むなど、あまりにも馬鹿げているだろう！」

「――ですから、私たちが出向くと申し上げていてはありませんか！」

怒気を孕んだ高い声が響き渡り、一同の目が天幕の入口のほうへと向けられる。

そこには、先ほどの声の主と思われる亜麻色の髪的女司祭と、静謐さを湛えた黒髪の司祭の姿があった。彼らが前に進み出ると、天幕の中の空気が張り詰めたものへと変わっていく。

「この雨と視界の悪さでは小銃は役に立たないでしょうし、無用の犠牲を厭われる將軍のお気持ちはわかります。ですから我らがルキア様の救出に参ると申しておるのです」

エーゼンがゆったりとした口調で告げる一方で、アゼリアは優しい顔立ちに不釣り合いなほどの強い怒りを浮かべながら、メフィスに詰め寄る。

「当主の一大事におめおめと安全な場所にいるわけにはいきません。あなたの許可など私には知ったことではありませんので、今すぐ出立いたします！」

アゼリアの迫力に気圧されたのか、メフィスは吃り出す。

「だ、だから先ほども申したではないか。……き、貴公らを敵地に送り込むのは――」

途中、エーゼンが失笑を漏らす。

「これ以上司祭の犠牲を出したくないと思われる気持ちはわかりますが、そもそも高位司祭には一人の犠牲も出さぬよう厳命されているはず。さすがに第四部隊の司祭を全滅させるのは問題でしょうが、ルキア様の他に一人二人の犠牲が増えたところで大差ないでしょう。役に立たぬ大軍を率いて救出に向かうよりは、私とアゼリアの二人で救出に向かうほうが將軍にとってもよほど有益かと思えます。ですから將軍、お早くご決断を」

エーゼンがずっとメフィスに冷たい視線を向けたとき、エリーヌは彼を縫るように見上げる。

「あ、あの、司祭殿！ 私も連れて行ってはいただけないでしょうか！」

思わず声を張り上げたエリーヌに、二人の上官の目が注がれる。

「少尉、あなたはなにを……」

近衛大尉が呆れたようにエリーヌを見やり、近衛中佐は諭すような口ぶりで告げる。

「我々は殿下のご命により伝令に向かったのですよ。気持ちはいわらないではないですが、あなたには近衛士官としての役割があるのです」

「それは、わかっておりますが……しかし、このまま中央司令部に戻るなど、とても――」

エリーヌの言葉に、中佐は片手で頭を抱えながら、沈鬱に呻く。

「まあ、たしかに……この状況をそのままミカや殿下に報告するというのは少々、いえ、かなり問題でしょうね」

大尉も腕を組みながらそれに続く。

「このままキウロス要塞に帰還しては、殿下は私たちのことを伝書鳩以下だとお怒りになるかもしれませんからね」

「大尉、伝書鳩を馬鹿にするものではありませんよ。軍鳩ぐんきゅうのほうが我らよりよほど速く着くのですから」

「それなら本当に伝書鳩以下ではないですか……」

そう言い合って、二人の上官は重々しく息を吐いた。

エリーヌは上官たちと同様の考えから、エーゼンに同行を申し出たわけではなかった。専ら、役目放棄と知りながら、ルキアの救出に向かいたいと思った一心での発言だった。

ただ、改めて考えてみると、上官たちの言う通りなのである。第四部隊の敗走に加え、ルキアまで行方不明というこの状況を、そのままミカヤに報告するというのはかなり問題がある。

この宿営地からキウロス要塞へ帰還するには最低でも一日半かかる。ルキアを含めた百五十もの兵が行方知れずとなって既に四時間が経つが、状況が刻一刻と変化する今の状況をそのまま伝えてもなんの意味もない。むしろ、一刻の猶予も許さないこの状況に立ち会っておきながら、なんら手を打たずに要塞へ戻るほうが役目放棄と呼べるものなのかもしれない。

エリーヌが再びエーゼンに声をかけようとする、彼のほうが先に口を開く。

「別に私はかまいませんよ。ご自分の身だけ守っていただければ、足手まといにはなりませんからね。……ルキア様のこと、ご心配なのでしょう？」

当たりは柔らかいものの、さらりと厳しい毒の含んでいる言葉だった。なおかつ、反論したくてもできないような威圧的な空気を孕んでいた。

中佐は、やむをえませんね、とエリーヌに許可を与えた。それは

まさに苦渋の決断という風な声色であった。

エリーヌは上官である中佐と大尉に一礼した後、エーゼンとアゼリアに向かって告げる。

「それでは、一刻を争いますのですぐに出立しましょう」

「――勝手な行動は慎め！　どうするかを決定するのはこの私だ！」

事の成り行きを啞然として見守っていたメフィスは、机を叩きながら勢いよく立ち上がった。その怒声が放たれたことにより、一同はやっとメフィスの存在を思い出すことができた。

エリーヌたちにとって、メフィスなど既に無用の人と成り果てている。

第四部隊の総責任者が四時間かけても決することができなかった方針を、近衛と司祭がものの五分で組み立て、それがすぐに決行されようとしているのだ。

「しかしメフィス將軍……他に取りうる策を提案することはできない、かといって、我らの策に許可は出せないでは、こちらとしても……」

中佐が呆れ果てたように告げると、その態度に気を悪くしたメフィスは、再び怒声を張り上げる。

「だから今は策を練っているところなのだ。貴様らも軍人ならば、上官の指示に従え！」

上官の指示、とはいふものの、西方軍と近衛では管轄が異なるため、いかに陸軍における階級が上だとしてもメフィス少将の指示に近衛中佐が従う必要はない。おそらくメフィスは頭に血が上ってい

るためにそのことを失念しているのだろう。

そもそも、四時間かかって策が浮かばないならば、一晚考えても結果は同じだろう。メフィスは、決断力もないくせに権力だけは振りかざすという、上官としては非常に厄介な人物だ。

エリーヌが胸中でそう毒づいた途端、鋭利な声が飛ぶ。

「生憎と私は軍人ではありませんのでね」

エーゼンは目を鋭く細めてメフィスを見やる。

「仮に軍人であったとしても、あのような見え見えの誘導に乗せられる指揮官には従えませんよ」

「――なにを……貴公にはあれが初めから奴らの誘導だとわかっていたとでも言うのか！ 後からではどうとでも言えるものだ！」

「失策の言い訳は後でなさってください」

冷たく言い放ち、机から身を乗り出しているメフィスへとにじり寄る。

「お忘れになっていませんか？ ルキア様は、高位司祭の中でもっとも失われてはならぬ方……。この件、あなたはミカヤ殿下にどう報告なさるおつもりなのですか？ あなたが保身に走れば走るほど、あなたの首は胴から離れていくことになると思いますよ」

エリーヌは、エーゼンとメフィスのやり取りを呆然と見つめていた。

（仮にも司祭ともあろう者が、なんということを口にするのだろうか……）

エーゼンは何年か前に宮廷司祭であったため、エリーヌはエーゼンのことを見知っていたが、そのころの彼はいつも柔和に笑んでいたため、優しい司祭だと思っていた。よもや、一度口を開けば毒矢を吐き出す人物だと思ひもなかった。

とはいえ、この場でもっとも頼りになりそうなのは、この黒髪の司祭であるに違いなかった。

「御身大事なのでしょう？　ならば、あなたのなされるべきことは一つです」

エーゼンはメフィスに有無を言わせないほど凄絶な笑みを向け、了承を取り付けた。

冷たい雨 (2)

薄闇が徐々に濃くなっていくころ、木陰に身を潜めたルキアは、恐れとともに苛立ちを募らせていた。

地の利はシベリー側にある。それを忘れ、自分たちの力を過信したことが仇となったのだろう。

第四部隊の最前線にいた兵の一部は、東の湿地へと誘い込まれていた。敵左翼正面と中央からの猛攻から逃れるには、その先が湿地であろうと東へと向かわざるをえなかったのだ。

部隊を分断され、敗走せざるをえなくなったとしても、敵の攻撃さえ止めば南西の陣地まで戻ることも可能だと兵たちは思っていたことだろう。

しかし、湿地にはシベリー軍が待ちかまえており、ゴースティン軍は追撃のために湿地へ向かったシベリー軍との挟み撃ちに遭うことになった。湿地ではただでさえ馬が泥や水に足を取られ、騎兵は不利となる。

悪いことは重なるもので、突発的な豪雨により西に流れるマールヴエ川が氾濫したためか、湿地には足首の高さまで水が浸っていた。加えて、霧が深く立ち込め、視界が悪く、竜騎兵の小銃はまるで戦力にならなかった。

この豪雨はシベリー兵にとっても予想外であつたに違いないが、あらかじめ隊列を整然と組んでいる彼らと、なんの準備もなく散り散りに湿地へ入ったゴースティン兵とは歴然とした差があつた。騎兵は銃を放つことは叶わず、逃げ惑いながら敵兵に銃剣で応戦す

ることが関の山だった。ルキアは何度も魔法を放とうとしたものの、そのうち発動させることができたのは二度だけで、それもほとんど＞念くを集中させることはできず、小銃の射程外に逃れることを優先した。

(……こんな混戦になるなど予想していなかった)

銃弾と剣の入り乱れる中、どれほど敵を駆逐することができたのだろうか。

周囲を見渡しても、自軍の兵らしき者は見当たらず、自身の置かれている状況すらわからなかった。

早くこの湿地を抜け、第四部隊の陣地へと辿り着かねばならないが、その方向がまったく掴めない。なんとか木立に辿り着き、身を隠したものの、その必要がないほどあたりは霧に包まれており、敵も味方もその姿を見ることが叶わない。

ルキアは懷を探り、時計を取り出そうとしたが、落馬の衝撃で落としたことに気づいた。

先ほどまでなんとか視界は確保されていたが、今では完全に陽が落ちている。時間の経過がまるでわからなくなり、そのことは恐怖へとつながった。

苛立ちを抑えきれず、こぶしを強く握りしめた。

その途端、腹部が鋭く痛んだ。

この木立の中へ逃げ込む途中、ルキアは敵の銃剣をともに受けた。とっさに身を振ったが間に合わなかった。精神力を消耗したために注意が散漫になっていたのだろう。

傷は治癒魔法で大方塞いだものの、まだ違和感が残っている。

腹をさする手がサーベルに触れた。

戦には似つかわしくないほど過剰な装飾が施された剣……。これ

こそが、今もつとも自分を助ける武器となるのだろう。

紋章のインタリオを指でなぞりながら、わずかに刀身を抜く。

先ほど、初めてこの剣を振るった。ただ無我夢中で、敵の頸部を突き刺した。子供のころから懸命に剣の鍛錬を積んできたにもかかわらず、冷静さを欠く実戦ではまったく言っていないほど思う通りに剣を振ることができなかった。そもそも、接近戦に持ち込まれたら司祭にはなす術がない。それは初めからわかっていたが、今になってそのことを思い知らされることになった。

——私は神など信じぬ。

ふと、懐かしい声が頭を過ぎる。

それはルキアが幼いころ、ミカヤから散々聞かされてきた言葉で、ミカヤがそう口にするたびにルキアは彼をたしなめていたが、こんな状況ではその言葉に同意したくもなかった。なにより、このような殺戮行為に神が味方などされるわけがない。これぞまさに天罰というものだ。

——必ず生きて戻ってこい。

はたして、その命令を守ることはできるのだろうか。

ルキアの頭に、敵の砲弾で次々となぎ倒されていった血塗れの兵の姿が浮かぶ。戦いの最中はいろんな感覚が麻痺していたため危機意識すら持つことができなかったが、あの中に自分自身がいたとしてもなんら不思議ではなかったのだ。

湿地に追い込まれた他の兵士たちはどうなったのだろうか。

雨の勢いはだいぶ弱まっていたが、夜になると一気に気温が下がり、じっとしているだけでも濡れた身体からどんどん体力が奪われ

ていくようだった。深い霧と暗闇に敵の気配も味方の気配も遮られ、寒さに思考が閉ざされていく。ルキアは自分の歯がカタカタと鳴る音を聞いたが、これは寒さのせいなのだと思い込もうとしていた。恐怖によるものであるなど、絶対に認めたくなかった。

また、じわじわと傷が疼き始めた。

ルキアは詰襟を開け、いつも首に下げているメダルを取り出した。チェーンを指に絡め、聖イシスの横顔に口づける。

助かりたい、そんな考えが頭を浮かび、ルキアはメダルを握る手に力を込める。そう願うことすら、神への背信だと感じた。

ルキアは自虐の中で、恐れと苛立ちを沈めようとしていた。

柔らかな雨粒が頬を打つ。

どのくらいの時間が経っただろうか。ルキアはしばらく意識を失っていたが、わずかに耳をかすめる馬のいななきで目を覚ました。

敵か。

味方か。

主を失った馬が戦場をさまよっているだけか。

木立の幹に寄りかかりながら立ち上がり、冷え切った指で剣の柄を強く握った。

馬蹄と水の飛び散る音が徐々に迫ってくる。

ルキアは剣を抜き、木立の陰から飛び出した。馬は飛沫を散らせながら、その場で二、三度足踏みをした後、ルキアのほうへとゆっくり歩を進めてきた。

淡い角灯の光が、雨粒の中できらきりと拡散し、ルキアは思わず

目を細めた。

馬は二頭いた。そのうち一頭には馬上に人影が見えたが、もう一方には誰もいなかった。

徐々に光に慣れた目を凝らす。闇に浮かび上がる人影は小さかった。華奢で、屈強な兵士とは思えないほどの……。

ルキアはかすれた声を絞り出す。

「……なぜ、あなたがここにいる？」

「殿下からの伝令を受けて、第四部隊へ向かったんだ。……そうしたら、あなたの行方が知れないと聞いたから、それで……」

エリーヌは途切れ途切れに答える。

ルキアは剣を納め、彼女を見上げた。

「伝令に向かったのであれば、すぐに中央司令部へ戻り、殿下に結果を奏上すべきだろう。それなのに、あなたという人は、なぜこんな勝手なことを……」

他に言いたい言葉はあった。しかし、口をついて出てくるものは、ルキアの意味に反しているものばかりだった。

エリーヌは馬から降りてルキアの前に立ったが、ルキアが俯いたままだった。

そのとき、再び複数の馬蹄の音と高い声が聞こえ、はっと顔を上げると二つの灯りがルキアとエリーヌを照らした。

「——ルキア様！ ああ、ご無事でいらしたのですね……！」

馬から飛び降り、駆け寄ってきた女性の姿にルキアは瞠目する。

「アゼリア……それにサルファ殿まで……」

エーゼンは濡れ髪を掻き上げながら、馬上からルキアを見下ろす。

「メフィス將軍が保身のために賭けに出た結果ですよ。ただ、説得に手間取ったせいで、救出に参るのが遅くなってしまいました。本当に、ご無事でなによりです」

ルキアは混乱をなんとか抑え、三人を見つめる。

まさか、助けがくるなど思ってもいなかった。自分の目の前の光景を信じるのができなかったが、頬を打つ雨はたしかな冷たさをルキアに伝えていた。

「あなた方は……まさか三人だけで？」

「ええ」

そう答えるエーゼンを見やり、縋るように問う。

「湿地に追い込まれた兵士は私の他にもたくさんいるはずですが、彼らはどうなって――」

「救出命令が出ているのはルキア様だけなんです」

アゼリアが沈鬱そうにルキアに告げた。

「なぜ、そんな……」

吐息のような声で問いかけると、エーゼンがアゼリアの言葉を引き継ぐ。

「要は、高位司祭が一人でも失われることがあれば指揮官の首が飛ぶのです。兵士の犠牲が一千人に上ろうとも、將軍には一切の処分がなされないでしょうが、もしあなたの身になにか起こった場合、將軍は降等処分ではすまないでしょう。ですから私たちをここへ遣ったのです」

馬鹿な、とルキアはエーゼンの言葉を遮る。

「將軍はなにを考えておられるのだ。それに……司祭を敵兵の溢れるこの地へ遣ったりすれば、なおのこと事態が悪化するやもしれないというのに……！」

「この天候と暗闇の中、大軍を遣ってもいらぬ犠牲が増えるだけのことです。私たちは雨の中であらうと暗闇であらうと、ある程度戦えますから、あなたを救出できる可能性の高いほうに賭けざるをえなかったのでしょうね」

「それならばエリーヌはどうして……？」

ルキアが問いかけると、エリーヌは決まりが悪そうに顔をそむけた。

そんな二人の間に、アゼリアが躊躇いがちに口を挟む。

「あの、エリーヌ様とともに伝令に訪れた近衛中佐殿の了承は得ておられますから……」

アゼリアは妙に含んだ物言いをする。話を総合すると、上官である近衛中佐はエリーヌの行動に許可を与えたものの、メフィス少将はそれに積極的な許可を与えることはせず、黙認の姿勢を取った、

ということらしい。

エーゼンはうんざりしたように息を吐く。

「もし私たちの身になにかあれば、將軍は私たちが無断で湿地に向かったと報告するつもりなのでは？　そして無事に戻れば、自らの采配の賜物だとも言い出すのかもしれませんが。……まあ、私たちとしても無事に戻ることができれば、戦後あの者がどうなろうと知ったことではありませんがね」

苦笑を噛み殺しながらエーゼンは続ける。

「ラウルやオーウェンも連れてこようかと思いましたが、さすがに司祭すべてを敵地に遣るのは上層部も渋ったでしょうから諦めました。結果として、数人で動いたことは良かったと思っています。交戦地付近にはシベリー兵がまだ多くおりましたから、国軍の騎兵を大勢引き連れて動けばシベリー兵を回避することができずに混戦になったことでしょう」

エーゼンいわく、陽が落ちてから第四部隊の陣地を出立した三人は、ルドン州軍と交戦した地へと向かい、そこから湿地へと入る経路を選んだという。

当然、シベリーはゴースティンの動きを警戒し、その周辺には兵を駐留させていたのだが、エーゼンとアゼリアはそれを極力避けつつも、必要に応じて魔法で蹴散らし、湿地へと一気に駆け抜けたのだそうだ。湿地に入ってからにはシベリー兵と遭遇することはなかったが、水に浸ってしまった草地や点在している沼地のせいで速く馬を駆るのは難儀であったという。

ルキアは足元に目をやり、ふと思う。

豪雨のために草地が薄らと水に浸かっており、この湿地には道と

呼べるようなものはない。

ルキア自身、シベリー兵から夢中で逃げたため、自分がどのようにしてここまで進んできたのかもわからないのだ。

「あなた方は一体どうやってここまで……？」

「それは……その馬が勝手に……」

ルキアの問いに、エリーヌは連れていた馬の手綱を引いた。薄闇の中で捉えることのできた白い軍馬は、たしかにルキアの乗っていたものだった。敵に傷を負わされたときに落馬し、そこから戦いながら逃げたためにはぐれたままだったのだ。

「波動のおかげですよ」

ルキアが馬に手を伸ばそうとすると、エーゼンが声をかける。

「まずはあなたの魔力の波動を辿って、おおまかな方向を掴んだのです。つまり、司祭同士でなければ見つけることはできなかったでしょう。……ただ、あなたも我々も精神力をほとんど使い果たしているせいか、微弱な波動しか感じることができませんでした。ですから、その軍馬を見つけなければ、あなたと落ち合うことはできなかったかもしれませんね」

エーゼンは穏やかに目を細めて馬を見やる。

「その馬、真っ直ぐにあなたがいるほうへ向かっていったのですよ。なにか感じるものがあったのでしょうか……？ 人よりも動物のほうが第六感に優れているとよく言われますが、それは本当なのかもしれませんね」

「そう、だったのですか……」

ルキアは馬に近寄り、丹念に馬の脚や胴を見て回ったが、目立った怪我はしていないようだった。ルキアは濡れたたてがみを撫でて、生きていてくれたことへの感謝を示した。そして、彼らをここまで導いてきてくれたことにも……。

こうして何事もなく落ち合うことができたから良かったものの、もし彼らが敵陣に足を踏み入れてしまっていたら大変なことになっていた。エーゼンとアゼリアから感じる波動はたしかに弱まっており、ここに辿り着くまでにだいぶ魔力を消耗したのがわかる。シベリー族は気の荒い民族と言われており、この状況下において、敵と見なせば容赦などしないだろう。

先ほどルキアを銃剣で刺したシベリー兵……。
ルキアに向けられた鋭い瞳には、強い憎しみがこもっていた。

（無理もない。我らは侵略者でしかない……）

「これはルキアのだろう？ あぶみ 鎧に引っかかっていたんだが……」

そう言ってエリーヌが差し出したのは銀の懐中時計で、上蓋に獅子と薔薇の紋章が彫られていることから、ルキアが落としたものに間違いなかった。

「……ああ、すまない」

ルキアがそれを受け取ろうと左手を伸ばしたとき、エリーヌの視線がルキアの右脇腹に注がれる。

「……もしかして、怪我をしているのか？」

ずっと庇うように押さえていたため、不審に思ったのだろう。
ルキアは腹部を押さえていた手を下ろし、エリーヌに向けて一息に告げる。

「ああ。だが、もう傷は塞いだから、かすり傷のようなものだ」

「あなたは どうして そういう嘘を――！」

「傷を塞いだのは本当だ」

ルキアは強く言い切り、その話を切り上げた。

今はとても押し問答を続ける気力などなかった。腹部の痛みは徐々に強くなっているように思われたが、ルキアはそれを気のせいだと思い込むことにした。

懐中時計を開き、時間を確認する。

「もう、四時なのか……」

ルキアが呟くと、エリーヌはさっと顔色を変え、声を乱す。

「ルキア、八日に第三部隊からの伝令がキウロス要塞に届いた。アパス州の占領軍が、ルドンの北中部でファジールの軍隊を見た」と

「――ファジールが動いたのか！」

ルキアは驚いてエリーヌを見やる。

「それはたしかな情報なのか？　もちろんファジールの動きは予想

されていたことではあるが、少々早すぎるのではないか？」

「たしかに早すぎるが、いくらなんでもシベリーとファジール軍を間違えるわけがない。偵察隊の報告を聞く限りでは、ファジール軍がシベリーへの援軍なのか、ゴースティンに対する牽制のつもりなのかは判然としないそうだが、この状況では援軍であると考えておいたほうがいいだろう。甘く見て、足元を掬われるよりはいい」

「そうだな……」

これで、この戦がゴースティンとシベリーの間だけで収束する可能性は限りなく低くなったということだ。開戦前は閣僚も上級将校もケーニヒスの動きを殊に気にしているようだったが、まさかファジールのほうが先に動くとは……。

「ファジール軍が南下しているのであれば、第四部隊が真っ先に交戦する可能性が高いと偵察隊の者が話していた。ファジール軍が南に進軍するのであれば、既にゴースティンが落としたアパス州ではなくルドン州を経由しようとするのが当然であるから、と。この報告が中央司令部に入ってから、既に二日経つ……。だから、早くここから抜けて本隊と合流しなければ危険だ。ただでさえ、ルドン西のシベリーとは再び交戦になるのだから」

エリーヌの話聞き、ルキアは眉を寄せたまま声を絞り出す。

「たしかに……できる限り早く湿地を抜けたほうがよいだろう。ただ、陽が昇り始めるまでは動くべきではないと思う。目印になるものがなにもないし、方向がまったくわからない」

「そうですね、我々はあなたの波動を辿ってここまで来ただけです

し、この周辺の地理などまったくわかりませんからね」

エーゼンの言葉にアゼリアが続く。

「せめて夜が明けるまでは待つべきでしょう。といっても、後一時間ぐらいでしょうから」

ルキアは三人を見つめながら告げる。

「では、夜明けを待ち、このまま南へ突っ切ることにして。下手に西に向かうと、再びルドン州軍の挟み撃ちに遭う可能性もあるだろう。ここから直接エーヴェル要塞へ向かうとなると、かなり時間がかかってしまうが、それが一番安全だと思う。要塞までの間には自軍の警戒陣地もあるだろうから、そこまで辿り着くことができれば……」

ルキアは星一つ見えない空を見上げ、顔に降りかかる雨粒を浴びながら、深く息を吐く。そしてエリーヌを見やり、感慨深げに小さく微笑んだ。

「散々な初陣になったものだ。私も、あなたも」

……+

四人は木立に身を潜め、時が流れるのを待った。

闇が薄く溶け始める。明け方になって雨の勢いは若干強まり、霧

もまだ残っているものの、やっと方向が掴めるようになった。
吸い込む空気は冷たく澄んでいて、心地良い緊張が全身を包んでいる。

ルキアは馬に跨り、隣にいるエリーヌと向き合う。

「魔道の力というのは無尽蔵のものではない。強い力を放てば、そのぶん精神力も体力も消耗する。サルファ殿もアゼリアも昨夜までかなりの魔力を消耗しているだろう。私の力もうそれほど当てにはできないと思う。……すまないが、なるべく自分の身は自分で守ってくれ」

「言われずとも、初めからそのつもりだ」

エリーヌは昔から意地を張るときに見せる顔をルキアに向けた。
これまで一度も当てにしてこなかった彼女の強がりやを、今は信じるしかないだろう。

前方のエーゼンとアゼリアにも告げる。

「決して、敵に深追いをしてはならない。目的は自軍に辿り着くことだけなのだから」

「……了解いたしました」

アゼリアがそう答え、エーゼンは薄く笑んだ。

ルキアは左手で手綱を握り、深い呼吸を二度繰り返す。

「では、行こう……」

四人は同時に手綱を引き、一気に駆け出した。丈の長い草を蹴散

らし、幅のある沼を飛び越えると、着地とともに水飛沫が上がる。

馬を疾駆させる四人は、薄い霧に霞む視線の先に、鮮やかな衣を身につけた集団を進む先に見据えた。

その姿が徐々に明らかとなっていく。

浅黒い肌に、茶や金の髪。臙脂に藍、濃緑色の巻衣。見紛うことなくシベリー兵である。

その数は約三十。

武器は銃剣。

すべて歩兵。

(……半数は仕留める必要がある――！)

アゼリアとエーゼンが風の刃を放ち、半数以上の敵兵の身体を切り刻みながら吹き飛ばす。シベリーの引きつれた叫び声に、エリーヌの放った短銃の音が重なる。剣を握る腕を銃弾で撃ち抜かれたシベリーは草地に這いつくばりながら呻く。

ルキアは馬を加速させながら剣を抜き、銃剣を向けるシベリーの上腕部を一気に貫く。肉を引き裂く感覚が手に伝わったのも束の間、すぐに剣を引き抜き、残りの者の肩口を切り裂いた。

そして、ひたすらアズーラ平原へと向かう。

背後から銃撃音が数発聞こえた。まだ銃を放てる兵がいたのかと頭の隅で考えるが、そんなことはすぐに頭の中から消え去る。敵に深入りすることはない。

ただ、前に進んでいかなければならないのだから。

ルキアは剣を納めることをせず、手綱と柄を一緒に握ったまま馬を走らせていた。次第に血が刃を伝い、振動で飛び散り、ルキアの手には赤い粒が飛散する。降りかかる血など気にかけることもなく、

先へ馬を先へ先へと進ませる。血など、すぐに雨が流してくれるだろう。

再び沼を飛び越えたところ、突如、ルキアは腹部に鋭い痛みが走るのを感じた。先ほどの戦闘で敵の刃を受けたわけではない。剣を強く振り、なおかつ、馬上で激しい揺れを受けたために昨夜の傷が開いてきたのだ。

奥歯を噛みしめる。指に不自然なほど力を込めて手綱を握り、痛みに耐える。

湿地はまだ眼前に広がっているが、少し馬を駆ける速度を弱め、後ろを振り返った。

エリーヌの険しい顔がそこにあり、ルキアは安堵の息を漏らす。

「エリーヌ、怪我はないか？」

横に並んだエリーヌが眉を寄せた。

「私のことなど放っておけばいい。それよりもルキアのほうが――」

「あなたが無事ならば、それでいい」

ルキアは強く言い切り、再び前方を見据えて必死で馬を走らせていく。

太陽は徐々にその輝きを増していき、草地から飛び散る滴に煌めきを与えている。

あまりに幻想的で、雄大な景色……。

初めて見る風景だが、なぜか懐かしくも感じた。

（なぜ、自分はここにいるだろうか……）

頭は冴え冴えとしているというのに、そんなことすらわからなくなるような気がした。

前方に、なにやら白い集団を捉えることができた。それは、先ほどのシベリー兵と比較にならない規模で、しかも騎兵であった。

四人は馬を止め、その様子をうかがう。

「……あの白い隊服は、ファジールの竜騎兵だ」

エリーヌが単眼鏡を覗きながら引きつれた声で告げると、エーゼンは諦めたような笑いを漏らす。

「今度はガレ族が相手、というわけですか……」

その数はざっと見たところ百はゆうに超えている。いや、二百はいるだろうか。

ファジールとルドン州の国境にはファジール軍の駐屯地が置かれているが、その軍が既にこの湿地を南下してきたということだろうか。先ほどエリーヌから聞いた話でさえ、あまりに動きが早すぎると思ったが、ファジール軍が今ここにいるということは、数日前には国境の駐屯地を発っていたということになる。

「……もしかしたら、ルドン州の東部を南下して、ガイル・ゼシカ大橋を渡って西にやってきたのかもしれない」

エリーヌは気落ちした声で呟いた。

ルドン州東部は、まだ第三部隊による制圧が行われていない。フ

アジール軍がゴースティンの目につかぬよう、ガイル・ゼシカ大橋を渡ってルドン州西部に入り、敢えて湿地を行軍する可能性も考慮するべきだっただろう。

（しかし……まさか、こんなところでファジール軍と鉢合わせすることになるとは……）

エーゼンもアゼリアもさすがに疲労の色は隠せないようだった。無理もない。彼らは昨夕よりシベリー兵が潜む湿地に入り、雨が降り注ぐ中で馬を走らせ、神経をすり減らしながら何度も魔法を放ってきたのだ。加えて、昨日のルドン州軍との戦いにおいてもその力を用いている。

ファジール兵もこちらの様子に気づいたようであった。しかし、たかが四名の騎兵を彼らはどう見るのだろうか。

ファジールにはゴースティン軍がルドリア教の司祭の力を戦力としていることまで伝わってはいないはずだが、遠目に見ても、ルキアたち四人がシベリーに見えることはないだろう。司祭の身につけている軍服は珍しいものであるが、軍服に黒を採用しているのは周辺諸国においてゴースティンだけである。また、エリーヌの軍服を見ればゴースティンの近衛士官であることは一目でわかる。

ファジール兵の停止している位置は、ぎりぎり小銃の射程範囲外なのだと思う。前列の騎兵は既に小銃を構えており、これ以上前に出れば一斉放射を始めるつもりに違いない。

ルキアは思わず息を呑む。

開いた傷の痛みは急速に増しており、手綱を握る手すら痺れを伴っていた。こんな状態で、ファジールの正規兵とまともにやり合うわけにはいかない。

肉体は、もはや戦闘に耐えることはできないほどに衰弱している。それでも、魔道の力を用いればこの窮地を打破できるかもしれない。一度に仕留め切れなければ、この近距離ではすぐに銃弾を浴びることになるだろう。しかし、もしこれで力を使い果たしてもかまわないのならば、最後の一撃に賭けるしかないだろう。

ルキアは右手を胸に当て、＜念くを集中させた。ざわり、と肌が粟立つ。

血が沸き、頭の中が真っ白になるような心地に包まれ、手のひらに小さな赤い玉が生まれた。それは＜念くを込めるごとに肥大し、強い光を放ち始める。

ルキアの身体をゆるりと包んでいた炎は、徐々に鳥を象り始め、ルキアの手が指し示すままにファジール兵へと悠然と飛んでいった。

再び地上にその姿を現したベリアザーベルは、広げた両翼で敵兵を包み込む。

縦横に炎が行き交い、炎の爆ぜる音と無数の悲鳴が混じり合った。

「……だいぶ、手加減されたのですね。初戦で見た＞神の力くはこの数倍の威力はあったように思いました」

エーゼンの呟きに、ルキアは炎が敵を呑み込んでいくのを見届けながら、苦笑を漏らした。

これは手加減などではない。今はもう、これが精一杯だったのだ。強い疲労が沸き上がり、ルキアは思わず目を固く閉じた。この疲労は腹部の痛みに耐えているせいではなく、専ら精神の消耗により生じるものようであった。

ルキアは大きく息を吐きながら目を開け、微笑みながらエリーヌに先を促す。

「あと少しで湿地を抜ける。早く要塞へ向かおう」

エリーヌは青褪めた顔をしたまま、なかなか馬を走らせようとしなかった。

なにかあったのかと不審に思ったが、すぐその理由に気づく。

エーゼンやアゼリアの放つ風の刃で切り裂かれた敵兵は、剣で切り裂かれたり、銃弾を浴びたものとそう変わらないだろう。だが、ルキアの放った炎はそれらとはまるで違う。

エリーヌは、魔法で人を殺めるのを見たことはあっても、炎に巻かれ悲鳴を上げながら逃げ惑う人間を見たのは初めてなのだ。王太子付きの近衛にいれば剣で暴漢を切るような機会すらない。なにより、今のように入外の力で多数の命を奪う様を見る機会など、この大陸のどの軍隊に属していてもありはしない。

数日前、ルキアは初めて魔法を用いて人を手にかけてが、それにはたった一日で慣れてしまった。剣を用い、その手に肉を引き裂く感覚を味わうことにも、もはや抵抗は感じていない。

ルキアは少しの後悔と自虐を口元に浮かべながらエリーヌに問う。

「怖いかな？」

沈黙が続く。

空から落ちる雨が炎を引かせていく。それとともに、奇怪に折れ曲がった黒い死体が焦土に伏せられていく。

「……くだらないことを言っていないで先を急いだほうがいい」

エリーヌはそう言い捨てて馬を駆る。

彼女はファジール兵の屍の山の前にさしかかったとき、しばしそ

ここで立ち止まり、視線を落としていた。ルキアが声をかけると、顔をそむけ、迂回をしようと手綱を引いた。

そのとき、山の一角が動いた。それはほんの一瞬の出来事だった。

仕留め切れなかったファジル兵の銃剣が、エリーヌの乗っていた馬の脚を切り裂いた。馬が大きく暴れたためにエリーヌは地面に叩きつけられた。それでも素早く短銃を懷から手に取り、引き金を引いたが、弾は剣の柄に当たり、高い音を立てて跳ね返った。

敵兵は無残に焼け爛れた皮膚から血を垂れ流しながらも、怯むことなく真っ直ぐに剣をエリーヌに向け、彼女の右肩を切り裂いた。

エリーヌの悲鳴が澄んだ空气中に響き渡る。

短銃は泥水の中へ沈み、鮮血がその上へと滴り落ちていく。

「早く剣を取れ！」

ルキアは馬を走らせながら叫んだが、エリーヌは肩を押さえたまま、身を固くしている。

敵兵の銃剣が再び振り上げられても、エリーヌはまだ剣を抜こうとしない。

あの態勢では逃げ場がない。

背後でアゼリアが魔力を高めた気配を感じたが、今からでは魔法を繰り出しても間に合わない。

ルキアはさらに馬を加速させ、自分の剣を男に目掛けて投げつけた。

男の悲鳴が上がる。

剣の切っ先は男の胸のあたりをかすめて地に落ち、泥水を跳ね上がらせた。

敵兵がひるんだ隙に、ルキアは馬から飛び降りてエリーヌを引き

寄せ、敵兵が手にしていた銃剣をもって、その息の根を止めた。
泥水と血を飛び散らせながら、ファジール兵の男は今度こそ地に横たわった。

ルキアは深く息を吐き、泥水の中へと落ちたサーベルを拾い上げた。神に祈りを捧げるようにインタリオをなぞり、刀身にこびりついた血を払いながら、剣を納めた。

腕の中で抱き止めていたエリーヌを見つめ、静かに問う。

「……大丈夫か？」

エリーヌはなにも答えず、身体を小刻みに震わせていた。出血からすると、彼女の傷はそれほど深くないと思われたが、この場合は傷の深さの問題ではないだろう。

エリーヌの髪や頬には敵兵から流れ出た血が滴り落ちていた。傍に倒れている男に改めて目を落としたとき、その凄まじい形相にルキアは思わず顔を引きつらせた。

「ルキア様、お急ぎを……。この場にこれ以上留まるのは危険でございます」

馬上から投げかけられたアゼリアの言葉はもつともだった。

おそらく、先ほどの竜騎兵は偵察部隊だったのだろう。あの数を切り抜けたことだけでも上出来だが、結果として、一人も残さずに仕留めておけたことはよかったのかもしれない。だが、ファジール軍が進軍している以上、いつ本隊が現れるとも限らない。

エリーヌの乗っていた馬は脚をやられてしまったため、ルキアは自分の馬にエリーヌを乗せ、彼女を抱いたまま馬を走らせた。

幸いなことに、そこからはシベリー軍と鉢合わせることもなく、すぐにアズーラ平原へと抜けることができた。

ルキアはかすむ目に力を込め、平原を見渡す。

この一帯に、まだ敵兵の気配は感じられなかった。

エーヴェル要塞まではまだ距離があるが、そこに至るまでの間に点在しているゴースティン軍の警戒陣地までは上手くいけば数時間で辿り着けるはずだ。

ここからは王太子の旗が目に入るまで、後ろを振り返ることなく、ひたすら馬を走らせるだけだ。ただ、この馬にはかなりの無理をさせているため、駆る速度は先ほどよりもだいぶ落とした。あまり揺れてはエリーヌにも負担がかかってしまう。

小さな呻き声が聞こえた。

ルキアが思わずエリーヌを強く抱き寄せると、血の匂いが鼻をかすめた。

昨日、首から上を砲弾で吹き飛ばされ、軍服を血に染めながら馬から転がり落ちる士官の姿をじっと見つめていた。手や顔に付着した彼の血の感触を、雨は洗い流してはくれなかった。そして、敵の刃を受け、夥しく流れる自分の血を見た。激しい痛みで遠くなりそうな意識をなんとか留めようと、豪雨の中で必死に耐えていた。

しかし今、あのとときよりもはるかに死が恐ろしいと感じている。

ルキアは手綱を取る手に力を込め、唇を強く噛みしめた。

冷たい雨 (2) (後書き)

【補足説明】

この話は現実世界の十八世紀ヨーロッパをモデルにしています。

戦闘で使用されている小銃はマスケット銃のことで、前装式で連射はできません。

また、マッチロック式ではなく、フリントロック式であり、天候にはそれほど左右されず、雨天時でも問題なく撃てます。

ただ、ゲリラ豪雨の中でも銃が撃てるか、となると微妙なところだと思います。完全に湿気てしまうと不発になるでしょう。

作中で細かい説明はしていませんが、ゴースティンは銃の開発に力を入れており、従来のものよりも飛距離と命中精度が飛躍的に向上した“ミニエー銃”らしきものが一部に出回っているという設定にしています（現実世界では十九世紀半ばに登場する銃です）。

ただ、軍で制式採用はまだされていないので、上級将校が開発途中のものを使っているという感じです。もちろん、戦列歩兵の兵士は使っていません。

エリーヌの使用している短銃は、リボルバー式で連射が可能です。これも軍が制式採用しているものではなく、大貴族の将校が特別に作らせて所持している高価な代物です。

……正直、宝の持ち腐れかもしれません。

夢の跡

……静かだ。目には闇しか映らないが、今は夜だろうか。
あれからのくらの時間が経ったのかわからない。

柔らかな敷布の上では、現実が夢と化す。しかし痛みは夢を現実へ帰す。

身を起こそうとしたとき、腹部に激痛が走った。たちまち傷が脈を打ち始める。

目を閉じたまま、じっとその痛みに耐える。

「エリーヌ……」

ルキアは熱で乾いた唇を動かし、彼女の名を呼んだ。

……+

シベリー軍殲滅作戦の中央司令部が置かれているのは、西方軍の半数が駐屯しているキウロス要塞であったが、ファジールの参戦に伴ってエーヴェル要塞へと移されることとなった。

ゴースティンは東と南が海に面しているため、陸軍所属の軍隊は北と西に集中して置かれている。西方軍は元々シベリー軍に対抗するためには作られた軍隊ではなく、専ら対ケーニヒスのための軍隊であった。

二十年前にファジールが独立してからは対シベリー及び対ファジール防衛の拠点となっているのが、このエーヴェル要塞である。

金牛宮の月、二十三日。

ファジール参戦の報が入ってから、当初の予定において予備戦力としてベスラ要塞に駐留させていた北方軍の二個師団が組み込まれることとなり、北方軍司令官であるアシュレイ・グレンヴィル伯爵が軍を率い、一旦エーヴェル要塞まで到着した。

現在、二個師団は一週間の休息を摂っており、数時間後には既に占領下に置かれたルドン州を抜けてファジールへの進軍を開始する。

軍議の後、眉を寄せて思案に耽っているアシュレイのもとへ、グラッドは歩み寄りながら声をかける。

「グレンヴィル伯爵、ずいぶんと考え込まれているようだが？」

ケールセン・グラッドとアシュレイ・グレンヴィルは士官学校の同期であったことから、互いのことはある程度ならば知っている。グラッドは今では王太子派の中心的存在の軍人であるが、アシュレイが宮廷の派閥に属していないこともあり、彼らの仲が変に拗れることはなかった。元より友人と呼ぶほど気安い仲でもなかったが、張り合ったり牽制し合うような相手でもなかった。アシュレイが少将となった二十八のとき、グラッドは中尉だったのだから、対抗心を燃やすだけ無駄というものである。

ただ、グラッドにとってアシュレイのような人間は好ましいものだった。必要以上の慣れ合いは、却ってしがらみとなるものだ。

アシュレイは顔を上げ、ゆるく開かれたカーテンの隙間から遠くを見る。

「頭を抱えたくもなるだろう。ファジールが参戦したことにより、ケーニヒスが動く可能性はますます高まっているのだから……」

二か月前に行われた特別軍議の場においてミカヤは、北方軍派遣は対ケーニヒスの戦力であると明言したが、その言葉とは裏腹に、ミカヤはファジールの動きのほうを危険視していた。多くの者がファジールの参戦可能性についてケーニヒスほど重要視していなかったのは、ファジールが独立した後、ケーニヒスとの関係が冷え切っている一方、ゴースティン相手には相互防衛同盟が結ばれていたためである。しかし、所詮それは紙切れ一枚の同盟であり、あまりに頼りないものでもあった。

アシュレイはふっと視線をグラッドに投げる。

「グラッド將軍、貴公はこの派遣軍についてどう考えておられる？ 聞けば、王都駐留軍からの増援までこの要塞に向かっていているという話ではないか。そこまでするのは一体、なんのためだ？」

「念のためだ」

「ケーニヒス参戦の情報を既に掴んでいるからだろうか？」

はぐらかすグラッドに、アシュレイは即座に切り返した。

グラッドはそれについて否定せず、どこか愉しげに言い放つ。

「デデュー公もラッセル伯爵も必死に開戦を避けようとされているそうだが、いっそ、ケーニヒスも参戦してくればよいのだ。司祭ら……特に四大司祭らの働きは予想以上のものだ。彼ら一人の力で何千という敵兵が散っていったのだ。ファジールとケーニヒス、そしてルザーリまでを相手にしても我々に負けはありえないだろう」

その言葉に、アシュレイは眉をひそめて反論する。

「それでも、第四部隊の被害は当初の予測に比べれば大きい。ゴースティンはシベリーに比して戦略や武器の精度ではるかに勝ると自負してきたわけだが、ルドン州軍戦においてはシベリーの策略にまんまとのせられ、敵の砲や銃に翻弄され続けた。加えて、あの急激な天候の変化だ……。ファジールの動きも早く、第四部隊への援軍が遅れば被害はさらに拡大したやもしれぬ。たしかに今は優位に立っているが、なにかもが順風満帆というわけではない。そのように現状を楽観視し、いたずらに戦への道を歩もうとするのはどうかと思うが？」

グラッドは、アシュレイの静かな怒りを受け流すように、笑みを深く刻む。

「八十年前の大戦においても、ミレニス州付近での交戦において我が軍は甚大な被害を被った。今回の作戦においても、首都バードン攻略までを含めれば第一・二部隊にもそれなりの死傷者は出た。それに比べれば第四部隊における五百人未満の死傷者など微々たるもの……。不測の事態は発生したが、その割には上出来だということころだろう。問題は、高位司祭に犠牲者が出るところだったということとだな。それだけはなんとしてでも避けねばならなかった。セヴァンス侯の無事が確認されるまで、メフィス將軍は生きた心地がしなかったであろうな。あの者たちが警戒陣地に現れたとき、ずいぶんと驚かされたが……」

このシベリー軍殲滅作戦において、もっとも重要かつ危険な役割を果たすのはミレニス州や首都バードンを攻略する第二部隊であり、グラッドがその総指揮を担っていた。その反面、行軍距離こそ長い

がもつとも危険は少ないと考えられていたのが、ジュダ州とルドン州西部を攻略する第四部隊であったのだ。

第四部隊から中央司令部にセヴァンス侯ルキア・ベルネスが戦場で行方不明となったという報告は、十日正午の時点において中央司令部であるキウロス要塞には入っていないかった。首都バードン攻略後、ファジール戦に備え、ただちにエーヴェル要塞へと向かっていたグラッドは、エリーヌを抱きかかえたルキアが要塞の北にある警戒陣地に現れたところを、まさに目にする事となった。

九日の夕刻、湿地へ高位司祭二人と近衛士官一人が向かったのは、第四部隊の指揮官メフィスの判断ではなく、彼らの独断であったと報告されている。第四部隊の宿営地を無断で出た三人は十日未明にルキアと合流し、夜明けを待って、エーヴェル要塞へと退避することに決めたのだという。その退路を主張したのはルキアであったとのことだが、賢明な判断であったとグラッドは思う。

もし、第四部隊と合流しようと西へ進んでいれば、シベリー軍はさることながらファジール軍の一部との遭遇戦になった可能性が高い。偵察隊からの報告によると、二万を超えるファジールの軽竜騎兵及び歩兵が、ゴースティン国境へと向けて南下していたという。いくら神の力くとやらを有する司祭であっても、手負いの上、足手まといを抱えていては、とても切り抜けられはしなかっただろう。もつとも、ファジールの偵察隊約二百人を一発で仕留めたことはさすがと言わざるをえないものである。

警戒陣地に辿り着いたルキアは、エリーヌを横抱きにしたまま馬から降り、その場に彼女を下ろした。

駆け寄ったグラッドが、一体なにがあったのかと問うと、ルキアは第四部隊に起こった事態と、その後自らの身に起こった事態の経緯について簡潔に説明した。さらに、ファジール軍の動きについて伝令を出すよう指示までした。

その口調は明晰で、意識ははっきりしていたようだが、一度膝を折った後は再び立ち上がることはできず、しまいには目を伏せて身を横たえた。驚いたグラッドはルキアを抱え起こそうとしたが、その身体の冷たさにグラッド自身の背筋が冷たくなった。

先ほどまで意思に満ちていたはずの深緑の瞳は、もう二度と開かれることはないように思えた。目のあたりには濃い影が落ちており、唇は土気色で、陣地に駐留していた軍医や司祭たちがルキアの様子を見た途端、たちまちに色を失くしたほどだった。

「それにしても、セヴァンス侯には驚かされた。あなたに酷く詫びられて」

アシュレイは腕を組んだまま椅子に背をあずけ、秀麗な顔を曇らせる。

「……娘が負傷したことについては、あの方が詫びられることではない。聞けば、あの子が殿下から大役を仰せつかっておきながら、勝手に高位司祭らとともに敵地へと向かったというではないか。それでは却ってルキア殿や他の司祭の手を煩わせただけではないのかと……」

「それでもミカヤ殿下は満足そうであられたがな。ご息女に処罰など必要ないとおっしゃっていた」

二日前、エーヴェル要塞でアシュレイと顔を合わせたルキアは、自分のせいでエリーヌを巻き込んでしまっただけで申し訳ない、と頭を下げたのだ。必死に詫びるルキアを、アシュレイが留めさせていた。

その光景を、グラッドは不思議な感覚で眺めていた。

戦場では一瞬で何百という敵兵の屍を作り上げた男なのだ。それが、命に関わるわけでもない切創ごときであれほど取り乱すなど理

解しがたいものだった。傷を負ったのが顔だというのならまだわからないではないが、軍医によれば、利き腕でもない左上腕部に負った傷であり、魔道による治癒を併用すればほとんど傷跡も残らない程度のものだという。

それに対して、ルキアの傷は右脇腹を銃剣で貫かれており、ある程度は自身の魔法で塞いだらしいが、それが退却の際に大きく開いたのだという。

司祭らは丈が長く、黒い軍服をまとっているせいか、グラッドはルキアが重傷を負っていることにすぐ気づくことができなかった。倒れたルキアを受け止め、軽く腹部に触れたとき、指の隙間から鮮血が零れていった。こんな状態で馬を駆って陣地まで辿り着いたなど、とても信じられないものだった。

「ルキア殿があのように取り乱されるところは初めて目にした。私はあの方を幼いころからよく存じ上げているが、クラウド卿が非常に厳しく接しておられていたせいか、十になられることには隙のない振舞いをされるようになられていたからな。家を継がれてからはなおのことだった」

アシュレイは含み笑いをしながら、どこか寂しげに呟く。

「しかし、可笑しなものだな。まさかあの子らが戦場に出ることになるなど、昔の私は考えもしなかった。私から見れば、今でもあの二人は幼い子供のように思えてしまうところがある……。このようなことになるならば、娘が士官学校に入ると言い出したときにもっと反対しておけばよかったと思う」

「グレンヴィル伯爵、あなたのような冷血の武人でも、愛娘のこととなればお甘いのだな」

そう言いながら、グラッドはルキアたち四人が陣地に現れたときの様子をミカヤに報告したときのことを思い出していた。

あのとき、ミカヤは本当に愉快気に笑っていた。グラッドが訝しげにしていると、彼はいつものように不敵に笑む。

『知らないのか？ エリーヌはルキアの元婚約者だ』

それは初めて耳にした話ではあったものの、グラッドにとってそれ以上に納得のできる答えなどありはしなかった。

『だが、ルキアが一方的に破棄をした。ドートリツシュを継いだときにな』

ミカヤは嬉々として語る。

二人の婚約は正式に披露されていたものではなかったが、近しい者の間では暗黙の了解事項であり、クラウスが存命であれば、今ごろルキアはグレンヴィル家に婿入りしていたはずなのだという。

二人の婚約はなんら訝しいものではない。ドートリツシュの息子を他家の婿にやるというのは珍しいことだが、ルキアの出自も考慮すればグレンヴィルほど相応しい家もない。

グレンヴィル家は、アシュレイの兄がアルト＝ヴィジェ王の第二王女を、そして甥が王の庶子を妻に迎えており、王家との縁が非常に深い。その二人ともミカヤの異母姉に当たるが、王が花嫁を差し出したのは、グレンヴィル家が何代にもわたり王家に忠実な臣下であり続けたからこそだろう。

人を疑うことを知らないような王であるが、不思議とその見る目が曇っていると感じたことはない。その証拠に、王自らが推薦・任命した官僚は非常に優秀な者が多く、ギルベイドやハーシェリオン

出身者であっても欲深な者からは一線を引いており、王なりに彼らの権勢を殺ごうとしているのが見てとれる。それでもやはり、宮廷闘争を治めることができないでいる以上、あの王は暗愚と呼ぶしかないものであった。

二年前、そんな王の不甲斐なさが一因となり起こった事件がある。新年を祝う宴が宮殿で開かれたときのこと、ミカヤがその席でバルフォア家の長男マートンと諍いを起こした。バルフォア家当主マールテルの妻はハーシェリオン分家出身であるが、ハーシェリオンはかつてのゴースティン王家の家系であるため、非常に気位が高く、オトゥール王家への敬意はそれほど強くない。その流れを汲むマートンもその手の人間で、王太子とはいえ下級貴族の妾の子であるミカヤへの敬意など持ち合わせておらず、それは直接口に出さずとも態度に表れていた。

ミカヤは、自らの前に跪いて口上を述べるマートンに対し、型通りの挨拶などいらぬ、とその言葉を遮った。

『思いのままに申してみればよいのだぞ？ 卑しい血筋の者が玉座に着くことが我慢ならぬ、なぜこのような下賤の者に頭を下げねばならぬのかとな』

冷ややかな視線を落とし、強い侮蔑を舌先にのせる。

『貴様が大貴族としての誇りを命よりも尊んでいるのなら、今ぐらいは胸の内を秘匿し、低頭に振舞ってみればどうだ？ ここにいる大勢の者と同じようにな』

あの場に国王は居合わせなかった。その一月ほど前に大病を患い、まだ公の場に姿を見せられるほどに回復していなかったためだが、そのことがミカヤの籬たがを外してしまったのかもしれない。クラ

ヴィーエ公キイルのほか、ロベルト・ネイゲルやジーク・ラッセルら王弟派の重臣もその場にいたが、ミカヤの挙動に不快を感じたのだろう。周囲の者は眉をひそめ、広間には動揺が広がっていた。

『宮廷には家柄を鼻にかけるしか能のない輩がのさばっているが、その最たる者が貴様だな』

すぐ傍にいたルキアが見かね、殿下、と、たしなめるように声をかけたが、ミカヤはそれを無視し、腕を組んだまま立ち上がった。そのまま前へと歩み寄り、床に置かれたマートンの手を靴先で鋭く払った。

とっさに手を引いたマートンに向け、嘲笑をぶつける。

『しばらくそのままにいるがいい。さすれば、私が王となった暁には高位を保証してやってもいい』

腰をかがめ、手を伸ばし、マートンの髪をぐしゃりと握る。

『這いつくばり官位を強請るのが貴様には似合いだ。所詮、そのぐらいしか能がないのだろうか？』

そう言い捨てて、哄笑を響かせながら身をひるがえした。

誇りを床に叩き落とし、その落ちたものを踏みにじる、そんな言葉だった。

マートンは手と肩を震わせながら跪いたままだった。誇り高い生まれの者が大貴族らの集う宮廷において恥をかかせられたことへの屈辱は想像に難くなく、このやり取りを眺め見ていた宮廷貴族らはマートンに同情し、ミカヤに強い反感を抱いたことだろう。いつもはミカヤの好きにさせているダラス公アンジェも、あのときばかりは少し焦りを覚えているようであった。

広間に漂っていた華やかな空気は一転して重苦しいものへと変わったが、それでこの場は納まるはずと誰もが思っていたことだろう。しかし、若さによる短気、と庇い立てすることも滑稽なほど、マートン・バルフォアの行いは愚かだった。

壇上へと戻ろうとするミカヤに向けてマートンは剣を抜いた。切っ先はまっすぐにミカヤへと向けられ、そのままマートンは猛進していった。壇上の近くに控えていた近衛はすぐに動いたが、それよりも先んじて動いたのはルキアだった。もっともミカヤのすぐ脇に控えていた彼は、ミカヤの差していた剣を抜き、マートンが振り下ろそうとした刃をなぎ払い、切り返しとともに剣を床へと叩き落とした。

高く、乾いた金属音が謁見の間に響き渡った後、ほんの一瞬、静寂が訪れた。

ミカヤはマートンに切りかかれたことよりも、ルキアの行動に驚いているようだった。

すぐさま近衛が男を取り押さえたことで、再び広間はざわめきに包まれたが、二人の間には異質な空気が流れていた。

ルキアはミカヤの前で跪き、剣を両手で水平に捧げる。

『とっさのこととはいえ、失礼をいたしました』

ミカヤはルキアをほんの少しの間見下ろした後、冷笑を漏らした。

『お前は、本当に司祭なのか？』

ルキアの手から剣を受け取り、鞘へと納める。

『だが少し、腕が鈍ったようだ。今のお前が相手なら、私は勝つことができるやもしれんな』

ルキアの上腕部には一筋の切れ目が走っていた。その白い長上着の裂け目は徐々に赤く染まっていた。その様子を目にしてもミカヤは動揺する素振りを見せず、近衛に拘束されているマートンに向かって歩を進めていく。ミカヤの手は剣の柄を握っており、それが今まさに引き抜かれようとしていた。

跪いていたルキアが急いで駆け寄り、ミカヤの手を押さえる。

『殿下、お止めください!』

ミカヤはルキアの肩を勢いよく突き飛ばし、構うことなく剣を抜いた。

『邪魔をするな!』

『剣をお納めください。この者を裁く権限はあなたにはございません』

『私に権限がないだと? ふざけるな! こやつは私に切りかかりた罪人なのだぞ』

『いいえ。罪人であるからこそ、この場で手討ちになどなさってはなりません』

ダラス公もミカヤに歩み寄り、静かに諭す。

『ミカヤ様、私からもお願いでございます。王太子ともあろう方が、御手を罪人の血で穢されることはありません。この者はしかるべき

場において断罪されるべきと存じます』

王族に剣を向けたことは重罪であるものの、ミカヤに直接危害が及ばなかったこと、また明らかにミカヤの言動に非があったこと、マートンがバルフォア伯爵家の長男であること……それらを考慮すれば、温情がかけられる可能性はあった。

なんとかミカヤは剣を納めたものの、怒りが収まらなかったのか、マートンに言い放った。

『貴様が傷を負わせた者も王族だ。死罪は免れぬものと思え!』

この一件は、近衛隊の面目丸潰れの出来事でもあったが、もう一つ、大きな事態を引き起こした。これまでは噂の域を出ないとされていたルキアの出自は、ミカヤの一言により暴露され、王太子を斬りつけようとした大逆事件とともに宮廷中に知れ渡った。

その日を境に、ルキアの宮廷での立場は誰の目から見ても悪くなっていた。これまででも一部の廷臣らの前では酷く萎縮していたが、まるで不祥事を起こした貴族の身内のような空気をまとうようになっていた。

ドートリッシュには国内外問わず付き従う貴族が多く、王家に取り入らずとも安泰であるため、宮廷司祭の地位を辞するほうがルキアのためであったに違いない。だが、王が強く引き留めているために、宮廷を下がることはできなかったのだろう。

アルトリヴィジェ王には多くの子がいたが、王が本当に可愛がっていたのは亡き妃との間の双子の王女のみで、数十人に上るとされる私生児には義理のような温情以外をかけることはなかった。だからこそ、実弟の私生児に過ぎないルキアに対する王の態度は、異様と呼ぶに相応しいものだった。

幼いころなどは、国王自ら抱き上げたり、傍に呼び寄せ、優しく

言葉をかけたりしていたものだった。長じて司祭となつてからは、ミカヤではなく自らの側近として宮廷に召し上げる始末である。

お飾りとはいえ、王にそれほど目をかけられ、舞い上がらぬ者はいない。それ幸いにと王に取り入り、官位を強請ろうとするのが普通であるが、ルキアはそれをしない。誰にも媚びへつらうこともなく、王のためだけに忠義を尽くし、王以外とは一切の関わりを絶とうとしていた。

もつとも、ルキアがいかに慎ましく振舞おうと、王のルキアに対する目のかけようは度を越しており、そのせいで、実は国王の落胤ではないのかと噂されるのである。ルキアに愛情を傾けることは、王なりのキイルへの罪滅ぼしのようにも思われたが、それによりルキアが肩身の狭い思いをしていることに王は気づいていないだろう。

一方、ミカヤに対する王の態度は、王太子として大事にしている様子は見てとれるものの、二十三年前の一連の騒動に辟易させられたために、ほとんど無関心を決め込んでいる。ミカヤの立場を明確にし、その地位が絶対的なものであると保証することで宮廷の争いも解決できそうなものだが、曖昧な王の態度がミカヤを蔑ろにしているかに見え、結果として王弟派をのさばらせてしまっている。

王は息子同然のキイルに深い信頼を寄せており、何十年もの間、なにをするにしてもキイルに任せ切りであった。かの一件により王への反逆とされ、筆頭王位継承権者としての地位を失い、宮廷追放が相当とまで言われた者を、周囲の反対を押し切って王の一存で宰相の座にまで据えるほどである。

宮廷の闘争に決着をつけるためにはミカヤが王位に就くしかない。王太子派の貴族はギルベイド家に縁や恩のある者が多いのは事実だが、中道派の間では王弟派の権勢に辟易し、王太子寄りの考えを持つ者もそれなりに存在する。

宰相クラヴィーエ公を始め、優秀な閣僚たちが多いことは素直に認めているものの、ハーシェリオン家の権勢が長く続いていることにより、表に出てこないだけで汚職が起こり、末端においては機能不全に陥っている部署も少なくないとされる。上層部においても財のやり取りによる高位の任免のほか、業務執行者と監督者の癒着が起こり、不祥事の隠匿も珍しくない。マーテル・バルフォアによる“シベリー暴動に関する虚偽報告”もその一例に他ならない。

(……もつとも、これは戦後大きく変わりうるものだ)

グラッドが胸の内ですう呟いたとき、アシュレイの感慨深げな声が耳をかすめる。

「それにしても、シベリーの制圧は呆気なかったものだと思う。今はもう占領統治へと移行しているが、まさかこれほど早く首都バードンまでを陥落させることができるとはな……」

グラッドは腕を組みながら口の端を上げる。

「たしかにな。これまで散々シベリーの暴動に悩まされていたことが馬鹿馬鹿しくなる」

「百年ほど前からケーニヒスがシベリーを属国化していたが、それで納まりがつくならば、シベリーもそれに越したことはなかったであろうに……。大国の保護下にはいればまだ、最低限の保障にありつけたというのに、あの者たちはそれを自らの手で壊していったようなものだ」

「所詮は異教の蛮族、共生などできはせぬ。ケーニヒスもよくこれまで耐え忍んだものだと感じする。まあ、これで肩の荷が下りよう。」

我らに感謝してもらいたいものだ」

グラッドの言葉に、アシュレイはほのかな怒りの気配を漂わせた。アシュレイはシベリーに対して同情しているのだろう。彼のような人間は貴族の中ではそれほど珍しいものでもない。これまでシベリーの被害を目の当たりにすることのなかった者だからこそ持ち得る感情と言えはよいだろうか。国境周辺に住まう民の苦難など、王都の大貴族にとっては知るべくもないものだ。

グラッドは気にせず言葉を続ける。

「そうそう、ミレニス州軍戦の際だが、私はあのお伽話の>神の力くをこの目で見ることができた。地の司祭ローザン・ゲールであったか？ あの方がミレニス市街周辺に築かれた塹壕をことごと潰していく光景は圧巻であったな」

「アルゼ教典の一節か……。私は直接目にしてはいないが、報告は受けている。あのような力が本当に実在したのだな」

「ファジール戦でも見ることはできるであろう。その目で確かめられればよい」

司祭の放った光の中から、獰猛な爪と牙を持つ巨大な黒牛が現れ、雄叫びとともに大地を引き裂いた。その姿はまさに、教典の中のガリアントそのものであった。ガレ族にとっての唯一の神、ルドリア神の御使いが放った力により、シベリーたちは無残にその命を散らしていった。

ガレ族の台頭、殊にゴースティンとケーニヒスの規模が拡大するにつれ、シベリーは両国の国境へと迫いやられていった。この大陸のどこにも彼らの安住の地などありはしない。だからシベリーはケ

ーニヒスに従属していたのだ。たとえ捨て駒とされてでも、この地に留まり生き抜くためには選ばざるをえない道だった。そうやって、どれほど迫害されようとも、この地は我らのものだと言わんばかりにシベリーは抗い続ける。ゴースティンとシベリーの争いは不毛なものだが、そもそもシベリーの存在自体が、ガレ族の支配するこの大陸において不毛なものなのだ。

それならば、こうして殺してやるのが慈悲ではないのか、とグラッドは思う。異教徒に向ける言葉ではないが、生活を保障することや命を助けてやることだけが慈悲深さではないだろう。

だが、もはや今となってはそのようなことを考えるだけ栓なきことである。

シベリーとの戦はもう終わったのだ。ゴースティン軍の圧倒的勝利において。

去りゆくその背を (1)

エーヴェル要塞に、前線部隊にいるグラッド將軍より書簡が届いた。

現在、ゴースティン軍はシベリー戦の際に分けられた四つの部隊が再編成され、ファジール国境に向けて進軍している。そこには北方軍の二個師団も加えられている。

いくら可能性として考慮に入れていたとはいえ、ケーニヒスとの関係が冷え切っている今、ファジールと戦はできれば避けたかった事態である。ファジールはゴースティンよりもはるかに国力の劣る国であるものの、落とすとなれば一筋縄ではいかないだろう。

ファジールの軍の四分の一を占めるのがルザリーの傭兵部隊と言われている。ルザリーはファジール西に位置する王国であるが、国土の大半が山地で農業がそれほど盛んでなく、かといって他に有益な産業もなく、次第に傭兵稼業が重要な産業となったという歴史がある。その武勇は大陸中に広まっており、特に隣国であるファジールは独立戦争の際もルザリー傭兵の力を導入し、現在も近衛連隊にファジール傭兵を組み込んでいる。彼らはファジールの正規兵よりもはるかに実戦慣れしており、なおかつファジールに対する忠誠心も持ち合わせているため厄介な存在である。

グラッドからの書状に目を通すミカヤは、エリーヌの目に上機嫌に映った。この書簡は戦況が優位に立っているという知らせであるうが、なにか彼にとって特別な報告でもあったのだろうか。

横目でさりげなくその様子を見つめていると、ミカヤから声がか

かる。

「エリーヌ、怪我はもう良いのか？」

「はい、ご心配をおかけして申し訳ございません」

エリーヌはミカヤのほうへ向き直り、胸に手を当てる。

「だから言っただろう？ あれを心配する必要はないと」

「はい……」

あれから二週間余り経って、エリーヌは中央司令部となったエーヴェル要塞での隊務に復帰した。怪我はそれほど酷くはなく、翌日から復帰しても支障のない程度であったため、復帰は少々遅すぎるほどだった。

その間、エリーヌはエーヴェル要塞の一室にこもっていた。それは心身を癒すためのほか、謹慎の意味合いも含まれていた。

予想通りというかなんというか、メフィス將軍は司祭たちとエリーヌが勝手にルキア救出のために敵地へ向かったと中央に報告をしたという。おそらく、ルキアが瀕死の重傷を負ったことが原因であろう。

当然、エリーヌの上官である中佐と大尉がそれは違うと主張したのだが、表向きはメフィスの主張が通る形となった。中央の将校らは、第四部隊の采配に対するメフィスの明らかな失策を知っているため、それが事実と異なるであろうことは理解しているようだった。

とは言うものの、伝令の役目を受けておきながら、その途中に身勝手な行動をとったことは事実である。一時的な謹慎以外のお咎めがなかったのは、ルキアを救い出したことが影響している。自軍の

兵士の命が千あっても、司祭一人分の価値もない。特にルキアはその地位、立場からして決して失われてはいけない人物だった。もし彼の身になにかあれば、戦後、第四部隊の指揮官の首は確実に飛んでいただろう。

ただ、ルキアには救援など不要であり、一人でもあの窮地を切り抜けることができたに違いない。そう思えるほど、ルキアの力はエリーヌの予想をはるかに超えていた。

ルキアが魔道の力を使うのをエリーヌが目にしたのは、あれが初めてではない。まだ分別のない子供のころなら、戯れに炎を繰り出してみせることがあった。兵士の傷をたちまちに回復させるのを幾度か間近で見してきた。そして、ミカヤからの命令書を燃やして灰にしてしまうところも……。

しかし、あのときは違った。

ルキアの手から放たれた劫火が敵を一瞬にして飲み込んだ。敵は炎から逃れようとのた打ち回り、呻き声を上げながら、すぐに息絶えた。もちろん、その様にも衝撃を受けたが、エリーヌが恐れを抱いたのは、力を使ったときのルキアの姿だった。彼は炎に巻かれた敵を、眉一つ動かさず眺めていた。深い緑色をした彼の瞳が不気味に赤く光る様は、なんとも言えぬほどに恐ろしかった。

「ルキアは、本日中にも部隊に合流するそうだ」

「そうでございますか……」

「第四部隊からの報告がたしかなら、あいつの働きは予想以上だな。渋っていたわりに、よくもあれだけ屍の山を作れるものだと感心している。司祭などよりも、よほど軍人のほうが向いている。そうは思わないか？」

エリーヌは曖昧に相槌を打ち、わずかに話の軌道を変える。

「なににせよ、司祭への被害が出ておらぬのは好ましいことですね」

「一人の被害も出すわけにはいかぬから……。前線とはいえ、出しゃばらず、距離をとって戦えばいい。出撃前にそう厳命してある」

ルキアがそのような戦い方をしていることを、エリーヌはただひたすら願うことしかできない。

五日前の夜、やっと床から起き上がれるようになったルキアが、エリーヌのいる部屋を訪れた。明朝から部隊と合流することになり、発つ前に話をするためにここへ寄ったのだと彼は言った。

『……あなたは、馬鹿ではないのか？』

エリーヌは思わずそう口にしていた。

ルキアの傷はあまりに深いものだった。陣地まで辿り着いた途端、彼は倒れ、それから三日も意識が戻らなかった。開いた傷はアゼリアの魔法でなんとか塞ぐことができたものの、それから一週間もの間、高熱が下がらないままだと聞いていた。

ルキアは腹部の傷をかすり傷だと言っていたが、それは単なる虚勢だった。夜が明けゆく中で見た彼の顔は、あまりに青白く、今にも消え入りそうだった。エリーヌを気遣う言葉を紡ぐ唇は、既に色を失っていた。なんとかルキアの手助けをせねばならないと思っていたが、ルキアは血路を塞ぐ敵を一瞬のうちに駆逐し、傷を負って

呆然としているエリーヌを抱え、陣地へと辿り着いた。

エーヴェル要塞に辿り着いたとき、ルキアの腹部からは夥しい血が流れていた。あれほどの傷を負いながら、自身に追い打ちをかけるような振舞いをしたのだ。たかだか十日程度で体力が回復しているはずがない。

呆れるエリーヌをよそに、ルキアは平然と言いのける。

『私はもう戦えるのだから、戦線復帰するのは当然ではないのか？』

『もう、充分なのでは？』

『まだ戦いは終わってはいない。シベリーはほぼ片がついたのとこのだが、ファジール攻略戦に間に合うよう戻らねばならない。それに、いつケーニヒスが動くやもしれぬのだ。司祭が戦えば、より自軍の犠牲が少なく、より早く決着がつくのだから、悠長に寝ている場合ではないだろう』

エリーヌは、あまりにルキアを見くびっていた自身を恥じた。

この戦はルキアにとって望ましいものではないため、相応の理由がつけば、ルキアはすぐにでも戦線離脱するものと思っていた。そもそも、あれほどの深手を負えば、大抵の者はその後の戦闘に参加しない。後方支援部隊に残るのが関の山で、前線復帰などまずありえない。なにより、ルキアのような力を持っているのなら後方部隊で負傷兵の治癒に当たることすら許されるはずなのだ。

それにもかかわらずルキアがこれほど早い復帰を決めたのは、被害の必要な拡大を防ぐためであり、強いてはミカヤのためだろう。

『たしかに、我が軍にあなたの力は今すぐにも必要なものでしょう。あなたただけでなく、司祭たちの力とはとてもないもの……。私など、

足手まといになるだけだったのだから』

エリーヌがそう口にしながらうかがい見たルキアの顔は、玻璃のように冷たい光を放っていた。そのようなルキアの表情はこれまで目にしたことのないもので、エリーヌは訝しさとともに不安をかき立てられた。

『以前から思っていたが、あなたは武官向きではない。昔から感情に走りすぎるきらいがあったが、今回のように途中で役目を放棄するなどあまりに軽率だ。いくら上官殿の許可を得ていても、あなたが言い出さなければその許可も与えられなかったものだろう？ あなたは父君が止めるのも聞かず、武官の道を志し、今その地位にある。あなたがそこに辿り着くまでどれほど腐心してきたか、私は知っている。だが、いかに剣の腕が立っても、実戦で使えなければ意味がないことに早く気づかれたほうがよい』

ルキアの言葉はいつも柔らかな響きを持っているものだが、今日はいやに棘を含んでいた。

エリーヌは動揺を抑えつつ、ルキアを正面から見据える。

『なぜ、あなたにそこまで言われねばならない？』

『もう、あなたに甘いことを言うつもりはないからだよ。今までにも厳しいことは言ってきたつもりだったが、あなたはまるで耳を貸そうとしなかった。……だが、この際だからはっきり言っておこうと思う。シベリーとの戦いで我が軍にもそれなりの被害が出ている。ファジールの正規軍と戦を交えれば、死者や負傷者はますます増えるだろう。あなた程度の怪我で戦線を離脱する軍人などいない。あなたは殿下に害を加える者がいれば、切り捨てねばならない立場だということを忘れてはいけない』

数年前、エリーヌはそれと同じような言葉をルキアから言われたことがある。

あれは、エリーヌが近衛に入隊して数か月が過ぎたころのこと――ちょうど王弟派の勢力に陰りが見え始め、それを加速させるように国王が大病を患ったころだった。国王の病状について医師らは回復の見込みはないと匙を投げ、とうとうミカヤが即位するかわれていた。

ミカヤは長年、王太子としての正統性に疑問を投げかけ、中傷を繰り返す宮廷貴族に苦しめられてきた。一六になるころを境に、ミカヤは彼らに対し強烈な敵意を向けるようになったが、そのことがますます宮廷貴族たちの反感を買うようにもなっていた。

燻っていた火種が一気に爆発した、まさにそんな事件だった。

ミカヤはある伯爵家の嫡子と宴の席で諍いを起こした。それは、ミカヤの傍若無人な言動に耐えかねた相手の男が、ミカヤに剣で斬りかかるというとてもないものだった。

結果として、ミカヤは怪我を負わずに済んだ。男が斬りかかったとき、近くにいたルキアがミカヤを庇い、腕に傷を負いながらも男から剣を奪ったのだ。男はすぐに近衛によって拘束され、その様子をその場の大勢の者が固唾を呑んで見守っていた。ミカヤの怒りは凄まじく、その男を自らの手で処断しようとしていたが、それをルキアやダラス公が必死に止めた。

ミカヤが退席するやいなやエリーヌはルキアに駆け寄り、言葉をかけようとした。しかしその言葉が放たれることはなく、彼を労わろうとした手は空を切った。

――あなたのすべきことは別にあるだろう。

そう言い残し、ルキアは赤く染まった腕を押さえながら退席して

いった。

あれ以来、エリーヌにはルキアを見返してやりたいと思う気持ちもあった。しかし、それ以上に、なぜルキアが司祭の地位に留まろうとするのか理解できなくなった。

あれほどミカヤに忠義を持ち、才能にも恵まれている人間がなぜ、なんの力も持たない国王に仕えているのだろうか。ルキアこそ、なすべきことは別にあるはずである。

もどかしさや悔しさは次第に怒りへと変わっていく。

『……偉そうに言われるが、所詮この戦いは侵略で、あなたのやっていることは殺戮にすぎない。あなたが国王陛下に殲滅作戦の中止を進言すればこのような事態は避けられたやもしれないというのに、ただ流されるがままとなった結果がこれではないのですか』

『ああ、そのことを否定する気はない。だからこそ、私はどのような手を使っても早々にファジールを落とし、この戦いを終わらせる』

『戦いを終わらせて、それであなたはとうする？』

『……生きて戻ることができたら、元の生活に戻るだけのことだ。私は司祭としての役目に一生を捧げる』

エリーヌは侮蔑を込めて一笑する。

『あれだけ人を殺しておいて、まだ司祭であり続けるつもりだとも？ 手を血で汚した僧侶など聞いたこともない』

あえてルキアの傷を抉るような言葉をぶつけたが、ルキアは表情を変えず、事もなげに言い放つ。

『仕方あるまい。人を殺めたことで今の地位を辞しては、戦後この国には高位司祭がいなくなるのだから……。あなたのほうこそ、退役を考えてはどうか？ アシュレイ様も今回のことで、そう望んでおられるようだったが』

北方軍司令官である父アシュレイは、ファジル戦に向かうために北方軍の二個師団を率いてエーヴェル要塞に来ている。エリーヌの怪我を聞きつけてこの部屋にやってきた父からは、その経緯を問いただされ、結果として散々小言を浴びせられた。

そんな父とルキアは会ったのだろうとエリーヌは推測する。

彼らはなにを話したのだろうか。ルキアは退役するよう説得してほしいとでも父から言われたのだろうか。父は、今さらルキアになにを頼ろうというのだろうか。

二人の会話を思い浮かべていくにつれ、エリーヌの心に暗い影が落ちる。

『……父上は、元より私を軍人にしたくなかったのだ。グレンヴィル本家に嫡男がいらないせいで、私が襲爵することになると十年以上も前から決まっていた。……だが、私になにかあれば、叔父上のところから養子をもらい、跡を継がせればよい。私がどのような道を選ぼうと、あの家にはなんの影響もない』

『家のことではない。あなたの身を案じてのことだ。それがわからぬわけではないだろう？』

ルキアは怒鳴った。表情も声も乱しはしなかったが、エリーヌにはそう思えた。

多くの者が思っているように、ルキアが感情を露わにすることなど滅多にないが、今の状態こそ、彼が最も怒っているときなのだ。

エリーヌは知っている。

『……そのぐらい、わかっている』

エリーヌは俯き、そのまま口を閉ざした。

ルキアは、どんなに腹に据えかねたことがあったとしても、一方的に怒ることは絶対にしない人だった。過ちを指摘し、諭し、納得できる形で受け入れさせようとするのが常だった。二人はそれほど年が変わらないというのに、悔しいほどに彼は大人だった。

『すまない、少し言い過ぎた』

エリーヌが顔を上げると、彼は眉を寄せながら小さく首を振った。

『勝手なことを、と思うかもしれないが、私はあなたに自分の願望を重ねているところがある。私自身が思うように生きられぬせいだろうか……。本当は、あなたには好きに生きていてほしい。ただ、あのような無茶はもう二度としないでほしいのだ』

口を閉ざしたままのエリーヌに、再びルキアは子供に諭すような口ぶりで声をかける。

『これは指図ではなくお願いだよ、エリーヌ。私があなたになにかを願い出ることなど滅多にないのだから、今回ばかりは聞き入れてはくれないだろうか？』

それが指図であろうと願いであろうと、エリーヌはルキアに逆らえない。優しい彼の言葉に、態度に、いつも懐柔させられてきたのだから。

エリーヌがわずかに首を縦に振ると、ルキアは安堵したように微

笑した。そしてエリーヌの手をとり、なにかを握らせた。

『これを、あなたに……』

エリーヌが恐る恐る手を開くと、そこにあったのは聖イシスの横顔が刻印されたメダルだった。これはルキアが司祭となったとき、主教から賜ったメダルである。

『ルキア、しかしこれは――』

『よいのだ。別にこれは司祭の証になるものでもなければ、軍人の勲章に値するものでもない。私のような不心得者のメダルなど、どれほどの加護があるか知れたものではあるが、せめてもの守りに……。あなたに聖イシスのご加護のあらんことを』

ルキアは微笑を浮かべ、＜古代語＜で祈りの言葉を唱える。すると重ねられた手の隙間から、きらきらと輝く眩い光の粒がこぼれて、夢のようにすうっと消えていく。

エリーヌはメダルをきつく握りしめながら、ルキアの顔をじっと見つめた。

ルキアの微笑みは、まるで宗教画の天使のようだ。エクシユール宮殿の階段に飾られた絵画の中に、彼とよく似た天使がいる。その絵の前に立つと、慈愛に満ちた瞳をした天使が、なにかを語りかけてくるような気がする。

十歳くらいのころ、あの天使がルキアに似ていると告げたとき、彼はありがとうと言って笑ったのだ。それは憂いなど一切感じさせない、屈託のないものだった。あの絵を見るたびに、幼いころのルキアの顔を思い起こさせ、彼女の胸を熱く、切なくさせる。

こうやって、すぐに昔を懐かしんでしまうのは、そのころが自分

たちにとつてもっとも幸せだったように思えるからだ。

『……なぜ、私たちは昔と同じようにいられないのだろうか？』

エリーヌは思わずそう口にしていた。

ルキアが家を継いでから二人は疎遠になった。エリーヌが近衛に入隊して宮廷に上がったからは、王宮で顔を合わせる機会はいくらでもあったが、私的な会話をすることはなかった。ルキアはエリーヌとすれ違っても目を合わせることにせず、エリーヌもまた、意地を張るようにルキアを無視するようになっていった。拒絶されることをわかっていたから、かつてのように彼の背を追うことはできなかったのだ。

ルキアはふつと嘲りを含んだような笑いを漏らす。

『可笑しなことを。いつまでも子供のままでいられはしないだろう？』

『私は、そういうことを言っているのではない』

『わかっているよ』

ルキアは即答する。穏やかな声だったが、エリーヌには酷く冷たい響きをもって届いた。

『いいや、あなたはなにもわかっていない！』

エリーヌがなおも食い下がろうとしたが、ルキアはエリーヌに有無を言わせぬかのように苦笑し、そのまま身をひるがえして部屋を出て行った。

その場に取り残されたエリーヌは、目の前に靄もやが広がっていくような感覚に支配されていた。手の中のメダルに熱がこもっていくにつれ、虚しさもまた彼女の中に降り積もっていく。

ルキアの去りゆく姿を見ることが、エリーヌにとって苦く、辛い情景を思い起こさせる。

それは五年前——やっと十七歳になったばかりの、まだ儚げだった少年の姿だった。

去りゆくその背を (2)

クラウドスの葬儀の翌日、エリーヌがドートリッシュ邸内の聖堂へ赴いたとき、ルキアは祭壇の前で跪いていた。それは祈りを捧げている風ではなく、ただなにも考えられず、そこにうなだれているだけのようだった。

ためらいがちに声をかけると、立ち上がったルキアはエリーヌのほうを虚ろに見やった。

エリーヌがドレスを引きずりながら一步一步ルキアに近づいていくと、ルキアは倒れこむようにエリーヌを強く抱きしめた。背に回された手が震えていて、泣いているのだろうかと思った。エリーヌは下ろしたままだった腕を、恐る恐るルキアの華奢な背に回し、長上着の生地を爪でかくように掴んだ。

しばらく二人は抱き合ったまま、微動だにせずにいた。

やがて、エリーヌから身体を離れたルキアは、一呼吸を置いてから顔を上げた。ルキアの顔は涙に濡れてはいなかったが、しばらくの間眠ることも食べることもできなかったせいで憔悴しきっていた。そんなルキアの姿を目にした途端、エリーヌの胸は強く軋んだが、次の瞬間、鼓動は強い高鳴りへと変わっていった。

ルキアは震える指先でエリーヌの髪に触れ、愛おしむように撫で始めた。そして指先を滑らせるように移動させ、手のひらでエリーヌの頬を包む。エリーヌが戸惑いながら視線を上げると、ルキアの顔が近づき、それとともに唇に柔らかいものが触れた。

一瞬、なにが起こったのかエリーヌにはわからなかった。

それまでルキアから贈られた口づけは額や頬へと軽く触れるだけのもので、恋情よりも親愛に近いものでしかなかった。婚約者とはいえ、ルキアはまるで幼いころの延長のようにエリーヌに接することが常で、周囲の大人たちはそんな二人を微笑ましげに見つめていたが、エリーヌはそれを少々不満に思い始めていた。たった二歳しか変わらないというのに、ルキアはずっとエリーヌを子供扱いしていた。

また、ルキア誰にも頼ろうとはせず、弱音も決して吐かない少年だった。それは誰に対しても同じであったが、これから共に生きていこうとする人間相手にくらいは寄りかかってくれればよいのにとエリーヌは思っていた。だからもし、ルキアが誰かを初めて頼ろうとしているのなら、それはエリーヌにとって望ましいことだった。しかし、そんな甘い期待はすぐに打ち碎かれることになる。

塞がれていた唇が自由になっても、エリーヌは恥ずかしさから俯いたままだった。やっとの思いで顔を上げると、そこには薄く笑んだルキアの顔があった。それはとても綺麗な笑顔だったが、これまでに見たこともないほど硬質な印象を受けるものだった。

『エリーヌ、婚約は解消しよう』

なにを言われているのかわからず、エリーヌは瞬きを必死に抑えてルキアを見つめたが、ルキアはすぐに顔をそむけた。零れ落ちた横髪のせいで、ルキアの表情はわからなくなった。

『私がこの家を継ぐ。だからグレンヴィル家へは行けない。アシュレイ様には私から話す。あなた方に迷惑はかけられないから……』

ルキアはエリーヌの肩に置いていた手を下ろし、ずっと横を通り

抜けていく。身廊を進んでいくその後ろ姿を、エリーヌはなにも考えられずに見つめていることしかできなかった。

それから幾日もの間、ルキアの思いめたような顔と、彼が絞り出すように告げた言葉が頭から離れなかった。

ルキアの言う“迷惑”とはなんなのだろうか。こんなときに頼ることもできないような関係だったというのだろうか。これまで共に過ごした日々はなんだったのか。弟のルノーと同じ年だから頼りない子供だと思っているのだろうか。初めからルキアの人生になんの影響も持たない人間だったのだろうか、と自問を繰り返した。

尊敬していた父親が急に亡くなり、酷く気落ちしているにしても、ルキアの一方的な別れの言葉とが理不尽なものにしか思えず、行き場のない想いは次第に怒りへと変わっていった。

その数か月後、エリーヌは士官学校に入学した。それを境に、エリーヌはルキアのことを考えないように努めていた。目が回るような忙しさから、過去を振り返ってばかりもいらなかった。

そんな折、カレニーナに連れられて出向いた王宮で、エリーヌは夕方からの公式礼拝に参加する機会があり、王室礼拝堂の祭壇に立つルキアの姿を初めて目にするようになった。上級聖職者が身につける白い祭服、背に流したままの長い髪、ゆるやかに振るわれる聖杖、そこから放たれる赤い光……。

あまりに神聖な光景に、エリーヌは思わず目を奪われた。幼いころから傍にいた少年に初めて神々しさを覚えたあとき、自分たちはもう決して交差することのない道を歩み始めたのだと思い知った。

二年後、エリーヌが近衛士官として宮廷に出仕するようになって、ルキアの姿を目にする機会は少なかった。ルキアはアイオーン

離宮には寄りつかず、本宮の礼拝堂と王の私室とを行き来する毎日を繰り返していた。

ミカヤがルキアを傍に召したとき、エリーヌは彼の姿を近くで目にするのができたが、ミカヤの前で膝き、頭を垂れる姿も、ミカヤに向ける玻璃のような瞳も、なにかもがエリーヌには衝撃だった。一見、優美である笑顔ですら脆く、儚く見えて、精巧に作られた陶器の人形を目にしているかのようだった。

ルキアは、王弟派・王太子派を問わず、宮廷の有力貴族たちから快く思われていない。もう何年も前から、彼らから嫌味を吐かれたり侮蔑を含んだ視線を投げかけられ、貴婦人からは口先だけの同情を向けられている。キイルもミカヤも、公の場においてルキアに冷たい素振りを見せることが多く、それが廷臣たちのルキアへの態度に反映されていた。

かつてキイルは、ルキアに対し無関心ではなく、幼くして宮廷に召されたルキアによく目をかけていたという。しかしアズノエルの死を境にキイルは冷たい性格に変貌していき、それに伴い、ルキアへの態度もよそよそしいものになってしまったのだとカレニーナが話していた。

ルキアを取り巻く状況にはカレニーナも心を痛めており、あんな風に神経をすり減らしてまで宮廷に身を置くべきではない、とも口にしていた。

エリーヌも伯母と同様の考えだった。ルキアが宮廷に召されたのが国王の命であったとしても、固辞すればすむ話である。王はルキアの頼みは無碍にはねつけたりはしないだろう。

——私自身が思うように生きられぬせいだろうか……。本当は、あなたには好きに生きていてほしい。

ルキアの自嘲を含んだ言葉がよみがえる。

もう五年も前のこと、大蔵大臣ロベルト・ネイゲル男爵が、ルキアにその出自を突きつけ、王太子に仕えるのを辞めて宮廷を去るよう迫ったのだという。王弟派の中でもっとも忠義に厚いとされるロベルトは、主君の子が政敵の王太子に仕えているという状況を見過ごすわけにはいかなかったのだろう。

主君を想うロベルトの気持ちはわからないではないが、ルキアの責任ではないことを彼に負わせようとするのはあまり理不尽に思えた。その一件を知った王がロベルトに激怒し、その後ロベルトには一切の謁見を認めていないというが、エリーヌはロベルトに同情はできなかった。

——あのような無茶はもう二度としないでほしいのだ。

エリーヌは思わず首元に手をやり、服の上からメダルに触れた。ファジル兵に斬りつけられたときのことを思い出してしまったのだ。

あれほど大口を叩いておきながら、すぐに剣を抜いて応戦することができなかった。自分を殺そうとする敵兵を前にして、感じたものは恐怖しかなかった。腕を斬られたときの焼けつく痛みに加え、ずたずたに裂けた皮膚から血を垂れ流す敵兵がただ恐ろしく、身体がまったく動かなくなったのだ。

そんなエリーヌを抱き上げたルキアの力強さは、昔の彼にはなかったものだった。五年前に比べれば、背も伸び、肩や胸には少し厚みが増していた。弱々しさを帯びた少年の影は徐々に薄くなっているというのに、かつてよりも脆さと儚さが増している。

なぜこんなことになってしまったのかと、エリーヌは空漠たる想いを抱いた。

「ミカヤ殿下！」

別室より駆け込んできた士官の声に、エリーヌは空想より現実に戻る。

「王都より、マーテル・バルフォア中将がお越しになりました。至急お目通りをとのことでございます」

「ならば早く通せ」

ミカヤは正面を見据えたまま冷たく言い放った。

廊下を歩く騒がしい靴音とともに、一人の男が中央司令部の会議室へと現れた。バルフォアは現在、王都駐留軍の司令官を務めており、シベリー討伐には加わっていなかったが、前西方軍司令官として文官たちとともに作戦遂行の補佐を行っていた。そこで、陸軍大臣ジーク・ラッセルからの書状を持ち、早馬で駆けつけてきたとのことだった。

バルフォアは酷く神妙な顔をしていた。陸軍大臣からの至急の書状とのことだが、バルフォアの表情から察するに、それが良くない知らせであるというのはわかる。

ミカヤの前に跪いたバルフォアが書状を差し出す。ミカヤはそれを素早く広げ、目を通した。

頬に手を置いたまま文字を追っていくミカヤからは、うつすらと笑みが浮かんでいた。それはどこか奇妙に思える光景であった。

「これは、面白い……」

ミカヤは書を握り潰すとともに、たしかにそう呟いた。ほとんど

聞き取れないような声だったが、彼の近くにいた者は認識することができただろう。

ミカヤの言葉に、バルフォアの顔色が変わる。バルフォアは目を白黒させながら、なにか言葉を発しようとしていたが、次第にうなだれ、跪いたまま静止していた。

ミカヤは顔にかかった髪を後ろへと払い、立ち上がる。

将校たちの視線が一斉にミカヤへと注がれ、辺りは張りつめた空気に包まれた。

「皆、聞くがよい。今しがたジークより報告が入った。ケーニヒスがファジールとの交戦に参戦するとのことだ」

ケーニヒス駐留の大使から外務大臣であるデデュー公に向けて急使があつたという。それによると、ケーニヒスがファジールに向けて数万の軍を派遣したとのことだが、その軍はファジールに差し向けたわけではなく、あくまで対ゴースティンのための戦力だと判明しているようだ。

室内にどよめきが広がる。

それぞれが、来るべきときが来たのだという思いを抱いていた。現在までゴースティンは圧倒的優位に立っていたが、ファジールに加えてケーニヒスまでがともなれば、被害も拡大し、当初の予定よりもかなり戦が長引くことになるのは避けられない。これがいかに予想されていた事態とはいえ、兵の士気に大きな影響を及ぼすことだろう。

ジーク・ラッセルは、ケーニヒスはもちろんのこと、ファジールとの交戦も避けようと尽力していたが、ゴースティンがこれだけの大軍を擁して国境で戦を繰り広げている状況において、ケーニヒスにしてみれば手をこまねいているわけにはいかなかったのだろう。従属関係が解消されたとはいえ、ゴースティンによるファジール占

領を許すわけにいかない以上、ケーニヒスの参戦は当然であつた。

「案ずることはない。ケーニヒスが動くのは、もとより承知の上だ。そのための方策は既に講じてある」

ミカヤは徐々に静まりゆく部下たちを満足げに眺め、命令を下す。

「バルフォアよ、お前は今から西方軍と合流しろ。そして直ちにグラッドとともに西方軍の指揮を執れ。ジークのもとへ戻る必要はない」

「はっ、はい。了解いたしました……」

バルフォアは齒切れの悪い応答をし、再び頭を垂れた。

「私はこれよりファジルへ向かい、戦場において直接指揮を執ることとする。近衛隊、そなたらも供をせよ」

士官たちは一斉に敬礼をする。

会議室を退室していくミカヤの後ろ姿を見つめながら、エリーヌは前線にいるルキアを想う。

彼は今も炎を繰り返し、敵を殲滅しているのだろうか。これ以上、彼に手を汚してほしくないと思うのは我儘でしかないが、それでも願うことは止められなかった。

断ち切れない過去への愛執が、彼女をそうさせていた。

砂塵のいづく散る

ルキアが戦線を離脱している間に、ジュダ・アパス・オーリアの三州を除くシベリー四州が制圧され、既に首都バードンにおいて総督が降伏の意思を示していた。各州にはゴースティンの占領軍が置かれ、州代表は拘禁されており、州軍は解散を迫られた。厳密には、軍隊はほとんどがゴースティン軍との戦闘で失われてしまったため、軍は解散されたも同然なのだが、占領軍に対する反乱を未然に防ぐため、処刑という名の残党狩りが行われている。

そして双児宮の月、十日。

ゴースティン全軍はファジール領内へ侵攻を開始した。第一・第二部隊も占領軍を除いて第三・第四部隊へと合流を終えている。

ファジールの首都マールは領土のほぼ中心に位置しているが、その手前にはダンテクト要塞が築かれており、首都までの進軍を阻んでいる。ダンテクト要塞から南東に位置する荒野に、総勢十一万のゴースティン軍が集い、ファジール軍を前に横に長い隊列を整えていた。

対するファジール軍の中にはルザリー傭兵の旗のほか、ケーニヒスの国旗が混ざっており、既にケーニヒスからの援軍が布陣しているのが見受けられた。ケーニヒスがファジールについたとの一報は前線の各部隊にも入っているが、それがどの程度の影響を及ぼすのか、皆、計りかねているのが現状である。

グラッドによると、ファジールは厚かましくも同盟関係にないケ

ーニヒスに援軍を要請し、ケーニヒスは自国の利益のためにファジールに援軍を送ることに決めたのだと口にしていた。

今のケーニヒスにはゴースティンと正面切って戦えるほどの力はない。それはファジールの兵力と合わせても同様であろう。ケーニヒスの判断は明らかに戦局を見誤っているが、その失策がまったく不可解なものと思えない土壌もたしかに存在していた。

ケーニヒス国王フェルナンド・セルバンテスは気が弱く、一説には病であるとも言われており、私利私欲に走る王子や重臣たちの言いなりになっていると伝え聞く。ケーニヒスはセルバンテス王家による支配体制をとりつつ、いくつかの分家筋に地方領地の統治を任せているため、政情が不安定な側面がある。さらに、国政は現王と王太子が取り仕切っているが、王太子を含めた四人の王子たちは協調関係が築かれておらず、内政の混乱はゴースティンの比ではないという。事実、ファジール地方の独立を許したのは先代のカール大公が辣腕家であったことによるが、悪評高いジョアン大公の代になって五年が過ぎてもなんら手を打てないでいるのは、フェルナンド王が為政者として暗愚であることに起因するのだろう。

ケーニヒスはベイリーズなどの小国を属国扱いしており、国外にも強い影響力を及ぼしてはいるものの、フェルナンド王の代になってからの二十数年で、ファジールの独立を許したことを契機とし、国力は目に見えて落ちていった。ほんの数十年前であれば、ケーニヒスとゴースティンの国力は拮抗しており、先制攻撃をかけることもできずに睨み合っていたというのに無常なものである。

本日の戦においては、四大司祭が一つの軍に初めて揃い、>聖戦<において用いられたイシスの力が同時に使われることとなり、リ

ーヴァ・エクランドが風狼フレイドを、クユラ・ウェーリックが水蛇アナートを、ローザン・ゲールが黒牛ガリアントを、そしてルキアが炎鳥ベリアザールを軍勢に向けて放った。

結果として、司祭たちは異教の蛮族だけでなく、同じガレ族である隣国のファジールやケーニヒスの軍隊を、>神の力<をもつて葬り去ることとなった。三百年前にゴースティンだけが独特の教義を持つようになったルドリア教会であるが、フレイド、アナート、ガリアント、ベリアザールという四聖獣が登場する原始教典は、どの国のルドリア教徒にも強い影響力を有している。四大司祭らの放つ力は、ルドリア神を崇める同族でありながら、神の加護はゴースティンだけに向けられているのだとでも告げるかのように残酷なものだった。

ファジール・ケーニヒス連合軍はゴースティンに匹敵する十万もの大軍であったが、中央の戦列歩兵に対し一斉に>神の力<が放たれ、一瞬にして何千もの兵の命が奪われた。また、四大司祭以外の高位司祭たちは敵の両翼に半数ずつ配置されているが、彼らは敵の砲が届かない位置から、次から次へと魔法を撃ち続ける。司祭は、その有する魔力のすべてが尽きるまで延々と放ち続けることはできない。それより先に体力が尽きてしまうからだ。

しかし、この戦においては司祭の限界を考慮するまでもなかった。戦闘開始から数十分が過ぎるころ既に、三万の敵兵が強大な魔法によりその命を失っていた。

ファジールはジョアン大公が過剰な軍備増強を行っていたため、ゴースティンとの交戦が急遽決定したわりには数も質もそれなりの兵を揃えていた。軍属経験は長くとも実戦経験のない者も多いようだったが、その戦いぶりは充分見事なものだった。ルザールの傭兵部隊はその名声通りの勇猛さを見せ、士気も高く、統率にも優れていた。ケーニヒスからの援軍も同様だった。司祭を徴兵しなければ、

ゴースティンは勝率五分、いやそれ以下の状態で戦いを挑まざるをえない相手だっただろう。

戦況の悪化に伴い、親征していたジョアン大公は側近から退避を求められ、早々にダンテクト要塞まで引き上げていた。その際にルザーリ傭兵と騎兵の大半も要塞へと向かった。ケーニヒス軍も、指揮官が冷静に撤退の時機を悟り、既に退却を終えている。この戦場に残されているのは数百の騎兵と砲兵、そして新兵を多分に含んだ歩兵のみで、それらの兵の指揮を任されたのがバルゼ・カーリエ総司令官である。

もう、勝負は決している。それなのにこの戦は終わらない。

カーリエ司令官の役目は、防戦しながら兵を引き、ダンテクト要塞での戦いに備えることのはずである。しかしカーリエは、ゴースティン騎兵の突撃に対し、無謀な応戦を命じた。それにより目を覆いたくなるほどの惨状が荒野に広がっていくこととなった。

再び、ゴースティンの騎兵隊が突撃を開始し、ファジールの砲兵隊にゴースティンの騎兵が猛攻を浴びせた。サーベルで応戦するファジール兵中にはいたが、ほとんどが砲を捨てて自軍後方へと逃走した。

司祭たちは馬をゆったりと駆りながら、自軍の兵を避けつつ敗走する敵兵を背後から仕留めていく。一方ルキアは、地を這いながらも手向かってくる兵のみを手にした剣で殺めていた。ファジールが降伏さえすれば、このような殺戮は行わなくてもよいのに、と虚しさを噛みしめながら。

ルキアは戦場を見渡した。

ファジールの軍服は白を基調としているため、血や泥がよく目立

つ。ほんの数時間前までは清浄であつたはずの服も肌も、今では見る影もない。

この戦の当初の目的は、シベリー軍を殲滅し、国境周辺の州を制圧することだった。そのためシベリーの敗走兵には追撃を行っていたが、ファジール軍に対しては、歯向かわぬ者ならば命を奪うことはせずに捕虜とし、取引材料とすればよいのだ。ゴースティン側としても、彼らが降伏すればすぐにでも攻勢を緩める用意がある。それにもかかわらず、彼らは部隊が壊滅するまで戦い続けるつもりのようなだった。といっても、兵の士気は決して高いとは思えない。これは兵の意思ではなく、戦況の読めぬ指揮官の意思に他ならない。

「――ルキア様！」

自分に向けられた声にルキアが顔を上げると、左斜め下方より銃剣の切っ先が迫ってきていた。

なぎ払おうと剣を構えたが、柄を握る手がぬめぬめとした血で滑った。

切り返しが間に合わない。

（一旦、左腕で刃を受けるか……）

そんな考えが頭を過ぎったとき、銃剣を持つ手が宙を舞い、敵兵は耳をつんざくような叫び声とともに、荒野に身を伏せた。その身は無残に切り裂かれていた。

アシリングが馬を駆り、ルキアの横で止まる。

「ルキア様、お怪我は？」

「ああ、大丈夫だ。すまない」

「……なぜ、魔法を使われないのです？」

アシリングの氷のような青灰色の瞳が、ルキアを責め立てるように射抜く。

ルキアは本日の戦闘において禁忌魔法は二度しか使っていない。それ以外の魔法にしても数えるほどしか使っておらず、戦闘にほとんど決着がついた今では、ほぼ剣のみで戦い続けていた。ルキア一人が魔法を使用せずともゴースティン側の優勢はまったく揺るがないほどになったとはいえ、司祭が武器を手にして敵兵を屠っていく様は異様に映ることだろう。

「……少し、>念^{ゼン}くが乱れているだけだ」

それは嘘ではなく、ルキアはこのところ思うように炎を操ることができないでいた。まだ腹部の傷は完全に癒えていないが、それが影響しているわけではないだろう。魔道の力は肉体の不調に影響はされることはほとんどなく、精神に深く依存するのだと、父が話していたのを思い出す。

戦線に復帰してすぐのこと、ルキアがファジールの軍勢に向けて神の炎を放ったとき、身体の内側から全身を刺すような痛みに襲われた。

まるで自らを罰するかのように。

「奴ら、引くことをしませんね」

アシリングが辟易したように遠くを見つめる。ルキアも同じ方向に視線を馳せる。

「いたたまれんな……」

そう口にしながら、よくもこんな言葉を吐けるものだ。ルキアは思う。

無能な指揮官の命令だと知りつつ、ゴースティン軍は戦う意思のない敵兵を次々と手にかけている。それもまた、自分たちに下された命令だからだ。しかし、いかに命令であるとはいえ、目の間に広がる惨状には同情を禁じえないものがあつた。

砂埃と泥に塗れ、散り散りに切り裂かれた国旗、捨て置かれた砲、軍服を歪な朱に染めていく者、サーベルや銃剣しゅけんを握り締めたまま固くなった者、屍の山の下でうごめく虫の息の者……。

初めて戦場に踏み込んだころならば、ルキアはこの光景をまるで夢のように虚ろな心持ちで眺めていたことだろう。だが、もはや夢に落とし込めて逃げ切れるほど現実甘いものではなかった。

ルキアはずっと考えないふりを続けていたが、第一・第二部隊が第三・第四部隊に合流したということは、シベリーの北方の州の制圧は完了したということになる。

ゴースティンの人間にとって、シベリー族と聞いて真っ先に思い浮かぶのが、馬に跨り、鮮やかな衣を纏い、大きく湾曲したサーベルを振りかざしている姿である。しかし、そのような特徴的な姿を持つシベリーは全体で見ればせいぜい三分の一程度であり、その他のシベリー族はこの大陸に数多くいる、ありふれた日常を送っている者たちとなんら変わらない。

州の制圧は、最終的に市街戦となり、軍属以外の者の犠牲者も多数出ることとなる。シベリーは男だけでなく女も武芸を身につけることが当然とされていると聞く。軍に属していない者であっても、武力を持って抵抗してくれば、その者たちを手を掛ける必要がある。ゴースティンの軍人は市街地に居住する女子供にも容赦なく銃を放ち、剣を振り降ろし、司祭たちは彼らを“敵”と見なして魔法を放

っていったことだろう。

（直接手を下さずにすんだ私は、どれほど恵まれていたのだろう…
…）

卑怯な安堵を胸に沈めながら、ルキアはファジール兵の亡骸に目を落とす。数え切れぬ者を手にかけ、胸を悪くするような血の臭いにはもう慣れてしまっていた。

ルキアはふと、後方の丘を見やる。

今、あの丘にはミカヤと近衛士官らがおり、戦の成り行きを見守っている。出撃前に、よほどのことがない限りキウロス要塞を離れることはないミカヤは言っていたが、ファジールの参戦によりエーヴェル要塞へ、そしてケーニヒスの参戦により戦場にまで出てくることを決めたようだ。シベリーとの戦闘だけならば、少々の不測の事態が発生しようとも要塞を離れはしなかったと思われるが、ここまでの事態になった以上、すべてにおいて自らの手で事を進めようとミカヤは考えているのだろう。もしかしたら、一度も戦場に出ずに帰還するのはミカヤの誇りが許さなかったのかもしれない。

総指揮官である王太子が戦場に出てくるとなれば、兵の士気は非常に高くなるのかもしれないが、いかに戦況が圧倒的優位に立っているとはいえ、ここは戦場なのである。兵の代わりはいくらでもいるが、王太子の代わりはないのだ。なぜ周囲の者はミカヤを止めなかったのだろうか。ルキアは苛立たしく思いつつも、ミカヤを止められる者などいるわけがないと小さく息を吐く。

最後の生命線と思われる部隊が突撃を開始した。その数は三百とあったところだろうか。すべて歩兵で銃剣を抱えている。既に弾薬は尽き、剣による戦いを挑む以外に道は残っていないのだ。

「一気にケリをつけてやる」

低く呟いたアシリングが、両手に＜念くを込める。

ルキアは剣の柄を強く握りしめる。既に返り血は乾き、むせ返るような臭いは消えてしまっている。しかし、再びこの剣は血に塗れるのだろう……。

腕に巻かれた包帯を解き、剣の柄とともに手に巻きつける。柄にはめ込まれた王家の紋章は包帯で隠れていく。

強い光とともに、アシリングの放った無数の刃が敵を切り刻む。

アシリングに続き、砲兵隊も一斉に砲撃を開始する。あたりは一瞬にして爆音と粉塵に包まれた。

絡み合う糸 (1)

交戦開始より二十七日――巨蟹宮の月、七日。

ファジールの首都マールロは陥落した。

ゴースティンは何度もファジールに停戦を申し入れていたが、それらが受け入れられることはなく、首都マールロの陥落及びダンテクト要塞の攻略まで戦闘は続くこととなった。

ゴースティン軍はダンテクト要塞を攻略するに先立ち、高位司祭を中心とした三万の部隊だけを残し、主力部隊には要塞の南を迂回し、マールロへと向かわせた。敵の主力は要塞に駐留していたが、首都さえ落とせば戦いは終わるのだから包囲戦に時間を費やす意味がない、とミカヤが判断したためだった。

ダンテクト要塞は一見、強固な造りである。キウロス要塞やエーヴェル要塞とほぼ同時期に建設されたもので、幾重にも稜堡が組まれており、死角の少ない様式はとてもよく似ている。しかし、その稜堡をことごとく司祭が破壊していったため、ゴースティン軍が包囲戦を開始するころには、要塞としての機能はほとんど失われていた。

主力部隊がマールロへ行軍するために障害となるのは南と西の稜堡であった。そこで司祭たちは真っ先に南と西の稜堡を潰し、そしてすぐに主力部隊はマールロへの進軍を開始した。当然、ゴースティンの主力がマールロへと向かうとなると、ファジール軍は要塞より打って出てくることとなったが、その軍勢は四大司祭の>神の力<にて一瞬のうちに葬り去られた。それによりファジール軍は籠城を決め

込み、首都防衛はジョアン大公とともに要塞から事前に撤退していた騎兵とルザリー傭兵に託すことに決めたようだった。

そのころ、敗戦を悟ったジョアン大公は、マール陥落前にケーニヒス国境ベスランへの脱出を図ろうとしていた。しかしその途中、マール北部の村でゴースティンの騎兵と交戦し、ルザリー傭兵は最期まで大公を守り、その命を散らした。近衛騎兵に守られながらベスランへと急いでいた大公は、国境まであと少しというところでゴースティン騎兵により拘束されることとなった。その知らせがダンテクト要塞内へと入り、バルゼ・カーリエ司令官が降伏に応じ、ファジールとの戦いは終結した。

現在、中央都市マールに駐留している西方軍が戦後処理に当たっているが、ファジール軍はその組織自体が壊滅状態に陥っており、西方軍の役割は、マール市民に対する占領統治が主目的と化している。また、亡命を断念せざるをえなくなった大公は、マール宮殿にて講和条約締結に向けての準備を行っているという。

マール陥落より一夜明けた今日、ダンテクト要塞において、ケーレン・グラッド少将及びマーテル・バルフォア中将とファジール軍総司令官バルゼ・カーリエが対面することになり、そこには西方軍の上級士官に加え、ミカヤの指示により列席した高位司祭もいた。

この要塞の貴賓室は、ゴースティンにおいて主流の意匠とは少々趣向が違う。もともとゴースティンとケーニヒスの国境は文化の分岐点とも言われることがあり、言語、服飾、料理、建築など、あらゆる文化面において大陸中の国々がゴースティン流、ケーニヒス流などに分かれている。ファジールは同君連合が形成される以前より

ケーニヒスの影響を強く受けていた国だったため、いわゆるケーニヒス流が主流なのだ。

これは言語についても同様で、ファジールの公用語はケーニヒス語である。ゴースティンとケーニヒスの言語は綴りこそよく似ているものの、発音がまるで異なり、文法もケーニヒス語のほうが複雑な面が多々見られる。とはいえ、シベリー語ほど習得に難儀するものではなく、大陸全土にあらゆる学問の書物が広く流通しているため、ある水準まで学業を修めた者であれば、両国の言語は一通り理解できるものである。

しかし、この会談の席で交わされるのはゴースティン語である。敗戦国に払う敬意などあろうはずがない。

グラッドが低く響く声でバルゼ・カーリエ司令官に問う。

「まずは、貴公にお訊きたい。なぜファジールは、我が国とシベリーの戦に参戦された？」

グラッドの前に対座するカーリエが苦々しげに口を開く。

「……白々しいことだな。そなたら、元々シベリー軍の討伐だけで終わるつもりなどなかったのだろうか？ あれほどの大軍を擁するなど、我らに戦をしかけるつもりだったとは思えぬわ。しかもあの魔道士はなんだ？ 聞けば奴らはルドリア教の司祭だというではないか。貴様らは軍人としての誇りも捨てたのか！」

カーリエはルキアたちを睨みつけ、捕虜には珍しい威勢の良さを見せた。

グラッドは眉一つ動かさず、静かな口調でカーリエに語りかける。

「我々は、ケーニヒスは元よりファジールにも危害を加えるつもり

などなく、あくまで今年初頭に起こった暴動に対する報復としてシベリー軍の討伐を遂行したまでのこと。国王陛下は隣国との戦争を望まれてはいない。貴公らが兵を挙げたために我らも応戦したにすぎないのだ」

カーリエはますます気色ばみ、グラッドに食ってかからんばかりに身を乗り出した。

「あの色に溺れた王などどうでもよい。実権を握っている王太子はファジールもケーニヒスも潰すつもりなのだろう！ あの王子の悪評はいくらでも耳に入ってくる。野心家で傲岸不遜な人物であるとクラヴィーエ公も申されていた」

キイルの名が出た途端、ルキアが強張らせた顔でグラッドを見やった。その様子を見届けたグラッドは、意表を突かれたような表情を作ってから、口元に薄らと笑みを浮かべる。

「これは奇妙なことを。貴公は敵国の王族の言葉を鵜呑みにされるのか？」

「クラヴィーエ公ならば信頼してもよいだろう。この国の独立はあの方の助けなしには成せなかったこと。この国の者は皆、クラヴィーエ公が王となり、我が国と良好な関係が築かれることを望んでいたのだ。……それを、あのような若造が王位に就こうとしているとはな」

室内にざわめきが広がっていったが、グラッドはそれを咎めることはせず、捨て置いたままだった。

これまでキイルがファジールに友好的であり、シベリー軍の殲滅に異を唱えていたのは、ケーニヒス及びファジールと戦争になるこ

と避けるために他ならない。キイルの望むものは、民を疲弊させる戦争という手段は取らずにケーニヒスの力を殺ぎ、ゴースティンをアレイシス大陸の宗主に仕立て上げることであった。いずれはファジールをゴースティンの支配下に置く算段であったと思われるが、八十年前のような戦争を避けることが為政者として選ばざるをえない道だと考えていたのだろう。

つくづく、理想主義に凝り固まった貴人であるとグラッドは思う。

そんな王弟派の重臣の振舞いは、王太子派に対抗するためだけのものに見えることが多く、これまでファジールに向けて行ってきた少々度の過ぎる支援は、その目的が崇高な理想に基づくものであるからこそ、胡散臭さを漂わせているのも事実であった。カーリエの発言は、そんな空気を一気に後押しするものとなった。一度芽生えた疑念は、そう簡単に刈り取ることはいできない。

グラッドは神妙な顔をして、カーリエに問いを重ねる。

「しかしカーリエ殿。貴公らが我が国の王太子を快く思っておられずとも、ファジールがゴースティンと良好な関係を望んでおられたのなら、シベリーに与する理由などないはずだが？」

「……シベリーは所詮、我らにとってはルザーリよりも安上がりな傭兵というだけのことだ。今はもう、ケーニヒスの支配を受けていたところとは違う。シベリーを傭兵として利用はするが、保護をしてやる必要など一切なく、我らにはシベリーに与しようなどという気は毛頭ない」

口の軽い男だ、とグラッドは内心ほくそ笑む。

司令官の口から、ファジールがシベリーを傭兵としていたことを白状してくれたのはグラッドにとって好都合であった。

望み通りの話の流れができたこの好機を逃す理由はない。

「その安上がりな傭兵が、我が国の軍隊に無体を働いたことについて、貴公はどうお考えなのだ？」

「そのようなこと、なにを今さら……！ その件についてはデデュール公に詳しく説明申し上げており、とくに決着しているはずだろう！」

完全に頭に血が上ったカーリエには冷静さなど微塵も残っていないようだった。声を乱して言葉を発し続けるカーリエを、グラッドはなにも言わずに見守る。

「だからこそ我々もゴースティンの暴挙を不問としてやったのではないか。貴様らには協定を遵守する気もないのか？ そのようなもののシベリーと同じ、いや、それ以下の野蛮で下劣な行いではないか！」

「協定の順守？ 貴公は一体なんのことを言われているのやら……」

グラッドが薄く笑いながら問いかけると、カーリエはさっと顔色を変え、口を噤んだ。

当然と言えば当然であるが、カーリエはゴースティン宮廷の派閥について完全に理解しているわけではないようだった。少なくとも、グラッドのことを王弟派の軍人であるとも思っていたのだろう。西方軍の将校は、概して王弟派の軍人が多く、王太子派のグラッドが司令官に就任したのは異例中の異例であったのだから無理もない。グラッドは青褪めた顔で机上を睨んでいるバルフォアを一瞥し、さらにカーリエに問い詰める。

「シベリー暴動の件……。貴公の主張によれば、あれはファジール所属のシベリーであったということなのか？ それを我が国の外務大臣に詳しく説明されたということだが、そのような話、私は初耳なのだがな……」

ゴースティンにおいて、シベリーの暴動の真相とファジールとの密約について知っていたのは、王弟派の一部の閣僚と将校だけである。そして、この場においてそれを知っているのは、当事者であるバルフォアと秘密裏に情報を入手したグラッドのみである。

さすがにカーリエも気がついたのだろう。糸が切れたように、諦めと嘲りを含んだ笑みを漏らした。

「やはり、貴様らはシベリー討伐など建前で、初めからファジールに戦を仕掛けるつもりだったということではないか……」

荒んだ目でグラッドを見上げる。

「もうよい……。あの王太子が王となれば、遅かれ早かれ今と同じことになったのであろうからな。下賤の女の産んだ私生児がゴースティン王となるなど、まったく……五百年続いたオトゥール王朝も地に堕ちたものだな」

「カーリエ殿、我が主君を侮辱するのはそこまでにされよ。……誰か、カーリエ殿をお連れしろ」

グラッドは側に控えていた部下に、今までとは打って変わった冷たい声で命じる。

カーリエはうなだれたまま、ゴースティン兵に抵抗することもなく退室していった。それと同時に、グラッドはバルフォアに問いか

ける。

「先ほどの話、貴公はどう思われた？」

俯いていたバルフォアの肩がわずかに揺れる。

「今年初めの、西方軍第五連隊をシベリーが奇襲したことに端を発した暴動……。あれはどうやらファジール所属のシベリーであったようだ。ファジール軍の最高責任者であるカーリエ殿がそれを認められているのだから、それは事実ということなのだろう」

「……そうだとすればなんだ？　なぜ、そのようなことを私に訊く？」

やっと口を開いたバルフォアの声は滑稽なほど裏返っていた。

グラッドは笑いを堪え、俯いたままのバルフォアに視線を投げる。

「ファジールの関与があったなど、貴公が提出された紛争鎮圧の報告書に一切書かれておらなんだのな。貴公はなにもご存じではないと思っていたのだ。……だが、カーリエ殿の話を聞かれても驚かれた様子がない。もしや、貴公は初めから知っておられたのではないのかと――」

「失礼なことを申すな！　そもそも、あのような男の言っていることなど当てにならないか！」

「そう考えるのが自然だが、あの男、あまりに口が軽すぎる。あれではろくに奸計を図ることもできぬだろう。だからこそ、敢えて貴公に訊いているのだ。貴公は私の前任者なのだから、西方軍のことは私よりも詳しいはずであろうからな」

「だから、なにが言いたいのだ！」

「シベリーによる第五連隊奇襲の件、私は常々不可解に思っておったのだ。第五連隊が報復としてシベリーに応戦したとのことだが、それは真か？ よもや、シベリーに攻撃を仕掛けたのは第五連隊からではあるまいな？」

バルフォアから得ることのできない返答を待つことなく、グラッドは先を続ける。

「おそらく、カーリエ殿の言われていた“協定”というのは、西方軍による暴挙を不問に付すという取り決め、言わば密約のことであろう。とすれば、一体デデュー公はなにを取引材料にされたのであろうな？」

グラッドの言葉を聞いたバルフォアは、グラッドから目をそらさずにいるのがやっとという状態だった。彼もまた、カーリエと同種の人間だということなのだろう。その場に居合わせた者は皆、バルフォアの引きつった顔をその目に焼きつけていた。

しばし黙ったままだったグラッドは、鼻で笑いながら席を立った。そして、驚いて顔を上げるバルフォアを冷やかに見る。

「まあ、その一件について今は訊かぬこととしよう。それが真実であつたとして、貴公を断罪するのは私ではないのな。今はなににより、シベリー軍の殲滅という長年の目的がやっと達せられたことを喜ぶべきであろう。さらに、目障りなファジールを我らの支配下に置くこともできた。自軍の被害を最小限に留めた上だな。これはすべてミカヤ殿下の知略によるものである。……そうであろう、司祭

殿？」

グラッドは司祭の中でも敢えてルキアを見やった。ルキアは頷くことはせず、じっとグラッドの顔を睨むように見つめていた。

「とはいえ、我が国最大の兵力を有する西方軍がゴースティンの誇りを傷つけるような無体を働き、あまつさえ王太子殿下に対し虚偽の報告を行ったのが事実ならば、私は西方軍司令官としてこの問題を捨て置くことはできぬ。昨今、西方軍内において軍規が乱れていることも、この事態を招いた要因であろうからな」

グラッドはもう一度バルフォアに視線を戻す。

「戦後直ちに軍法会議が開かれるだろう。その中で真実を明らかにされよ、バルフォア中将殿」

そう言い残し、グラッドはその場を後にした。

貴賓室を出て、長い廊下を歩きながら、グラッドはこれまでずっと張りつめていた神経を解いていった。

ここに至るまでの大きな関門、それはファジールを参戦に踏み切らせることができるかどうか、ということであった。

ミカヤがシベリー軍の討伐を検討し始めたとき、当然、ファジールとケーニヒスを刺激しない方法を優先的に模索していた。

それを一変させたのは、王弟派が秘匿していたファジールとの密約をミカヤが知ったことによる。この密約は、元々は独立戦争時に締結されたもので、表向きは相互防衛同盟であったが、裏ではシベ

リー国境付近における權益拡大などの条項も含まれており、その期限は二十年とされていた。つまり、シベリー暴動の際に交わされた密約とは、この同盟の延長を求めるものだったのだ。

今のファジールとこのような同盟関係に置かれていることは、決してゴースティンにとって有益ではない。初めからバルフォア父子を罰し、ファジールとの同盟を破棄すれば済むことであつたはずのだ。

それをクラヴィーエ公やデデュー公が避けようとしたのはなぜだったのだろうか。

まだファジールを切り捨てる時機ではないと踏んだのか、それともバルフォア家の当主と息子を罰すれば、その主筋に当たるハーシエリオン家にも類が及ぶことを恐れたのか……。

いずれにしても、それが王弟派の者たちにとって付け入られる隙となつたのだ。

シベリー軍討伐に関し、王弟派の外務官はケーニヒスと開戦を避けるべく交渉を行っていたが、ミカヤは自ら手配した外務官をケーニヒス王太子の派閥に向けて送り、直接交渉を推し進めていた。ケーニヒスの宮廷が複数に分裂していることは鼻から承知であつたが、彼らがゴースティンの王弟と王太子のどちらに味方するかは一つの賭けであつた。

結果として、ケーニヒス王太子はミカヤにつくことを選んだ。

“影の王”と呼ばれる宰相ではなく、いずれ王座に座る者であるミカヤに手を貸すことに決めたことは、優柔不断とも評されるあの王太子にしては英断であつたと言わざるをえない。グラッドにとつては運を天に任せるように思えた計画であつたが、当初の目論見はすべて叶つたのだ。

ケーニヒスはファジールに対ゴースティンの同盟を持ちかけ、その証として援軍を送った。それが、ミカヤにとって勝利を確信した瞬間だったことだろう。ケーニヒスは、ゴースティンとの盟約に基づいてファジールに偽の同盟を働きかけ、早々に撤退させる予定の軍を送ったに過ぎないのだから。

なにはともあれ、国外の戦争も国内の政争もこれで決することになったのだ。

グラッドはこれまでの長い道のりを振り返り、勝利を与えられた神に向けて、心からの祈りを捧げた。

絡み合う糸 (2)

(……茶番だ)

ルキアは退室していくグラッドの後ろ姿を見つめながら、冷静な怒りを胸に沈めていた。グラッドに怒りを感じる一方で、明らかに分が悪いのはバルフォア並びに、彼に連なる者たちであるということもルキアにはわかっていた。もしグラッドの指摘したものが真実ならば、王太子派の者たちは国内の政争についても勝利宣言を下すこととなるだろう。

疑う余地もなく、グラッドは証人として不必要に多くの者をこの会談に列席させたのだ。会談の内容について他言無用と厳命していたが、内心はすぐに知れ渡ることを望んでいるに違いない。

シベリー軍の討伐はファジールと交戦するためのよい口実だったのだろう。当初の戦力配置等の采配を改めて考えると、初めからこうなることをミカヤは予測していたようにすら思える。それは、単に軍略や洞察力に優れているという言葉では片づけることのできないものであった。

たとえばファジール戦において、予備戦力としてベスラ要塞に駐留していた北方軍が投入された件。

北方軍の投入は開戦前から決まっていたことではあるが、シベリー戦の開戦直後に中央司令部より、ケーニヒスの参戦いかにかわらず、北方軍の五割を西方軍に合流するよう通達があり、援軍がエーヴェル要塞まで到着していたという。それは、ミカヤがジーク・

ラッセルからの書簡を受け取るよりも前のことである。

貴賓室を後にしたルキアは、近くの階段を上ってテラスへと出た。今日は朝からとても暑い日で、分厚い生地 of 軍服に煩わしさを感じていた。丘の上の要塞には心地良い風が吹いており、それが階段まで流れ込んでいる。

あたりを見渡ししながら、テラスを歩いていたルキアは、視線の先に見慣れた後ろ姿があることに気づき、足を止めた。

「まったく、とんだ茶番でしたね。あなたもただ白けるばかりだったでしょう？」

石壁の手すりに寄りかかっていたエーゼンが、乱れる黒髪を押さえながら振り返る。

「それにしても、あれが西方軍の元司令官ですか……。あのような者が国内最大の軍隊を統率していたなど、磐石に見える我がゴースティン王国も、思わぬところで綻びが生じているのかもしれないね」

「……そうですね」

ルキアは吐息まじりに呟いた。

エーゼンは、彼特有の無表情な笑みを浮かべながらルキアに近づく。

「まあ、初めからわかっていたことでしたかね。私たちは開戦を押

し切るためのただの駒。そしてシベリー討伐は、ファジルとの前哨戦のようなものなのだ」と

すらすらと紡がれるエーゼンの言葉に、ルキアは眉を寄せる。

「あなたは、王弟派の閣僚がファジルと密約を交わしていたことも知っていたのですか？」

「まさか、私はなにも知りませんでしたよ。王弟派の大臣方がああも強く反対されるからには、なにかあるのではと思っていただけです」

エーゼンはふつと苦笑を漏らすとともに、目元に陰しさを漂わせた。

「宮廷ではこう噂されていましたね。キイル殿下はミカヤ殿下を厭うゆえに開戦に難色を示されていたのだと。しかしそれはありえません。そのようなくだらない私情に振り回される人間が、二十数年にも渡って国を導けるわけがないのですから。とはいうものの、この結果については少々失望いたしました。よもや、キイル殿下がこのような失策をなさるとは……」

「あの一連の事態、指示されたのはクラヴィーエ公なのでしょいか？」

「ルキア様がお信じになりたくない気持ちはわかりますが、首謀者がラッセル伯爵であろうと、デデュー公であろうと、キイル殿下がご存じでないはずがないでしょう」

バルフォアが一貫してすべて自分の企みであると主張したとして

も、武官であるバルフォアにそのような権限はない。

バルフォアの報告が虚偽と知りつつ、それを隠蔽したのは、陸軍省のトップであるジーク・ラッセルであり、ファジールと裏取引を交わしたデデュー公ミシエルがその関与を言い逃れることはできなくなれば、クラヴィーエ公キイルにその責が及ぶのは確実だった。

徐々に視線を落としていくルキアに、エーゼンは温和に語りかける。

「ここ数年、キイル殿下はどこか鈍重になられたと思いませんか？
腹心のネイゲル男爵が非常に有能な方ゆえ、失政につながるようなことはございませんでしたが」

「なにより、ずいぶんと人が変わられたようにも思います」

「そうですね。かつてはミカヤ殿下にずいぶんと気を配っておいででしたのに、今では酷く冷淡なものですから」

当時のことを思い出したルキアは、やるせない想いに駆られた。
脈を打ち始めるこめかみを押さえ、強く唇を噛んだ。

そんなルキアの耳に、エーゼンの嘲笑を含んだ声が届く。

「あなたはミカヤ殿下が王となられるのを望んでいらしたでしょう？
殿下が敬われ、宮廷において強い権勢を誇られるのは、あなたにとっても喜ばしいことではないのですか？」

「だからといって、このような結末を望んでいたはずがないではありませんか」

ルキアが理不尽な徴兵命令をあっさり呑んだのには、いくつかの

理由があつた。抗うだけ無駄だと考えたのもその一つだったが、常に不安定であつたミカヤの立場を悪くしたくないという思いもあつた。さらに、ミカヤへ降りかかるであろう批判を恐れていた。もしルキアが命令を拒んだことで、それに倣う司祭が出てくれば、ミカヤは彼らを容赦なく罰したに違いない。そうなれば、元々悪評の立ちやすいミカヤへの非難は熾烈を極めることとなつただろう。

しかし、シベリー殲滅戦の目的は、国境紛争に終止符を打つためではなく、王弟派排除に主眼が置かれたものだったのだ。それを初めから知っていれば、ルキアはまったく別の行動を取つたことだろう。知らずのうちとはいえ、キイルを貶める策に手を染めた自身に、ルキアは言いようのない嫌悪を抱いた。

横髪をかきむしるように握り締めた。疼き続ける頭痛のせいで、吐き気さえ覚えていた。

「そういえば、宮廷において不敬な噂が流れていたのをご存じですか？ このようなこと、噂になど耳を傾けないあなたには意味のない問いかもしれません」

ルキアは薄く伏せていた瞳を押し開き、エーゼンを見やる。

「……不敬、というからには、ミカヤ殿下に関するのでしょうか？」

「ルキア様にも関わることですよ。ミカヤ殿下が司祭の徴兵を強硬に推し進められたのは、あなたの命が戦場で失われればよいと考えになられているからだ、というものです。他にも、シベリー軍討伐の勅許は精神薄弱の王を脅して得たものであるとか、あまつさえ、国王の病は殿下が毒を盛るよう指示をしたためである、といった類の噂も囁かれていました。まあ、それはいつものことですが」

このような噂は、なにも驚くようなことではない。

司祭の徴兵の件は、ルキアがミカヤと不和であると周囲の者たちに思われているためであり、国王の件は、ミカヤが父王を嘲ったり蔑ろにするような発言を平気でするため、病床の王の死を願っていると邪推する者がいるためである。

いい加減な噂であつても一旦流されてしまえば、真実は捨て置かれてしまう。先ほどカーリエ司令官がミカヤの悪評について言及していたが、あれがキイル自身の言葉であるはずがない。王弟派の、口さがのない者の発言に違いないのだ。

「ご心配なさらずとも、それはまったくの出まかせですよ。ミカヤ殿下が排斥なさりたいのはキイル殿下であつて、あなたではありませんから。むしろルキア様をかつてのようにご自分の側近に据えたいとお考えです」

無意識のうちに顔が強張っていたからだろう。ルキアを労わるような声色で、エーゼンは言葉を紡いだ。耳朵を打つ声の感触は、慈愛に満ちているかに思えたが、それは錯覚に過ぎないのだとルキアは即座に否定し、おもむろに顔を上げる。そこにあるエーゼンの瞳の奥は、いつものように闇色に煌めいていた。

「戦後、宮廷の勢力図は大きく変わるでしょう。当然、あなたを取り巻く環境も……。早々に覚悟を決められたほうがよろしいと思いますよ」

なまめいた風が吹き、髪と服を緩やかに揺らしていく。エーゼンは酷薄の色を強めた瞳でルキアを一瞥したのち、悠然と身をひるがえた。

…：…

マール陥落より半月後。巨蟹宮の月、三十日。

ゴースティン軍はマール北部ケーニヒス領土内において、ケーニヒスの正規軍と交戦するに至ったが、ケーニヒスは本気でゴースティンを相手にする気などなく、数日のうちに停戦講和を申し出てる始末であった。

ファジールのように首都陥落及び君主の捕縛といった経過をケーニヒスが辿らなかったのは、事前にゴースティンとの間で交渉が行われていたからに他ならない。

そして、獅子宮の月、十三日。

かねてよりの手筈通り、マール宮殿において、外務大臣デュー公並びにジーク・ラッセルとケーニヒスの最高軍事責任者であるイグレシア元帥及びファジール大公ジョアン・ザイドとの三者が集い、講和条約が結ばれた。賠償問題については、後日の会談で決せられる予定である。

シベリー軍の殲滅に始まりファジール及びケーニヒスまでも巻き込んだこの戦は、これにより終結することになる。このまま戦を続行すれば、終結までに年単位の歳月を要し、ゴースティンの被害は拡大しただろう。ゴースティンに敗北などありえないが、ケーニヒスに勝利したところでそれほど有益はなく、戦の続行は賢明でなかった。

ゴースティンやケーニヒスは、自国の領土を拡張していく中でいくつもの小国を呑み込んできた。強国にとっては戦も外交もある種のお遊びに過ぎないが、弱小国にとっては食うか食われるかの瀬戸

際に立たされることとなる。生き残りをかけた小国の君主や大臣たちは、冷静に強者を見極め、臆面もなく自らを貶めて媚びへつらう。この戦においては、あの大国ケーニヒスがこれまで征服してきた弱小国と大差ない振舞いを強いられることになった。

ケーニヒスは再びファジールとの統合を望んでいたが、ファジールがゴースティンに完全制圧された以上、ゴースティンに歯向かい、ファジールにおける権益のすべてを失う事態だけは避ける必要があった。いずれゴースティンの手に落ちたファジール領土を奪い返すにしても、有益な外交手段を整えておかなくては話にならない。なにより、八十年前の不完全な不可侵条約を確固たるものとせねば、かつての属国だけでなく、本国の領土割譲をゴースティンに迫られる事態にすらなった可能性もある。

だから、ケーニヒスはファジールを捨て、ゴースティンの要求を呑んだのだ。すべては、生き残るために……。

終戦に伴い、ゴースティン軍も西方軍の一部を除き、帰還することとなった。この戦争は、被害よりも圧倒的に収益のほうを上回る。勝ちの見えていた戦とはいえ、ここまで優位にことが進んだことにより、大義の存在価値など無へと帰した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0798w/>

鈍色の空を溶かして

2011年11月25日21時10分発行